

南園全集

第十七号



海邊巖

御製

いそ崎にたゆまずよするあら波を凌ぐいはほの力をそおもふ

皇后宮御歌

海をいつる年のはつ日に照らされてのとかにたてりはまの大岩

皇太后宮御歌

おとたかく寄るしら波をちよろつの玉とかへつゝたてる岩かぬ

目次

△口 繪

- 一、御大典記念南園婦人文庫……………(コロタイプ)
- 一、新舊校長……………( )
- 一、本科第九回卒業生……………(その1)( )
- 一、同……………(その1)( )
- 一、實科第十七回卒業生……………( )

△巻頭の辭

- 一、先づ健康……………會長 筒井捨次郎……………

△教の園

- 一、近松門左衛門の誕生地に就いて  
特別會員 中野 貞介……………四

△文の園

- 一、作文……………(各學年生徒)……………七
- 一、詩・和歌・俳句……………( ) 同……………三〇

△縁の園

- 一、修學旅行の記……………( ) 同……………五九
- 一、洞春詠草……………安富 敦子……………七九
- 一、川島より……………佐伯まつ子……………八一
- 一、小郡町より……………長田千代子……………八一
- 一、遼東の一角より……………藤田 俊子……………八二
- 一、川崎市より……………堀 芳子……………八三
- 一、福川校より……………坂本 勝子……………八四
- 一、樽屋町より……………椋木ゆり子……………八五
- 一、ふと思ひ出でしまゝ……………澤 正子……………八六
- 一、紫福村より……………服部クマ子……………八七
- 一、時 雨……………山本 照……………八八
- 一、東京實踐より……………大橋さみ子……………八八
- 一、まんじゆしやげ……………金子 敏子……………九〇
- 一、南園の皆様へ……………榎間 芳子……………九二

- 一、鐘の音……………井上ヒサヨ……………九三
- 一、雜 詠……………菊屋喜美子……………九四
- 一、女のみうつし繪……………友永マサ子……………九五

△學校記事

- 一、南の園より……………(なかの)……………九六
- 一、學校日誌抄…………………………九八
- 一、卒業證書授與式…………………………一〇五
- 一、會長の更迭…………………………一一〇
- 一、學藝部だより…………………………一一一
- 一、南園婦人文庫だより…………………………一二二
- 一、運動部だより…………………………一二三
- 一、第十三回體育會の記…………………………一二九
- 一、園藝部だより…………………………一二一
- 一、同窓會々則改正並に役員…………………………一二一
- 一、第十六回同窓會の記…………………………一二四

△會員名簿

- 一、昭和四年度南園會歳入歳出豫算……………一二六
- 一、昭和三年度歳入歳出決算書……………一二六
- 一、篤志者芳名……………一二七
- 一、會 告……………一二七
- 一、特別名譽會員……………一
- 一、名譽會員……………一
- 一、特別會員……………一
- 一、舊特別會員……………二
- 一、校外會員……………三
- 一、在校會員……………四二

明治天皇御製

おのがじし務ををへて後にこそ花の蔭には立つべかりけれ  
浅みどり澄み渡りたる大空のひろきをおのが心ともがな  
積りては拂ふが難くなりぬべし塵ばかりなる事とおもへど  
眞木柱立てしころを動かすな世にはあらしの吹き荒ぶとも  
國民の力の限り盡すこそわが日本のかためなりけれ  
むらぎもの心つくして報いなむおほし立てつる親のめぐみに  
たらちねの親の教をまもる子はまなびの道もまよはざるらむ  
過を諫めかはして親しむがまことの友のころなるらむ  
並び行く人にはよしや後るとも正しき道を履みなたがへそ  
事なしとゆるぶ心はなかなかに仇あるよりも危かりけり  
よしあしと人の上にはいひながら身をかへりみる人なかりけり  
今はとて學の道に怠るなゆるしのふみを得たるわらははべ  
たらちねの庭の訓は狭けれどひろき世に立つ基とはなれ  
世の中の人に後を取りぬべしすゝまむ時に進まざりせば



(面 正) 庫文人婦園南念記典大御和昭



生先藤齋 長校前



生先非簡 長校現

三坂ハルエ 齋藤ノシエ 田村了サコ  
 入江先生  
 藤山常盤 堀本シヅエ 八木正枝 大塚キクエ 吉原先生  
 堀野公子 弘エキ子 小野キヨコ 仁保正子 江村先生  
 水津福子 竹内操子 淺海平代子 北野先生  
 竹内茂山 土井幸子 阿武教子 原田先生  
 三戸正子 山田徳子 河村ツタエ 石丸文子 校崎藤先生  
 田中雪子 有田澧子 田中清子 松井節子 宇野先生  
 中野先生  
 高洲キヨ波多野照子 中村富美子 細田マツ子 布村先生  
 池上先生  
 山根アヤ中谷幸子 佐伯千代賀 馬屋原壽満  
 柴田キヨコ 藤田照代 大石ヒサ子 赤崎ヒナ 河内先生  
 田淵先生  
 七俣先生 藤井繁子 上田ミドリ 生駒峰子 上利先生  
 藤田先生  
 今城先生 石光 静子 波田 静江 有田先生  
 今道先生

神田先生

一の其（月三年四和昭）生業幸回九第科本



- |         |         |         |          |         |         |     |
|---------|---------|---------|----------|---------|---------|-----|
| 小堀 英三   | 谷 武     | 野 干     | 野田 耕三    | 青田 英三   | 今 嘉     | 英 三 |
| 古 崎 武 三 | 藤 井 健 三 | 土 田 三 夫 | 三 浦 和 子  | 土 俣 英 三 | 藤 田 英 三 | 英 三 |
| 柴 田 幸 三 | 藤 田 照 外 | 大 江 三 平 | 森 清 コノ   | 所 内 英 三 | 田 崎 英 三 | 英 三 |
| 山 崎 文 十 | 中 谷 幸 三 | 湯 田 平 次 | 黒 須 剛 三郎 | 赤 林 英 三 | 新 玉 英 三 | 英 三 |
| 高 橋 幸 三 | 野 邊 禮 三 | 中 林 富 彦 | 藤 田 文 三  | 宇 野 英 三 | 中 野 英 三 | 英 三 |
| 田 中 雪 三 | 林 田 隆 三 | 田 中 祐 三 | 藤 井 通 三  | 宇 野 英 三 | 中 野 英 三 | 英 三 |
| 三 貝 五 三 | 山 田 隆 三 | 所 持 三 夫 | 江 武 文 三  | 堀 川 英 三 | 藤 田 英 三 | 英 三 |
| 菅 内 英 三 | 山 崎 三 夫 | 土 井 幸 三 | 岡 丸 善 三  | 堀 川 英 三 | 曾 根 英 三 | 英 三 |
| 水 崎 隆 三 | 山 崎 三 夫 | 菅 内 隆 三 | 結 新 平 次  | 非 禮 英 三 | 耳 林 英 三 | 英 三 |
| 藤 野 公 三 | 三 井 三 夫 | 小 泉 幸 三 | 三 井 五 三  | 藤 井 英 三 | 森 田 英 三 | 英 三 |
| 藤 山 常 三 | 藤 本 三 夫 | 菅 田 隆 三 | 小 林 八 郎  | 藤 井 英 三 | 藤 田 英 三 | 英 三 |
| 藤 田 七 三 | 藤 本 三 夫 | 八 木 三 夫 | 大 崎 三 夫  | 吉 田 英 三 | 藤 田 英 三 | 英 三 |
| 三 越 八 三 | 百 瀬 三 夫 | 藤 田 三 夫 | 田 村 三 夫  | 吉 田 英 三 | 人 馬 英 三 | 英 三 |
|         |         |         |          |         | 藤 田 英 三 | 英 三 |

河村ノシヱ 伊藤 靜枝 秋山 敏子 守田 富美枝  
 岡田 寛子 中村 芳子 田中 富佐子 大島 敏子 吉原 先生  
 西山 正子 山根 キクヨ 深井 貞子 川島 佐芽子 入江 先生  
 森屋 滿壽子 佐伯 花子 中原 豊子 中本 智恵子 赤川 先生  
 中村 千枝 石津 夏子 藤田 富枝 大永 千代子 北野 先生  
 吉田 富美子 長村 ノシヱ 田村 ノサ子 上田 静子 原田 先生  
 田中 シヅエ 下井 智恵子 永安 イクコ 矢次 登美子 宇野 先生  
 阿字 雄美子 口羽 千重子 吉見 武子 杉原 ミツ代 布村 先生  
 阿武 淑子 竹内 睦子 柴田 シヅヲ 末岡 静子 河内 先生  
 中村 豊子 久保田 惠美子 荒地 千穂子 松本 ハル子 池上 先生  
 美野 芳江 刀瀧 カメ子 木原 豊子 松屋 千代子 上利 先生  
 七俣 先生 今城 先生 甲中 美豊子 宗賀 元代 有田 先生  
 伊藤 先生 今道 先生



二の其（月三年四和昭）生業幸回九第科本



小野 英志	今藤 英志				今藤 英志
美濃 英志	氏田 英志	田中美穂子	宗丸 英升	菅田 英志	嶋田 英志
中村 健子	大野 英志	木原 健子	藤原 英升	土原 英志	田所 英志
西丸 英志	竹内 英志	渡部 英志	母本 英升	西内 英志	新上 英志
西丸 英志	口藤 英志	吉見 英志	藤原 英升	赤井 英志	中野 英志
田中 英志	石井 英志	赤松 英志	大友 英志	宇野 英志	酒井 英志
吉田 英志	法科 英志	田村 英志	土田 英志	原田 英志	藤田 英志
中村 英志	石井 英志	藤田 英志	大友 英志	井上 英志	吉村 英志
藤原 英志	山田 英志	中野 英志	中本 英志	井上 英志	赤田 英志
西山 英志	山田 英志	石井 英志	田中 英志	大友 英志	藤田 英志
西田 英志	中村 英志	田中 英志	大友 英志	大友 英志	藤田 英志
西村 英志	石井 英志	藤田 英志	宇田 英志		吉原 英志
					嶋田 英志

伊藤先生

藤田先生

林トミ子 國守ツチ子 村田マサエ

村岡おさだ 藤川 美枝 井川志未子 上利先生 吉原先生

有吉 謙 江原千鶴子 岡崎 政子 赤川先生

末武ヒサ子 西尾 祥子 榎本マミ子 北野先生 江村先生

七俣先生 有馬 初枝 松本ツルヨ 鈴木ヨシヨ 布村先生 神田先生

今城先生 兒玉 靜子 松永 靜代 粟屋 得子 原田先生 校齋藤先生

今道先生 河内山 堀江 勝子 増野 絹世 河内先生 中野先生

今道先生 石津マミ子 中谷 芳子 林 宣子 宇野先生 池上先生

山根サヲヨ 西村 正憲 松永 菊枝 松村先生 秋山先生

久志 春子 岡崎 壽子 郡司須惠子 有田先生 入江先生



## 卷頭の辭

### 先づ健康

會長 筒井捨次郎

「先づ健康。」これ嘗て某新聞社の懸賞募集に於て一等に當選した標語であつた。實に人生何が幸福だと言つて健康な程大きな幸福はない。健康な人は常に元氣に満ち、心は何時も快活である。進取の氣象は自然に起り、勉強にも遊戯にも活氣が溢れて居る。心は素直で、友人に親切で、求めずとも他人の敬愛を受ける。

斯くの如くにして、始めて修養も社會奉仕も意のままに出來、智徳は日一日と向上する。學校に於て良き生徒となり、家庭に於ては良き令嬢となり、他日妻となり、母となるも重大なる責任を十分に果たすことが出來、眞に意義ある生涯を送ることが出来るのである。

これに反し、凡そ世の中た何が詰らないと言つても、不健康なほど詰らないものはない。心は常に陰鬱で、何事も進んでなす氣が起らない。従つて學習も鈍り勝ちで、遊戯さへも楽しくやれない。益々氣六ヶ敷しくなり、徒らにいらいらし、人を羨み、友を妬む心も自ら湧いて來る。従つて知人も遠かり、友人とも自然に疎遠となる。斯くの如くにして、心は次第に荒み、果ては世を呪ひ、人を恨み、品性は日に墮落し、終には國家社會の厄介者となることも珍しからぬことである。

然れども、我等凡夫の常として、斯く貴重なる健康に付いても、平素無事の日には、多くはその價值を感じないも

のである。一度病の床に伏して、呻吟懊惱の苦い経験を積めば、無論痛切に其價値の如何に大なるかを感じるものであるが、然し既に身體を壊してからは取り返しがつかない。須く此の無事の日にて、日常細心の注意をなし、常にその幸福を感謝し、眞に生き甲斐ある人生を送るべく益々其の増進を計らねばならぬ。

然らば健康増進の道如何。衛生と體育こそ實にその二大要諦である。

衛生について注意すべき方面多々ありと雖も、慾望の節制と心身の清潔は其の主要なるものである。人は兎角我儘なもので美味なる料理、甘い菓子等は食べ過ぎ易い。好きな競技・遊戯等は度を過ぎ易い。試験前等には夜を更し易い。小説雑誌などは長時間讀み耽り易い。若い時代は元氣旺盛で、身心には弾力があるから、一度や二度なれば別に障害もない様であるが、必ず多少の害はある。度重なれば大いに身心に故障を起す。今の青年に比較的多い胃腸病、神經衰弱等の原因の多くは斯くの如き不節制より來るものである。尙衣服、居室、食器等の不清潔は結核病、赤痢、腸チブス等の不名譽なる病氣の原因となること少なくない。又心の不潔即ち諸々の邪念は我等に恐怖、憤怒、煩悶等の非常に有害なる影響を興へ、生活機能を萎縮せしめ不健康の基となる。其の他數へあげると限りがないが、要するに我等が學んだ衛生上の常識を基として節制清潔に努むれば、先づ大過なしと言ふべきである。消極的衛生の方面はこの位として、次に積極的の體育の方面に付いて一言したい。

流れぬ水は腐る。動くべく出來て居る我等の身體も適當にこれを使はぬと薄弱となる。温室に育つた植物は弱い。我等が身體もよく消極的衛生の道を守るだけで、これを鍛錬せないと發達せない富貴に生れ、多くの雇人にかしづかれて育つたお坊ちゃんは多くは柔弱である。深窓に育ち、通學にすら車馬を驅る様なお嬢さんは兎角病身である。細腰瘠身、「風にも堪へぬ楚々たる姿」のお姫様を貴んだのは昔のことである。今日は長くも、内親王殿下、女王殿下と雖も、スポーツにいそしみ給ふ時代である。從來久しく不振をかこたれた女學校の體育は近年著しい進展をなした女生徒の體格向上の顯著なことは統計を見る毎に我等の意を強うする。併し我國女子の體育は決して現状を以て満足すべきではない。尙ほ、各自は大いに數段の努力を必要とする。

却説然らば身體鍛錬即ち體育の道如何。體操遊戯競技等は素より其の主要なるものなるも、必ずしもこれを以て終

りとするものではない。遠足、散歩、水泳、登山等も何人にも行へる非常に適切なものである。更に炊事、掃除、水汲み、洗濯、園藝等の家庭的作業も見様によつては體育である。農家の子女、女中等の強健にして筋骨のよく發達せるはこれが爲である。これを要するに、餘り過度に陥らない範圍内に於て、小まめに身體を働かせ、時には多少の苦痛を忍んでも寒暑を凌ぎ、身體の抵抗力を養ふは何れも體育と考へてよい。又冷水浴、冷水摩擦、深呼吸等を毎日續けて行ふは最もよい鍛錬法である。

女子は弱いものとして自ら弱がり、體操や勤勞を厭ふものは我と我身を削つて居るものである。お轉婆と言はれるのを恥しがりて、競技や水泳をやらないのは折角父母より受けた立派な玉を磨かないものである。人生の行路は必ずしも平坦ではない。険しい山坂もあれば、物凄く荒波もある。殊に生存競争の日一日激甚ならんとする今後の社會に於ては、女子も男子と伍して、或は職業方面に、或は社會奉仕の方面に、活躍する必要があるものと覺悟して居らねばならぬ。かゝる際萬難を排して、其の使命を全うするには強健な體力と旺盛な氣力が必要である。我が國の婦人はまだ、體力の上より言ふも、意氣の上より言ふも歐米諸國の婦人に比して遙に遜色がある。諸子の眞摯なる心身の鍛錬は優良なる國民として世に立たんとする上に於ても極めて必要なることである。私は茲に本題を提唱して諸子の奮起を促す所以である。(昭和四年十月二十六日體育會の前夜にこれを綴る。)

健全なる精神は健全なる身體に宿る。(ローマ古諺)

晝食後暫く休め夕食後一哩散歩せよ。(西洋古諺)

快活は健康から咲き出る花である。(ルーソー)

明治天皇  
御製  
ことしあらば軍のみちにたむ身は  
野をも山をもふみならさなむ  
みちくにつとめいそしむ國民の  
身をすくよかにあらせてしがな

## 教の園

### 近松門左衛門の誕生地に就いて

特別會員 中野貞介

近松門左衛門、姓は杉森（或は相森と書く）名は信盛、巢林子と號した。我が國にて名高い文學者、殊に淨瑠璃作者の中では、最も偉いといふことは誰もいふ所であるが、その郷國については、いろ／＼説がある。諸説の中、最も普通に行はれるのは、長州萩の人といふ説であるが、此の説にも萩に生れたといふ説と、大津郡深川に生れたといふ説と二つある。其の中で、近頃は深川説がよく唱へられてゐる。此の説によると、近松の父は相杜（近松の姓は普通杉森、又は相森と書くが、萩の藩士の方は普通相杜と書く）といつて萩の藩士で、其の領分が深川の江良といふ所にあつて、その下屋敷で生れた子供が近松といふことである。私は此の相杜家の遺蹟を見たいと、かね／＼思つて居たが、先年遂に其の宿望を果すことが出来たのである。

それは十一月十二日のことであつた。味爽玉江驛發の汽車に乗り、正明市驛に下車し、膚寒い朝の風に吹かれながら田圃道を歩いて、驛の南一里近くもある近松の誕生地江良へ向つた。稻はもう皆刈取れて、農夫は田をすいたり、麥を蒔いたりしてゐた。數町行くと、黄ばめる雑木林の中に、青松の立つて居る丘の麓に出た、道を農夫に問うて此の丘を右に廻つて、野菊の咲いてゐる小徑を行くこと數町にして、山と山との間に江良の部落が現れる。江良は正明市より大分離れた一寰區で、耳に車馬の音をきかない幽邃境である。茅屋の所々には大根の葉が青々として白い根が

寒さうに見える。近松の誕生地を小學校行きの子供に問うたがな／＼分らない。丘の麓の家について尋ねようと思つて行くと、其の家から六十歳餘の婆さんが出た。此の婆さんは小林と叫んで、元相杜家に仕へて居た家の人であるさうで、此の人にわざ／＼案内してもらふ。近松の誕生地は此の人の家の少しさきで、丘の下の小高い所にある。屋敷はあとも無くなり今は敷畝の田となつて、近松門左衛門誕生地といふ風雨にさらされた木の標札も倒れて居る。婆さんは相杜家の人が江良に居られたのをおぼえて居るといふことや、遠方から近松の遺蹟を尋ねて来る人々が多いが、此の地における事蹟が明瞭でないといふことなど、いろ／＼話した。私は暫くの間屋敷に立つて、ものおもひに耽つたのである。思へばそれはもはや二年餘の昔となつたのである。

さて、近松門左衛門が深川に生れたといふ説は、主として肥前の唐津の近松寺の碑文に據つたもので、此の碑文を見ると、明かに長門深川の人と書いてある。そして碑文の出来たのが、近松の亡くなつた享保九年十一月二十二日の翌年の享保十年六月二十二日で、其の間僅七ヶ月であるから、あまり歳月を経て居ない。従つて誤傳を生ずることは無い筈である。ところが毛利藩士であつた相杜家の後裔、周行氏所藏の相杜家の系統圖に、近松の名即ち信盛も、通稱の平馬も其の號も出て居ない。或はこれは相杜家で何かの都合でわざ／＼省いたのかとも思はれる。元來杜相家は關東から来て、豊浦郡長府に住し、後萩に移住したものらしい。萩に来てからは、春日神社の後に住んで居た。古い萩の繪圖に其の屋敷址が出て居る。近松は深川江良の下屋敷に生れ、青海島の法船庵の大日比文庫は多くの圖書を藏して居たから此處で勉強し、此の寺のついで唐津の近松寺に移つたのかとも想はれる。これは深川説についての概要であるが、萩誕生説では、平安古の田總百合之助先生の宅の後方にあつた相杜家の別邸で生れたといふことである。とにかく近松を萩の人（誕生地は江良であつても、相杜家の本邸が萩にあつたので、近松を萩の人といふのである）といふ説は、やゝ古くから唱へられ、東京本所柳島妙見菩薩境内には、近松の曾孫といふ近松春水軒續月の記した近松門左衛門の碑文があるが、それにも明かに長州萩の藩臣杉森某の男とある。ところがこゝに異説がある。それは近松が生れた頃には、相杜家は萩に移住して居ない。相杜家は近松が五、六十歳になつた頃に、毛利吉元公に隨つて長府から萩に來たといふ説である。従つて近松の生れた時には深川江良にも下屋敷が無かつたといふことになる。相杜

周行氏所藏の系圖にも、周行氏十代の祖で、近松の、父かといはれて居る廣品は、長州豊浦郡内日村淨土宗泰榮寺に葬つたとある。これから考へると、近松楳は杜家の領分で、下屋敷のあつた内日村（或は長府）に生れ、幼時下關の寺に行つて居て、此の寺から唐津の近松寺に移つたらしいのである。たゞし誕生地はいづれにしても、近松の名高くなつた頃には、近松の本邸は萩に移つて居たのである。以上はいづれも長門誕生説で、そして近松門左衛門の近松は、唐津の近松寺から採つたといふ説であるが、こゝにさうでない。門左衛門の近松は近江國の三井寺の南方にある近松寺から採つたのであるといふ説がある。近松の誕生地についても、長門説の外、京都説、越前説、三河説、出雲説等がある。越前説、三河説、出雲説は後人の假託に出たものらしい。越前説の如きは、近松の弟岡本一抱子が、越前侯に仕へてゐた所から思ひついたものではあるまいか。京都説は餘程古くから唱へられた説で、明和頃に出でた音曲道知論や、櫻里散人の茶話雜談や、竹豊故事に掲げられ、殊に近松が年少の頃京都の俳諧の會で作つたといふ俳諧も近年發見されたとかいふので、近頃京都説も大分擡頭して來た。しかし寺々の碑文や、近松が終焉の際に自ら書いたものに、「代々甲冑の家に生れながら武林を離れ」とあるのや、近松の作つた淨瑠璃の取材に九州に關するものゝ多いことや、生前いたくもてはやされながら、其の系圖や、誕生地を隠したことは、田舎生れであつたからと思はれるので、長門誕生説が、今の所他説に勝つて居るやうである。續燕石十種京攝戲作者考や、好古類纂や、聲曲類纂等には萩説が掲げられてゐる。たゞし近松の姓は普通杉森又は相森と書いてあるが、萩藩士の方は、楳杜周行氏の系圖にも、萩の繪圖にて楳杜とあつて、杉森、相森と無い。此等のことはなほ研究の餘地がある。私は近松誕生地に關する研究材料は少々集めて居るが、今回はやかましく考證的に述べたてることができて、なるべく平易に諸説の概要を記すにとどめる。

唐津 近松 寺 碑文

仰海祖門上座者長門深川人也 從當山第四世遠室禪師而受業得度 學識共卓絕 後遊京師變姓名稱 近松門左衛門 以著作淨瑠璃爲業 享保九年甲辰年十一月二十二日卒於浪華 以遺言歸葬於當寺墓地 享保十乙巳年六月二十二日 當山六世現住鏡堂識之

## 文の園

### 作文

#### 元旦の朝の一瞬

本一 冷泉 龍子

元旦！ 元旦！ 何ぞなく嬉しく空も地も晴やかに浮き立つて見え、昭和五年の新春をにこやかに壽ぐ様である。昨日まで荒れ狂つてゐた空はからりと晴れ、今朝はうら、かな上天氣となつた。早くも門口に顔を出す國旗は、體一ぱいはた／＼と音をたて、隣どうしの國旗と「お目出度う」を言ひかはずそぶりも面白い。かすかに聞える太鼓の音は、たしが天滿宮のお神樂に相違ない。朝未だ夜も明けやらぬ中に、清らかな風を頬に受けながらお宮に参り、お神樂を上げてもらふ心持は何となく晴れ／＼して、何處となく末頼母しい氣がする。やがて東の方の空はほの赤くなつて、神々しい太陽は初日の光を

放つ。彼方の山の頂をうつすら薄化粧した雪に朝日がほんのりと映え、此方の地上には若草の柔い香があたりたゞようと、元旦の朝はすがすがしい。

#### 菓子屋の店頭に立ちちて

本一 津田 貞子

四方館の一角に私の家の親類がある。菓子商で年末は忙がしいので、私は冬休みの廿五日から卅一日までその店頭立つて、せつ／＼と店の手傳をした。年末の三十日。卅一日は目のまはる様に忙がしかった。拾圓札がほんほん入つて來るといひたいが、緊縮の世の中だ。拾圓札が入つて來るところではない。子供は一錢づつ菓子を買ひに來る。けれどお客さんはお客さんだから、お客あつかひにせねばならない。田舎のぢいさんや、ばあさんは中々きつい事を云ふ。これで思ひ出したが、或日の事は私一斤入る様な袋を出して、一生懸命に煎餅を入れてゐると、又其のおばあさんは「ちよつて待つて、こつちにしてもらはう。」「はい。」「といつて又其の方の菓子を入れてゐると「ねー様。ねー様。やつぱりこつちの方がよ

からう」といつて、煎餅を二三枚取つて、べしや／＼食べてゐる。一斤を秤にかけてゐると、側に來て、「これは目方が、ちがやせんかえや？」。「いゝえ、これでよろしうございます」といつて、目方の目もりを説明して聞かせたなら「ふふふふん」といつて、又もや袋の煎餅を三四枚袂の中に入れた。その結果、足らなくなつたので入れようとするに、「五十匁でよからう……」……」  
「なんだ、むつかしいお客だらうと、心でぶつ／＼思ひながら、「目方は如何程に致しませうか？」と問ひ返へした。「まあ、え、一斤もらはふ。」又瓶の中の煎餅を一二枚食べてゐる。やうやく一斤かけて、ばあさんに渡すと、伯母の側により、「安うしいさんせいや。」といつて五錢少なく私にくれた。けれど私はだまつて、伯母にお金を渡した。へむつかしいおばあさんは歸つて行つた。私は此の様な人を始めて見た。お客さんでも、べしや／＼他家の菓子を無断で食べるには餘りだと思はずには居られなかつた。これから後、商賈をするには、色々な人に接しなければならぬが、お客さんの機嫌を取るのには、なかなかむつかしい。

弟

本一 高松 正子

私の家の人氣物？、それは弟である。  
弟は今年一歳で、ぼつ／＼物を覚えようとしてゐる。此の頃は「あばば」とか「ばーば」とか「かつか」とかいろいろな事を覚えて、もう坐つてまで居るやうになつた。私が襖の後に隠れて、だしぬけに「ばー」といつてひよいと襖の後ろから顔を出すに「ぎやッぎやッ」と笑ふ。家中の者がどつとふき出す。別に何で笑ふ事もないが、あれで家中の笑ふ事が出来たものだ。時々父がごはんを一粒口の中に入れてやられますと、小さな口をもぐ／＼させたりべちやべちやさせたりして、食べる風をする。それが又滑稽だといつてふき出す。いつも食事をする所にねかしていたとくと、私達の食べるのを一生懸命に見て居て、自分の口をもぐ／＼させる。何かほしい物があるに相違ない。家中の者が並んで皆がおいで／＼をする。どやつぱりわかると見えて、赤ちやんは母へ行かうとする。強ひて取らうとするに、母の着物にしがみついて中々離さない。

皆赤ちやんを笑はせるのを競つて、珍しい事や面白い

事をして見せると、赤ちやんは小さい唇をつけながら笑ひつゞける。

思ひ出

本一 中村 正子

梅の花の香が漂つて來る或る春の日、暖かい光で一杯包まれた机にもたれながら、二階の柱にかけてある鶯をぢつと見てゐた。無雜作に生けてあるバラの花からは、淡い香がやはらかに、清く、あまくあたりをこめてゐた籠の中の小鳥は、つやつやしい緑の羽毛に包まれた體を如何にも面白さうに、あつちの止り木にとまつたり、こつちの止り木に止つたりしながら飛び廻る。時々ゑぢよこに顔を突込んで、小さいおががつた嘴で餌を食べる。小さい咽喉を「くゝ」と動かしながら。さうして小さい丸い目をさよろさよろさせながら、暫くちつとしてゐるかと思ふと、又以前の様に飛び廻る。春の風は時々そよそよとバラの花の花弁をゆらゆらとさすのだつた。そして私が讀書を始めると、眞似するやうに、鮮やかな絹をさくやうな美しい聲で「ほーほけきよ」と歌ふ。春の空氣にしつとりとけあつて、まるで心からうつとりと

させるのだつた。何時の間にか私と鶯は親しい親しい心の友となつたのだ。春も次第々々に更けて、花も散り、青葉の茂る初夏となつた。——其の頃私の小さい胸は何とも言はれない淋しい思ひで一杯になつた。それはあの可愛い私のお友達が、不圖した事にあの美しい聲を聞せなくなつてしまつたからだ。そして籠の中になつとしてふるへながらまるくふくれてしまつたから。——なぜだらう？……病氣にでもか、つたのかしら等と思ひ續けた。鶯は益々弱り行くばかりだつた。  
或日の事、私が學校から歸つて見ると、どうした事か鳥籠だけ淋しくつられてゐる。鶯はどこにも見えない。もしや私の目の誤りではないかと思つて何度も何度も見返したが見あたらない。あまり氣にかゝるので、母に尋ねると、「あれはね、あまり弱つてゐたから今の中にがしてやつたら、外に出て蟲でも食べて又元の元氣になるだらうと思つて、可愛想で／＼ならなかつたけれど、……；けれどももし死んだらなほ可愛想だからにがしてやつたの」と言はれた。私は急に親しい友に別れたやうな悲しさと淋しさを覺えた。これからはあのやさしい姿が、あの美しい聲が——と思ふと、たまらなく物足りなさを感ぜずには居られなかつた。



梅の花の咲き初める頃になると、何時も思ひ出さずには居られない。

#### 四季

本一 磯野千尋子

冬は炬燵で燈下にしたしむによい時だ。  
鏡湯から歸り道、つめたい風が頬をかすめる。お月様も青く澄んでつめたさうだった。遠くで犬が吠えてゐる聲が、黒く青く晴れた夜の空に、うつたへるが如くかすかに聞えて来る。たまに道を通つて行く人々の足音もさむさうに響く。炬燵に入ると淡いねむりにさそはれる冬の晩だ。

其の頃、春になつたらと、おそろしく待遠しかつた春が来る。霞につまされた山脈、天然自然の風景につまられてそだつた私達は、どんなに幸福だらうか。春は野の小草にも花を咲かせ實をみのらせる。慈愛に充滿した春は、人々を冬の寒さからよみがへらせてくれる。間もなく花が散つて新緑の香に夏の訪れをきく頃となる。びち／＼と生きて脈打つやうな潑潑な生氣に満ちた少女には夏の天空、夏の海、夏の山などを見るのが一番愉快だ。

そんな愉快な夏が去る頃に、薄着の裾に涼風が立ちそめる。

秋は空も空気もすみ渡る、刻々たそがれて静寂が深まつて行く夕暮はたへられぬ淋しさにおそはれる。秋の夕ぐれ時、門に立ち、月待つとなく、人まつとなく、やるせない淋しさの中に日は西の地平線に沈む。枯葉がちらる秋は哀愁の時だ。

#### 齋藤校長先生を送る

本二 菊屋正子

私共は、昨年春本校に入りまして以来、先生のおいつくしみ深い御親切な御薫陶に感激しつつ、平和に通學し又緊張して勉強致して参りました生徒でございます。此度、突然先生の御辭職を耳に致しまして、校内は何とも形容の出来ない、不安と悲しみに鎮されたのでございませぬ。然し、此の噂がどうか噂のみであれかしと祈つて居りました。けれども、どうしても、其の不安と悲しみは私共の上から取り去る事は出来ません。恰度、雨雲が、山の端からムク／＼と起つて来る時の様でございまして先生はお別れの式で、私共一人々々を子供の様に思つ

#### 今年の梅雨

本二 金子夏江

今日も亦天氣、此の頃は雨の降る日とては無い。梅雨と言ふのに、今年はどうして雨が降らないのだらう。稀に雨模様になつたかと思へば、俄雨となつて直ぐに霽れてしまふ。庭のあやめや紫陽花も二三日雨が降り續くと一層美しくなるだらう。庭隅の梅の實も半ば黄色に變つて、まだ青々した實を見せてゐる。今頃田舎では箆笠姿や姉様かぶりや、田植に懸命なのに雨の降らないのは實に残念である。今朝も農夫達が田圃路で、「少しは降つても悪くは無いのに」「ほんとに、こんなお日和ばかり續くと後が心配だ」等話して居た。私はあの毎日々々ト／＼降る五月雨は實にいやである。けれど、疊がジメ／＼して室内はさながら穴倉の様で、身體にも微が生えさうなあの梅雨は、或るかくれた力を以つて我々に忠實に盡してくれて居る。私は此の貴重な梅雨に深く感謝すると同時に、今年も十分に降つて農夫に安心を與へる様に祈つてゐるのである。

X X X

て居るごおもらし下さいました。私は此時、たゞたゞ涙がにじんで、有難いと言ふ感じと共に、心の奥深く勵まされた。此の様に不束な何も出来ぬ者までも、こんなに深く御考へになつておいでになつたのであるか、一年間と申しますと、そんなに永い年月ではございませぬけれど、私共に對する御慈愛、又先生に對する敬慕の念は、何十年のそれにもまして深厚であります。それに、私共は、其の御心の萬分の一もお答へする力はない、却つて御心配をおかけするばかりではないか、と思ひますと、たまらなくすまない心地が致します。けれども、今こゝに先生と、お名残り惜しいお別れを致しますに際しまして、先生の今後を御祝福致しますと共に、私共は益々勉勵して、諸先生の御指導のもとに、善良な生徒となり、益々本校の聲價をあげます様勉勵まして、せめても御恩報じの一端にご御ちかひします。先生の御體は萩高女にございませぬとも、今まで通りさびしい鞭とも、やさしい父上ともおなり下さいまして私共をどこまでも正しい道へお導き下さいませ様お願ひ致します。此の上は、先生の御健やかに日々をお過し遊します事を偏にお祈り致します。

## 食 鹽

本二 厚 東 晴 子

古から鹽は食物中最も大切なものとして使はれて居ます。私どもはそれを何の氣もなしに、ただ粗末に使つて少々落した位は下駄で踏んでしまふ様な事も致しました。鹽がお金であれば五厘落しても、一錢落してもすぐに拾つて、踏むなどと言ふ事は假初にもないと思ひます。あののががらいな様な食鹽が、どんなに私どもの食べ物においしい味をつけて、私共を喜ばせてくれる事で御座います。私達は此の食鹽の尊きお蔭は考へず、ただお味しさに舌鼓をうつばかりで御座います。其の他日常食物として、一日も人生に缺く事の出来ない、お味噌、醤油、澤庵漬等にも、皆此のながらい食鹽が入つてゐます。私共がこれをお美味しくいただくのも、全く食鹽のお蔭で御座います。又、私共が咽喉を痛めた時なども、少々の時は食鹽で含嗽し、又食鹽注射など云つても、食鹽は醫藥上にも用ひられます。又、化學工業にも用ひられます。其の他、あらゆる方面にも此の食鹽は用ひられます。此の尊き食鹽こそ、私達が人生を渡つて行く上にも、大切な食物と思ひます。それで私共は以後は、食

鹽をたごへ一摘みたりとも、粗末にすまいと心に誓ひました。

## 蟻

本三 玉 井 節 子

「一寸油断してゐたら、もうこんな蟻が附いてしまつたよ、お母さん。」妹はさも大きな事件でも起つた様に叫んだ。「まあ何時の間に見付け出したものだらうねえ」母も驚いた様に、お膳の上に出して有つたお砂糖壺を覗かれた。自分も壺の中を見ると、成程多くの小さい蟻が何處から續いて来たものか、そろそろと壺の中に入つたり、又外に出たりしてゐる。體の割合に大分大きいと思はれる口を以て、あの小さいお砂糖の分子を挟んで、一匹一匹が皆一生懸命に運んで行く。甘いお砂糖ばかりではない。お菓子の欠片一粒落して有つても、死んだ蟲蟻一つ轉がつて居ても、直ぐ蟻の餌食になつて仕舞ふ。

何時のことだつたか、兎に角炎天で焼け付く様な暑い夏の眞晝の學校の歸途の事、家々の軒下傳ひに陰を乞うて歩いて居た時、溝の縁をうねりくねつて往來する一群の蟻に出合つた。と思はず足を後に引いてしまつた。唯

不規律に一面に廣がつてぞろ／＼と這つて行く蟻ならさ程驚きはしなかつたであらうが、自分の見た其の蟻の一隊と云ふのは眞直ではなく曲線を作つて歩いてはゐるが然しその幅は殆ど一定をなして、併も長く／＼引續いて居たのには、思はず目を見張つて驚いたのだ。その蟻の行列に氣が付いた時には、もう大分その一隊が續いてゐた邊りであつた。自分はその一隊の續く所まで見届けてやらうと踵を返して進んで見たが、波の様に曲つた同じ幅の行列は、丁度茶褐色のテープを延ばして置いた様であり、餘りその蟻のテープが長いので終に止めてしまつた。そして途上その蟻の事を頭に描きながら、何時ものやうに家の無い一本道を一歩々々足を運んだ。

「彼の蟻は何を求めて居たのかしら。何故あんな長い列を作つて居たのかしら。小さい芋蟲を見付けたのかしら。いやそんな事はないだらう。あんなに多勢の蟻の行列だつたもの、小さい蟲蟻位ではない。するともつと大きい動物？ 何だらう。それにしても、まあ本當にあれ程の長い列を好く作り得たものだ。」

巢の中から一匹の蟻が這ひ出た。餌を探しに稼ぎに出たのだ。細い幾本かの足を暑い地面に運ばせながら彼方此方を探し廻る中、たうとう巢より何十間と離れた遠い

所に、何か分らない自分達の何百倍何千倍とも量り知れない動物が轉がつてゐるのに出合つた。大きな獲物を見付けた一匹の蟻は、細い足の疲勞も忘れて巢に歸り仲間の方にさも得意氣に話した。そして幾匹かの仲間を連れ出して獲物の在る所に案内して来た。餘り大きいので數匹の蟻では仕事が出来ず、又多くの者に告げに行く。この様にして多勢の蟻は幾千となく幾萬となく續いて行くのだらう。然しなんと規律正しい列を以て續いてゐることであらう。蟻は本當に協力一致の心に富んだ蟲だ、こいらぬ想像から遂に小さいあの動物に再三感心した。

すつと以前の事、何かの本の中に、アフリカの蟻の塔とか寫眞と共に載つてゐた。側に立つてゐる人間の高さよりもすつと高く、岩の様に頑丈な土の塔であつた。どの位の年月を経たものかは知らないが、實際その寫眞を眺めた時は蟻の苦心勞働の現れである事を思はせられた。又同じく雑誌中に或る暑い國では、蟻の群に出合ふとどんな大きい蛇でも、其の他どんな大きい動物でも、忽ち弄ばれて遂にはこの蟻の餌食となる。そして又或る獲物を取ると二重三重にその周圍を取圍んで敵の襲來に遭つても中々獲物を離さないと言ふ事が載つてゐた。

たつた一匹の蟻を、大きい動物と比較する事は到底出

來ないがその比較する事も出来ぬ小さい弱さうな蟻が、何十萬何百萬と寄つてたかつて敵に向へば、一匹々々の努力と多勢の協力とによつて、大した力となるのである。この努力と協力を考へると、この暑夏に一生懸命に働き、冬の貯へとする蟻によつて少なからぬ教訓を興へさせられる。

## 弟

本三 藤田 幸子

黒い土の上に、ほつかりと濃緑の小さい夢の芽が靨く頃、それは私の住む邊では冷い霜月の末だが、其の頃から私の弟の病氣は段々と快方に向つて來た。

二月に餘る長い病床に呻吟してゐた彼にとつても、それはとても大きな喜びであつたには違ひないが、其の看取りする私達もやつと永い間の不安から救はれて愁眉を開いた譯だつた。其の頃から私の家の沈澱してゐた空氣が少しづつ、明るくなつて行つたのは勿論である。私と弟とは俗に云ふ年子で一つ違ひであつた。従つて私達は幼い時から、兄弟中で一番良い遊び相手だつた。

「小さい姉ちゃん、早く歸つてね。」

毎朝私が學校へ行く時彼は斯う云つて念をおすのだつた。弟は私が傍に居る時が一番元氣が良かった。私は又毎朝最寄りの神社に参拜して弟の全快を、誰にも知らさずそつと祈るのが例であつた。

何時も、「お前はあちらへ行つて勉強おし。」と母に言はれて立たうとしても、弟の淋しさうな顔つきに引かされて遠遊んでやつた。だからあの時分私は、試験の時でも、ふだんでも一寸も机に着いた事は無かつた。だけどさうする事が病に苦しむ弟に取つて、唯一の慰めだと思へば、それ位私には何でも無かつた。

それはもう全快に一息と云ふ或日であつた。珍らしくも其の日弟は床の上に坐つてゐた。

「小さい姉ちゃん、せんせいももう少し位外に出ても良いと云つたよ。だけどお母さんが出してくれないの。姉ちゃん後生だから外へ一緒に遊びに行つてくれない？」弟の顔には切なく、哀願の色が判然と表はれてゐた。永い／＼間も外へ出た事の無い彼に取つて、それは本當にどんなに大きい希望であるかは察するに餘りがあつた。

「お母さんは？」

「お母さんは町へ出たの。」

「大きい姉ちゃんは？」

「あちらでお裁縫。」

弟の目はいき／＼と輝いた。幸か不幸か邊には誰も居なかつた。私には彼の可憐な申出を拒絶する勇氣が無かつた。

「はいへ行くと云ふの。」

「はいでも姉ちゃんの好きな所へ。」

私は彼を連れて行くべき所を色々考へて見た。何處が一番適當かと云ふ事は一寸判らなかつたけど、結局小さい時からよく二人で遊びに行つた千人塚へ行くことに定めた。

「じゃ千人塚へ行かうね。ほんの一吋よ。」

弟は躍り上つて歡喜の聲を上げた。此の時はまだ私の心の奥に彼を連れ出す事は、非かを迷つてゐたけれど、弟の此の喜び様を見るとどうしても口に出すことが出さなかつた。

「ぢやあね、お母さんにも大きい姉ちゃんにも内證よ」是がどう云ふ結果を呼ぶか神ならぬ身の知る由も無く私はいか／＼と弟を連れ出してしまつたのだつた。千人塚は家から五分とかならなかつた。暖かな日和と云へ寒い霜降り月の末、吹く風は氷のやうに冷たかつた。氣

遣ふ私の顔に引きかへて弟の顔は喜びにはち切れさうだつた。永い間小さく區切られた窓からしか外を見得なかつた彼にとつて、此の廣い天然の風景に久々に接し得たのだから其の喜びも當然だつた。

千人塚からはよく海が見えた。白い鷗の飛翔や、赤い船等を見て弟は手を叩いて喜んだ。

「あんなに喜ぶんだもの。連れて來て良かった。」私も満足だつた。

だけど、だけど、連れて行つたのは矢張りいけなかつたのである。

其の翌日私は學校から歸つて、母から

「今日ね、どうしたものか晝前から又どつと武に熱が出て俄かに悪くなつたよ。昨日あんなに出たがつてゐたのを抑へて用心した位なのに。」

と云ふ事を聞いた時、私は頭がくらく／＼として天地が一時に眞暗になつたやうな驚愕を覺えた。

「やつぱりあれが、あれが悪かつたのだ。」

家内中の人は私達が千人塚へ行つた事は少しも氣付かなかつた。

ともすれば倒れさうになる身體をやつと支へながら、弟の病室に入つて見れば、昨日はあんなに元氣だつた弟

が蒼白な苦しげな顔をして、すやくと寝入つてゐる。「武ちゃん許して。私が一番悪いのよ。」もう一步で全快と云ふ大事の時に、二月餘りも御飯一粒だに食べ得なかつたやうな弟を、分別もなく外に連れ出したりした愚者は此の私なのだ。お母さんさへ止められたものを。考へれば考へる程私は堪らなくなつた。

其の翌日私は頭がすき／＼痛んで、とても登校する気がしなかつたので、弟の病床に着いてゐた。

「姉ちゃん、あそこへ行つた事を云つた？」

うと／＼と眠つてゐた弟が突然目を開いて問ひかけた。「さういふ胸に響くのを強ひて堪へて、」

「……………」首を振つて見せた。

「武ちゃん、御免ね。姉ちゃんが悪かつたのよ。」

「い、や僕が悪かつたんだよ。ね、姉ちゃん、あれはお母さんにも、誰にも云はないでね。云ふと姉ちゃんが吐られるから。」

優しい弟の心遣ひに私は何と答へて良いか判らず、只涙がほた／＼と膝の上には落ちて行くのを見てゐた。

弟の危険の日は續いた。私の學校を休む日も續いた。どうぞどうぞ弟の命を助けて、出さる事なら私の命と取り換へて、と身も世もあらず萬の神佛に祈つたのも入

れられず、それから十日目頃、遂に弟の總てはあはれ果敢なく短い生涯と共に此の世を散つてしまつた。可愛いらしい白木の柩の中に冷く横へられた弟の顔は大理石のやうに白くて美しく神々しかった。

一家を擧げての悲歎の中に取り分けて私はもう茫然としてゐた。

「私が弟を殺したのだ。殺したのも同然なのだ。私がある時連れて行きさへしなかつたら、あゝ、私は恐しい人殺しなのだ。」

世界中で私と弟のみ知つてゐる此の罪、弟が死んでから私が黙つて居さへすれば永久に知れない此の罪に私は氣も狂ふかと思つた。誰も知らない丈に私の惱みは一しほひどかつた。幾度かそれを私は父母の前に懺悔しようかと思つたけれど、それは餘りに情なかつた。

「許して、許して。姉たるべき私が、あゝ、武ちゃん」私は柩の前に跪いて、幾度地に俯し天を仰いで悔悟の涙に暮れたか判らなかつた。

弟は私を一寸も恨んでは居なかつた。弟の靈魂は安らかに満足して天上へ去つた。けれど地上に残されし者の苦しきはひどかつた。

これは今を去ること三年前の、弟の死に際しての、誰

も知らない哀史である。

私は何時も弟の事を思ひ出す度に、身をかきむしられるやうな苦痛と悔悟を覚えるのである。

### けむり

本三 岩本 當子

火のついた蚊遣線香を一本、電氣にかざして見るともなく見てゐた。

えらえらと立ち上る煙がなやかな曲線を描いたかと思ふと、パツと崩れて恰度夏の雲の様にむくむくと湧いて出る。

ふうわりと廣がると羅衣の様に青く透き通つた。綺麗な色だ。まるでダンスでもしてゐる様に軽く、靜かに、舞ひ上つて行く。

三筋に別れた。藻草が水にゆらぐやうに捕つてゆれる中途からもつれ出した。細い幾筋かに分れて、思ひ思ひの方向にさまよひつゝ、夢の様に消えてしまふ。……………  
儂い少女の日のあこがれのその様に――。

X X X

### 使命

本三 竹田 貞子

世には恵まれし人間生活に、全く無意義な人がある。

あたかも蝶の春にさまよひ、享樂にさながら幻を追ふが如くに、漂然と人世の迷路にたゞよひ、むなしく春の淡雪と消える者がある。

人間が生存を維持して行く上には、萬人に與へられた天の使命がある。男子に家を總べ、社會を構成し、國家の盾となるべき使命を有する裏に、女子には陽に對する陰の使命がある。

又、萬人には誰しものがれ得ることの出来ない自己獨特の使命がある。即ち、自分と同じ類の人は一人も居ない。何處を尋ねても歴史をさかのぼつても勿論ない。未來に於ても恐らくない筈だ。之が各々獨自の使命を有する最も明白な證據である。

猫は鼠を捕へる。故に猫は決して己の使命を忘れてゐない。使命を持つべく生れ出でた私達には、其の目その日の使命即ち仕事がある。私達はその使命たるべきあてがはれた仕事を果す責任を持つ。

今日の使命を果さんとすれば、今日の仕事を果すべき

である。使命の延期は絶対に禁物である。怠慢な心がつ  
のる毎に、肩荷は重くなる。之は殆どあらゆる人の體驗  
し心をなやます所である。

更に進んで私達の最大責任たる使命を成就するには、  
物事に當る第一歩を重大視せねばならない。

十里の旅へつく第一歩と天外萬里異國への鹿島立とに  
於ては、その第一歩に大いなる意氣の相違がある。誰し  
も摘草、遊山の山登りには大した考へは持たぬ。

しかし一たん高山、峻嶺の登山の途につく時は、豫め  
の用意は勿論相當の覺悟のもとにふみ出すだらう。

すべて物事は、第一歩の目標を確と定めておいてこそ  
始めてその日くが支配されてゆくのである。

私達は朝の第一歩の氣持次第で、能率の増進をはかり  
得る。すなはちその覺悟如何で我が重大なる使命をなし  
とげられるのである。

### 港を見物して

田中清子

ブンと鼻につく港の匂、カンカンと照りつける陽、幾  
本となく突き立つた煙突、そしてもうもうと立上る煙は

青々と暗れ渡つた空を覆ひ、チリチリと燃けついたアス  
ファルトは、我等を焼きつくす様な夏の日であつた。  
さうした中を私達は汗とほこりにまみれながら、突堤  
へと急いだ。

「あゝ」思はずはとばしり出た喜びの聲。

油の如き海上を吹き渡る風に、ひらひらと舞ふ五色の  
テープは、幾本幾百とも数へきれず、ブラジル行の河内  
丸は、雄大な姿をゆつたりと埠頭に横へ、甲板に或は突  
堤に、黒山の如く群をなした人々は、手に手に國旗をう  
ち振り、門出を祝してゐる。

私達は始めて見るこの光景に、しばしは言葉もなく見  
とれてゐた。

と突如ひびき渡る汽笛の音と共に、ゆつたりとかまへ  
てゐた河内丸も、するすると岸を離れ、一つ一つ切れて  
行くテープはひらひらと風に靡き、打振る國旗と萬歳の  
聲は又一しきり湧きかへり、さしもの突堤も人と聲に満  
ちた。

やがて見送りの船に附添はれた河内丸は、日の丸の旗  
と共に遙か彼方に消えて行つた。

ほつとした私達は、この雄壯な志を抱いて遙か海の彼  
方の異國に働きに行く人々に對して、心からなる感激に

胸一つばいになつて、自然と涙の出るのを感じた。

### 指輪

本三 齋藤雪子

それは晝をも欺く様な萩の銀座通りだつた。

美しく飾り出されたT指輪店に、何気なく足を止め  
た燦然と光りを放つてゐる種々の指輪の中、一だんと目  
立ち、一だんと光澤の強い、眞赤な眞紅な紅薔薇の様な  
その様な大きな玉の指輪が有つた。別にはしいとは思は  
なかつた。

明る日も明る日も、その指輪はウインドーの中で玉の  
如く光つてゐた。

或日だつた。何時もより遅く學校から歸りがけ、そつ  
とウインドーを見た。けれどその指輪はも早そのウイン  
ドーから姿を隠してゐた。軽い失望を感じながら私はほ  
んやりと佇み、その指輪の幸福な様にと祈つた。きつこ  
きつとIの字形の麗人の指先に前よりも一層強い光を放  
つ様にと。

### 繪日傘

本三 尾崎登茂惠

淡い水色の絹地に薔薇の花を散らした派手な日傘。水  
色の清楚な地に石竹の花を流した粹な日傘。黒地に白で  
模様を描いた上品向の日傘等が、明るい街頭の飾窓の中  
に、あの華奢な姿を見せる頃となる。いつの間にかし  
のびやかにあの溼潤たる夏のおとづれをさく頃となる。

くるくるとしなやかな繪日傘がまはると、だらりと下  
つた絹紐もくるくると同じことまはる。そつと後からの  
ぞいて見たら日傘の主や誰?

「お師匠さま、さよなら。」今まで聽えて來た粹な音色  
もばつたり止んで、出て來た二人の下町娘。帯を胸高に  
しめた、口紅を愛くるしくさした瞬間の姿を、ばつと開  
いた紅色の燃える様な日傘の中にしながら薄物をまごつ  
た華奢な姿で、いそいそと歸つて行つた。夏の日。

夏の輕快な淑女等の洋服姿にも、この繪日傘は一種の  
異つた異國的な風情を添へる。

暑い日。日傘をさした人々を見ると、私はたまらなく  
なつかし味を感じる。それはあの麗はしい繪日傘の中に  
は、白百合の香のやうな甘い幸福が満ち満ちて居るやう

な氣がするからである。  
私はこの繪日傘から先づ夏のおとづれと、來るべき夏の幸福をきく。

## 海外發展と女子の自覺

本四 羽仁喜久江

外國人が日本に來ての感想談に「日本は面積の割合に人口が非常に稠密である。何處に行つても家が多く、山の上にも家も建てゝある。」といつたさうであります。が、成程さうであります。世界の主なる國で、一平方軒に就いての人口の密度を申しますと、イギリスが第一位、日本が第二位、ついでドイツ、イタリアの順でございます。が、イギリスは人口が稠密でありましても、海外に廣大なる植民地があつて人口の多いのを憂ふるには足りません。然るに、日本ドイツは殆ど行詰りの状態にありますが、ドイツは其の本國に平地が多いため、まだよいのでございますけれど、日本は山が多く此の點に於ては我が國は一層困難な状態にあります。其の上現在非常な速力で人口が増加しつゝあります。即ち明治初年は約三千萬人であつた内地人が大正十五年に於て、六千萬人以

上となりました。僅か六十年間に二倍と成つたのであります。最近世界主要國の人口の増加は日本が第一位、次がイタリー、米國、ドイツ、イギリス、フランスの順で我が國は今でさへ人口が多過ぎるのに毎年の増加は甚だ大でありますから、早晚必ず大なる行詰りを生じませう。是は食糧問題が現今盛に喧傳される所以であります。今より百餘年前英國人マルサスは「人口の増加は幾何級數的であるが、食糧の増加は算術級數的であるから、世界は早晚食糧問題に悩まされるであらう。」と豫言いたしました。我が國は全くマルサスの豫言どほりになりつゝあります。

さて私達は此の行詰りつゝある問題を如何にして解決したらよいのでございませうか。それには三つの方法がございます。即ち第一は食糧増産論、第二は産兒制限論、第三は海外發展論でございます。

第一の食糧増産論は今盛に講ぜられてありますが、これは暫くの急場を凌ぐだけの事で、マルサスの言つた通りで、永遠の解決法ではなからうと存じます。

第二の産兒制限論は近時多少これを唱へる人がありますが、大和民族の發展の爲には、何處までも其の數を増さなければなりません。これを制限する等といふ事は全

く退嬰の策であります。

此處に於て、海外發展の問題より外に方法がないのでございます。海外發展の方法にも種々ありますが、大要之を三つに分けます。一は領土の擴張、即ち植民地の獲得で、二は工業生産の振興と貿易の發展で、三は海外移住でございます。

一の領土の擴張は人類の平和を理想とする今日では採るべき良法ではございません。

二の工業生産の振興と貿易の發展とは、他國より原料品を輸入し、これに加工して輸出し、其の利益に依つて食糧品、其の他の生活必需品を外國より買入れる事でございます。それにしても原料品の購入にも製品の販賣にも、直接國人が海外に出かけ定住しなければなりません。それでなければ、十分の利益を得る事は出来ません。即ち我が國の人が世界中處々を舞臺として活動せねばならないのです問題はこゝにあるのでございます。

三の海外移住はドイツ人もイタリー人も盛にやつてゐる方法で、人口問題解決方法として、極めて良い方法でございます。我が國の人も早くより之に着眼し、近くは滿洲、シベリヤ、遠くは南洋布哇、南北アメリカに移住して居りますが、是等在外本邦人の合計數は只今の所で

六十七萬でございます。それは僅か一ヶ年の人口増加數にも足りません。併し今日では我が國人はアメリカ合衆國や、英國の領土内には移住がむづかしい様であります。是は嘗て大問題となつたのでありますが、こゝではこの問題には觸れないで置ませう。我が國人の自由に移住出来る所は、南米、和蘭領南洋及び滿洲でございます。年々ブラジル共の他に移住する人の多くなりましたのは人々が是等の問題に就いて目覺めた兆でございませう。又最近政府は、ブラジルの風土が極めて、日本人に適當してゐる所から大いにブラジル行を奨励してをります。併しこゝに我が國人の海外發展を妨げる原因としまして私共女性に大なる關係のある問題があります。それは第二の貿易上の海外發展にしても、第三の移住の爲の海外發展にしても、主として活動するのは勿論男子であります。が、男子のみの海外渡航は永く續けられませんが、彼の地でじつと辛抱して成功するまで待つ事は眞に困難でございます。これは海外に行つた人の僞らざる告白で、どうしても女子も共に行つて、女子が内助しなければ無理でございます。歐米人が外國に行き、其の地の土となるも厭はない決心を以て辛抱するのは、多くは妻子を伴ふからでございます。是に於て、私達女性は大いに自覺す

る必要があるのではないかと。

其の第一は海外渡航する様な進取の氣象に富んだ男子に喜んで嫁ぐ事でございます。又一旦嫁いで後此の問題が起つた場合には、女々しい事はいはず、進んで同行を快諾し、夫を勵ます事でございます。即ち妻として夫を奨めて海外發展せしむる事でございます。

第二は自分の子を育てる時に海外思想を吹き込む事、即ち慈愛溢るゝ母の双腕に抱かれて安らかに眠つてゐる純真無垢の其の頭に、海外發展の必要である事を十分に吹き込む事でございます。三ツ子の魂百までとか、搖籃に於て吹きこまれた母の思想は、其の子一代をも支配致します。可愛い、我が子を外國等にはやらない。と言つて泣いたのは舊時代の女性の事でありまして、今日の女性是我が子の海外發展は、名譽の出陣と同様に考へて、大いに獎勵し、又力をつけてやらなければなりません。即ち母として子供を世界的に育てる事でございます。

要するに、海外發展も根本的にしようと思つたら、女性の自覺と奮勵に待たなければなりません。そして私共女性の一念の如何に依つて、我が大日本帝國が將來に於て生きるか、否かを決する重大なる關係がある事を切に自覺したいものでございます。以上

### 曲り角に立ちて

本四 竹田直子

私達が今日まで辿つて来た道、それは廣い平坦な何の障礙物もない楽しい道でした。而も周囲の美しさ珍しさ等に心を奪はれて、ともすれば躓きやすい私達の背後には、何時も慈愛深い父母、或は先生方の擁護の眼が注がれてゐたのでした。その爲に私達は、唯一度として躓くこともなく、無事に一歩々々を進めて、今此處に立つてゐることが出来るのであります。がしかし静かに佇んで行手を見詰めますと、其處には更に新しい幾筋かの道が私達を待ち構へてゐるのが見えます。即ち幼い子供の時代から學生生活へかけての廣い一本道は、早やその終末に達しようとして、その先は種々雑多な道に分れてゐるのであります。或は今迄の様な平坦な道、或は石塊道、或はぬかるみ道といふ様に、社會生活が複雑になればなる程道の數も増して來ます。私達は馳つて此の岐路に達し、此等の道の何れかを進まねばならないのであります。けれども世の人の希ふ幸福は、必しも平坦な道に得られるものではなく、石塊道ぬかるみ道の先に樂園が横はつてゐないとも限りません。大切な岐路を眼前に控へた私

達は、心を鎮めて自己の目的と境遇とを振りかへつて、自己の進むべき道は、果して何れの道であるかといふ事をしつかりと定めなければなりません。往々にして世の若人達は、目先の利益、或は僅かばかりの楽しみを得んが爲に、方向をあやまり一生を失敗に終る人もあると聞きます。

一度その曲り角をまがりますと、私達は唯一人で歩まねばなりません。若し踏みはづして倒れたならば、自分の力で立上らない以上は、再び歩みを運ぶことは出来ないのであります。それ故に、前よりも一層の綿密の注意と、多大な努力を要するのであります。そして自分の目的地に達するまでは、如何なる困苦にも負けないといふ大いなる勇氣と、確乎たる決心を持たなければなりません。

私達は此の覺悟を持つて馳て來るべき岐路に立ちたいのであります。

### 帽子

本四 中 所 富 子

佳子は明日の遠足の事を考へながら家に歸つた。

佳子の父は十一年前彼女が四つの時、或る役所に務めて居たが、ふとした病で床に就き、母の厚い看護の甲斐無く他界した。

母は父の僅の扶助料と自分の内職の裁縫とに依つて幼い佳子を育て、今は町の尋常科を卒業させると、貧しい中からも女學校に入れてゐるのであつた。

唯今

と佳子は挨拶すると、何時もの通り母は、あゝお歸り。其處の茶棚にお八つが有るからおあがり。と云ひながらせつせと頼まれ物の裁縫をし續けて居た。佳子の机からは前が格子戸に成つて居て、格子の相間からよく前の道路を行く人が見えた。

佳子が今お八つに頂いたおさつこの二つ目を口に入れようとする時、彼女と同じ年ぐらみの少女が二三人セイヤ一の服にフェルトのいゝ帽子を被つて居たのを見た瞬間佳子は母に聞えない様に、

明日の遠足にわたし一人帽子を被らないのかわ、クラス誰彼もなく皆持つて居るのに……あんない、のでもなくともい、いゝえ明日一日だつていゝんだけ……いゝえ、いゝえ、駄目、あきらめよう貧乏なんだから。女學校にまで上げていたゞいて居るのに、お母様

にすまないわ、勉強して偉く成るんだ、それが一番い  
ゝ、お母様あんな愚痴を云つてすみません。

とつぶやいた。

一滴二滴と出て来る涙を拭きながら少女達の行く方

を指すように見つけた。

さう、そんならい、けれど、

と云つて母は佳子を見て居た方を一寸見た。

共の夜は明日の遠足が有る為め明日の必要な品やセ  
ラーの服と靴下と行儀良く枕元に揃へて早く床に就いた  
翌朝佳子は母より早く起きて自分でお辨當を作つて母  
をあまり早く起きさせまいと床より出て見ると、もう母は  
お辨當の用意をすませてゐた。

佳子は朝食をすませると、  
ではお母様行つて参ります。

佳子、一寸お待ち、お前にいゝ物と上げるから、

と云つて箒箆から昨日格子越に見た少女達の被つて居た  
のど、同じフェルトの帽子がはかれて、  
これ帽子、これを被つて愉快に遊んでおいで。

と微笑しながら佳子の頭にのせた。

佳子は其の間、はつとした。若しかあのつぶやきが  
母に聞えたのだらうかと、なんどなく恥しく成り頬がほ  
てつて来た。

さうして、佳子は此の上なく母の有難い心盡しに感謝  
せずにはゐられなかつた。

お母様、有難御座いました。

それから幾分かの後、佳子は二三人の友に誘はれて楽  
しさにフェルトの帽子を被ふつて家を出た。

母は二三人の友と楽しく語り合つて行く佳子をほろろ  
みながら何時までも見送つて居た。

一九二九、九、二二、稿

### 田床山に登る

本四 關屋ヨシ子

海拔三百七十米、萩の東方に屹然として立つてゐるの  
が、田床山である。その田床山の登山と聞いて、私の心  
はどんなに欣躍したらう。お友達から、蕨取、その他  
いろいろの面白いお話を聞かされてゐるので、田床山に

どんなにか、希望してゐた。それがしかも爽快極らない  
初夏の日に實現しようとは……………

朝六時半過ぎ、お友達に誘はれて家を出た。以前の修學  
旅行に較べて、何と少い荷物だらうと思ひながら、それ  
でも變らぬ喜びを胸に抱いて、松陰神社に向つた。真赤  
い頬、足取りに、元氣潑潑としたのを見せながら皆様が  
段々見える。富士山へでも登山する様な恰好の先生の  
いらつしやるのも、歸つてからの土産話の一にも數へら  
れさうだ。

七時半、列を調べて四年、實二、三年、實一、二年、  
一年の順々に、二列になつて出發した。上野から山に差  
掛る。夏服の純白が周囲の緑と相映して本當に氣持良い  
雑木林を過ぎ、清い谿流を左右に見て進む。勾配はゆる  
やかで一人行く位の中である。後方を見返ると、磯の行  
列の様、先頭を行く嬉さが全身に込み上げて来る。松林  
を過ぎ峠に差掛る。春の日に鳴き後れたのか、鶯が緑蔭  
深い間から聲を洩らす……………と思ふかと思ふ鳴いて  
来る。縁の中から時々顔を出してゐる谿流の邊に名知ら  
ぬ純白の可憐な花が見えたのは手折りたかつた。可愛い  
ゝ松の生えてゐる野山の様な所に出る。見返ると山峰が  
波の様に起伏して、足の運びが鈍くなつて来た。力強い

引力を足に感じて、竹林を過ぎると、とても廣い溜池に  
出る。こんな山中に溜池があるとは、ちよつと意外だつ  
た。傍の二三人から猿潭の池の廣さと比較なさるのを耳  
にする。周囲を環周する山々は、水際を境として又水面  
に山を畫いて、池を包圍する。若芽を競ふ緑が周圍にも  
見えた。さらさらしい初夏の光は鏡の面に限りもなく渡  
る。

……宵……山頂の月が冴えわたり、神秘的な湖上に明珠  
の様な影を寫す時、そよ風の風に草木のざわつく時どん  
なに傳説的な思ひに入るであらうかと、私は湖を想像し  
て思つて見た。

うねうねした道を過ぎて行き、やがて赤禿の所に出る  
と、今来た道が下に見下された。汗を拭ひつゝ、氣息奄  
々として、やうやく頂上に達した時の喜び。今まで覚え  
なかつた渴が急に喉の廻りをいらつて先刻の谿流など  
目前にちらつく。

なるべく木蔭の廣い場所を選んで休息の場所とした。  
足を伸ばせながら、でもまだ山路をお辿りになる下級生  
の方など思ふと、本當に濟まない様な思がした。友達  
のあつい情の冷たい水で喉などうるほし、雑談や食事の時  
間を過す。鬱蒼とした木の間から俯瞰すると、萩が一望



だつた。「あゝあそこは〇〇が見えるわ」「でもあんな所  
か知ら」と友達と指し合ふ。そして萩の町が井然として  
ゐる事が分つた。すうと向ふに傘山が見え一年生の時代  
に登つた、なつかしい思出など脳裡に甦つた。渺々とし  
た海面はどんなに私達の心を廣々とさせたか。水平線の  
向ふは麗に霞んで見え、六島村は遙かに見渡された。友  
と「あれが〇〇島だわ」「いえあちらの方ですよ」と諍ふ  
のも興味深いものだつた。香氣の漂ふ新芽の中に圍まれ  
て、青空を仰いだ時の心持、何の束縛もなく、たゞ恍惚  
として、何時か夢幻の世界に入りそうだつた。快い鳥の  
羽音が足許から舞ひ上つて來、木々のアンテナを傳つて  
方々から談笑の聲が、靜かに耳に入る。

暫くたつた。せき立てる様な喉の欲望を満足するため  
水を求めに、木陰から出て見ると、もう皆様が並んでい  
らつしやる。驚いて列に加つたが、まだ人数が調はない  
ので暫く待つ。……視線を向ふの山々から轉じて  
大分水を飲みに行つた人であらう。黒影が凹凸した山腹  
を活動寫眞の様に見せて上下してゐる。突然、サイレン  
が、あたりの喧噪を靜寂にした。こんな山中まで聞える  
のは、ちよつと意外だつた。中野先生から、二三の山の  
名を教つた。

下りは登りと違つた、山頂から麓まで連つた一直線だ  
つた。何物かに追はれる様に、私達は只走り続け、降り  
續けた。吐息も急がしく、逸足だ。  
一同は暫くして、松陰先生の誕生地に集つた。皆なの  
顔に、行きがけの元氣も何處へやら、疲勞!!。疲勞!!。  
只それのみが、全身を征服してゐた。其處で、すがんぐ  
しい初夏の景色から生れた緑色の風を、まともに受けて  
暫く休憩し、校長先生から今日の態度に付いて、御批評  
を受け、解散した。  
嬉しい、そして私達の最も記憶に残るであらう、第一  
回の遠足日は、夕陽と共に西の山に入つていつた。  
困苦に耐える氣力を養ひ、諸々の知識、體力を練る事  
なきに就いて、私達は大いに利益した事と思ふ。

### 行倒れ

本四 小原 正代

陽の光の薄い日だ。歩きながら空を仰向くと、彼處  
に日があるのだなと思はれる邊がぼんやり白くして、空  
一面が薄雲で掩はれてゐる。何だかしら寒い風が、絶え  
ず廣い街の屋並に添うて地の上をそ〜つと吹いてゐた。

あゝ冬が來たな、と思つて、私は歩いてゐたが、今ま  
で前方に向つて歩いてゐた私の足が、眼と共につと路傍  
の人だかりのしてゐる方にそれた。

「何があるのか、といたさいた。」と言ふ聲がして二三  
人の野次馬連中がやつて來た。

てくてくと忙しうに歩いて來た人達もこゝまで來る  
と、一寸立止つて覗いて行く。

私も好奇心にかられて、人だかりの間から一寸顔を出  
して見ると、其處には、見すばらしい襤褸の着物をまど  
つた一人の老人が横たはつてゐた。そのそげた頬のあた  
りは白い髻に掩はれてゐる。そして薄く眼を開いたり、  
閉ぢたりして、薄いかすかな息を吐いてゐる。私はそれ  
を見るとき、暫く或感情に打たれて、知らず識らずに涙が  
頬を落つるのを禁じ得なかつた。

可哀相にきつと寒さと飢のために倒れたのだ。あたり  
の野次馬連中もさすがに聲を立てる者が無い。互に同情  
の眼をもつて見てゐる。がさて「誰もどうしてやらう」  
と言ふ氣は無いらしい。私は先を急ぐので、後に心を残  
しながら歩いた。

今の人は身寄が無いのであらうか、放浪者で此處まで  
來て飢のために、歩かれ無いやうになつて倒れたのであ

らうか。それども……等と考へてゐると、後の方で俄  
に大きな聲がした。私はふと後を振り向いて見ると、誰  
か呼びに行つたものだらう、巡査が、或威嚴を保ちな  
がらその人ごみの中に入つた。

私はやつと安らかな氣持になることが出來た。

「あの老人も警察に保護されればもう安心だ。」と私は私  
に言ひ聞せる様につぶやいた。

薄い風が地の上を匍ふ様に吹いて行つた。

「飢ゑたる人々。」ふと私の頭に何かで讀んだ句が浮んだ  
空を仰ぎ見ると薄曇の空はさつきよりも憂鬱だ。私は  
思ひ出した様に足を速めた。

### 新春を迎へて

實一 弘津 静子

昭和四年も夢の間に過ぎて、私達は此處に新しい希望  
に輝く新年を迎へる事になつた。自然の萬物はみな生氣  
に溢れてゐる。

私達は今此處に過ぎし日を顧みて、この新年に何物か  
をもとめて進まうではないか。そしてこの年こそ意義あ  
る生活をし、將來の光明をみとめ様ではないか。

考へて見るに私達は今日まで何を目的として生活して来たのであらうか。唯將來もなく過去もない、現在の幸福を求めて来たのではあるまいか。いや過去の事はすべてを運命と諦め、未來にのみあこがれの儂い夢を見て来たのではあるまいか。けれど今こそ其の夢から目覺めて目的を一新する時ではあるまいか。そして自己を見出し目的を定め、大なる覺悟と決心を以つて、昭和五年の新春に其の第一歩をふみ出すべきではなからうか。たとひ現在何の累ひもない學生々活をしてゐるとは云へ、やがては社會に出なければならぬ。今日の社會の現状を見ては、たとひ女子とは云へ唯ぼんやりと其の日共の日の幸福をむさぼつてゐる事は出来ないであらう。私達は昭和五年の新春を迎へると同時に、お互に自覺してしつかつた目的を立て、現代に相應しい女性として進み行くべく修養すべきではないか。

## 夕暮の空

實一金子芳子

青桐の一葉一葉に思出多い初秋がおとづれた。四方の

山々の濃緑な葉陰に、化粧したはげの葉がちらちらと見える。つるべ落しの秋の日は早や夕暮にせまつて居る。思出深き初秋の夕べ：四方はだんだん霞んで黄昏の色を深めて行く。私はお湯から上つてちつと空を眺めて居た。あゝ星が流れた。秋の空の奇怪な現象の魅惑にひかされうつとりとして居た。南の方には人魚の落した涙の様な星の一群が、燦爛と輝いて居る。つゝい。涙の様な尾を引いて空の彼方に流れた。唯夜の空の言ひ難い現象に動され私の心は、夢の様な天國の有様が幻と共に詩的な空想を描いた。東の空に一抹の夢が起り、消えたかと思ふと又眞綿の様なやわらかな光澤の白銀の雪だ、夢の如くほつかり浮んだ。静止して居る様な雲もよく見ると微動を續けて居る。私は色々な空想を描きながら、我を忘れて此の奇怪な空の現象に心も魂も奪はれて、唯ぼんやりいつまでも見つめて居た。

## 公判傍聴についての感想

實二小野規子

私は、第一天はどこまでも、公平なる處置をこるものであることをつくづく感じました。又お金と言ふもの、

一時的の慾望を満すために、犯したその罪の輕重にか、わらず、不道の行は一生涯自分の身に付き纏ふものであり、又自分の良心も満足して後々を愉快に過すことは出来ないであらう。その精神上の苦痛は一通りではあるまい、一寸した一時的の慾望を満すために、物質方面を満足するために犯したその精神此の苦痛はそれより以上であります。併し今日の事件に就いて被告の立場は同情致します。何故此の様に前に、今少自分を反省して見て、物の道理を考へて見なかつたらうかと思ひました。又生半途な學問はせぬがよい。僅かな自分の智力を悪用して、一般の正直な人を欺いたことは大へん悪いことだと思ひます。今日の被告の涙がいよいよ自分の本心から出でて、それが誠の心に立歸つたものであつたら、幸だと思ひます。あれが本心から出たものであつたら、罪を赦されて家内の者と一緒に暮らされたらどんなによいでありませう。裁判に依つて、人の心を清らかにすることが出来る、ほんごに裁判の必要が感じられました。

X X X

## 公判傍聴についての感想

實二藤田喜美子

裁判所といふと、誰でも嚴重な所で、何だか門内に一足でも入るのも恐しい様に思ひましたが、本日公判を傍聴致しまして、そんな所では無いといふことが、よくわかりました。又判事検事等も今までは大へんに恐しい様に思ひましたのが、きびしい中にも、私等の持つ同情心のあることを知りましたが、何處までも公明正大です。人は悪い事をすれば、必ず天罰が當ります。家の中に親兄弟を残して、此の様に公判に來た人はどんな氣持がするでせうか、良心がとがめませう。けれども言渡されを判決には服従しなければなりません。少しの過失で、一生の疵となります。私等は何處までも正しい道をふみ、良い教育を受けて行くことが大切です。如何に立派な人でも、悪い思想を持つては駄目です。すべて何事を爲すにつけても、よくよく深く慮るべきであります。決してあやまつた行をすべきではありません。私等は正しく生きて行かねばならぬと思ひました。

詩

深山の小鳥

深山の奥の谷底に  
小さい小鳥が唯一人  
淋しく／＼鳴いてゐた  
小鳥のお家は何處である  
小さい梢の影だろうか  
父さん母さんはなれて唯一人  
どうしてこゝまで来たのだろ

本一 河邊綾子

お人形

机の上のお人形は  
長い／＼秋の夜に  
淋しい夢を見たさうな  
どんな夢かは知らないが

本一 水谷幾子

朝

きもちよい朝  
うらかな朝  
頬をかすめる風は桃色  
木の葉をゆるがす風は水色  
一人ほゝゑまれる心地よい朝  
きもちよい朝  
ほがらかな朝  
頬に輝く光はピンク色

本一 冷泉龍子

桃色のコスモスの  
散つた夢ではなからうか

机の上のお人形は  
長い／＼秋の夜に  
淋しい夢を見たさうな  
どんな夢かは知らないが  
櫻の春のお花見に  
残つた夢ではなからうか

木の葉にはんわり輝く光は緑色  
一人ほゝゑまれる心地よい朝

秋のおこづれ

本一 長富ヨシ子

田の面に  
稲穂は黄金の波を打つ  
そよ風にそよ／＼ゆれて  
彼方此方の山々に  
木の葉は紅葉し始める  
そよ風にさそはれて  
秋の野に  
七草咲いた  
そよ風にそよ／＼ゆれて  
もう秋だ

今に大きくなつたなら

本一 岡野輝子

この子はたまに申します

雨の中

毎日ひなたぼつこをしております  
今に大人になつたなら  
鼠の番をよくします  
この子はほちに申します  
おてておあづけ皆上手  
今に大人になつたなら  
御門の番をよくします

本二 三戸文子

しど／＼降つてる雨の中  
お庭の花がうなだれる  
心配ごとがありますの  
小さな磯のおこづれに  
首を振つてる赤ダリア  
お庭の花がうなだれる  
今日も小雨でうなだれた

鳥

本二 瀧野芳枝

眞赤な夕やけのお空で鳥が鳴きました  
何故鳥は鳴いたのか私が一人知つてゐる  
言つて見ませうか其のわけを  
遠くの〴〵母さんが  
戀しい〴〵つて鳴きました

### 思ひ出

本二 熊毛屋光子

コスモスは  
今も變らず咲くけれど  
此の世を去りし我が友は  
幾年経つても歸り來ず

### 藤の花

本二 齋藤静枝

咲けば咲く程頭を下げて  
やがて立派な實を結ぶ  
我等はこれに何をか學ばん  
任務と謙遜女のつとめ

### むらさき

本三 浅野愛枝

ある人は言つた  
「紫は妖艶驕慢な感じのする色」と  
けれど私は何故か紫が好きだ  
紫はしほらしく  
上品な色の様な気がする  
紫衣の王者 紫被布の麗人等  
紫は華やがで莊重な色だ  
ギリシヤの神々が  
オリンピック山上で祭を行つた時  
ヴィナスのまごつた紫の寛衣が  
如何に美しく映えた事か  
紫！ 紫！  
紫は本當に莊重な麗しい色だ

### 月の渚

本三 田中操

月の渚に來て見れば

寂しく暮れて影もなし  
水面にうつる月影は  
絶えず寄せ來る漣に  
千々に碎けてたゞよへる  
月の光にすかし見る  
水の面のどよめきは  
涙の亂舞の如く見え  
海洋深く秘められし  
神秘のなぞの解けもせず  
ぬるゝひとみに仰ぎ見る  
月は情のそれならず  
冷たく笑みて輝けり

### 春のおこづれ

本三 金子 恭

慈愛には、笑む日ざしに  
若き力の血をうけて  
青くやはらかに草萌え初めぬ  
日蔭の小沼や深山の谷は  
厚き氷も解けぬれば

春風香りて吹き出でぬ  
春のお庭を眺むれば  
やさしく咲ける紅梅の  
ゆかしき香もて満ちにけり  
すべてに春は訪れきたれば  
憂愁の人の心にも  
快活の思ひ花  
咲けよかをれよ大輪に

### 冷酷

本三 室谷キヨ子

意地のかたき人  
水の張りたるが如きハート  
絶えず木枯の吹きすさぶ  
冷めたき胸ぬち  
石像の如きあの横顔の  
かつて笑みしことなく  
永久に涙せぬ君が瞳  
なぜか冷き君が俤  
幼き頃の搖籃に

慈母の子守歌を聞かざりしか

思ひ出

本三 内山 貞子

うす桃色の薔薇の花  
おぼろにかすむ春の夜は  
可愛い妹の夢を見る

夏は川邊にあいらしく  
小さく咲いた月見草  
眺めて遊んだあの方の  
優しい瞳を思ひ出す  
さやかに咲いた白菊の  
そよ／＼揺れる秋の日は  
花を手折りに楽しみし  
別れし友が偲ばれる

静かな冬の雪の夜は  
幼い時の思ひ出の  
うら淋しさに夜が更ける

夕べ

本三 岩武 哉

思ひ餘りて唯一人  
覺束なくも夕暮の  
むなしき空を眺めつゝ  
涙に袖をぬらす時  
静に胸に手をくめば  
一入秋の寂しくて  
知る人もなし我が心

學びや

本三 阿武 マツ子

明るい學びやには  
師の君の愛と恵が  
溢れてゐる  
學びやの庭には  
姉妹の温情が  
漲つてゐる  
互に親しむ

秋の夜

本三 石原 英子

影と光は  
清い窓に輝いてゐる

ハート

本三 河村 籌江

私のハートが  
赤薔薇ならば  
燃ゆる思ひを  
示しませう

私のハートが  
黄薔薇ならば  
清き思ひを  
示しませう

私のハートが  
白薔薇ならば  
純な思ひを  
示しませう

ちかひ

本三 松浦 キク子

お祭の晴着を  
一心に縫つてる母の  
肩の細さよ！  
亂れ毛をつたつて  
頬骨の高い  
横顔を  
ちつと見つめてたら  
ふと！  
母とひとみがかちあつて  
淋しく  
悲しく  
笑ひ出しましたの  
蟲のこゑしげき秋の夜

今頃何をして……

いらつしやるか知ら  
二月も使りのないのが  
………氣になる  
小さい小指を  
そつとくんでちかつた……  
あの人の横顔が  
春の小さいそよ風に  
ゆられて見える

ナイト

本三 堀田文子

×さんは水色の蝶  
×さんは薔薇色の蝶  
さうしてあたしは  
エンジの蜂  
勇ましいナイトー

山茶花

本三 伊東昌子

山茶花の

かをりをきけば  
しのばる、  
過ぎし昔の我が友

そは幼稚舎に  
通ふ折  
弾力多いまりのそれの上に  
二人で飛んだあの頃が  
おかつば頭の

あの頃が  
一人なつかしく  
想はれてー

白き花の散る様に  
幽かな香の

その様に  
儂きものゝ  
それに似て

別れしまゝに  
訪れの  
文なき此の日

老婆ご唄

本四 川村利子

修學旅行の時  
私と同じ汽車に乗つた  
少しならぬらしい老婆が  
憚る色なく  
わにの様な口を開けて  
唄をうたつてゐる

若い二人連の夫婦も  
老人もクラスの人も紳士も  
只あざける様に笑つて  
この老婆に目をそゝいでゐる  
しかし老婆は知らぬ顔で  
まだ平氣で唄つて居る

ろり

本四 關屋ヨシ子  
まうと無限の間から吹きつける暴風に

ゆくりなく  
山茶花の  
かをりをきゝて  
想ひ出す  
儂くなりし  
我が友を

桃われ

本四 竹重くに子

夕やみの中にちらと見えた  
蛇の目すばめて行く  
君の初桃われ  
紫のコートに  
すつきりした白いその襟足  
漆黒の黒髪、鬢  
燃ゆる様な赤い鹿の子  
うひ／＼しいその後姿に  
しばし我を忘れる  
小雨そほ降る夕ぐれに

X X X

向ふの山はあれ狂ふ  
時々悪魔の囁が聞える  
冬枯の眞裸な木々の  
抱き合つて泣き叫ぶ冬の夜  
暴風がかた／＼と家を襲ふ  
平和にござされたまどろの内よ  
暴風は和氣に拒絶されて  
遠くに鳴りをひそめた  
幸福にみちたまどろの内よ  
あろり火がどろ／＼燃えて  
父は草履をつくり母はつゞれをつくらふ  
その菓のもつれる音がつゞれの摺れ合ふ音が  
さながら父母の愛撫の吐息  
兄が登山の話をすれば妹はま／＼この話をする  
どろ／＼と燃えたるろり火  
親子の心を一層暖くする  
つづらかな眼の兄妹

### 車中にて

ボーツ………

本四境 千代

汽笛が鳴つた  
静かに汽車は  
走り出した  
私の隣の人も  
向ふ隣の人も  
大ていの人みんな  
見送りの人々に  
別れを惜しみながら  
さよなら／＼をして居た  
だが／＼それらの人の  
どの人も／＼  
みんな幸福さうに見えた  
夕陽に照らされたその面は  
より一層輝いて居た  
私はそれ等の人々の  
何處かしら幸福に  
恵まれて居るのを見た時  
何となく淋しい感じがした  
たつた一人のひとりぼっちの私を載せた  
汽車はもう大分走つて居た  
見ず知らずの人の中に

かすかな不安と淋しさに  
取りまかれながら  
じつとこらへて居る  
ふと、窓外を眺めた時  
汽車はある川の鐵橋の上を  
走つて居た  
夕陽は眞赤に／＼燃えて居た  
水面には金粉を散らして居た  
そしてその河の兩岸には  
黄色い小さい花が  
物待ち顔に咲いて居た  
夕陽はだん／＼沈んで行く  
田舎家から立ちのぼる煙は  
水色に窓外を  
うつすらと染めた……  
未だ自分の行くべき地は  
遠く隔つて居る  
ふと／＼それを思つた時  
つらい悲しい氣持に  
又おそはれた  
そして涙ぐまずには

居られなかつた

### 私の心

本四 石丸 都

ほーんと  
靴先にあたつた小石  
小石は振へていひました  
何がそんなに／＼やしいの  
御免なさい  
小石さん  
嬉しい時は  
そつと避けて通るのに――  
ほん／＼にわからない  
私の心

### 思ひ出の丘

本四 鈴木志計子

あの丘を見るたびに思ひ出す  
いつかの昔あの方と

櫻さく丘かげで  
たのしくかたらひしその目をば

あの丘を見るたびに思ひ出す  
いつかの昔あの方と  
舟にのりて阿武川に  
たのしく遊びしその目をば  
あの丘を見るたびに思ひ出す  
いつかの昔あの方と  
思ひ出多き丘に立ち  
かなしくわかれしその目をば

### 逝ける友

本四 野田綾子

おゝ美代乃様  
私の敬慕する美代乃様  
清き月光は貴女のおくつきに降りそゞいでるます  
私達はあなたのお姿を拜し  
貴女のお聲を聞くことを  
どんなに歡ばしく思つてゐたことせう

それなのに  
貴女は  
私達を置いて遠い所へ逝つて  
おしまひになりました  
貴女は永遠にもう  
私達のところへはいらつして下さいませ  
永遠に歸りませぬみたまよ  
私の心は今  
寂しさと哀しさで  
いつばいでございます

### 神秘的な夜

本四 小原正代

夜です神秘的な  
そこに垂れたカーテンは  
そよそよもしないで立つてゐます  
何處かで衣づれの音がします  
あゝそれは夜の女神の愛のおとづれでせう  
夜です神秘的な  
庭の白ばらは

月下でさめぐと泣きぬれました  
水色の空氣の一ぱいに漲つた  
神秘的な夜  
何だか手を合せて祈りたい

### 夏の宵

本四 藤山タメ子

眞晝の暑さに引きかへて夜の涼しさ  
ちりばめたやうな空の星  
涼しい微風が絶えず湯上りの肌を吹いて快い  
ほつれ毛を搔上げるどブーンとお湯の餘香がする  
鳳仙花の薄桃色が朦朧と闇に動く

### 父を慕ひて

本四 國司スエ子

父上慕ひおくつきに  
きたりて見ればさきりくす  
鳴く聲かすか秋の野べ  
あゝ父上の御姿は

この世の人にましますで  
石にきざめる文字見れば  
靈樹院とぞ書かれける  
過ぎし昔の父上が  
今ははかなきこの様や  
生死は常ささしくかご  
あきらめ難き我が心  
泣く泣く手桶を引きよせて  
淋しき父のおくつきに  
水をそゞげば父上の  
ありし昔のおもかげの  
ほのかに浮びいつるかな

### 朝の濕り

中所 富子

靜かに  
靜かに  
夜のとばりは開かれた  
さうして  
朝霧がかはつて薄青の幕で



あたりをどちこめた  
庭に立つて  
新しい空気を呼吸すると  
ジンとして氣持よい  
朝の濕りが  
身にしんで  
純な清い心になる  
朝の濕り！  
朝の濕り！  
私は朝の濕りを禮讚する

二つの花

本四 河邊不二子

白い花のすざらんは  
なき母様の——思ひ出の花  
赤い花のアネモネは  
なき父様の——思ひ出の花  
一人ポッチの丁ちゃん  
二つの花に泣いてゐる

大晦日

實一金子芳子

さら／＼と音がする  
雪の降る音  
いゝえ雪ぢや無い  
木の葉の散る音  
幽かな音がする 荒れた野で  
細いすゝきのすゝり泣き  
いゝえ去り行く昭和四年の聲  
ほそ／＼と音がする  
人の足音  
いゝえあれは人の足音ぢやない  
昭和五年のしのび足

空

實一 藤田ヒサ子

みどりの空  
青い空  
晴れた眞夏の午後の空

我等の心の如くすんでゐる  
眞紅の空  
赤い空  
夕陽の沈む暮れの空  
我等の如く希望にもえてゐる

秋

實一 藤田ヒサ子

あゝ秋だ！  
大空の青さよ  
芝生を分けて行く秋風よ  
黄ばむ草の上ですわること  
梢をわたる清く冷たい秋風が  
野山の匂ひを運んでくる  
總ての草樹が紅寶石の様に赤く輝く  
あゝ秋だ

新春の光

實一 阿部スミ

東の海の水平線を離れた太陽の輝きは

和歌

歡喜を叫ぶ潮の如く新しい春を告げる  
昭和五年の光——それは世界に平和の光を放つ  
凡ての生命は恵みを受け  
萬物は鮮に更新の色に映える  
新春の光——それは歡喜 恵み 平和の光である

本一 横見園子

夕立や晴れて涼しき夏の空庭の草木もよみがへりけり  
同 赤川元子  
原つばにボール遊びに餘念なき子等をつゝみぬ夕ぐれの  
もや  
待ちわびし遠足の日の前の晩たびん／＼出でて空を仰ぎぬ  
同 吉田泰子  
谷川の清き流れにもみちばの色あざやかに影をうつせり  
同 朝枝都喜子  
新調の制服着たる姿をば鏡にうつし一人はゑむ  
同 井上玉代  
萩の花こぼれそめにし我が庭に蟲の鳴く聲淋しくきこゆ

去りし日の事さまふに浮び來ぬ訪れ來る友の文見て  
明け方の澄み渡りたる大空に日の丸の旗輝きにけり  
つかれたる身を窓ぎはによせながら遠く暮れゆく山を眺  
めつ

同 原川 幸子  
淋しさに姉の方へと目をやれば互に見合ひてはるゑみに  
けり

同 長山 菊代  
朝まだき雲降りつゝも梅が枝に咲けよとぞ鳴く鶯の聲

本二 厚東 晴子  
秋風のゆるく渡れるグラウンドをテニスの球は快く飛ぶ

遠寺の暮ハツ鐘をきゝ居れば亡き兄上の徳はるゝかな  
夕雲の急げば我も急くなり木の下の蔭の蟬も急げり

本二 菊屋 正子  
避暑の人は暑さと共に去り行きて菊ヶ溜邊は秋風の吹く

桃削に結び初めにしか小娘のちさき日傘に頬染めてけり  
美しく咲かせんどのみ思ふかな菊のつちかひ友と誓へば

本一 田村 菊惠  
夕やけに赤くいろごる杉の森は我がなつかしき古里のや  
ま

夏去れば野山をかざる秋は來て龍田の姫は錦をりたす

秋の夜  
本二 稻村こみ子  
叢に蟲の鳴く音も静かにて星まばらなり月冴ゆる夜は  
旅愁

汽車の音聞く度毎に思ひ出づる我家なつかし旅の空にて  
本二 光永 一枝  
天までもひびけと歌ふ弟の歌をば我ははるゑみて聞く

本二 左野 政子  
本箱のふたあくる度思ふかな我がなつかしき兄はいづこ  
と

本二 瀧野 芳枝  
空を行く白き雲にも言ひがたき淋しく見ゆる秋の夕ぐれ  
み佛の前に坐りて涙するゆきにし母の事をしのびて

雲出でゝ月の光の弱き夜もあざやかなりや白きコスモス  
亡き母のかたみとなりしうつつしゑを取り出し見れば逢ふ  
こゝちする

本三 梅岩 本當子  
目の上のほくろ此の頃氣になりていつも鏡を手には取り  
つる

同 岩本 林子  
稻を刈る秋の夕の大空を時々通る小雀の群

同 池上ミキ子  
庭さきの松の根もこにうゑられしつゝじの花は今盛りな  
り

同 波多野 トヨ子  
我が縫ひし衣をば着たる妹をつくゝ眺め一人微笑む

同 富田 千恵子  
青白く細りし指を眺めつゝ淋しくゑめるいたづきの君

同 岡村 フキ  
秋の夜に蟲の音を聞きふと思ふ遠き彼方に住める姉をば

同 小野 智枝子  
カチ／＼と時計の音も身にしみて留守居の夜の物凄さか  
な

同 河野 タケ子  
月白し草葉の蔭に鳴く蟲の聲もほそりて夜ぞふけゆく

同 金子 恭  
只一人淋しく歸るなはてみち見上ぐる空に螢飛び行く

同 金子 光代  
洗濯をして居る母の傍に來てお乳／＼とせがむ幼児  
同 加藤 富子  
コスモスの花を手折りて亡き父のみたまの前に今日も手  
向けぬ

同 田中 操  
いにしへの跡しのばんと來て見れば唯荒れ果てゝ見るか  
げもなし

同 玉井 節子  
小春日の午後の日向の草むらに小さき小猫の鈴と戯る

同 長井 密子  
此の道を昨日は二人歸りしに今日一人行く君を思ひて

同 中原 隆子  
寄宿舎の縁の下にてこほろぎの鳴く聲聞けばわがや戀し  
き

同 長谷 喜代子  
久々に別れし友に逢ひし時先だつ物は涙なりけり

同 中村 タキ子  
いでゝ行く選手の姿見送りて勝利あれよと我は祈りぬ

同 室谷 キヨ子  
さよならと友と別れし峠道秋の日暮れてひぐらしのなく

同 内山 恭子  
夏の日に鎌を手にする人を見て學びの業をいそしみにけ  
り

同 内山 貞子  
昨日來ず今日は來るかと待つ中に淋しく暮れて妹は來ず

子供等の騒ぎし聲も早や止みて向ふの山に星一つ出づ  
 同 黒瀬千鶴子  
 古の書に残ればなつかしみはるく尋ぬ阿武の松原  
 同 山根ゆき子  
 我一人波打際にイみて思ひに耽る妹の死を  
 同 山本禎子  
 目覺むれば時計は方に一時過ぎさやけき月に蟲の聲かな  
 同 深井チエ  
 秋たけて落葉の音も淋しかり一人書よむ夕暮の窓  
 同 福原綾子  
 父母にお變り無いかと兄君はふみの始に常に書かる、  
 同 藤田實子  
 子供等が祭々と騒ぐ日もいつしか過ぎて秋ふかみ行く  
 同 藤田幸子  
 萩咲けば歸るといひし母なるに七たび咲けど母は歸らず  
 同 藤田元子  
 朝顔も起きいで見れば萎みたり夏の休みの朝寝坊かな  
 同 藤村多喜  
 父母によくつかへよとつけられし祖父のみ胸に今日もそ  
 むきぬ

落葉する木の下かげに我立てば臙に浮ぶ友の面影  
 同 厚東葛子  
 月見草咲きたる丘に出で來れば荒みし心いつかなごみぬ  
 同 浅野愛枝  
 妹は運動會にいそぎ行く新しき靴足にうがちて  
 同 安藤フジエ  
 秋來れば亡き父君を思ひけりたわ、にみゆる柿を眺めて  
 同 佐々木美都子  
 そよ風吹くたび毎に風鈴の涼しく鳴りて秋近きぬ  
 同 柴田君代  
 久々に母校の前をすぎ行けば書讀む聲も懐しきかな  
 同 本永松恵  
 夕映の田圃の道を我れ一人行けば聞ゆる松蟲の聲  
 同 森川秀子  
 學びやの赤く熟せし柿見れば我が古里の忍ばるゝかな  
 同 伊東昌子  
 トマトをば好みたまひし父なればその熟るゝ時ことにし  
 のばる  
 本三菊 岩武 哉  
 今日の日も靜かに暮れて遙かなる山の頂夕月のいづ  
 同 石光幾代

人ひとりあし音もせぬ秋の夜のさびしきなかに猫の一聲  
 同 堀田文子  
 美しき夢を秘めたる乙女子の胸をおもはすコスモスの花  
 同 大島秀子  
 一しきり又一しきり蟲の聲更け行く秋の野べのさびしき  
 同 岡村孝子  
 秋の夜に蟲の鳴く音を聞くごとに君の身の上慕はるゝか  
 な  
 同 岡村喜久枝  
 風吹けば稻の香にはふ秋の朝學びや急ぐ我が心地よき  
 同 岡崎文枝  
 ありし日の田中大將思ひ出し思はず涙目にかふかな  
 同 尾崎登茂恵  
 しはらしきコスモスの花咲き出で、あはれ今年の秋も立  
 つらし  
 同 横山壽美子  
 みどり兒に乳ふくませてはゝゑめる母となりたる姉のけ  
 だかさ  
 同 田中清子  
 他校試合負けたる時のくやしきはものいふ先に涙出で來  
 る

さ夜ふけて机によりて文よめば月さし入りてこほろぎの  
 鳴く  
 同 田坂千鶴子  
 紅葉せる柞の蔭に生ひ立ちて山路を飾る白菊の花  
 同 上田昌子  
 父上のみたまの前に手を合す少き弟姿いじらし  
 父上のみすがたあたまにうかび出歌は少しもうかばざり  
 けり  
 同 柳井君子  
 たまがれの窓にもたれて浮び出る母のほゝゑみなつかし  
 きかな  
 同 山縣貞子  
 夕映にお庭の隅にさびしげに咲きし野菊も美しきかな  
 同 山本イチ  
 幼子のてまりの歌の可愛いさに怒りし心やはらぎにけり  
 母と我言葉すくなくさし向ひ父なき家の夕餉淋しき  
 同 山本ツル子  
 母のるす豆を煮よとて命ぜられ我はこまりぬ味のつけか  
 た  
 同 山本美智

入相の鐘には馴れし我なれど秋なればにや今日は淋しき  
うろこ雲わけて夕月出でにけりほのかに青し水と木と我  
赤に黄に彩られたる柿の葉にしこりと降る雨のさびし  
き

同 松浦 富枝  
同 松浦 キク子

夕暮に裏の島に来て見れば何日咲きしかコスモスの花

弟の病の時は一入に父の祈りの聲ぞ悲しき  
同 幸崎 シズエ

弟のみ靈の前に捧げなん美しく咲け白菊の花  
同 上利 光子

あかりなき部屋に寝ながら窓見れば障子にうつる後の名  
同 阿武 トシ子

月の夜に淋しき庭に下り立てば松の木影にきりぎりすな  
く

同 阿武 マツ子  
照りつくる眞夏の光浴びながらラケット振れる少女勇ま  
し

掃除せし後の心のはれやかき働くことは樂しかりけり  
同 齋藤 信子

同 齋藤 雪子  
同 坂 本 展子

桃われを初めて結びし姿をば鏡にうつし姉笑ひける  
同 宮内 信子

こころよき目覺にきぬ春雨のしづくとなりて土を打つ  
音

同 末岡 益子  
夕映の空を眺めてふと思ひ家に向け入り宿題をなす

同 末武 貞代  
宿題の出でしを忘れ友垣となほ遊びをる夕ぐれの濱

同 末光 紀代子  
こぞの春逝きにし友を想ひつゝ我は歩みぬ菊が濱を

本四梅 伊藤 里子  
白ばらのはかなく散りてまふごとく白帆たゞよふ夏のわ  
だつみ

本願寺にて 同 石丸 都  
今はなきあで入徳ぶ悲雲閣高く聳えてそぞろ悲しき

同 羽仁 喜久江  
なき祖母の御靈に黄菊たむけする母の横顔淋しげに見ゆ

同 波多野 靖子

冬の朝足はやばやと行く人の下駄音高き橋の上かな

同 堀 登美代  
かすかなる物の音にもおびえつゝ唯一人して留守居する  
我

同 大橋 マサ子  
幾年も我にはうとさ友なるを秋風吹けば思ひいださる  
かくまでに教へ子の末思はるゝ師の君の思いかむくい  
ん

同 岡 久子  
蚊遣火をかこみて語る我と母うつれる影のいとも寂しき

同 小田 君江  
旅に寝ね旅につかれし心よりいととなつかし母のみなさ  
け

同 大野 貞子  
ほそくこのぼる煙のそれよりもはかなきものは若き日  
の夢

同 若松 ウメ子  
日曜日すべきことをば思ふうち秋の日あしはかたむきに  
けり

同 和田 安子  
とこしへに歸らぬをばと知りながらなほ呼びて見る墓の

前にて 同 河野 嘉彌子  
いとし子をたゞひとりこのいとし子をなくし給へる従姉  
の心

同 吉井 延子  
阿武川のほとりに立てる老松に親をしたひてこがらす  
鳴く

同 高田 美子  
さえ渡る月の雫か草花に輝きわたる露の玉かも

同 田中 喜美子  
らふたけし貴女の面影偲ぼする臚に白き木蓮の花

同 竹内 義子  
よろこびを胸にひめつゝ裾軽く家路に急ぐたそがれの道

同 中村 千代子  
逝きし母思へば悲し夜の空のいづれの星ぞそのみ靈なる

同 長野 光枝  
胸にあふるこの熱情よはゞからず筆にあらはすすべなき  
ものか

同 長嶺 正子  
コロくゝと雛を集むる妹の可愛き聲に夢はさめたり

同 村上 朝江

母上のつくりたまへるひぐすり残り少く春來るらし  
つれなきになげきはすれど恨みえぬ弱き心のいとほしま  
るゝ

同 野田綾子

秋の夜の淋しきままに思ひ出づ旅にて逝きし叔父の哀れ  
を

同 久保菊枝

師の君にまなびしチュー料理して父母共に舌つゞみ打  
つ

同 久津内貞子

校庭の赤きをほこるカンナーの色にも似たり君の心は

同 柳井文子

静かなる清き小川のせゝらぎに蟲の音合す秋は來れり  
しのばるゝ母の切髪見てあれば八年昔に逝きし父君

同 山縣照子

夕映のさまぐの雲眺むれば妹の衣に仕立てたきかな

同 安田マサ子

いにし日の樂しき思ひ語るかなたびのうつしゑ友と眺め  
て

同 松浦光子

同 藤田トミ

夕立の後に残りし水たまり早や青空をうつしゐるかも

同 藤屋ツル子

杉の木の一枝ごとに暮れて行き静けき夕鈴蟲なくも

同 小原正代

一言の言葉なれどおもほへず涙さそはるいたつきの日は  
宵闇に白く光れる大理石冷き人の胸にも似たり

同 藤山タメ子

戸をくれば大海原や吹き來たるこゝろよき風髪をなびか  
す

修學旅行にて

静かなる春の海をば走り行く見知らぬ舟もなつかしまる  
ゝ

同 厚東静子

積れども雪には折れず擔みせる山田の竹のつゝまじきか  
な

同 粟屋喜美子

旅にいで船によひてぞ友垣のあつきなきけを解しぬるか  
な

同 有田幸子

廣前にぬかづきませる父君の肩にうつれるありあけの月

同 坂佳子

まゝごとすわらべのさまを見てあればかぶろの髪は今  
懐し

同 佐々木千鶴子

流れ來る調ゆかしき樂の音に耳かたむけて我もうたひぬ

同 三好孝子

うらわかき娘の居れば土用ばし貧しき家も美しきかな

同 水野信子

いさかひて友と久しくもの言はぬ久しき間心苦しも

同 弘兼文子

幼兒のまゝごと遊び母となりすまして遊ぶいじらしきか  
な

兄君の歸り給ふときくからにソースの香にも心ときめく

同 平島節子

宵やみに白う浮べる夕顔の影にたゞすむ美しき君

同 本永隆子

いさゝかのいさかひなるに涙する我となりけり君と別れ  
て

同 森艶子

夏休み來りて見ればさほどにも樂しきこともなかりしも  
のを

同 森中美代

海原の遠き彼方は幸あらん日毎に寄する波の静けさ

同 居田百合子

なつかしきふるさとの空眺めつゝ遠き昔をしのびぬるか  
な

同 杉山昌

からかへばまこと思ふ幼兒の黒き瞳はものおもひなる

同 澄川喜江子

長き夜もいつしか明けて軒下に雀は鳴けど起きぬ弟

同 鈴木志計子

かしましく木々にさわぎし蟬の聲いつしかやみて松蟲の  
なく

同 重藤美智子

白萩の葉末をよぎて白き玉ほろろと散りて蟲なき出でぬ

百合の花唯一輪に夏の陽を心ゆくまで吸へるごとく咲く

紫陽花の匂ひかすかに送り來ぬ物なつかしき夏の夜の風

亡き父のうつしゑをみて幼兒の両手を合すいじらしきか  
な

同 井上忠子

あをみゆく蠟の灯のごと悲しけりいたつきませる君がか  
んばせ

うら若き乙女の姿そのまゝに庭に咲けるコスモスの花

夏来れば冬をば慕ひ冬来れば夏をぞ思ふ人の心は

友が吹く口笛の音におもほえず調子合せてわれも歌ひぬ

夕もやに包まれながら屹然と昔を語るお城山かな

立ちのぼる煙の如く人の世も果敢なきものかひどりかな

なき母の召したまひにしころもを見るたびこゝに涙流るゝ

あぜ道の野菊の上を赤とんぼすつすことびて秋は来にけり

美しく色のつきたる柿の葉に夕日の照りて秋はくれゆく

くりがへし秋の夜ながに思ふかな去りにし友のあつきな

さげを

み佛の前に座りて今日もまた姉のいませし時をぞ思ふ

庭の隅生ひしへちまの長き實に照る夕月のかげのさびし

友の死を悲しむ餘り果てしなき廣野の道を我はさ迷ふ

よきにつけあしきにつけて思ふかな父のなませぬおのが

車窓より神戸の夜景眺むれば伽話の龍宮に似し

久方に懐しの友に巡り合ひ秋の夜長も話つきせず

朝顔の一朝毎に花の數少くなりて秋は淋しき

卒業を指折りてみるたび毎に何とかなしに涙流るゝ

みたまをば呼びもごさんと母上の冷たきむくろ暖めて見

し

別れきて淋しきまゝに道のべの夏草手折り手に持ちて見ぬ

悲しさに空を仰げば友の家の真上に淋し星のまたつき

夕立はくまなく晴れて照る月の青田にうつる影ぞ涼しき

父に似し子とぞいへればなき父のうつしゑいだしながめけるかな

やめる日のあまりさびしき花一つ机の上にはしと思へり

はるかなる故郷の空ながむれば雲間にうつる母のおもかげ

我がやごの垣根に咲ける朝顔は日々に花數増して行くな

詩集もち一人溜邊をあゆむこと好める我になりにけるかな

な

同 長田 光子

同 長澄 富美枝

同 中所 富子

同 國司 瀧子

同 國司 壽恵子

同 草刈 定子

同 矢次 純代

同 安田 クニ子

うつしゑの我の姿と友の影つくゞ見る秋の夕暮

雨晴れてたちきの下の雑草のほのかに匂ふ山のお路かな

思ひ出づ彼の春の日に君と我忘れな草をつみし頃をば

ニッコリとほゝ笑みおはす母上の肩にうつれる十六夜の

郵便の聲諸共に着きにけり待ちに待ちたる懐しき文

寒き朝遠き驛まで見送れる母と別れてひとり泣きにし

静かなる今宵なるかもまたたける星のきらめきいとつ

亡き祖父のうつしゑ見てはありし日のいろの事思ひ

しとくく小雨する夜はいとゞしく古里の母なつかしきか

な

同 松尾 愛子

同 藤田 喜多子

同 藤井 シズエ

同 粟屋 淑子

同 有馬 清子

同 天野 令子

同 有吉 久枝

中庭のかをり床しき梅が枝に誘はれにしか鶯の鳴く  
同 安野志都子  
樂しきは詩集たつさへ河邊にて友と語らふ秋の日曜  
同 浅野綾子  
なつかしの友より來たる文をよみ笑みておはする顔をし  
のびぬ

同 澤本乙女  
夏の夜の静けさ破り聞こゆるは土用修業の太鼓うつ音  
同 境千代  
うつし世を遠く去りにし妹を思ひおこさず秋の夜の月  
やはらかき月の光に乙女子の後れ毛上ぐる指の白さよ

同 光國茂子  
父上の髪の白さのますを見て何ともなしに悲しくなりぬ  
同 柴田信子  
夕立の降りたる後の心持よき木々の緑に風のわたりて

同 重本千鶴子  
昨日までこはく見えける兄君も別れとなれば懐しきかな  
同 廣常子  
汽車は今汽笛するごとくならしつゝ雨ふる中をひた走りの

同 廣田綾子

我が庭の垣根に生ふる萩の花蕾破れて秋は來にけり  
同 關屋ヨシ子  
コッ／＼と母の咳入る聲をき、我は祈りぬ月に向ひて  
同 助石マツ子  
姉君の歸るてふふみ讀みてより汽笛の音も胸のときめく  
同 福田静江  
谷川のつめたき水に飯盒の米を洗へば鯛の啼く  
實一 吉岡トキヨ  
草むらにすたく蟲の音かしましくいよ／＼秋も深み行き  
けり

同 弘津静子  
窓もる、月の光にてらされて想ひは遠きなつかしの君  
同 弘津静子  
コスモスの花美しく咲きにけりやさし乙女の姿にもにて

同 矢次清子  
吹く風に梢の黄葉ゆらめきて夕日かよふボプラ美し  
同 吉崎久子  
澄渡る東の空の松影におがみたくなる十五夜の月

X X X

俳句

元日や笑顔の揃ふ朝の膳  
本一 和田榮子  
同 柳田秀

月見れば思ひをそふる雁の聲  
同 末武政子  
同 小林愛子

秋風に黄金の波の田の面かな  
同 小林愛子  
同 木村代志枝

何もかも皆あらたなるお正月  
同 木村代志枝  
同 栗屋儀子

そよ風に月こぼれけり萩の露  
かな／＼の聲さわがしき日暮かな  
同 栗屋儀子  
同 平島ミュキ

なの花もかすんで見えるおぼろ月  
同 平島ミュキ  
同 瀧野芳枝  
夕立や干物入れし頃やみぬ  
本二 瀧野芳枝  
わびしさを知れとや庭に落葉かな  
本二 光永一枝

蜜蜂は時ををしんでかせぐなり  
ボツボツと言ひており來る屋根の鳩  
孫  
本二 渡邊ヤス子

伯母くればすぐに孫だく夕涼  
秋の夜  
本二 齋藤富美子  
くさむらに蟲の音高し奥の院  
本二 齋藤静枝

冬の日や母に離れて恩を知る  
鶯  
本二 熊毛屋光子  
鶯やひねもす歌ふ春の午後  
本三 玉井節子

鶯のおとづれを待つ窓の梅  
摘草を頭にかざす野邊の春  
同 加藤富子  
元日や晴れて香し梅の花  
同 岡村フキ

家内中集ひて語る炬燵かな  
涼風の方へねなほす晝寢哉  
同 岩本當子  
夜更けて雨戸を叩く吹雪哉  
同 小野千枝子

うと／＼とねむりもよほす小春哉

初雪に雨天の實の紅きかな

雪の夜や街燈さへて町淋し

夕立の名残の空に虹の橋

山寺の鐘の音さびし秋の暮

木葉散る下に語ふ秋の午後

濱千鳥飛ぶや淋しき冬の海

冬の朝つるべの音の寒さ哉

冬枯の庭に一輪ばらの花

雪の朝軒端にまよふ雀かな

檻の木に小鳥ついでむ小春哉

初どりの聲に目出度年明けぬ

同 山縣貞子

同 山本イチ

同 高杉愛子

同 竹原房子

同 末國ミサエ

同 阿武トシ子

同 山本美智

同 田北ミネ子

同 横山壽美子

雪の朝水車止まりし小川かな

春風に空高くをどる鯉のぼり

春雨に煙りて見ゆる指月山

我一人口づさみつ、行く夏の夜

雪の上に紅の山茶花散りにけり

白露をつまんで見たる我が手かな

夕立や晴れて我が家につきにけり

疲びれて紅葉の影に憩ひけり

海邊にてバラソルさせし二人連

たらちねの親の乳房もしをれけり

姉君さわかれて寂し秋の夜

ワンワンと犬かけまはる雪の朝

如月や枯木の中に寒椿

同 岩崎タミ子

本三 浅野愛子

本三 岩武 哉

本三 堀田文子

本三 齋藤義子

末武貞代

冬の夜や炬燵かこんでむだ話

名月や猫も月見かやねの上

大空に鳩一群や雪の朝

名月や三つの子までも縁に出で

名月や蟲の音高し庭の隅

秋曉や目しむ海の蒼さかな

名月や父を思ひて筆取りぬ

蟬時雨縁にねころぶ子供かな

小春日や川の淀に魚浮ぶ

小春日や後向きなる洗髪

雨やみて蟲の音繁し秋の庭

魔の如き瓦の色や月の影

今日も又蟬のしぐる、朝曇り

大根の双葉に朝の露青し

同 波多野 トヨ子

同 長井密子

本四梅 波多野靖子

同 小原正代

同 野田綾子

同 三好孝子

同 重藤美智子

カラコロと寒夜に響く下駄の音

春の夜の夢に現はる友の顔

木の間よりもれる残月はだ寒し

拍子木の音かすかなる冬の夜

初春を迎へし姉の初島田

かるた會顔もはづかし墨のあと

妹と留守居してゐる炬燵かな

梅散るや講義さくのも後わづか

おぼろ夜や阿武の川瀬に浮ぶ舟

元日やよろ／＼廻る年始客

年増すを喜ぶ可愛子供かな

はれ着きた喜び顔に初日かな

本四菊 西村八重子

同 金子初代

同 吉村文子

同 竹重くに子

同 瀧野 琴

同 竹岡文子

同 草刈貞子

同 安田クニ子

同 松田文子



年始客見知らぬ人も交りけり  
年賀状思はぬ人に貰ひけり  
幼子の大羽子板を抱きて來し  
夕空に馬の繪風の残り居り  
同 福田 静江

冬の日や日影さし入る座敷かな  
同 栗屋 淑子

柿の木の節くれ見えて空寒し  
同 有吉 久枝

かしはでのこだまに響く初詣  
迎へけり駒のいななく晴の歳  
元旦や燈明の光冴えにけり  
同 安野 志都子

月ばかり静かに見ゆる師走かな  
同 天野 令子

元旦やそよ風吹くも氣持ちよし  
短しや冬の休も過ぎにけり  
同 澤本 乙女

小雀の行水使ふ水たまり  
やせ馬に重き荷引かす冬の暮  
同 境 千代

元日や家から洩るゝ笑ひ聲  
同 廣 常子

はら／＼と芥子にかゝるや通り雨  
春日和空にひばりの聲高し  
同 實一 吉崎 久子

拾出す俄に寒き今日の朝  
同 伊勢島 キヨ子

そよ風に重げにゆれる稻穂かな  
同 小野村 清子

何處までも車の轍雪の朝  
同 香原 キクエ

暮の鐘淋しく響く秋の夕  
枯枝に鳥の集る秋の暮  
同 吉岡 トキヨ

夕立やあちらの木影にも三四人  
同 弘津 静子

暮告ぐる鐘に霞める小村哉  
同 佐々木 初代

修學旅行記

本科第一學年  
羽賀臺へ

岩本フミコ

五月十一日 まだ人通りの少ない春風の吹き渡る河邊を踊る胸を抱きしめながら、楽しい旅行の一步をふみ出しました。何ともいへぬ心持です。驛にはもう五六人も來て居られます。誰の顔を見ても喜びが溢れてゐます。空まで私達の喜びを共にしてくれる様に、刻一刻と晴れて來ます。汽車の來るのも、もう四分しかありません。人々は皆プラットホームに出て行きます。間もなく汽車が來ました。玉江から乗られた人も、皆喜びながら汽車から顔を出して居られます。今まで踊る胸を抱きしめながら、プラットホームに居た人も、皆汽車に乗り込んでしまひました。やがて汽笛の合圖と共に動き出しました。空はすつかり晴れました。大井ではあまり近いので何だか力がないやうですが、それでも汽車は我が故郷へと走

り、そして見馴染な土地であるから、何だか親しい様な心持が湧いて來ました。我々の喜びを乗せた汽車は、兩側の綠滴る山々の間を走つてゐます。やがて反射爐が見えはじめました。此處は前小畑であります。爐は玄武岩及び煉瓦をもつて築かれ、基底は長方形でありまして、上方は漸次に狭く、細くなつて、先端は二つに分れて煙筒となつてゐます。舊藩時代兵器を作る所であつたといひます。今は天下の史蹟として内務省より指定されてゐるさうです。やがて高倉荒神様が見えはじめました。古來遠近の信仰厚く、毎年正月二十八日の祭には、俗に世だめしと稱して參詣人織るが如く、今は三月二十八日が祭日であるといふことです。日はすつかり照つてゐます。目的の驛に着きました。これから羽賀臺へ行くのです。麥田の中の小道を通りぬけ、藤の花の咲き亂れてゐる小道を通り、更に少し峻しい夏蜜柑畑を兩手に控へた小道を上つて、阿宇雄様のお家へ行きました。こゝは文久三年八月、長州に落ちられた七卿の一人澤宣嘉卿が生野に義旗を上げられたが失敗せられ、生野より地方に逃れ、又更に長藩に身を托し、六島村大島に隠れられ、慶應元年二月二十六日木村に入り、河野氏方に移り、其の年五月十五日又弘誓寺に移られた。澤卿の大井に居られたの

は三年である。弘誓寺は阿字雄の前の夏蜜柑畑の所だつたといふ。今は福川村にあるといふ事だ。澤卿の近侍橋本將監は兵庫縣出石の藩士で勤王の心厚く、澤卿に隨ひ弘誓寺に居られ、其の中病を得て死なれたので境内にお墓を建てられた。それから橋本將監のお墓にお参りしました。裏にまはり夏蜜柑畑の氣持の悪い所を通りぬけ、更に小道を少し登ると、その家のすぐ上に苔むす墓が二つ並んでゐます。一つは弘誓寺の先祖を祭つたもので、そのすぐ右に阿字雄の瀧があります。水が白泡をたて、ほとばしり出てゐます。も、午前十時半になりましたので、すぐ引返し、羽賀臺へ向ひました。険しいじめ、した道を四町ばかり行くと、左にはわらびが生え、右は墓地です。更に松林を四町ばかり行きます。十二時前からお腹も大分空いて來ました。少し休み、更に木立の中を三町ばかりも登り、右手には森林左手には木立の切あとのある険しい小道を五六町も行きますと、又森林の中に入ります。四五町も行きますと、野原の様な所に來ました。羽賀臺かと思つて喜んで居ますと、それは羽賀臺ではありません。小松が一ぱい生え、少し上の方にわらびが一面生えてゐます。そこで後れた人待ち、暫く休んで歩き始めました。少く行くと、又森林の中に入りまし

た。八九町も行くこと、やはり松林ではあるが、今度はいちこの花がたくさん咲いてゐます。そこを約十町餘行くと、急に道が廣くなり、峻しく近頃開いたやうで右に折れてゐます。その道を二十間あまり行くと、目的の羽賀臺です。今まで落膽してゐた私達は急に元氣づきました。羽賀臺には真中に大きな「天保閩兵の地」と書いた石碑が建つてゐます。又其の側に一本松の木があり、左や下は松の森林で、他は草を刈つて綺麗にしてあります。その松の下で汗を拭ひながら、六島村や大井村なきを見はらします。此處は東南に中國山脈を控へ、天然の要塞で天保十四年毛利敬親公が藩士數萬を集めて、洋式にならつて村田清風先生をして閩兵をなされた所であり、もうお書になりましたので、阿字雄さんのお家へ引返ししました。お腹が空いてたいへんえらい上、ひどく日が照りつけてゐますので、すつかり疲れてしまひました。やうやく阿字雄さんの家に着いてお辨當を戴き、少憩して阿武の松原の方へ出かけました。學校から少し驛の方へ寄つた所から右手へ取つて、険しい小道を少し登ると穴観音があります。此處は阿武の君の古墳であると言ひ傳へられてゐます。穴の横が九尺、入口三間、高さ七尺穴の左右共大きな石で作つてあります。又引返して今度

は阿武の松原へ行くのでしたが時間がないので、伊藤先生の御宅に寄つて残りの御辨當を食べ、急いで驛へ出ました。汽車は思ひ出の多い大井の地を後にして萩の城下へと向つて走ります。いよゝ萩驛に着いた時は、もう日は金谷の森に隠れ、家々からは煙が立ちのぼり、夕暮の色が漂つてゐました

## 本科第二學年 秋芳洞旅行の記

本二 大谷 榮子

五月十一日 早朝のすがすがしい空氣にふれながら、我等一行の自動車は、曲りくねつた田舎道を、砂煙を立て、飛ぶが如くに、目的地たる秋芳洞へと、道を急いでゐる。道の邊には、黄、紅、青、と、色とりどりの草花が、咲き亂れて、田舎らしき趣を呈してゐる。やがて我等一行は、秋芳洞入口の側の、一旅館に、疲れを休め、轟く胸をおし静めながら、身仕度もそこゝに、洞内へと、歩を運んだ。

私達は第三班で、一番お終ひの組であつた。案内者に伴はれて、先づ、一の淵から順々に奥へ奥へと、ともす

ればにぶりがちな足を、ふみしめ、だん／＼と進みました。

唯何を見ても、驚異の目を見はり、一つ／＼感歎詞を發するばかりである。進み進んでやがて、高棧敷へ來ました。その刹那、今まで咬々として、四壁を照してゐた電燈が、パツ、と消えて、一瞬にしてあたりは常暗の國と變りました。唯／＼と四壁にこだまする水の音のみ、あたりは森として、亡者のさゝやきも聞えるかの様である。

さあ、私達の小さい心臓はさきめき出しました、あ、もう此のまゝ此の闇の國に、葬られるのだらうかと、不安の念に襲はれて、ひたすらに、明りの國が懐かしく思はれるばかりでした。かうした不安な時が續いてやがて一點の松明の光を見出す事が出來、始めて、ほつて不安の心をなでをろしました。

かうして無事に何の負傷者も出來ず、見學をすませて印象深き、且つ、思ひ出多き秋芳洞を後に、一行は元氣よく、歸途に就きました。

此の旅行中、最も私の囁裡に刻みこまれた事は、洞内にて電燈の消えた瞬間であります。

私はこれによつて、すは一大事と言ふ時には、あわて

す泰然としてそれについての、前後策を講ずる事が、肝要と言ふ事を、此の一経験に依つて、痛切に感じる事が出来た。

私達も之を守つたからこそ、一人の負傷者も出ずに、すんだのだと、喜びに堪へません。

此の事柄は永久に、私達の胸から消えない事でありませう。

### 本科第二學年實科第一學年

#### 萩町より宇部市まで

本三 藤田 幸子

五月十一日 團體で初めての宿泊旅行。それはどんなに大きい力で私達の好奇心をそそつた事だらう。

躍る喜ばしさと嬉しさを努めて抑壓し、家族の人が口々に云つて下さる、「よく氣をつけて」の聲を後にしたのは、まだ朝霧の漸く晴れて行く頃だった。身も心も浮き／＼と、色々の想像も楽しく、しつとりと露に濡れた草を踏んで行く中、折よくばつたり二三の友と出會つた友の顔にも旅行に對する喜悅の心が溢れてゐる。

日頃は煩しい雀の囀も、自動車の警笛も、戸を繰る音

も總てが楽しく聞える。私達が聲高に愉快に語らひつ、行つたのは云ふまでも無い。東萩驛内には既に多數の笑顔が集つてゐた。他の二三の乗客は私達の餘りにはしやぐのを見て呆れてゐた位だった。

「ビーンツ、ゴットン／＼」、遂に汽車は動き出した。

さうして萩驛で少數の友を乗せた私達の汽車は、太陽の正に山の端より出でんとしてゐる頃の薔薇色の空気を衝いて進行して行く。こう／＼と響く速度の音と私達の心が何時からともなく融合して、只さへ弾んだ心が一層浮き立つのだった。修學旅行に旅立ちし者の初め頃の心地それは他の何人にも許されない特別の味はひがある。何と云つたらよいか、今其の味はひ、氣持が私達の全身を包圍してゐるのだ。多勢の友と、はしやぎ廻つてゐながら、ごきん／＼と動悸の打つ音が判然と聞える。

玉江驛の一寸手前だったと思ふ。級の行かない二三の方が見送りに來てゐて下さつた。

「行つて参ります、さやうなら。」

窓から覗いて多勢聲を揃へて叫んだ私は、旅なれぬ身の故か、妙に感傷的な氣分になつて、思はず涙ぐんでしまつた。

日頃見なれた指月山が愈々見えなくなつたのは、玉江

驛で多くの友を乗せた此の汽車が大分進んで三見に近い頃だった。それから又懐かしい橙の木が段々少なくなつて

全く目に入らぬ頃は、母校や、我が家のある萩は遠い彼方であつた。こればかりは何處までも續いてある夢の縁と、紫雲英の紅に送り迎へされつゝ私達の汽車は西へ西へと突進してゐる。朝風の海上に點々として群がつかつてゐる真帆片帆は、何れも眩しい朝日の光と涼しい朝風の爲はち切れさうにふくらんで水の上をすい／＼と滑つて行く。一方の山には青葉若葉が溢れる如く繁り、これも朝風に吹かれて、さや／＼と左右する美しさ。其の繪畫のやうな美しさの中を、多くの躍る心を載せた私達の汽車は尙も西へ西へ。

不意の隧道にも驚かなくなり、トランプ遊びにも、ハルモニカにも、コースにもすつかり未練が無くなつた頃、汽笛は私達の汽車が厚狭に着いた事を報知した。

本線の汽車は今迄の比してすつと上等で、且都會らしい趣が漂つてゐた。殊に強く感じたのは朝鮮人の多いことだった。白いしかし汚れた朝鮮服、埃にまみれた結つた髪、内地人と違つて如何にもと云ふやうに大國民性の感が表はれてゐる。立ちん坊のまゝで宇部市へ行く輕便鐵道に乗り換へねばならなかつた。それは美禰線より

もつと粗雑な汽車だった。

さうして午前十時何分かに宇部市に着いた私は此處で全く汽車を棄て、宇部市の地を踏んだのであつた。それから一同は當地の女學校の先生の御案内で常磐公園へと向つた。

宇部市に來て最初に受けた感は、山の無いこと、何處を見ても夢ばかりのことだった。山又は海、又は家と空との續いてゐるのしか見たことのない私には、夢の穂と空の色との對照がひさく奇態に思はれた。又海が南にあるのは當然のことだと思つても／＼何だかをかしくてしやうがなかつた。

常磐公園は人工の美の方が多いらしい。しかし其處のかなり広い池は水がきれいに澄んでゐて、何だか繪に見える琵琶湖のやうな趣が感じられる美しい池だった。併し休む間もなく直に宇部高女へと向つた。其處は郊外だったのかも知れないけれど、行く道々は萩町の方が遙かに賑やかで、落ちついてゐる良いと思つた。學校に着いたのはかなりの道を歩いてからであつた。綺麗な講堂で茶菓を戴いて食事をした。はる／＼と見も知らぬ他郷に來てこんな親切にして戴くのは本當に嬉しかった。だけども只の三十分間の食事なので、ろく／＼飲み込みませぬ

中、もう此處を辭して新川驛へと向はねばならなかつた  
しかも駈け足で。

けれど私達の中に疲勞を口にする人はもう無くなつて  
ゐた。大部分は初めて来た、宇部市に對する名残惜しさを  
淋しく胸の中に感じながら、黙々として急いで行つ  
た。

### 宇部市より下ノ關市まで

本三 田北三年子

だるい足をやう／＼新川驛に運んだ時には、も早や驛  
頭には宇部行きの列車が私達を待つてゐた。大急ぎでこ  
れに乗り、やつと安心したけれど、でも澤山の人で又  
もや立つてゐなければならなかつた。窓外は丁度蓮華の  
花盛りで夢の黄色と相映して非常に美しく、その上を撫  
でるそよ風にうつとりしてゐる間に早や宇部驛に着いた  
こゝでなつかしい宇部鐵道に別を告げ、私達の第一の目  
的地である下ノ關行きの列車に身を投じた。丁度高松の  
女學生と乗り合はしたが、私達は校長先生を始め諸先生  
のみ教を固く守り、各自注意した故か、非常に乗客の評  
判がよくて、さすがは萩の女學生であると思ふ事

は萩高女にとつて大變喜ばしい事であつた。汽車は長府  
一ノ宮と過ぎ、やがてめざす下ノ關についた。汽船の音  
や、自動車、自轉車のさう／＼しきや、それ等の音をわ  
けて通る朝鮮人の白い服にもさすがは本州の入口と感ぜ  
られた。これから直ちに私達の宿り先である吉野旅館  
に向ふ。驛前の大きく聳えた山陽ホテルと異つて、あま  
りにもみすぼらしいこの旅館に何だか悲しい氣持ちで第  
一步を踏み入れた。こゝに一先づ荷物を置き、一滴の冷  
水に元氣を回復して下ノ關市見學に出掛けた。

先づ初に日清戰役の講和條約のなつた所で有名な春帆  
樓を見學した。こゝは残念なことには庭内縦覽を許され  
なかつた爲、門前より遙に望んだだけで、直ぐさま安徳  
天皇の御陵へ向つた。古松老杉の繁つてゐるこの奥に安  
徳天皇のみ靈が御安らかに鎮まりますかと思ふと、その  
側に立てゐる御裳川の碑といふものにも、一入その昔が偲  
ばれて急に眼がしらがあつくなつて来た。こゝで参拜を  
終り、その隣地の官幣中社赤間宮にお参りをした。赤間  
宮の参拜を終り、入り行くこと一丁ばかりで平家七盛の  
墓に達した。前後二列の墓石は何れも皆苔むして、四邊  
に聳えてゐる老木の散るまゝに、一代の榮華の名残も止  
めず、あの歴史や傳説を色どつた一族のなれの果かと思

ふと自然にまぶたの熱くなるのを感じた。こゝから直ぐ  
さま龜山八幡宮へ向ふ。こゝは海に面した丘上にあるの  
で、遙か向ふには門司が望まれ真下には大小さま／＼の  
船が入り亂れ、歐洲航路の船も交つて見えた。しばらく  
こゝで休息し、それから市中目抜の地を見て廻り、宿に  
歸つたのが凡そ午後五時頃だつた。やがておいしい夕飯  
を終り、七時頃各々買物をすべく五人六人と連れ立つて  
外出した。別に買物まではない私達は、晝のさう／＼  
しきと異つた麗しい灯の町を眺めて廻つたばかりで早く  
宿に歸り、トランプをしたりその他色々のお話に移  
した。さうして午後十時頃一同疲れを休むべく床に入つ  
た明日の樂しさを描きつゝ。

### 長府より萩まで

實一 佐々木初代

五月十二日 日は東に輝いて空は拭つたやうに青かつ  
た。私達は宿を午前八時に出發して、史上著名の古戰場  
壇の浦へ向つた。こゝから電車に乗つて目ざす長府へ進  
んだ。春風やはらかに鷗は飛び、帆船は波たゞぬ海面を  
走る。陳腐な言草だが、車中よりの眺めは恰も繪を見る

様であつた。

電車から下りて、先づ第一に關見臺に登る。こゝまで  
も青く續く下關海峡が眼前によこたはり、彼方には門司  
が見え、遙か左手に昨日見學した宇部市を髣髴し得たの  
も懐かしい。苦しい息も、流れる汗も忘れはて、小手  
をかざして方々を見廻した。

臺を下つて乃木神社に向ふ。かなり長い間を日光に照  
され、春風に吹かれながら、長府の町に着いた。町は水  
をまいた様にしづまりきつてゐた。神社の前に來て見る  
と露店が澤山列んで、祭の様に賑つてゐた。私は此の點  
に於ても、如何に神社に参拜者が多いかと云ふ事を知る  
に充分だらうと思つた。そして一歩々々美しい小砂利の  
上を神殿に近く踏入るに従つて、愈々肅然たる心持にな  
つて覺えず襟を搔合はせた。神社の用材は全部檜材で、  
輪廓の美、衆目をひくものはないが、清楚で、却つて忠  
烈無比の祭神の威徳を欽仰するに適してゐると思はれた  
其の他乃木家の遺什、將軍の遺墨遺物等は境内陳列館に  
陳列されて居り、一木一石に至るまで將軍と縁故のない  
ものはない、低徊去るに忍びられない感じがした。こゝ  
を後にして女學校に行き、講堂で晝食をとり一時間程休  
憩した。鄭重なもてなしや、親切な御見送に感謝しが

ら、自動車で驛に向つた。午後一時二十八分長府驛を出  
發した汽車は、私達一行を載せていよいよ歸途に向つて  
進行した。午後の陽を受けた變り行くあたりの景色は私  
達の疲労と倦怠の心持を蘇らせてくれる。午後四時四十  
五分無事玉江驛に到着した。私達は疲労の中にも旅行の  
楽しさを語り合ひながら家路を辿つた。

### 本科第四學年實科第二學年 京阪地方修學旅行記

本四 藤山タメ子記

萩出發より京都着迄

四月二十二日 日醒時計は午前三時を報じた。歡喜と  
希望に満ちた張り切つた心で空を仰げば、一昨日より降  
りつづいた雨はカラリと晴れて氣持がよい。  
朝飯を戴いて、昨夜揃へておいた手荷物をも一度改め  
て、友と一緒に我が家を出る。東の空は早乳色に明けて  
ゐる。

校門を入つて見ると、すでに皆並んでをられる。  
元氣の良い部隊長の聲で、人員調査も終つて歩調も輕  
く萩驛へ向つた。

が大きな汽船だけあつて設備もなか／＼よい。機關室に  
は大きな機械がさまざまの音を立てながら動いてゐる。  
便所等も設備がよい。風呂の設備も有る。船は少しも揺  
れず家の中に居るのさ全く違ひはない。

それより一二等の客室を見せて戴く。一等室は西洋式  
でピアノや蓄音機もあり、非常にきれいなものである。  
又二等室は和洋折衷式で、そこもなか／＼きれいなもの  
だ。私達の室は三等なので、天井も低く、うかつな顔  
をして立つて、頭を打つ。餘りに二等室と三等室の差が  
甚しい様な氣がした。

午後五時頃日の入を拜む、波靜かな水平線の彼方に沈  
まんとする眞紅の太陽の美しさ。私かもし偉大なる詩人  
だつたら、いかに美しい詩や歌が生れた事だらうに……。

八時夕食。其の後手紙を認めて就床。  
始めての海の旅なので、ごこのグループもべちや／＼  
喋べるやら、もぐ／＼食べるやら、一番忙しいのは口の  
運動である。定員七名の所に十二三人も寝るのだからた  
まらぬ。まるですし詰の様だ。その上薄い毛布が二人  
一枚。私たちが枕を並べてゐる様を一二等の船客が上  
から見たら何と思はれるだらう。裏長屋の貧民窟を想は  
れるだらう。屹度今頃は我が家でも皆眠つてゐるだらう

ここで中野先生より御注意があつて、午前五時五十三  
分私達の滿腔の悦びを載せた汽車は、諸先生や寄宿舎の  
方に送られて、門司へと向つてプラットホームを離れ  
た。

車中はこのグループからも楽しさうな笑ひ聲が洩れて  
来る。下關で下車して、荷物の検査を受けて船に乗つた  
係員が「何が入つてゐますか。」と問うたので「荷物です」  
と答へて笑はれて仕舞つた。

私達の乗つた香港丸は、英國のグラスゴウの造船所で  
造つたもので、六千餘噸もあり、乗組員は百二十人で、  
大阪商船の船で、直徑一間位のマストが二本もある、萩  
などでは、一寸見られない様な大きな船である。

船に乗つたのが正午で、それより甲板上で記念の寫眞  
をとり、中食を戴く。其の後甲板上でゴルフや輪投げな  
どして遊ぶ。

波靜かな内海は春の長閑な光をうけて、油のさけた様  
である。船のへさが心地よい音を立て、水を切つて進  
むにつれて、霞棚びく島々を迎へては送る。時々菜の花  
と夢の青葉とで錦を敷いた様な島が霞の中に浮いて見え  
る。

羅針盤の説明をきき、無線電話室に行きて見る。さす

眠れぬまゝにいろ／＼と未だ見ぬ街を描いて見る。笑さ  
へ浮べて眠つてゐる隣のAさんが羨ましい。午前三時頃  
目が覺めたので窓から首を出して見ると、黒い帷におほ  
はれた海は限りなく暗く神秘だ。

夜の白み始めたのは五時。やがて甲板上に出て見ると  
東の方より圓い眞紅の太陽の昇る美しさ、刻一刻赤く大  
きく……。右手に歌枕として名高い淡路島、數知れぬ  
白帆は風にふくらみ滑べるが如く走る。朝の海はあくま  
で美しい。まるで一幅の繪畫を見る様である。午前七時  
神戸入港、灣内には無数の鷗が居り、大きな汽船も多く  
見えて、さすがの私も眼を見張つた。住友三菱等の倉庫  
も指呼される。

そこで船に別れを告げて埠頭に上陸する。其の時の喜  
び——コロンブスがるん／＼海を越えて始めて米大陸を  
発見した時の様なものであらうか。

市中にて先づ圓タクの多いのに驚く、堂々たる西洋館  
そこには異國情緒が十分に漂ふてゐる。

南京町を通つて大倉山公園へ瓜先上りの段を上りて頂  
のグラウンドに來た時は、私達は(ト／＼)に疲れきつた  
そこには大きな運動場があつて、多くの人々がボール遊  
びなどして遊んでゐた。電車と自動車の目まぐるしい神

戸市も眼下に見えた。そこを下りて湊川神社に参詣する  
境内には無数の鳩が人馴れて遊んでゐる。「嗚呼忠臣楠  
子の墓」と彫つた碑がある。あゝこの楠子あればこそと  
思へば、自然に頭を下げざるを得なかつた。

午前五時五十二分、神戸を後にして再び車中の人とな  
り憧れの京都へ。車中より眺むれば、黄色の曇を敷  
きつめた様な茶種の畑が一面に広がつてゐる。

午後二時京都驛着、こゝで大抵の人は下車して、満員  
だつた列車内は殆ど空席となつた。プラットホームには  
下駄の音、靴の音、草履の音等ガチャ／＼／＼／＼ま  
るでジャズの名曲の様だ。

御大典の後のこととて、大きな奉迎門やイルミネーシ  
ョンがあつた。  
神戸と比較して見て第一印象は落付の有る街といふ事  
であつた。

#### 京都の一日目 本四 井上忠子記

四月二十三日 午後零時二分……プラットホームに流  
れ出した瞬間、おゝ今立てる此の地こそ、はるかなる日よ  
りどんなにかあこがれてゐた京の地なのだ！と思ふと一  
種のときめきを覚えて、力強く土を踏みしめたい衝動に

用等よく考へられてゐた。

#### 三十三間堂

古典的な堂宇に一千一體の千手観音が安置され、薄暗  
い殿堂に法の燈がゆらぎ、崇高・尊嚴・慈悲・圓滿の氣  
が四邊に漂つて、人界を超越した感が起つた。

#### 博物館

縁の芝生・廣壯なる洋館建その中には古代よりの名畫  
名刀となづけられる物が陳列され、我が國古美術の粹を  
集めてゐた。

#### 豊國神社

此處の表門は、桃山城より移されしもので、國寶の札  
が掛つてゐた。おゝこの大梵鐘こそ、あの狡猾な家康の  
ために、叫喚の蒼と化した大阪冬の陣の端緒となつた國  
家安康の大梵鐘！今尙三百年前の哀愁とつきぬ恨さを  
ひめて昭和の世に息づいてゐた。

#### 清水寺

「京の清水の舞臺から飛んだ氣で」と、よく云はれる言  
の葉そのまゝに、懸崖に高く架せられ、下は緑を競ふ楓  
さながら青雲の上に浮んだ樓閣と云ふ感じだつた。

#### 音羽の瀧

音羽の瀧!!! かうつぶやいた時、誰でもいはゆる白帯

かられた一行は直ちに指定の宿に導かれた。さうして此  
處に手荷物を下し、身軽になつて、此のあこがれの地の  
在りし昔の文化を辿るべくいさぎよく見學の第一歩を踏  
出した。

先づ最初に見學の主眼目たる  
桃山御陵へ。

七條より京阪電車に身を委ね……。桃山にて車を捨  
てた。これより落葉一片だに無き、清い白砂の道をざく  
／＼と靴で刻みながら歩を進めた。途の左右の松檜は春  
の爽やかな碧空を仰いで、緑濃やかに立つてゐた。やが  
て御陵に到る。こん／＼と湧き出る水に塵想をはらひ、  
襟を正して玉垣の所まで進んだ。鬱蒼とした松の緑をパ  
ックに、清麗なる御陵は我々に言ひ知れぬ神々しさを與  
へ、明治大帝の御聖徳をしのび奉つた。これより石段を  
下り東の陵に詣でた。昭憲皇太后の御神徳を仰ぎ、何と  
も云へぬ感に打れた。

#### 乃木神社

此の境内には、あの日露戦役當時の三軍叱咤の根據地  
たる營舎の俤をそのまゝに移した記念館があつて、當時  
の慘憺たる様を物語つてゐる。又長府の本邸を模した家  
があるが、實に粗末な、あばらやだつた。然し場所の利

を流した様な、綺麗な瀧を心に描くことだらう……。が  
現實の姿は想の外にも、三ツの寛から雨水が落ちてゐる  
様なには、幻滅の悲哀はユーモアを加へざるを得な  
かつた。

#### 八坂神社

濃厚な色彩の施された神社で、よく京の祇園の舞子の  
チリリとひびくかんざしの音に、京の夜は更けて行くこ  
は、他に求められぬなまめかしい情緒の一つだらう。又  
この周りは圓山公園で、すが／＼しい噴水の邊等、幾多  
の人の群がそゞろ歩きをしてゐた。これよりあの名工と  
うたはれし左甚五郎の、傑作たる鶯張りの廊下を以て知  
られたる知恩院に歩を運んだ。

#### 知恩院

軒の左甚五郎の忘れたい傳へられてゐる傘を仰いだだ  
けで、鶯張りの廊下の踏み心地も味へず、もどかしき心  
で此處を去つた。

#### 次はインクライン

水なき所を船で運ぶ。それは文明の力サイエンスの力  
でなくして何であらう。

#### 平安神宮

この頃は、極度の疲労と旅愁とが錯亂して、私の身心  
をさいなんだ。然し塵一つなく掃き清められた境内色彩

の配合麗しき廣莊たる殿堂を拜した時、一種莊嚴な感に打れた。

これで以て京都見學日程の第一日は済した。丁度太陽は最後の一瞥を地上に投げて、何處かの山の端に沈み、京の巷には騰脂の灯の瞬くころはひは、ひしめき寄せてゐた。

一行は直ちに電車にて宿へと急いだ。さうして始めて疲れ果てた體を憩はせることが出来た。やがて夕餉の膳は運ばれ、そこからもこゝからも華やかなさんざめが起つた。食事を認め、後入浴をなし、そこら邊りをそゞろ歩いて十一時過ぎ床に入った。

京都の二日目

本四 瀧野 琴記

四月二十四日 憧れの都、京都の第一夜は明けた。騒がしい朝の雑沓に夢は破られた。

午前六時に起床して、相變らず寢不足な顔をして、お膳に向ふ。愛想の良いお給仕に京都の御馳走を満足する程戴いた。すつかり旅の用意を済ませると、宿からつけて貰つたお辨當と、いつも離さない黒い洋傘を手に、街頭にキチンと整列した。足どりも軽く電車通りへ出て、一寸趣の變つた電車で御所の拜觀へと走る。入口からギ

ツシリの人垣だ。巡査が重々しい態度で守つて居る。急に緊張した心で、眞白な砂利の道を進んだ。學校の生徒と一般人とは、別れ／＼に各々二列に並んで進むのである。やがて右掖門をくゞり、紫宸殿の前に額づく。氣持よく掃き清められた白砂の中に、左近の櫻、右近の橘の老木が綾威の輝く限り生々成長して居る。太古そのまゝの笛や、太鼓がありし昔を偲ばせた。高御座・御帳臺を近く拜觀して、左掖門を出て、帷舎を廻らした春興殿に向ふ。こゝでは賢所大前の儀の莊嚴を偲びながら更に大饗宴場に進んだ。美しく且きらびやかに飾られた中にも、何處にか犯すべからざる尊嚴さ、奥床しさに自然頭が下つた。電燈の光が目を射る様に眩い。五節の舞姫が舞はれたといふ舞樂臺を右に見て、正面の玉座の前に來ると、その左右は悠基主基地方の風俗繪で飾られてある。次は待合室。御招待にあづかつた老臣達が寒からうとの思召しか、一々暖いスチームが通つて居る。私達一同は只々感激に満ちて言葉も出なかつた。程なく悠基殿、主基殿がある。これは杉の丸木が皮のついたまゝ用ひてあつた。遠い太古を偲ぶに最もよいと思つた。かうして場内を一周し、終に仙洞御所の南方、築地の御門から退出したのである。

少しくつろいだ氣持になりながら、再び電車で北野神社に詣づ。一同禮拜した後、こゝの境内で暫く休ませて戴いた。次は金閣寺、足利義滿が巨額な金錢を投じたといふから、どんなに綺麗なものかと道々想像したが見事に裏切られた。門の開くのを待つて居ると「切符をいたゞきます」と十才位の男の子が現はれた。どう考へても生意氣な句調である。始めから一寸めん喰つて何だか妙な氣持になりながら、案内者に導かれてお庭の様な處を一周して小山へ上るとあづまやがあつた。これは南天の床柱、萩の違ひ棚、といふので有名ださうな。そこを下ると二三軒の茶屋がある。この邊で晝食を戴いた。しばらく遊んで、直ちに西陣織の本場へ行つた。美しい織物に餘念なく二人の人が働いて居た。半襟や帯地を買求めて電車で西本願寺へ引返した。丁度外人のお客様が見えて居たが、これによつても如何に屈指のお寺であるかほゞ想像出来よう。左甚五郎が鑿を振つたと言ふ欄間や、探幽が描いた襖など一々説明してゐた。長い廻廊を巡ると、後方に規模の大きいお庭がある。城は割合に狭いが、その中に大自然の風景が遺憾なく表はされて居るのが巧である。一同佛前に額き靜かにそこを出た。……京都の見學も済んで宿へ歸つた。今少し京都に親しみ

たい、といふ皆の希望はあつたが、たうとう外出も許されず床に就いた。

翌朝!! 五時五十分發の列車で京都とおさらばをした。親切に世話をした宿の方々に限りない名残を惜みながら草津線を一歩伊勢へと向つたのである。

京都から奈良の前夜まで

實二 下田美智子

四月二十五日 午前五時五十分懐かしい思出深き京都の地に別をつけ、二見ヶ浦へと向つた。

午前十一時二十分二見ヶ浦に着きました。海水はゆるやかに岸邊を洗つて居りました。

私達は大變に疲れて居りましたが、海邊の新鮮な空氣に、幾分か元氣も恢復し、たゞり／＼して行く内に、天の岩屋がありました。岩屋は濕めほく、小さな奥深い物で、中に燈が輝いて居りました。

程なく目的の夫婦岩の所に行きました。

私は夫婦岩といふものは、沖の方にあるやうに寫真で見ましたが、案外にも岸邊近くにありましたので、少しく變な氣がし、さほど良いとは思ひませんでした。あの有名な夫婦岩がこれであるかと思ふ位でありましたが、

日出の時には、なんとも言ふ事の出来ない、壯麗な眺めだらうと思はれました。

此處を後にして、来た道を引き返し、電車に身を投じ内宮に参拜す。かじか鳴く五十鈴川の水は清くさらりと流れて居る。一同は手を清め口をすすぎ、老杉生ひ茂つてゐる、小石路をたどり行く時に野生の雞が、二三羽餌をあさつてゐるのを見かけた。

板垣御門には、白の幕がたれてゐました。

私達はうや／＼しく拜しました。其の時の神々しさ、なんとも言へない感じがひし／＼と、胸にせまつて來ました。内宮を出て徴古館に行く、此處には古代の遺物多く、私達に取つて大變参考になる物が多くございました。それから外宮に参拜す内宮と同感でした。拜し終りて汽車にて奈良へ向ひました。

閑静で傳説多き、奈良の想像が頭の中に、くり廣げられて行く。もう奈良驛だと思ふ内にプラットホームに横づけとなる。汽車からはみ出された私達は、疲れた足を引きづりながら「かめさ」と書かれた提灯を先頭にして行く。旅館に着いて皆はつとす。夜は十時頃まで自由外出が許されました。

奈良 實二林 シズ子

四月二十六日 午前七時、我が國最初の帝都たりし奈良を見學すべく宿を出で、先づ第一に猿澤の池に行く、案内の方の説明によると、その昔采女の衣掛柳は今も植ゑかへたのだと、なる程柳はまだ若々しい。西岸に采女神社がある。

それより春日神社に向ふ、途中に「三作石子詰の址」がある。お友達仲間がお互に自分の知つてゐる傳説を話しながら、どう／＼春日神社に來る。燈籠の多いのと鹿の数は数しれない。其の鹿が行きすぎる人に頭をびよんとさげては餌をねだるのは、如何にも可愛らしい。

春日神社の後方に三笠山がある。一名若草山といつて毎年二月に枯草を焼き拂ふとのこと「天の原ふりさけ見れば春日なる三笠の山に出でし月かも」と、よんだ阿部の仲磨の心中が察せられる。麓で休んでそれより紅葉の手向山八幡宮へ参拜、紅葉の間にながれてゐる少さい瀧は一層心を吸引する。

それより東大寺の東にある大釣鐘を觀る。次は東大寺である、木造としては世界一といはれるがなる程大きい。大佛様の肩や、手などに、ほこりの積つてゐるのも此の歴史を語るに十分である。大佛殿を出で興福寺に來る。寺の歴史は大佛よりも古

いそうで、こゝには花の松がある。此の松は花の代りに植ゑたのだと、高さよりも横に出てみる枝の方が長い。これで豫定通り奈良見物が終つてしまつた。此の閑静でおちつきのある奈良に心残りがある。かくして又車中の人となつて華かな大阪へ向ふ。

大阪一日目 山縣 照子記

「天王寺驛」。車掌の聲と諸共に、大地を踏みしめて立つた私達は、先づあたりの喧噪に驚かされた。大都會だと云ふ感じは、忽ち私達の胸に込み込んだのである。見上げる空には、數も知れぬ煙突が、空を刺すかの如く林立し、黒煙は空を掩ふてゐる。私達は驛前で深い印象を思ひ／＼胸に秘めて、天王寺公園内の動物園へ向つた門を入ると、右手の大きな池では、大小の鳥は云ふまでもなく、さまざまの動物が水にたはむれてゐた。數かぎりなく居る動物を左右に見て、衆目を驚かす錦蛇の前へ出た時、始めて案内人は口を開いた。此の錦蛇の體量は二十四貫あつて、食物は大變に少く、夏は六ヶ月に一回冬は五ヶ月に一回しか食べないで其の量は一度に兎が六匹、鶏が六羽ださうである。次が百獸の王である猛々しいライオンで、これは純粹の江戸ッ子である。即ち東京

上野公園に生れたのであつて、ケブ、バーバリス、二種類中で、此處のはバーバリスであるとのことだ。其の食量は牛肉六百匁、兎肉八百匁、牛乳四合ださうである。第三は象、その體重は八百貫あるさうで、食量は鹽一升四合、粟十五貫、青菜二十貫を食する云ふ事であつた。次がマレイ産の熊、これは最も珍らしい動物で、この動物園での主要動物とのこと。従つて其の食料も誠に結構なもので、牛乳とパンだけ食するさうである。

それから、ハイエナ、火喰鳥、ハゲタカ等の前を通つて孔雀の前へ行く。孔雀は今を晴の場さあの美しい羽毛を開いて、ソヨ／＼と風になぶらせ、如何にも女王のやうであつた。それから數種の動物の前を通つて、見學したのが駱駝。孔雀とは雲泥の差で、其の見にくい事は御話にならなかつた。其の次にゐるのが、萩に最も縁のある鶴であつて、説明者も、萩には普澤山の鶴が下りてゐると云つてゐるが、此の鶴も矢張り日本種が一番美しい。

私達はしばらく休息した後、動物園を辭して大阪城へ向つた。途中は阿部野橋より電車で眞一文字に走つた。目前に變轉する景色は、かぎりなく廣く目新しかつた。うらみも深き豊臣一族の在りし昔の大阪城、其の偉大



な城は半空高くそり立つてゐて、私達を戦慄させるる様だ。門前には、捧げ銃のいかめしい番兵さんの顔が四方を睥睨してゐる。天主閣に登れば、涼風は頬をかすめる。見下せば、遙か下方の大夏高樓は、マツチ箱のやうで、煙突から吐き出す黒煙は空を掩ふて日の光も薄いやがてこゝを辭して三越へ向つた。視野に映する八階建の三越の華麗、あの偉大な大阪城の景色と共に、私達の心眼に深く印象されて、忘れる事は出来ない。

エスカレーター、エレベーター等に送迎されて、階上階下をさまよひながらも、あたりの喧騒に驚かされる。三越前の大通りでは、交通巡査が警笛を吹き、手を振り聲をからして叫んでゐる。三越で三時間遊覧の後、體を電車に托して、道頓堀の宿に引上げた。

宵から雨を催してゐた空は、本當に激しく降り出した泥をどかしたやうな水に、數百の灯は明滅する。雨がついて自動車走り、電車は軋る。時の過ぎるにしたがつて、雨はますます激しく降りしきり、そして、大都會特有の夜の繁華は次第に更けて行く。

大阪第二日目の記 三好孝子

四月二十七日 安らかな眠りから覚めるはづの私達を

人工的な機械の雑音が、たゞき起してくれた。大大阪の朝だ!!。一日の勞役を告げる最初の電車が、轟然と走り去る。無数の煙突は煙をはき始めた。サイレンが鳴る!。夕の雨に濡れたビルディングや、オフイスの白い屋根が、しつとりと朝の日光に濡れて居る。人が動く!、人が動く!。

私達の胸も、大大阪の最も多く學ぶべき處のある見學の豫想にどかかづみ勝た。

朝の八時三十分頃、いよゝ宿を立出で、電車に乗つて先づ一番に造幣局に向ふ。

すつきりとした廣い白道、左右の櫻の並木、その小さい川さへも流れて居る。邊の空氣も何となく清く、大阪とは思はれない様な清新の感が起る。

左手の廣壯な白壁の西洋館、それに向ひ合つて、廣い路に面して居る右手の赤い煉瓦造の頑丈な建物こそ、小學十卷に出て、誰でも知つて居る造幣局だ。小さい門を入ると、柳の木が二三本ある、ベンチがある、そこでしばらく待たされた。

物音一つ聞えない、この館内に於て、偉大な機械が活動して居るとは、決して思はれない。しばらくして内部の見學を許された。

建物の屋上には、一つの報道機關たるイルミネーションの仕掛がしてあつた。

しばらくして内部に入り、直ちに會議所に入つて、一時間位色々な説明を聞いた。

それより内部の見學を始めた。第一番目に見學したのが寫眞場である。

新聞内に入る處の、出來事、人物、景色等の寫眞を色々製作する所である、大小二百三十八臺、千五百七十馬力の電動機がならべてあり、さうしてこゝには、色々な寫眞がならべてあつたが、ラグビー戦や、濱口雄幸首相等の寫眞がかゝけてあつた。

次が活字場である。

こゝには多くの活字がある。さうして、これらの活字は、新聞社獨特の、能率的配置がしてある。こゝには大變多くの、男子や、女子の人々が働いて居る。正しさと速さを誇る大新聞の陰には、この様な人も居るのだ。

その次は印刷場、こゝには世界最高輪轉機が三臺、高速度輪轉機が十二臺あつて、四頁のものを一時間に、前者は十二萬枚、後者は七萬二千枚を確實に刷るとの事でかなり廣い處にこれらの機械が整然とならべてある。

内部は熔解場、極印場、彫刻場、製作場、試験場、精煉場等に分れて居る。熔解場は色々な金屬をどかし、それを平板な金にし、これを圓形にくりぬいて、それに文字、模様等を入れて、普通我々の用ひる貨幣にするのである。熔解場には、赤くてれた熔解爐がある。試験場には、自動天秤があつて、圓形にくりぬいたものを、天秤が、正しいものと、軽いものと、重いものとに夫々分ける様になつて居る、實に精密なものだ。我々の見學した總ては、小學校で教つた總てを、少しも裏切る様な事は無かつた。自分の身が今にも渦中に巻きこまれる様な響

眞黒になつて働く人々、すべてが超人間的だ、と云ふ感が深い。午前十時頃我々は造幣局を立出でた。さうして二度電車に乗りこんだ。私はふと或る人の云つた言葉を思ひ出して、實に切實な感じがした。それは「東京は人が街に使はれて居る、しかし、大阪は人が街を使つて居る」と云ふ言葉である。地上の人が、……總てが活動して居る。行き過ぎる雑音につまされた街は、たゞ偉大だと云ふ一語でみたされるものであつた。

今度は、現代最も正しく、最も敏速なる事を誇る、大阪毎日新聞社を訪れた。

電車通りに面した鐵堅コンクリートの建物がそれであ

尙この新聞社の發行部数は、東京日々を合せて、二百五十萬位に達するとの事であつた。これも皆偉大な文明の恩恵である。

その後處々を見學して、午後七時過ぎ阪急マーケットに歸つた。こゝで私達は色々買物をしました。さうして九時すぎこゝを出で、はげしい通りを練々にしてよこぎり、梅田驛まで出たのが十時十分頃であつた。

其處は大都會の夜だ。赤青のイルミネーションが、高く光り、はつと思ふ瞬間、こつと青い火花を散らしながら電車が走る、go!!、忽ち人々は走るかの様に動きはじめた。

ほこりの黄色く立ちこめた薄明るい大通りの向ふから無数の自轉車が押寄せて来る、總てのものが波の様になつて押寄せて来る。色々の建物の數々が、黒い影を地上と空とに映しながら、そゝり立つ様に立ちはだかつて居る。

午後十時四十分、偉大な影を私達の心に落して來れた大大阪にいよゝ別れる事となつた。

さうして、雑沓しい梅田驛を後に、一路廣島へと向つて發車した。

大阪より萩まで

伊藤ツハ子記

堂で朝食を戴いた。やがて、修學旅行の目的の一つとして居た廣島の昭和博覽會場に着いた。もはや誰の顔を見ても、學校を出發する時の元氣、希望に充ち満ちた態度は、影もなく、只疲勞のみが全身にみぎつて居た。足をひきづりながら、先生の御導きの元に、西練兵場建設された第一會場を見學した。見物人の中を縫つては、案内者に導かれて進んだ。萩から直接、廣島に行つたのなら、珍らしいこともあつたであらうけれども、何しろ大阪、京都を見學した後なので、大して感心する程のことでもなかつた。産物は縣で區別されてあつたが、山口縣と書いてある所を見ると、急に懐しくなり、特に萩焼を見つけた時、非常に嬉しい感じに打たれる。彼方、此方と見學する内、いつしかお友達と私の二人は、列からはぐれてしまつて、一向、先生の御姿も、又見慣れた洋服の人も目に止まらない。私の胸は不安に満たされた。併し仕方がない。果ては何處かで一緒になる事が出来ようさ、二人はいつて居たものゝ、やつぱり心配なので、二人は館外に出た。併し先生の御姿も、御友達の影も見えない。只見知らぬ人の往來して居るばかり。ふと後をふり返つて見ると、二、三人、又遅れて、四、五人、私共を目當に、あの方達もやつぱり先生を見失はれたのか

遠く故里を離れて、五日間旅を續けた私共百餘人は漸く大阪驛についた。さしも繁華な大阪、さす黒い煤煙にざりかこまれた煙の都を後に、發車したのは、午後十時四十分頃で、田舎で云へば、闇の世界と、となへる頃であつたが、やはり其處は都の大阪で、赤、青の光は晝を欺く如く、私共の眼を強く刺戟した。汽車内は非常に混雑して席さへ取る事が出来ず、非常に苦痛であつた。汽車は何の容赦もなく、長い旅路に疲れた私共を詰め込んで進んで行く。其の時はもう、乗車した爲の安心からか、只眠りの催すのみで、都の夜景を見ようといふ様な心強さは始まらなかつた。車内の満員の爲、通路に座して、不自由ながらも、睡眠を取つていらつしやる方もあれば、又立ちながら頭を垂れていらつしやる方もあれば、様な悲惨な有様だつた。併し、平凡に樂に席を取り、安心して睡眠し、一夜を明すよりも、こんなにまで苦しんで一夜を過した事は、將來、何かの思ひ出になるだらうと考へられる。絶景を以て、世に聞えて居る須磨、明石舞子もいつしか通り過ぎて、東の空がほのくさ曉の光を見せる頃には、晩春の淡い霞が邊をこめてゐた。穏やかな春の瀬戸内海に、帆船の四つ五つ浮んで居る景色も又捨て難い趣だつた。先生方の御厚意により、汽車の食

と少し心強くなつて待つて居た。だんぐんと人數が多くなり、不安の念も少しは融け、果ては五十人位の一團となつて、先生を求めた。その中、先生も後の御友達も見つかつたので、全部揃つて、再び門をくゞり驛へと向つた。一から十まで、先生方へ御心配をかけてと思ふと、更に氣の毒で堪へられない様な感じがした。私共を乗せた汽車は、十時四十分廣島驛を發車した。もう疲れに疲れて、修學の二文字も忘れ勝ちだつた。あゝもう歸るばかりですね。等語らひながら、喜んでいらつしやる方を見らだに嬉れしかつた。もう汽車に身を任せて居りさへすればと思ひ、安心してうとうととなつた。やがて夢より覺めて見れば、生々とした野原、海邊、霞んだ遠山と景色は轉廻して、疲勞しきつた私共の心を、幾分か慰めてくれた。午後四時三十分、厚狹驛で乗換へた、いよゝ懐しい萩へ歸るのかと思ふと、急にこみあげて來る感情をどうする事も出来なかつた。一週間の留守中の學校の様子等語らつては、萩の接近するのを喜び樂んで居た。正明、三隅等の聲を聞くとも、もう心を押し沈める事すら出来ない。やがて、日本海の雄々しい景色が展開された。靜かな瀬戸内海も讚美する點はあるけれど、此の雄大な感じのする日本海の趣は、より以上好感を與へた

玉江驛と呼ぶ驛長の聲も大變嬉しかった。此處で少數の方は下車せられた。いよゝ萩驛につくと、中野先生を始とし、諸先生及び一週間留守居を下すつた皆様の御姿を見た時、何とも云ひ得ぬ程嬉しかった。先生も、澤山の御友達も此處で下車せられた。多忙な日暮時に、わざん、驛まで……。先生であればこそ、御友達であればこそと思ひ、何と申してよいかわからない様な有難い

感謝の念に打たれた。東萩で數人の御友達に別れ、漸く七年半頃大井驛についた。此の修學旅行中、二、三の人は運悪く不具合の方もあつたけれど、幸にそれも大した事もなかつたので非常に嬉しかった。私共が今かうして無事に修學旅行を終へて歸つたのも、實に諸先生の御蔭だと、深く感謝して止まないものである。

大正天皇御製

民はみな年のはじめを松の枝門にかざして御代いはふらむ  
かぎりなき山田の里のにぎはひもたてるけふりに知られけるかな  
影さゆる月にきはひて咲く梅の花の心を、しかりける  
ふりつもるかしの雪ぞあはれなるおいきの松はひとならねども  
ふりつもるまがきの竹のしら雪に世の寒けさをおもひこそやれ

縁の園

洞春詠草

山口市外大蔵村矢原  
舊特別會員 安富敦子

このまゝにかくて消ゆべき身なるべし月もいつしか山に  
かくれぬ。  
あかつきの光しろきにうらやまの小松の山に鼻のなく。  
目をさちて、もの思はまし月かげの梢をもれてしろきあ  
かつき。  
観音の檜皮のみ堂ゆれゆる、小萩の中にてばやさしき  
けふのわがかくながらふる生命さへ謎なるものを月はま  
しろし。  
永遠といひ不滅といへるそれをまたあたらしるこそ月に  
おもへる。  
花たでの細々生へる紅の小さき莖もあはれなるかな。  
紅たでの小さきくきのあはれにもいろづきつゝも細々生  
へる。

やはらかにのびたてるかもわが踏めばこの芝草は足をう  
づむる。  
あゝ幾年幾百年の昔よりかくこの寺に月はさしけむ。  
萩の花ゆれてゆらゝになびけるにおく白玉の露おほろか  
に。  
紅の夾竹桃の一もどが残りてさける古寺の庭。  
しほらしき秋海棠の一もどの花もにほへる古き庭かな。  
藻の花も紅の蓼も青くさも水澤の水にさけば美し。  
檜原山夕となれば芽の青くけにさやかにもくれのこりつ  
ゝ。  
萬龍の紅の實のつぶらかにあまたみのれる庭靜かなる。  
うすあをくみやまの水をたゝえたる池も靜かにせみなさ  
さほる。  
にはしづか、しづかにせみのなきるつゝ小池も水も色も  
しづかに。  
いつまでもこのすみすみししづけさに清けさのうちにあ  
らまし生命。  
うすむらさきの穂にさく花のうすうすとさけるみやまの  
山こえの路  
君が村うすむらさきの穂の花のさけるみやまの山こえて  
ゆく。

すみすみしみやまの水にうつろへば人間の子の思ひは悲し。

断ちがたき人間の子の煩ひに似てもかさなる青き圓葉よごしへにたゞわがかくて一人あるひとかこよひの月はましろし。

大寺の老木の杉のうれにあかくしろくまだまの月はかゝれる。

小さき聲して蟲なきいでぬ白玉のつゆの稲葉にこぼれこぼる。

たまきはる生命の謎のいやさらにおもはるゝかな月しろき宵。

かにかくにわれの心の憂き性の不遜のゆめに月すえわたる。

すべつきて漂ふ小ぶねでだてつきてたゞよふふねにたらずやきみ。

つぶらかに萬龍の實はつぶらかにみのり居るかもたゞつぶらかに。

大寺の氣のしづかなりましろなる二羽の小鳥がなきかはしつ。

大寺の用水の桶に水みちてすみてはるけき空のうつれる江をわたり西より来る何をも思ひてやまし禪定達磨は

ましろにも田の面をおほひせりの花かせにゆらゝにゆられつゝさく。

三間の明障子にもおしげるもごちて今宵もいねにける寺あきかせにわがくるかみの一すぢのゆるくもさびし萩さきいでぬ。

萩の花にはへる朝よあきかせにわがくるかみのなびく一すぢ。

燃ゆる火の阿蘇の山こえ廣野越え南の國に君かもかへる

(以下數種、南の故郷にかへるといふ人ありて)

ふるさとや南の國の青空のその故郷に歸らむといふ。

阿蘇とさけばなつかしきかもひとりなるかのわが友も仰ぎなれにし。(友人芹川梅子氏を思ふ一首)

あその野を思ふ幾年燃ゆる火の阿蘇のみやまを思ふいく

年。

なつの雲たちたへむらむそが上に燃ゆる煙のなびくらん

山。

しどになくせみをさゝつゝともすれば阿蘇のけむりの燃ゆるを思ふ。

いけ水のしづかに碧くすむ中にゆらぐ藻ぐさも悲しかりけり。

こき色のみどりの色につゆ草の花あまたさく路をわけゆ

く。  
孤兒等みな掌を合せつゝみほとけをおろがむみれば泪ぐましき。  
あしたしづの、檜原の山のをくゝくすむるも思ふ山の不可思議。  
あさ日さすやまのみそらの美しく夾竹桃の花のあか、り芭蕉葉のひろさがゆらゆれをりあしたの霧のたゞよへるうち。

### 川島より

萩町川島

大正六年卒業 佐伯まつ子

白雲に羽うち交はし飛ぶ雁の數さへ見ゆる名月の夜も程近ふ相成候。此頃朝夕は一入凌ぎよき時候と相成申候。其の後先生には益々御健勝にわたらせられ、御職務に御精勵の御事と存じ、御喜び申上候。平生は雑事にとりまざれ、心ならずも御無沙汰致し、誠に申しわけもなき次第、少しの御恩報じもなし得ない私を恥しく存じ候。御大典奉祝事業の件につきましては一方ならぬ御心をわづらはし、厚く御禮申上候。御熱誠なる皆様方の御志にあ

り、以外の御盛況の御様子漏れ承り、同窓生の一員として深く感謝致し候。  
千載一遇のこの御目出度き世に生れ合せし私の喜びの上、一生に二度となき御校の美譽に、幾分の御力添へもなし得ない私の不徳と御許し下され度候。御多忙中甚だ恐縮致し候へ共、聊かの志とそ的一部分に御加へ下さるやう御取計ひ事御願ひ申上候。  
時候柄御身御大切にわたらせ候やう御祈り申上候。  
かしこ

### 小郡町より

吉敷郡小郡町沖田

大正六年卒業 長田千代子

朝夕は大變に凌ぎよくなりました。その後先生にはお障りも入らせられず、御機嫌よく渡らせられます御事と御よろこび申上げます。次に私事も、おかげ様に事なう暮して居りますから、他事ながら御休神下さいませ。先の頃有志の方々より、御大典記念事業につき、趣意書を戴いてをりましたが、私共夏休みにて歸省を致し、又當地に参りましてからも、何かと取りまされ、殊にお

そくなり申譯け御座いません。先生に御手数おかけ致してはおそれ入りますが、別紙爲替券同封致しました故、よろしくお取りはからひ御願ひ致します。殊に些少にておはづかしながら、ほんの志をおくみどり下さいませ。もはや、私も長女七才となり、本年より通學致して居ります。長男四歳、次男一歳と、三人の母となり、守も雇はず、一人で致して居りますが、中々多忙で、修養書一つひもどく暇もなく暮して居ります。そのかはり病氣一つ致しませず、健康體で御座います。子を持つて知る親の恩とか、三人も子供を持ちましては、よくよく親の恩が身にします。一寸子供の寝んでをる間に、亂筆ながらおわびかたぐいお願まで、會長様はじめ、皆様によりしくおつたへ下さいませ。

### 遼東の一角より

大連市但馬町一九ノ三

大正十年卒業(舊姓田中) 藤 田 俊 子

滿洲の野にも秋風蘆花を吹く頃とはなりました。おなつかしい諸先生様や皆様には、お健かに御發展のこと、嬉しく存じ上げます。一昨年の暮、愛兒を亡くした悲し

みも消えやらぬ胸をいだいて、煙の都大連に参りました。船が浪高き黄海にさしか、り、名も知らぬ島にある支那人のあばら家や、遠く近く漂ふ漁舟を見ました時は、さすが異郷に來た思ひが致しました。その後早や二年近くになります。次に私の目に映じた大連と云ふ所を少し御紹介致しませう。當地の冬は、比較的暖かな内地にくらべますと、かなりな驚異を覚えさせます。一昨年の暮、埠頭に第一歩を印した時の寒さつたら……。然し土地の人は逐年暖かになつて行くといつて居ます。當地の冬は三寒四温といつて、週期的に三日の寒の後は、四日の温い日が來ます。この三寒の内に降つた雪がとけて、乾かない内に三寒が來たら大變、ペーブされた道は鏡の様になつて、とても危険で歩かれません。それで雪が降つたら直にかき取らせて居ます。空は、家々にたくストロブの煙に小暗くござされて、南滿第一の文化都市も、田園の清淨なのにくらべるとまはあきません。この有様が春四月上旬頃まで續き、人々はいやでも家の内に冬ごもりをしなくてはなりません。四月中旬頃野山に春が訪れて來ますと、人々は籠から放たれた鳥の様に、郊外へくぐりと歩みを運びます。四月も下旬になりますと、梅桃杏櫻などが一時にはつと美しい花を開かせます。この頃

は風が強く、例の蒙古の黄塵が來て、一夜の中に市街を眞黄にすることはしばしばです。昨年などは、このため太陽の見えない日が約十日もつゞきました。その後雨が降ればいゝですが、雨はなかく來ない。風が來て之を吹きまくる不愉快なこと。春は内地の様に愉快なものは御座いません。初夏の頃ともなりまして、街路樹のアカシヤの花が、あまい香を街路一面にたゞよはします。又こちらは海水浴が盛んで御座います。行先きは、星ヶ浦、夏家かし、黒石礁、老虎灘など澤山御座います。設備は實に完備したものです。シヤワーなどはほんとに氣持ちよく出來て居ます。來るべき約五ヶ月の寒に備ふべく、人々は競ひ集ふのであります。當地の秋は、一年を通じて一番心地よい時で、殊に紅葉の美しいことは、全く春の花以上で御座います。市街の有様は文化都市の道具建は一通り揃つて居ますが、その内に文化とは縁遠い支那人が多分に住んで居ますので、此等の人達によごされます。殊に乞食が多く「メシシンジャウ」(飯進上)といつて市中を歩いて居るのはこれであり、一面殖民地氣分でも云ふのか、一種のかるい氣分があります。これが人足をこゝに引きとめるものかしら……。

お、秋の日も正に暮れなるとして居ます。異郷にてなつ

### 川崎市より

神奈川縣川崎市旭町二ノ四三七

大正十一年卒業 堀 芳 子

かしき故里をしのびつゝカーテンよりも來る夕陽を見つめて居た私の眸には、いつしか露が光つて居ました。皆様どうぞおからだを御大切に遊ばせ。かしこ

お、なつかしい同窓の皆様よ!!。幾度かの秋は廻り來まして、丁度今宵の様な名月が、南の園の松の梢にかゝつた姿の美しいうて、寝るも惜しく、寮の柱に凭れて、萩の葉蔭に鳴く蟲の音もいちらしうて、感じ易い乙女心の涙したこともございましたものを。觀月會の催しも、今尙目の前に見るやうではございませんか。私のみならず今宵の月を御覽遊ばす多くの友は、あの無邪氣な昔の様をさみふに御思ひ起しになること、存じます。月は代り年は過ぎ、母校にて御教を賜はりし師の君様方の御姿も、次第々々に御去り遊すこの淋しい雁の便りに、その昔が偲ばれて七年の間の我身のうつり變りも亦悲しみの一つで御座います。皆様の中にも嘸かし愛兒を御亡くし遊ばした方も御座いませうと存じ、共に誌上で慰めあ

ふ事も出来ましたなら、とたどろろしい筆を蒼白い月影の流るゝまゝに走らせました。愛兒の死、これ程母親にござりまして、悲しい事實が御座いませうか、いとし子を失ひし人のみの知る胸の痛手かと存じます。夕闇の迫る頃、我子の眠る隙を見て病院をソトぬけ出でては、近くの御大師様へ御詣りし、此の胸も張り裂くる思ひで、只管にいとし子の病の恢復を祈る母の心の内を哀しむが如く、山門の鳩は悲し氣に鳴いてをりました。七月廿五日の午後、入院してわづかに四日、可憐にも吾が子は、泣きすがる若き母を一人残して、遠い旅路へと立つてしまひました。まるゝと肥りしまゝの坊やに、歸らぬ旅の晴着にもど、母の心づくしも亦哀れで御座います。三度笠とやらに杖を持たせ、草履をはかせて、たゞ一人彼の世へ送らねばならなかつた私は、人目も恥ぢずに吾子のいぢらしさに泣き伏しました。母の乳房を離れて吾子は、賽の河原で唯一人、積みては崩れる石の山に、母も一緒に行けたならと思へば、又しても涙は止めどもなく頬を傳はるので御座います。眠らんとすれば懐淋しく、昨日迄乳房ふくみしいと兒の死の利那の有様や、ふと見えし襖の破れ、壁の跡にも悲しき思ひは盡きせず朝夕の佛前の供養にも先き立つ涙に、新しき位牌の表も

かすむばかりで御座いました。一年経ちて、亡き子の年を數へては思ひ出新しく、月すむ夜には、在りし日の事のみ偲ばれてなりませんけれど、思ひかへせば私ばかりか、いとし兒に別れ、父母を失ひ、妻に先立たれて悲しむ人の、あまりにも多い世の中で御座います。つまらないうことのみしるし、早や月も西の彼方に寂しげに入らうとしてをります故、皆様の御健かを祈りつゝ筆を止めます。さらば同窓の皆様。

### 福川校より

阿武郡福川小學校  
大正十二年卒業 坂本勝子

拜呈、あたりの野にも山にも、いつとはなく秋らしい風が吹き初めました折柄、先生には斯の道の爲めに御盡力遊ばします御様子、蔭ながら御喜び申します。何と申しても、六年近くおたよりをも差上げません私の御無音を何卒お許し下さいませ。今更おたよりを認める一字一句に、汗顔にたぬ自分の姿をまざまざと見せつけられて居ります。六年前の私の片影、幸にして先生の御記憶の一端にでも浮び得るならば、如何ばかり幸福に存じる

事で御座いませう。振り向いて見ますと、最早學窓を巣立ちましてより、六年有餘の星霜が何をすることもなく過去のものとなりました。あまりに平凡な私には、之と云ふ仕事の一つだに出来て居らざる事を痛恨致します。でも先生およろこび下さい。どうかかかうにか教職について五年振りで御座います。かなり長い間を一日の缺勤もなく無事に皆様の御援助のもとに、今日まで来ました事は兎に角先生の御惠の賜だと存じて居ります。年を取れば取る程、若かつた日の思ひ出が限りなくなつてかしくなります。お友達のおたよりもほとんど三人のお方しかない様になりました。思ひ出すのは、六年前の先生生徒、そしてあの頃の面白かつた事や、さては授業時間の先生のお言葉、お別れの時のお訓へ等、一つ一つ明かに思ひ出されて、獨り静に思ひ出しては無量の感に打たれます。時折り誰彼となくお傳へ下さいませ母校の進展の御模様を承りて、せめて心をはらしてゐます。何も彼も皆思ひ出が深い因縁の多い世の中に、まして先生と教へ兒の間柄程親密なことはないと云ふ事を、私が此の職に在つて多分に味つて居ります。おたよりにとて、お久しぶりでは御座いますけれど、御世話になりました御事等はただ昨日の如くお忘れ申しては居りません。扱此度は

又同窓生の御方の思ひ立ちで、御大典記念の結構な御仕事がお出来になりますこの事、私も同窓生の一人として共鳴致します。先生方には、定めし御心配の多い事とお察し致します。つきましては、輕少ながら私の微志の小爲替封入致しておきますから、お世話下さるお方にお渡し下さいませなれば、仕合ます。此迄もなくお寄附致したらと存じて居る内、さういふ今日までになりました。其邊惡しからずおゆるし下さいませ。末筆ながら、校長先生はじめ諸先生におよろしく御傳言下さいませ様お願ひ申します。時節柄何卒お身御自愛の程を祈ります。

かしこ

### 樽屋町より

萩町樽屋町  
大正十二年卒業 椋木ゆり子

拜呈、山の端近く柿の實の色づく頃となつて参りました。其の後先生にはいつもみすこやかにいらせられます由、同窓生の方々より承り、蔭ながらおよろこび申し上げて居ります。考へて見ますれば、もう先生とお別れいたしましたから、五度あまりも新しい年をおくりむかへ

ました。其間一度のお便りもいたしません、今更ながら  
恥しい思ひにとらへられかうしてお便りいたしますペン  
もにぶり勝でございます。どうぞ私の勝手を先生の御同  
情によりまして、お許し下さいますことを一重におねが  
ひ申します。

ここに卒業の折は進學のことなどで一方ならぬ御配慮  
にあづかりながら、かうまで不躱な私をどうぞお笑ひ下  
さいませ。私も學校を出ましてから、とうとう家の事情の  
爲に上京の希望も思ひとせまらせられました。しかし今  
でも機會さへありましたらと、つまらぬながらもつとめ  
てをります。だけどもこれも一生空想に終つてしまふかも  
知れません。でも私はそれが實現出来なくても自己の希  
望に對してつとめることによつて満足いたしてをります  
さうして今ではこんな田舎にくすぶつてをりますので、  
先生にもお目にかゝりたいと存しながらもつい失禮いた  
してをります。

また此夏は同窓生の方々の御活躍によりて、大變結構  
なお試が出来まして、私も其の一人に加へていたゞかれ  
ますことを心から感謝いたします。同封しましたものは  
大變わづかでお恥しい次第でございますが、何卒私の心  
をお汲みとり下さいまして、係の方までお届け下さいま

い海洋をのぞみ憧れの扉をひらくそのとき、涙ぐましい  
様な感情は心靜かに愛誦詩をうたひ、又胸のなやみと憧  
憬の純情を詩に吟む。

何と云ふ若き日は紅い美しい、夢のドラマだつた事で  
せう。その日々は歡喜に充ち輝き、晴れやかなものゝ總  
てでもあつた事でせう。よし春の陽に、暗い日かげさし  
て痛み易い心を傷つくることも、燃える様な純情はまた新  
しい希望、憧憬を生み出すにさまで難かしくはなかつた  
と思ひます。しかし若さのかうした華やかな熱情希望と  
あこがれの焦點に生き得た悦樂境が、決して長いもので  
はありませんでした。涙多い抒情の時代も、やがては永  
遠の夢の記録とかはり近く時の來るのを知るのです。お  
憧れ多かりし若き日のゆめ、哀しくも亡び行く日のか  
げを遠く呼び起す時、そこに若き胸に甦る追憶はいつも  
新な涙と共に生きたものでした。しかしその追想の扉に  
秘めたなさけの——唯一つ切りない若き日のかたみ、そ  
のいかに、哀れかすかに小さいものであつた事でせう。  
花やかに、されど短い若き時代に、又と得難い情熱の眞  
を、ひそかに思はんよりも、たとへおぼつかなくも思ひ  
のま、を歌ひのこすこそ良かりしを、今にして思ふも  
空しく、せめて我が同じき道を辿らるゝでせう學び舎の

す様、勝手ながら先生にまでお願ひ申します。  
尚校長先生をはじめ、母校の諸先生に宜しくおつしや  
つて下さいますやうおねがひいたします。  
では永い間のお詫び方々御依頼まで。

### ふご思ひ出でしまゝ

名古屋市東區千種町字池ノ内百九十五番地  
大正十五年卒業(舊姓田中) 澤 正子

生長に憎悪を感じる!!、餘りにも惨めな、生存意識に  
囚はれ過ぎて居る。と自ら悲しく思はれるのですけれど  
人間として、この憎悪を感じずに居られるものがあるで  
せうか、否と斷言してもいゝ氣がします。——その大多  
數は無意識的ではありませうけれど、——事實この破綻  
をわが生涯に見出さねばならないことは、又、何と云ふ  
悲慘でせう。

夕はやく窓邊にありて、はるか空に冷たく微笑みを  
たへて居る一つの星を眺め乍ら、何時しか臉裏の熱す  
るを覚え、又は庭の籬の下にすだくこほろぎの餘生を嘆  
くでせう哀歌に、或は一つ咲き残つたコスモスの可憐な  
姿に胸とどろかせ、日光の砂丘にひとり座して果てしな

御身達、後に悔いざるべく心の斷片、純情の流露を詩に  
歌に限りなく、とゞめ給へど、ふご思ひ出でしまゝ、ペン  
執りつ。九月の宵に。

### 紫福村より

阿武郡紫福村  
大正十五年卒業 服部クマ子

御なつかしき諸先生始め、母校の皆様。  
御健全にお暮しなさいませことゝ我が事の様に嬉しく  
存じてゐます。

嗚呼やつぱりかうしてゆつくりした一瞬に皆様に御た  
よりいたしますと、有りし日、學び舎に御恵み深い諸  
先生より教はりました種々のシーンが幻の如く目前に茫  
然と現はれて参ります時は、流石に昔の學生時代を一層  
なつかしむ情で一杯でございます。

我が母校のモットーとされた、否寧ろ日本女性のモッ  
トたる「良妻賢母。質實剛健」といふ語が、かうして  
學び舎を外に社會に飛び出して参りました時、如何に母  
校のモットーが、眞實の女性に適してゐるかがわかりま  
す。現在の様な思想問題に馳せる女性の多い時、家庭を

忘れ、社會が危機に臨んでゐる此の頃、より良い母となり、より良い妻となることの大切であるかと思はれます。私も將來眞面目な圓滿な頼り強い力ある明るいやさしい家庭を創造してゆきたいと存じます。卒業後社會に對して感じた一端を記してまづいおたよりと致します。悪しき所は如何様にもお許し遊ばし。

### 時雨

萩町 江向  
大正十五年卒業 山本 照

散り敷ける紅葉ふみわけ行く袖に時雨わびしき興聖寺かな  
神無月ふりみふらすみからかさに紅葉散りくるべにしぐれかな  
まさ／＼と母をいつはり得たる日は叱らるるより苦しうなりぬ  
亡き人の好みたまひし百合に捧ぐとかきて川に流しつ美しき髪と眞白さはだえごをほしと思ひぬわれ二十一病む母もつかれたららしみとる我が指も細れりながさい

たつき  
俳句  
名月やはじめて堀りし芋の味  
名月や隣の屋根のなくもがな

### 東京實踐より

東京府下遊谷町第二明和寮内  
昭和二年卒業 大橋とみ子

朝夕の冷氣を一入おぼえる昨今、先生には、如何お暮し遊ばしますやらお伺申上げます。  
先生、何かからお話申上げてよいか分らぬ程、御無沙汰致しなことに申譯もございません。お蔭様で、私も愉快に勉強して居りますから、他事ながら何卒御安心下さいませ。これも偏に先生方のお蔭と感謝する次第でございます。今日は近頃珍らしい小春日和で、明治節には、どんなに曇つても晴れるといはれてゐる程で、今更ながら明治天皇の御高德を偲び奉りて、感慨を深うすると同時に、現在の國情を思ひ、又自分をふりかへつて見ますと、深く恐懼に堪へない次第に存じます。そして一日も早く明治天皇の御聖旨に添ひ奉らんことを誓つて止ま

ない次第でございます。

先月の十八日から廿日まで、成績展覽會並に劇パザーの催があり、十八日には、畏くも竹田宮大妃殿下、北白河宮大妃殿下、竹田宮姫宮殿下、北白河宮姫宮殿下のお六方臨席遊され、一日おくつろぎ下さいまして、劇並に生徒の成績品を御覽下さいましたことは、私共生徒としてこの上もない光榮に存じます。竹田宮、北白河宮大妃殿下は、明治天皇のお思召により、下田先生がお五歳とお四歳の頃から、お教育申上げられたその御縁で、前學期もお出で下さいました。學校も第一工事、第二工事、記念館の落成とつき／＼に終り、あと第三工事が残り、これにて完全になるわけでございますが、現在の有様にても、決して他校に比べて劣らない規模で、運動場も二千坪も廣くなり、昨日は體育會を催し、昔の運動會気分を味ひ、一日心ゆくばかり愉快な日を送りました。母校の運動會も盛會裡に終りました由、さぞかし愉快だったこと、お察し致します。明治神宮競技も今日をもつて終了致しますが、全國の精銳を集め、お互に優勝を期して競技場にのぞむのは涙ぐましい程でございます。一日には天皇陛下親しく競技場にのぞまれましたことは、選手は申すに及ばず、私共までも、只有りがたさに涙致

しました。一日は學校より明治神宮に参拜致し、丁度お祭でございますので、平日よりも参拜者も多く、大變賑かでございます。私共の寮からでも、學校からでも、徒歩で三十分位にて、明治神宮に達することが出来ます距離に置かれてございますので、朝食前などに、出かけることが多うございます。参拜致しました日は、一日邪氣が拂はれた様な氣持で、平日よりも、もつと愉快に過ごすことが出来ます。  
上野には、秋を飾る帝展が開かれますがまだ見に行きません。来る水曜日に學校から行く筈になつて居ります音楽會、講演會と都の活動はめまぐるしい程でございます。引續き起る色々の事で忙殺され、なか／＼落付くことが出来ませんでした。この週中に、遠足もある豫定で、これが済むと、第二學期の試験が目の前に來て居ります。私も出来る限り勉強致し、大いに緊張して母校の名を辱しめることのない様にする覺悟でございます。二年になりますと、一年よりは程度が急に高く、先生方も殆んど講師で、古今集、枕草子は金子元臣先生、新古今集は武島羽衣先生、日本文學史は山崎麓先生、言語學は金田一先生等、其の外いづれも名のある方にて、大鏡、東洋史



併文等もございませう。實踐の國文科は、古文が多くして現代文少く、それでは就職して一寸困る人もあるさうでございませう。校長先生は七十四歳のお年で、今日お誕生日をお迎へ遊ばして、倒れる迄生徒のために働くといつて、少しのお病氣はおして出ていらつしやるわけで、他の者がはらく／＼することが多うございませう。源氏物語のお講義を一週に二時間、その外お修身(實踐倫理)を一時間うけもつて居られます。先生は今日の學生の思想惡化について大變なげかれ、生徒のうち一人でも、赤化思想の者が出ない様に懇に私共をお諭し下さいませう。經濟上からも思想上に於ても此の多難な秋、私共は大いに緊張致し、小さな不平不満のために、前途を誤ることなき様に氣をつけてゐる次第でございませう。先生方に何の御恩返しも出来ないつまらない者は、消極的に只母校の名譽を傷つけないことが唯一の私としての御恩返しかとも存じます。

母校にも圖書館落成致し、年と共にますます發展遊さる由、陰ながら深くお喜び申上げます。久々筆を執りました、ゆゑ、何から申上げてよいか分りませぬ。言葉が前後致して、まことに申譯もございませぬ。何卒御判讀下さいませ様お願い申上げます。

かしこ

### まんじゆしやげ

萩町 鶯谷  
昭和三年卒業 金子 敏子

山に添ふただら／＼坂を、初さんと私はゆつくりとした歩調で登つた。冷い風が黄味を帯びた稲の穂の上をすべつては、山の竹をざわめかして居た。

初さんは藤の葉をこいではそばの小川に蒔きながら云つた。

「いくら私でもね、お母さんがあんなにいら／＼してゐるのは十分知つては居るんだけど——」

「そんなに分つて居るなら、出来るだけ愉快に働ける様にして上げるのが、あんたの務でせう？」

「——でもまるでヒステリーよ、この頃は——」

いつもの様に無表情な顔をして、青空の果を見つめて居た。

初さんは今十八で、五人姉弟の總領に生れて居た。二年前に自分の家を人に焼かれて、多くもない財産を失つた。そして其の翌年、丁度春雨の降りしきるころ、彼女の父は、五人の子を氣にしながら逝つてしまつた。家を失ひ、夫を亡し、近親とは不和を起して居た彼女

の母は、精神的にも、物質的にも随分ひどい打撃を受けた。乳呑子を抱へて、今後の自分等の生活の道、子供の養育等を考へると、とてもじつとしては居られなかつた

朝は冬でも三時頃からだいがらの音が響き四五段の小作田を、月明に夜更まで耕して居ることは珍しくなかつた

終日離離と殆ど顧る餘裕も與へられない彼女にとつては、せめて力強い何物かで、感激を覚える様な慰安に浸つて見たかつた。けれどさうした原動力を切望して居る魂は、いつも虚だつた。

「お前は私が機械だと思つて居るだらう。感覺のない操人形と考へて居るかも知れぬ。併し私としては、お前達の爲に、計り知れない世の闘争に、傷ついた騎士だと思つて居る——」かうした彼女の神經は極度に摩擦されて、鋭い錐の先端で、ぐる／＼廻つてゐるのだつた。だが鈍感に見える初さんの胸にも、母より受ける無言の電波は、はつきりと傳つて居たに違ひない。

けれど彼女もやはり若い女の一人である以上、デリカな心持で、自己の周圍を見廻す時、自分も伸びやかな、晴々した天地で、思ひ切り飛躍が見たかつたのだ。

だから夢の多い初さんの氣持は、母に取つては、許されない事であるし、又母の命令には、一たまりもなく破

壊されてしまふ事に、軽い憤さへ感ぜずには居られなかつた。

彼女は私がかんな風に云ふ時、いつもきまつて、涙ぐみながら、父の思ひ出話をするのが癖であつた。

「お父さんはとてもよかつたのよ、私一人見たいに可愛がつて呉れて——あのメリンスの羽織でも、一寸ねだつたら、直ぐ買つて呉れたのに——」

お母さんはあんまりと思ふ。今年のお正月には、政子まで他所へやられて——だけど政子だけは——。

私が十四の頃には、羽子をついて、浮々して居たのに——政子までも——。

舌がもつれて来た爲か、ふと口をつぐんだ。

妙に重苦しい沈黙がつゞいた。足もとばかり見つめて居た私の目が、向ふ側の新道路の並木の下を、烏が一羽ひよこ／＼と飛んで居るのを見つけた時、彼女は前より少し落着を見せて、又云ひつゞけた。

「私は随分反對して見たけど、政子はもう承知して居るし向ふもはつきり約束がしてあるんだから、今更お前がそんな事を云ふ必要はないつて叱つたの。」

政子にした所で、初から返事をしたのでない事は分つてる、後から風呂場のかげで泣いて居たもの——でも

はお母さんに何て云はれたつて、仕方はない。我儘もの、利己主義の、恩知らずの、一番劣等な人間だから――」。

吐き出す様にかう云つて、自己嘲笑とも云ふべき笑を片頬に浮かべながら、私の顔をちらと覗込んだ。

二人は道の両側に、毒々しく咲いて居る、まんじゆしやげの列を踏みながら、ボキ／＼折れて行く澄んだ音と今最後に云つた彼女の言葉とをこんがらがせて、ある漠然とした薄暗い空虚をひし／＼と感じた。

## 南園の皆様へ

阿武郡須佐町

昭和三年卒業 静間 芳子

おなつかしい先生、皆様方、お別れしまして二度目の秋が訪れてまゐりました。その後如何お暮らしいなすか。私もこの頃では御飯炊くことも覚え、別に變りなく暮してゐますので何卒御安心下さいませ。

懐しい學舎にも、澄んだ秋風が吹いてゐることでございませう。寄宿舎の裏の農園には今年もコスモスが咲きましたかしら？。そして花園にも澤山の秋草が微笑んで

運動場の隅のクローバーはまだありまして？。そして堤の青草も親しい。もう一度青草の上で……といふ氣になるのも、私一人ではないでせう。どうぞ、すこやかに伸びさせてやつて下さいませ、實社會に出たとはいへ、まだ／＼わからない私達。起居から何からまだ學校中でほん／＼……といふ迷口上は無効になつてしまひました。時々これから先さうしよう、と心細くなることさへあります。五十人足らずのクラスメートの中で、舊姓某の肩書を持たれる方が何人でせう。御別れしても、きつと御便りの交換はね！と誓つて、泣き／＼別れた卒業式の日が最後の日になるのだらうか？。「去る者は日にうとし」の言に漏れることは出来ないのかしら？。さう嘆く私も便りを書いたことは殆んどありません。暑中見舞と年始状を生きてる印に出すだけ、久しぶりにペン持つて、おかしなことを書き出しました。御免なさいね。この間から處女會が女子青年團と改名しました。皆様から女子青年團に對する希望。氣附き等、一言なりとも御漏らし下さいませでせうか。今思ひ出しましたが二三日前、朝日新聞の山口版に萩高女優勝!!の活字を見附けました。御芽出度うございます。在學當時、山口からの吉報を聞くべく電話口に、つき／＼りだつた私達が思ひ出さ

るますでせうね。一年中何かの花の咲いてゐる花園！、思ひ出しましたわ。いつでしたか私達四五人の者が、圖畫の課外教授をうけて居た頃、今日は何を描かうかしら？と話して居た時、ふいと花園の大きく開いたダリアが目にとまりました。あれとしよう話をきめて、十分後には、ダリアは園畫室の真中で、モデルになつてゐました。その皆々ならべられた四五枚の繪と、モデルのダリアと、私達の顔とを見くらべて開いた口が、ふさがらなていひたさうだつた顔！。あの時の安野先生の御顔!!。入江先生の我も忘れての御教授振り。中野先生のおだやかな御講義。繪筆持つてちつと私達の繪を見て下さる秋山先生。みんな／＼懐しい記憶を呼び起します。

もう一度學生生活に……と思ふことは度々あります。津田英塾に、出来なければ、せめて櫻井にでも、繪に、古文に。なんて眞面目に考へたこともありましたけれど、現在にその一つに實行してゐるものがありましたせうか？。カンバスに向つたこともありますが、構圖の出来ないのに、筆を投げ出す様な仕末です。「理想は遠く現實は悲し」と云はれた誰かの言が餘りに眞理をつかんでゐるのに怨めしくさへなります。さうさう運動會も近づきましたのね。今年も相變らず練習に御忙しいでせう

れます。先生方も、さぞかしお嬉しいことございませう。なんだかまとまりのないことばかり書き續けてしまひました。最後に南園の御發展をお祈りします。

## 鐘の音

萩 江向

昭和三年卒業 井上ヒサヨ

つげやらぬ惱もつ子は祈れよと、たそがれ時を包む鐘の音  
人の子に寂しい夢を、紫の夢を追へとやあぢさゐの咲く  
手にとれば遠き思ひのしのぼる、あせてわびしき四つ  
の細葉に  
月草のにはひし丘もしほざるに、おびえて暮る、秋は深  
かり  
道迷ふ小羊のごとさだめなく、茨の道にわれはさまよふ  
沈む陽に涙ぐむともあこがれは、雲の動きにいやまさる  
のみ  
ひと葉にも秋のうれひは忍びよる、立ちし姿に散るよわ  
くらは

雑詠

萩町 吳服町  
昭和三年卒業 菊屋 喜美子

さら／＼と雨降りいでぬあらたなる土のかをりのなつかしきかな  
雨の庭きのふ弟のわすれおきしおもちやの船に鳥のあそべり  
ひそ／＼と雨降る庭に名も知らぬ黄色なる鳥のひとりあそべり  
のどかなる雨の間に父上のうたひきこゆる今日の午後かな  
あたゝかき湯につかりつゝ静かなるころとなりて風をばきく  
しき石に雨のうがちしくほみにも小草の生ひて陽をばあふげり  
日々に友をばわすれ行くことしこの頃ふみを書かずなりたり  
日とともに友もわれをば忘るらしこの頃ふみのおとづれもせず  
何のため掘りゆく穴ぞひたぶるに大地をうがちたゆまぬ

雨だれ

苗字さへ忘れし友にゆくりなく小さき田舎の驛にてあひぬ  
やうやくに仕立て上げたるわが衣をかゞみの前に着てうつしみつ  
何事も思ふことなしやはたありやわがころなれどわからざりけり

秋 七題

はださむき風をあやしみ目をやればおもかけ山に秋の色見ゆ  
折り／＼に美しけれぞ空の色は底深く澄める秋の頃よしあけがたのかみなりは只ひとつにて雨のみふりぬ秋來るらし  
つはぶきのかげに小さきかはづ居て秋のひねもす動かざりけり  
それ／＼につばみつけたる庭菊のわたりに秋のにはほひこもれり  
かにかくに秋はさびしき花さへも地味なる色をひそやかに咲く  
さらぬだに秋は淋しきものなるにころにしみてこほろぎのなく

友のみうつし繪

熊毛郡室積女子師範二部  
昭和三年卒業 友永 マサ子

なつかしいまゝに  
今日もまた取り出しぬ  
記念の友のみうつし繪。  
目にうつる  
過ぎし日の友の面影。  
つき／＼と名をよびつゝ  
うち向へば  
なつかしの友は

ものいはんとす。

胸にうかび來る

南の園のたのしきつどひ。

おゝ友よ

そは永久にすぎぬ。

あゝなつかしの

このみうつし繪。

お断り、卒業生方の御投稿はなるべく掲載したいのですが、紙数の都合上全部掲載する事が出来ませんのは、甚だ遺憾です。併しそれはなるべく次號に載せるつもりです。

昭憲皇太后陛下御歌

善き人に交る人はおのづから身の行ひも正しかりけり  
むらぎもの心にさひて恥ぢざらば世の人ごとはいかにありとも  
夜ひかる玉もなにせん身を照す書こそ人のたからなりけれ

## 學校記事

昭和四年  
(十七号)

### 南の園より

暖い日影に桃の花も咲き、雲雀の聲も長閑に聞える頃皆様にはますますおすこやかにて、各々其の御生活のために、意義ある其の日其の日を送つて居られること、喜んでゐます。

さて、もはや新聞紙上などにて、よく御承知のことと思ひますが、長らく本校長並に南園會長として、種々御畫策御盡力になりました齋藤彦一先生は、昨年四月十六日を以て御退職になり、御後任として、山口縣立宇部高等女學校長をお務めになつて居ました筒井捨次郎先生がおいてになりました。齋藤先生は御退職後、直に本縣教育會主事となられ、相變らず本縣教育界のために御盡しになつて居ます。先生御退職の際、同窓生發起の記念品料醴金募集に就いては、奮つて御應募下さいました方が多かつたので、先生も其の御好意を非常に感謝して居られました。御後任の筒井先生は、京都府の方で、御着任後、本校並に本會のために、一方ならず御盡力になつ

て居ます。

同窓生の發起の昭和御大典記念南園文庫は、昨年二月起工して八月竣工し、工事費約四千圓を要した蕭洒たる洋式二階建て、校門内左側に、白と牡丹色の色彩あざやかに飾られて居ます。文庫は閱覽室、書庫、新聞雜誌閱覽室特別閱覽室(二階)等に分れ、昨年十月六日盛大な開館式を擧げて以來開館して居ます。此の文庫位の圖書館は、本縣下高等女學校には恐らく類が無からうと思ひます。併し惜しいことには、此の建築に對して藏書が割合に少い將來は此の方面の充實を圖ることが、何よりも緊要だと存じます。どうぞ皆様の中にも、御不用の書籍でもありましたら、ごんな書籍でもよいですから、御寄贈下さいましたら、仕合せ次第でございます。尙學校附近においでになりましたら、是非文庫に立寄られまして圖書を閱覽になり、特に卒業生の方は携出も出来ますから、出来る限り、本文庫を御利用下さい。

次に、近來以前と變つたことの概要を御報道致しませう。其の第一は體育熱が近來著しく勃興したことでございます。一月二月の嚴寒の季節を除く外、毎月一回、全校生徒の遠足があり、又毎週水曜日は、運動デーと定められ、放課後一時間、全校生徒運動場に出て、各級別の

運動をすることゝなつて居ます。遠足は一日旅行で、田床山・青長谷・笠山・羽賀臺・明木村等には、既に参つたのであります。衛生方面としては、生徒の飲用する湯茶の大槽や、辨當暖器が出来たことや、講堂に生徒のため、ストロップを設備されたことなど主なことであります。

訓育上に就きては、例の自治會は、毎月開催されまして、生徒は自治的に實行事項を申合せて居ます。近來此の申合事項の實行を督勵することや、一般訓育の上進を自治的に勸奨するために、各學級生徒に、清潔整頓掛・學習掛・運動掛・風紀掛等を置き、各掛はそれぞれ徽章を胸下に着け、時々其の協議會を開きます。清潔整頓方面に於ては、校舎内外が各學級により、分擔の區域が定められ、掃除審査の先生は、時々實地を檢閲して、各學級別に等級を附し、毎月十五日其の結果を發表することになりました。

教授方面に就きては、文科甲・文科乙・理科・家政科・體育科・美育科等に分れ、毎月一回實地授業研究會が開催されることに定まり、もはや文科甲・文科乙・理科・體育科・家政科等は、其の研究會があつたのであります。理科に於ては、生徒實驗用の器具・器械が多數購入され

裁縫に於ては、電氣アイロン・電氣熨も使用出来ることとなり、生徒も大層仕合して居る次第であります。生徒の談話練習會は相變らず盛で、昨年十一月には、山口高等商業學校に於て、防長海外協會並に同校辯論部主催の海外發展に關する講演會に、我が校より、本科第四學年の羽仁喜久江嬢が出演され「海外發展と女子の自覺」と題する演題の下に、熱辯を振つて、大に裁婦人の意氣を發揮し、遂に二等賞を得られましたが、一等賞を得られた方は、聞く所によると、大學卒業生であつたさうです。第一位の榮冠を戴かれたことゝなつたのであります。先年同じく防長海外協會で、海外發展の標語を募集された時に、我が生徒は之に應募して、一等二等を得たことゝ共に、實に愉快に堪へない所であります。

次に昭和三年より、南園會の事業として卒業生のために、研究科が設置され、専任の裁縫科擔任の先生の外、本校の先生も教授して居られます。來る四月よりは、從來の研究科の外に、教員志望者のために、必要な學科をも研究せられることゝなります。いつの御卒業の方でも、御入學が出来ますから、御志望の方は、なるべく早く御申し出でになるやうお勧めいたします。

同窓會は、昨年總會の際、規則の一部を改正し、新に別項の如く役員の改選任命がありました。どうぞ將來同窓會も、ますます自治的になつて、向上發展するやう望ましようあります。

だんく、報道が、春の日永に向ひましたためか、ながたらしうなりまして失禮しました。今回はこれで擱筆しませう。どうぞ皆様御身大切に。(なかの)

○山口縣立山口高等女學校校長三矢英松先生より筒井校長先生に寄せられたる書翰

拜啓 貴校羽仁嬢の辯論大會出演は實に壯舉と存居候處、誠に堂々たる御出來榮えて、男性辯士を顔色なからしめたる事、貴校の御名譽はもとより、女學生一般の面目と存候。即ち小生當日御祝の腰折れあり、貴兄の一笑に呈す。

海の外に出でよと叫ぶ言葉の  
幸を得たる意氣はり乙女

○山口縣立小郡農業學校長出田新先生より同じく校長先生に寄せられたる書翰

拜啓 昨日防長海外協會及高商の主催海外思想鼓吹辯論大會を始より終まで謹聴致候貴校の羽仁嬢は論旨女子に適當にて、態度音聲も申分なく、二等なり

十六日(水)萩中學校に於ける縣設國語研究會に出席のため中野先生神田先生出張。

十七日(木)中野先生神田先生前日に引續き出張。毛利元昭公午後一時萩驛出發歸京せらる、中野先生見送らる、靜岡縣立濱松師範學校教諭宇波氏校舎南園館參觀。

廿一日(月)御大典に際し永年教育に従事し切勞者として齋藤校長先生池上先生表彰を受く。本朝より薙刀寒稽古(二月二日まで)

廿二日(火)生徒談話練習會開催。

廿四日(木)贈正五位瀧鶴臺先生贈位報告を亨徳寺墓前に於て行はる。午後一時より中野先生之に参加し、終業後各級監及學級總代參拜す。

廿六日(土)伊藤先生山口師範に於ける理科研究會へ出張

卅一日(木)本月二十七日午後〇時久邇宮邦彦王殿下薨去

二月三日御葬儀當日につき齋藤校長先生より訓話あり。

二月 二日(土)薙刀寒稽古終了式舉行。參加總人數四百二十三名、皆勤者三百五十六名。中野先生より故久邇宮邦彦王殿下御葬儀に關する注意あり。

しは當然にて、一等は私立大學出にて東京に於て八十回も演壇に立ちし者なりと聞く、御悅勞 匂々  
十一月二十四日朝

### 學校日誌抄

昭和四年一月

一日(火)拜賀式舉行。

四日(金)齋藤校長先生母堂去る十二月三十一日逝去、本日告別式舉行、當地在住職員一同及生徒總代焼香に赴く。

八日(火)始業式舉行。本二梅竹内富子病死、本日葬儀執行、職員總代及生徒總代會葬。

十日(木)長濱先生一昨日逝去、熊谷町光源寺に於て葬儀執行、職員一同及生徒總代會葬。

十一日(金)齋藤校長先生服忌中のごとく本日より出勤。

十二日(土)山口縣立防府高女教諭藤川靜枝氏參觀。

十四日(月)中野先生毛利綱廣公贈位奉告祭につき講話。

十五日(火)午前十時より贈從三位毛利綱廣公の贈位奉告祭を大照院綱廣公墓前に於て行はる。職員總代及生徒總代として上級生參列。九州帝國大學農學部教授兼文部省督學官小出滿二氏參觀

八日(金)山口縣立德山高女教諭服部うた氏參觀。

十一日(月)紀元節拜賀式舉行。

十二日(火)日本齒科醫學士高麗秀雄氏の口腔衛生に關する講話あり。

十三日(水)齋藤校長先生中等學校長會議出席の爲山口へ出張(十七日まで)

十四日(木)生徒談話練習會開催。

十七日(日)中野先生山口に於て開催の教頭會議へ出張(十九日まで)

十八日(月)本縣視學委員廣島高等師範學校教諭助川己之七氏參觀。

廿五日(月)齋藤校長先生九州地方視察の爲出張(三月五日歸任)

廿六日(火)入江先生嚴父危篤の爲歸郷(三月十三日歸任)

三月 二日(土)神戸市立第一高等女學校長井上權治氏視察の爲來校。

三日(日)入江先生嚴父死去の報あり、弔電を發す。

四日(月)吉敷郡名田島村立實業補習學校生徒南園館參觀。

六日(水)皇后陛下御誕辰日なれども御服裝中につき舉

式せず。

十八日(月)齋藤校長先生山口縣廳へ出張。卒業生職員一同を招待し謝恩會開催。

十九日(火)生徒談話練習會に於ける成績優良者に對し賞品を授與す。

二十日(水)本科第九回實科第十<sup>七</sup>回卒業證書授與式舉行。修業生主催卒業生送別會開催。

廿二日(金)終業式。

廿五日(月)本科入學考查第一日。

廿六日(火)本科入學考查第二日。

廿八日(木)實科入學考查。合格者發表。

四月

八日(月)始業式舉行。

九日(火)入學式。

十二日(金)日本赤十字社々長男爵平山成信閣下來校。南園館參觀。

十五日(月)志都岐山神社春祭に參拜。

入江先生嚴父法會執行の爲歸郷(五月八日歸任)。

十六日(火)山口縣豊浦郡宇賀村小田護氏萩町立工業傳習所廣田良平氏南園館參觀。

(十一日歸校。)

十一日(土)本二生徒秋芳洞へ、本一生徒羽賀臺へ旅行。

十三日(月)第一回勝チブス豫防注射施行。

十五日(水)若人社幹事妹尾義郎氏の思想善導に關する講話あり。

十六日(木)守永彌惣次氏及び當地出身山根キク子女史の講演あり。

十七日(金)阿武郡宇田尋常高等小學校尋常科生徒南園館參觀。忠正公勤王事蹟につき藤本氏の講話あり。

十八日(土)第二回勝チブス豫防注射施行。神玉尋常高等小學校高等科生徒南園館參觀。

廿二日(水)本三、本四生徒の身體検査施行。

廿三日(木)本一、本二、實一、實二生徒及び職員身體検査施行。

廿四日(金)筒井校長先生縣下高等女學校長會議出席の爲防府高女へ出張。

廿五日(土)松陰神社に參拜す。

廿六日(日)伊藤先生山口へ出張。山口高女に於ける三球大會へ選手派遣。

廿七日(月)中野先生學事視察の爲宇部市へ出張。海軍記

十九日(金)齋藤校長先生の告別式舉行。

二十日(土)生徒談話練習會開催。

廿三日(火)伊藤先生、今城先生、吉原先生、有田先生引率の下に本四、實二生京阪地方に修學旅行の途に上る。(廿八日歸校)。創立記念式舉行。

廿五日(木)公會堂に於て萩町有志主催齋藤前校長先生の送別會あり。

廿六日(金)齋藤前校長先生午前十一時十三分萩驛發歸郷職員生徒一同見送りをなす。

筒井新校長先生午後二時十分萩驛來着。職員一同及び生徒總代出迎をなす。

廿八日(日)本四實二の京阪地方旅行團無事歸校。

廿九日(月)筒井校長先生の新任式。天長節拜賀式。

五月

(木)宇部新川小學校生徒南園館參觀。吉敷郡小郡小學校生徒南園館參觀。京阪地方修學旅行團の報告會開催。

九日(木)萩町公會堂に於て兒童愛護デーに關する講話あり。全生徒聽講宇部高女生徒南園館參觀。山口市第一小學校高等科生徒南園館參觀。

十日(金)本三實一生徒下關、長府、宇部地方へ旅行す。

念日につき馬來大佐の講演あり。  
三十日(木)皇太子殿下行啓記念式舉行。  
卅一日(金)三年級以下の修學旅行發表會を行ふ。

六月  
一日(土)田床山に登山。  
二日(日)下關小學校生徒南園館參觀。  
四日(火)全國齋防デーにつき萩町新堀松尾雅雄氏の口腔衛生に關する講話あり。尙「齒の悪しき人の損失を列記せよ」との問題につきテストを行ふ。

五日(水)水菊池縣視學官視察。  
六日(木)入江先生音樂研究會出席の爲深川高女へ出張  
七日(金)筒井校長先生全國高等女學校長會議に出席の爲東京へ出張。山口高女生徒南園館參觀。

十日(月)中野先生より時の記念日に關する講話あり。その後全生徒より時間尊重標語募集。  
十一日(火)去る八日死去せし本二菊山中操の葬儀梅藏院にて執行。職員總代及生徒總代參列。

十八日(火)校長先生上京出張中のごころ本日歸任。  
十九日(水)生徒談話練習會及自治會報告會開催。  
廿二日(土)校内競技會開催。

廿五日(火)午前八時より皇太后陛下御誕辰記念式舉行山口縣體育主事立石氏より、ラジオ體操の指導を受く、校内三球大會を行ふ。  
廿九日(土)赤川先生の告別式舉行。

七月

一日(月)香長谷方面へ遠足を行ふ。  
十二日(金)水泳講習會開始。(十九日まで)  
十九日(金)本縣知事黒崎眞也氏來校。水泳講習修了式舉行

二十日(土)終業式舉行。時間尊重標語優秀作者五人表彰を受く。文部省主催夏季講習會出席の爲布村先生東京女高師へ、松村先生奈良女高師へ出張。

廿二日(月)有馬縣視學同行廣島高等師範學校教諭河野通匡氏來校。

廿九日(月)田中前首相、久原前總相歸京。職員總代及生徒總代出迎をなす。

八月

廿三日 田中前首相、久原前總相歸京。當地在住職員及學校附近上級生見送をなす。

九月

二日(月)始業式舉行。

三日(火)繩田先生、和田先生の就任式あり。

六日(金)校内數學科教授法研究會開催。

十日(火)縣設數學科研究會開催。

十三日(金)乃木大將及同夫人の遺徳に關し横山健堂氏の講話あり。

十六日(月)本一梅高木壽美子昨日死亡。本日瓦町西光寺に於て葬儀執行。職員總代及生徒總代會葬。

十九日(木)生徒談話練習會及自治會報告會開催。

廿一日(土)山口縣立厚狹高女教諭江木ナツ子參觀。

廿二日(日)宇部體育協會主催縣下女子球技大會へ庭球、籃球の選手を、厚狹高女へボール投、走技、排球の選手派遣。庭球優勝。ボール投一等。

廿四日(火)田淵先生文部省並に縣設體育講習會出席の爲山口縣廳へ出張。(廿七日まで)山口高女教諭徳富フジ氏參觀。

廿五日(水)筒井校長先生縣下公立中等學校長集會のため山口縣廳へ出張。

廿八日(土)羽賀臺へ遠足を行ふ。

廿九日(日)厚狹、深川高女庭球選手來校。本校選手と試合を行ふ。

十月

二日(水)皇太神宮式年遷宮奉拜式舉行。籃球選手深川高女へ遠征。

三日(木)故田中義一男葬儀遙拜式舉行。尙有志職員及生徒總代萩町主催遙拜式場なる別院に參列す

五日(土)豐受太神宮式年遷宮奉拜式舉行。春日神社に參拜す。

六日(日)南園文庫落成式舉行。

七日(月)本一、二、實一の保證人會開催。

八日(火)本三、四、實二の保證人會開催。

十日(木)同窓會役員會を開く。

十一日(金)縣體育會へ選手派遣。

十二日(土)笠山へ遠足をなす。

十三日(日)縣體育會出場選手及應援團歸校。

十四日(月)生徒談話練習會及自治會報告會開催。筒井校長先生より舊藩公治蹟講話あり。本三梅西村政子病死。生徒總代會葬。

十五日(火)指月神社例祭に參拜す。

十八日(金)閑院宮殿下御來萩沿道に奉送迎をなす。筒井校長先生より吉田松陰先生に關する講話あり

十九日(土)故田中義一男の遺骨を出迎ふ。萩町本願寺別

院に於て田中義一男の葬儀執行。職員生徒一同焼香に赴く。

二十日(日)同窓會開催。

廿二日(火)久原前總相御歸京見送をなす。校内文科第一部(國語科)教授法研究會を開く。

廿四日(木)故田中義一男御遺族歸京につき、椿方面の生徒は筒井校長先生、中野先生、今城先生引率の下に萩驛前に見送をなす。

廿七日(日)第十三回體育會開催。

三十日(水)教育に關する勅語及戊申詔書捧讀式舉行。

十一月

一日(金)本月三日の全國體育デーを本日に繰上げて之を行ふ。

三日(日)明治節拜賀式舉行。筒井校長先生より明治天皇の御盛徳に關する講話あり。開校記念菊花會開催。

四日(月)本日より一般生徒に對し、南園文庫圖書閱覽を許可す。トラホーム検査施行。

七日(木)伊藤先生學事視察の爲東京へ出張(十四日歸校)前日に引續きトラホーム検査施行。

十日(日)北野先生舍務主任縣外共同視察の爲岡山愛媛

香川縣方面へ出張(十六日歸校)

十一日(月)精神作興詔書捧讀式舉行。原田先生十年間勤  
續表彰式舉行。生徒談話練習會及自治會報告  
會開催。

十二日(火)徳山高女教諭吉村時比古氏參觀。

十三日(水)山形縣立自治講習所生徒南園館參觀。

十四日(木)藤田先生學事視察の爲岡山廣島縣方面へ出張  
(二十日歸校)

十六日(土)山口縣女子師範學校教諭林正子氏參觀。

十七日(日)萩町希望社社友主催合理的炊事法講習會開催

十八日(月)中野先生女子中等學校教務主任共同視察の爲  
長府高女へ出張(十九日歸校)。山口縣師範學  
校専攻科生南園館參觀。

十九日(火)職員のトラホーム検査施行。

二十日(水)校内體操科教授法研究会開催。

廿一日(木)松陰神社例祭に參拜す。

廿三日(土)山口高商に於て開催せられし防長海外協會並  
に高商講演部主催の優勝辯論大會に本四梅羽  
仁喜久江を派遣す。辯士二十四名中二等の榮  
冠を得。

廿七日(水)縣設體操科研究会開催第一日。

廿八日(木)

廿九日(金)明木方面へ遠足を行ふ。

十二月

十一日(水)筒井校長先生事務打合せの爲山口へ出張。

廿一日(土)本二菊土井秀子一昨日病死本日葬儀執行。職  
員生徒總代会葬。

廿四日(火)終業式舉行。

昭和五年一月

一日(水)拜賀式舉行。

五日(日)本三梅平賀ナツ昨十二月三十日死亡、本日葬  
儀執行、職員生徒總代会葬す。

八日(水)始業式。

十日(金)和田校醫先生より感冒豫防に關する講話あり

十五日(水)生徒談話練習會及自治會報告會開催。

二十日(月)薙刀寒稽古開始。

廿二日(水)文科第二部(修身教育地理歴史英語法制經濟)  
校内教授法研究会開催。

廿七日(月)筒井校長先生山口高女に於て開催の縣下高等  
女學校長會議に出張。

三十日(木)侍從武官海軍少將今村信次郎閣下來萩、職員  
一同及本四實二生萩驛前に出迎ふ。

二月

一日(土)薙刀寒稽古修了式舉行。

五日(水)和田校醫先生より婦人衛生に關する講話あり

本三、四實一、二生徒聽講。

十日(月)生徒談話練習會及自治會報告會開催。

十一日(火)紀元節拜賀式舉行。

十九日(水)本四實二生徒級監引率の下に萩町區裁判所公  
判傍聽に赴く。

廿二日(土)中野先生明倫校に於ける國語科教授研究会に  
出張。

廿四日(月)家政科(裁縫家事手藝)校内教授法研究会開催

廿五日(火)和田校醫先生より衛生に關する講話あり。

本一、二生徒聽講。

卒業證書授與式

昭和四年三月二十日午前九時ヨリ第十七回卒業證書授與  
式ヲ舉行ス

學式次第左ノ如シ

一、生徒、卒業生、保證人入場

二、職員入場

三、來賓入場

四、學式ノ挨拶

五、唱歌(君が代)

六、勅語捧讀

七、唱歌(勅語奉答)

八、卒業證書並ニ褒賞授與

九、學校長告辭

一〇、來賓祝辭

一一、在校生總代祝辭

一二、卒業生總代答辭

一三、保證人挨拶

一四、在校生唱歌(祝歌)

一五、卒業生唱歌(仰げば尊し)

一六、閉式挨拶

一七、來賓、卒業生、保證人退場

一八、職員、生徒退場

卒業生 一覽 (昭和四年三月二十日)

本科卒業生 (第九回) (いろは順)

- 伊藤 靜枝 生駒 峰子 石津 夏子
- 石丸 文子 石光 靜子 波田 靜江
- 波多野 照子 仁保 正子 西山 正子



年度	卒業生数	入學後ノ異動						入學當初人員	入學年月日	種別
		減			増					
		計	死亡	病氣退學	事故退學	他校へ轉學	計	他校ヨリ轉入	大正九年 四月十日	昭和二年 四月九日
		九五	一四	一	一	五	七	九	一〇〇	三三二
		三〇	二							一三二
		一二五	一六	一	一	六	八	九		

本年度	昨年度迄合計	創立以來合計
九五	五八〇	六七五
三〇	九〇九	九三九
一二五	一四八九	一六一四

**褒賞**

操作善良、身體強健、學力優秀ナル者

本科 口羽千重子 吉田富美子 土井 幸子

實科 西村 正恵

學力優秀ナル者

本科 佐伯 花子 倉重トミ子 中谷 幸子

實科 松永 静代

學力進步顯著ナル者

本科 阿武 敦子 松井 節子 三輪 隆子

大石ヒサ子 堀本シヅエ 阿武 淑子

吉見 武子 森屋滿壽子 西山 正子

上田 静子 岡崎 壽子 有吉 壽

實科 國守ツチコ 岡崎 壽子

身體發育優秀ナル者

本科 中村 艶子

在學四ヶ年間皆勤シタル者

入學後ノ異動	種別
堀野公子	堀本シヅエ
土井幸子	刀永カメ子
大庭キクエ	大島敏子
岡田宣子	大島敏子
河村フジエ	河村敏子
吉見武子	吉田美子
田中清子	田中富子
田中シヅエ	田中美譽子
竹内睦子	竹内芳子
中原豊子	中村千枝子
中村艶子	中村富美子
中谷幸子	中本智恵子
宗實元代	上田静子
久保田惠美子	山口千重子
倉重トミ子	山縣登美子
山田徳子	山根キク子
八木正枝	松井節子
松本ハル子	馬屋原壽満子
藤田富枝	藤田照代
深井貞子	小林八重子
有田瀧子	赤崎ヒナ
堀野公子	堀本シヅエ
細石マツ子	細石ヒサ子
阿武敏子	阿武敦子
阿藤淑子	阿藤花子
齋藤フジ子	齋藤正子
木原雪子	木原ハル子
美野芳子	美野智恵子
柴田シヅ子	柴田ハル子
守田富美枝	守田満壽子
杉原ミツ代	杉原静子
淺海千代子	淺海敏子
秋山敏子	秋山敦子
阿武敦子	阿武花子
阿藤淑子	阿藤正子
齋藤ナミ子	齋藤千代賀子
阿字雄美子	阿字隆子
林トミ子	林正恵子
石津スミ子	石津正子
西尾祥子	西尾おさだ子
岡崎政子	岡崎おさだ子
村芳子	村おさだ子
久志春子	久志おさだ子
松永菊枝	松永おさだ子
増野絹世	増野おさだ子
江原千鶴子	江原おさだ子
有馬初枝	有馬おさだ子
鈴木ヨシ子	鈴木おさだ子
水津福子	水津おさだ子
弘田ユキ子	弘田おさだ子
柴田キヨ子	柴田おさだ子
三輪隆子	三輪おさだ子
佐伯千代賀子	佐伯おさだ子
阿字雄美子	阿字おさだ子
阿藤ナミ子	阿藤おさだ子
齋藤千代賀子	齋藤おさだ子
佐伯千代賀子	佐伯おさだ子
三輪隆子	三輪おさだ子
柴田キヨ子	柴田おさだ子
弘田ユキ子	弘田おさだ子
水津福子	水津おさだ子

實科卒業生 (第十七回) (いろは順)

- 本科 波多野照子 山縣 スミ 淺海千代子  
 在學二ヶ年間皆勤シタル者  
 實科 西村 正惠 松永 菊枝 江原千鶴子  
 在學四ヶ年間精勤シタル者  
 本科 細田マツ子 大石ヒサ子 川島佐芽子  
 吉田富美子 田中 清子 竹内 睦子  
 高洲 キヨ 中原 豊子 中村 艶子  
 上田ミトリ 馬屋原壽滿 藤田 富枝  
 赤崎 ヒナ 秋山 敏子 三戸 正子  
 下井智恵子 杉原ミツ代  
 在學二ヶ年間精勤シタル者  
 實科 堀江 靖子 村岡おさだ 松永 靜代  
 松本ツルヨ 藤川 美枝 兒玉 靜子  
 本學年間皆勤シタル者  
 本科 土井 幸子 岡田 宣子 河村フジエ  
 吉見 武子 中村 芳子 口羽千重子  
 矢次登美子 齋藤ナミコ 三輪 隆子  
 水津 福子  
 實科 林 トミ子 西尾 祥子 梶本フミコ  
 級長トシテ忠實其ノ任務ニ勵精シタル者  
 本科 土井 幸子 佐伯 花子

實科 西村 正惠 松永 靜代  
 告 辭

本日卒業證書授與式ヲ學クルニ當リ貴賓並ニ保證人各位多數ノ御來臨ヲ辱ウシタルハ本校ノ光榮ニシテ感謝措ク能ハサル所ナリ  
 卒業生諸子諸子ハ多年螢雪ノ功ヲ積ミ茲ニ卒業ノ榮譽ヲ擔フ諸子ノ喜悅察スベク余モ亦心中欣快ニ堪ヘサルモノアリ  
 然リ而シテ諸子今ヤ本校ニ於テ所定ノ教科ヲ卒ヘタリト雖モ諸子ノ當テ學ヒシ所ハ多クハ其ノ基礎ト理論トニ過キス將來之ヲ津梁トシテ更ニ自ラ研究スルノ要アルト共ニ又之ヲ實地ニ活用シテ社會人文ノ發達ニ資スヘキナリ若夫レ溫良貞淑ニシテ家庭和樂ノ中心トナリ子女教養ノ大任ニ留意シテ次代國民ノ進歩ヲ圖リ家政ニ忠實ニシテ一家ノ繁榮ヲ期シ高雅ナル情操ト堅實ナル意志トヲ以テ進ンテ社會教化ノ作興ヲ圖ルカ如キハ實ニ婦人ノ天職ニシテ諸子ノ夢寐タニモ忘ルヘカラサルコトナリ  
 特ニ諸子ノ注意スヘキハ我カ國風ニ背馳セル一部ノ思想ナリ諸子本校在學中日夕親炙セシ山川ハ嘗テ維新志士ノ輩出セシ所ニシテ其ノ學ヒシ學校ハ由緒アル南園ノ跡ナ

リシヲ思ヒ漫ニ世ノ惡風潮ニ惑ハサレズ確乎不拔ノ信念ヲ以テ婦人ノ天職ニ殉スルノ覺悟無カルヘカラス  
 卒業式ニ當リ諸子ノ前途ヲ祝福スルト共ニ聊所懐ノ一端ヲ述ヘテ告辭トス  
 昭和四年三月二十日  
 山口縣立萩高等女學校長 齋藤 彦一

祝 辭

花笑ひ鳥歌ふ希望に充滿ちたる春三月二十日、我が學び舎の姉君方は、平素たゆまずお勤みになりました績により、卒業といふ榮譽を得られました事は、誠にめでたい極でございます。  
 回顧しますれば、私共の入學致しました日から、妹とおいつくしみ下さいまして、或時は勵まされ、或時は誠められ、常に正しい道に進むやうお導き下さいました。今日はいよく、袂を分たねばならぬことゝなりました。共に學び、共に遊び、共に喜び、共に憂へましたことを思へば、今日の別れは、誠に名残の盡きぬことでございます。然し逢つたものは、何時かは別れねばならぬといふ世の定め、徒に別れを惜むも甲斐なきことでございます。

私共は、姉君方の殘し置かれました美しい校風を堅く守り、益々これを向上させて、御恩に報いる考でございます。學び舎を築立ち行かれます姉君方、姉君方の前途には、更に大きい社會といふ學び舎が横つてゐます。この學び舎こそ、姉君方が本校に於て學ばれましたよい實習場ではないかと存じます。こゝを卒業せられますのは、浪荒い大洋を小舟もて渡るよりも、一層至難のことと思ひます。そして師の君のみ教こそ、此の大洋を渡る小舟の前途を照す唯一の燈臺ともなるでございます。  
 近來は種々な思想も起り、中には身を害し、世を毒する思想もありません。歴史に輝く萩の地の學び舎を卒業せられました姉君方は、此等の惡思想に左右せられることなく、清くやさしき心を以て、堅く女の道を守られ、將來は良妻とも賢母ともなられて、更に立派なる成績を以て、社會の學び舎をも卒業せらるゝやう只管御願ひ致します。  
 こゝに在校生一同に代り、拙い思を述べ、謹んで祝辭を申し上げます。

昭和四年三月二十日  
 山口縣立萩高等女學校  
 在校生總代 竹 田 直子

答 辭

本日卒業證書授與の盛典を擧げさせられ、多數貴賓の御臨場を辱うし、尙懇切なるお詞さへ賜りました事は、身に餘る光榮でございます。

今日私共が此の光榮を擔ふことの出来ましたのは、全く長の年月、校長先生を始め、諸先生方の御教訓の結果と存じます。

私共の此の學び舎に入りました時は、物の道理も辨へず知識も極めて浅くありましたが、常に恵み深い御愛情を以て、私共を導かれ、時には嚴な御いましめを以て、こもすれば、崩れ易い心の礎を堅固に築き上げるやうに氣をつけて下さいました此の御高恩は、永久に忘れる事は出来ません。何をもちて報すべきでございませう、唯々感涙に咽ぶばかりでございます。

又在在校生の方々は、互に何の隔もなく、共に語り、共に楽しみ、いろ／＼睦みあつてゐましたことなど憶ひますと、今日の別れは、名残のつきぬものがあります。どうぞ今後も益々御奮勵になりまして、本校の名聲を益々發揚せられる事を偏に希望致す次第でございます。

兼立ち行く私共を待ち設けてゐる世の中は、どんなものでございませう。私共のはいつて行かねばならぬ社會にございませう。私共のはいつて行かねばならぬ社會にございませう。私共のはいつて行かねばならぬ社會にございませう。

學藝部だより

生徒談話練習會

昭和二年六月以來、三月、七月、十二月を除く外は毎月一回之を開催して居ます。其の方法は前々號に記載しておいた通り、各學級より一名宛を選出し一人約五分間宛とする。成るだけ多くの生徒にわたつて練習させる趣意を以て少くも一ケ年間にありては同一人を選出せぬこととし、そして毎回成績優秀者二三名宛を選んで賞を與へ之を奨勵して居るが、其の成績は著しくあらはれて來たやうに思はれます。

辯論大會出演者派遣

十一月二十三日、山口高等商業學校に於て、同校講演

は、どんなに荒い波が渦巻いて流れてをりますことせう。此の激流にあつても、長い年月築きあげて下さつた尊い礎は、きりくづされず、更にその礎の上に、立派な殿堂を築き上げるこそ私共の大切な使命でございませうこの重大な仕事を完成するには、年來の御教へど、今日のおさとしごが、どんなに多くの力を與へてくれますでせう。

さうして世の惡風潮に染まず、堅忍不拔の精神と、健全中正なる考を以て事に當り、將來は良妻も賢母ともなり、必ず女子の天職を完うする覺悟でございませう。あまりにも深い御恩に對して、適當なる感謝の言葉も分りませぬ。いさゝか將來の覺悟の一端を述べまして、謹んで答辭を致します。

昭和四年三月二十日

山口縣立萩高等女學校

卒業生總代 口羽千重子

會長の更迭

南國會長並に同窓會長でありました齋藤彦一先生は、大正七年五月三十一日附で、本校々長になられ、爾來十有一年、終始一日の如く、本校並に南國會同窓會の擴張

部と防長海外協會との聯合主催の縣下男女中等學校生徒及男女青年團員の「海外思想鼓吹優勝辯論大會」を開催せらる。本校學藝部より辯士として、四年生羽仁喜久江さんを派遣した。當日の出演者は中等學校生徒及青年團員二十四名あつたが、女子の出演者はただ羽仁さん一人のみであつた。出演者は何れも熱心に雄辯を揮はれたが殊に人目を惹いたのは羽仁さんであつた。多數の聽者の前に立つて怯まず臆せず、文の園に掲げられた「海外發展と女子の自覺」と題する文の趣意に依り、原稿も持たずに條理整然と説き了つた。然も態度といひ音聲といひ實に間然する所の無い程に上出来であつた。宜なるかな、高商教授及本縣農政課長たちの嚴密なる審査の結果第二等に當選し、受賞の榮を勝ち得られた。實に本人は勿論、本校の名譽とすべきことである。

時間尊重に關する標語

六月十日 時の記念日に於て即座に二十分間を以て各生徒をして時間尊重に關する標語を作つて出さしめ、そして先づ教員に於て優良なもの十八種を選定し、其の中から全生徒の投票によりて左の五つを選出し、優秀者として授賞しました。

一秒も一生の一步

本四 岡 久子

にがせばかへらぬ尊い時間  
時刻は規律の指導者なり  
寶の鍵は時間なり  
時を惜む者は最上の經濟家なり  
尙次點者五つをあぐれば、  
時の尊重成功の早道  
一分をむだにする人は

一生をむだにする  
本一 田邊フミ子  
實一 田中 達子  
本四 柴田 信子  
本四 井上 忠子  
本三 岡村 孝子  
本四 有田 幸子

時の利用と出世とのグラフは  
即ち原點を貫く直線なり  
時間勵行は生活改善の第一歩なり  
金より時を惜め  
本二 菊屋 正子  
實一 岸 千代子  
本三 長井 密子

成績品展覽會

十月六日、南園婦人文庫落成式の際、同文庫の壁上に習字及び圖畫の、生徒成績品中の優良品を陳列して參列者の縦覽に供しました。

菊花會

十一月三日、本校開校記念日には、例によりて菊花會を開催した。生徒の生花百五十點、其の中優秀者二十點を選んで授賞した。尙研究科生及び其他の生花も南園館に陳列せられたが、實に見事な出来ばえのものがありま

した。

南園婦人文庫だより

文よめば大和もろこし昔今  
萬の事を知るぞうれしき  
書よまで何に徒然なくさまむ  
春雨の頃秋の長き夜

昔、本居宣長翁は、右の様な和歌を詠まれた様に、讀書といふ事は、我等の一日も缺ぐ事の出来ない。大切な精神の糧食である。従つて、本校にも是迄、學藝部の中にあつた圖書部が、昨年四月から獨立して、將來益々盛にならんとする芽を、出した譯である。

一 昨年の御大典記念事業として、本校内に、婦人文庫設立の件は、昨年の會報により、皆様に御承知の筈であるが、この工事が昨年二月から始められて、八月末に出來上り、同十月六日數多の來賓をお迎へして、盛大な落成式が舉行せられた。それで其前に、元の圖書室から新文庫の方に、書籍全部を移し、其當日には、來賓の方々に隨意參觀せしめた。

其後閱覽者のために、諸種の規程を定め、十一月初旬より、全校生徒の閱覽を許可し、各學級より一週間交代

に二名宛の當番を出し、圖書の出納任務に當らしめ、日々多數の閱覽者ありて、大に所期の目的を達して居る。而して今や文庫藏書の數は二千四百五十餘冊に達し、將來益々發展せんとしつゝあり。

附記、南園婦人文庫の内容は左記の通り分たる。

一、新聞雜誌閱覽室

ロ、圖書閱覽室

ハ、書庫

ニ、階上

二、右建築工事費收支決算

イ、収入の部、四七五二圓九四〇

内 譯

七〇三圓五〇〇 生徒父兄寄附

一七二五圓〇〇〇 篤志家並ニ職員寄附

二二二七圓〇〇〇 同窓生寄附

八七圓四四〇 雜收入

ロ、支出の部、四七五二圓九四〇

内 譯

二一四圓一七〇 舊建物移轉改築費

三七〇五圓〇〇〇 建築諸費

一九五圓六〇〇 印刷並に通信費

運動部だより

四月 昭和四年度役員選定發表

本年より便宜上、運動部を分別して陸上競技部、

排球部、庭球部、籃球部の四部とし、各部に部長

委員を置き、練習並に各部の統一、練習指導等の

任に當らしめ、本學年の新陣容を整へる。

五月 愈本月初旬より各部共に猛練習に遷る。

庭球部、籃球部選手山口高女高等科主催近縣女子中等

學校三球大會に出場(廿七日)

庭球部優勝戦に於て惜敗し二位となる

庭球部成績

第一回戦 本校(竹内、杉山)四對零長府高女

第二回戦 同(竹内、杉山)四對一山口高女

優勝戦 同(竹内、杉山)二對四柳井高女

本年度最初の對校試合なるため、選手一同先づスタ

トに於て、他校を粉砕すべく必勝を期して第一回第二回

と試合を重ねる毎に意気揚々として、無人の境を行くが如く愈々最後の戦となる。時午後三時半観客一同手に汗を握り、何れが榮冠を得るか豫想を計さず、戦は開始され熱球互に空を飛ぶ。敵も縣下に誇る強者、遂に我に運非にして惜敗せしは残念なり。然し乍ら僅かの練習期間に於てあれ程迄の進歩を見せ、最後迄堂々と敵を壓したる選手の奮闘を此處に特筆す。

籃球部選手は前年迄のベストチーム五人揃つて卒業し非常にチームに打撃を受けしが、その後を受けて新進鋭の五人を以て選手となし出場す。未だ試合経験なき爲チームとしての練習日數淺きため、充分の技を出す暇なく敗退す。第一回戦に徳山高女を一蹴し、第二回戦に惜しくも二ゴールの差を以て長府高女に敗れる。

六月二十二日

本年度第一回校内對組陸上競技大會  
本・四・本・三の接戦の後遂に本・三菊組優勝す

日頃鍛へし力を今日こそ出して月桂冠を得んものゝ、各組意気揚々と開會式に出場す。午前九時三十分戦は始る。先づ五〇米A組よりスタートは切られ、本三梅組選手軽くテープを切つて最初の意氣を示せば、本一梅組選手倭小ながらも上級生を押しして亦テープを切り下級生の

ために氣を吐く。續いて本三菊組選手テープを切り、段々プログラムを進むにつれて戦は熱す。二菊トラックに於て群を抜いて活躍すれば、三菊フキールドに活躍し其の間本四梅菊各種目に得點を加へ戦は拍中し、各組の應援亦熱中し、何れの組が優勝となるか全く豫想を許さず、最後の四百リレーとなる。各組共に必死となりて戦ひしが、遂に本科三學年菊組四十三點三分一を以て優勝し、規定の優勝カップを授與せらる。時に午後三時半なり。當日の成績概要次の如し。

種目	組名	得點	順位
走幅跳	一菊	1.5	10
	一梅	1.1	8
	一實	3.3	7
	一三菊	1.0	9
走高跳	一菊	0	9
	一梅	0	8
	一實	0	7
	一三菊	0	10
走400m	一菊	1	9
	一梅	7	8
	一實	1	7
	一三菊	1	10
走800m	一菊	1	9
	一梅	1	8
	一實	1	7
	一三菊	1	10
走1600m	一菊	1	9
	一梅	1	8
	一實	1	7
	一三菊	1	10
走3200m	一菊	1	9
	一梅	1	8
	一實	1	7
	一三菊	1	10
走6400m	一菊	1	9
	一梅	1	8
	一實	1	7
	一三菊	1	10
走12800m	一菊	1	9
	一梅	1	8
	一實	1	7
	一三菊	1	10
走25600m	一菊	1	9
	一梅	1	8
	一實	1	7
	一三菊	1	10
走51200m	一菊	1	9
	一梅	1	8
	一實	1	7
	一三菊	1	10
走102400m	一菊	1	9
	一梅	1	8
	一實	1	7
	一三菊	1	10
走204800m	一菊	1	9
	一梅	1	8
	一實	1	7
	一三菊	1	10

(個人得點表 十位迄)

順位	得點	組名	氏名	年	學	別	得點
1	17	四菊	石丸 喜久枝	三	本	本	71
2	15	四梅	久保 菊孝	四	本	本	69
3	13	三菊	岡村 孝子	二	實	一	69
4	10	實二	西村 芳乃	二	實	三	39
5	9	三菊	杉山 美枝	一	本	本	37
6	8	四梅	佐々木 千鶴子	一	本	本	37
6	8	三梅	田村 千恵子	一	本	本	37
6	8	實一	田村 孝子	一	本	本	37
9	7	二菊	藤田 みすき	一	本	本	37
9	7	二菊	中村 ヒサエ	一	本	本	37

(各學年別得點)

順位	得點	學年	得點
1	71	三	71
2	69	四	69
3	39	二	39
4	37	一	37
5	24.5	一	24.5

六月二十五日

第二回校内對組球技大會

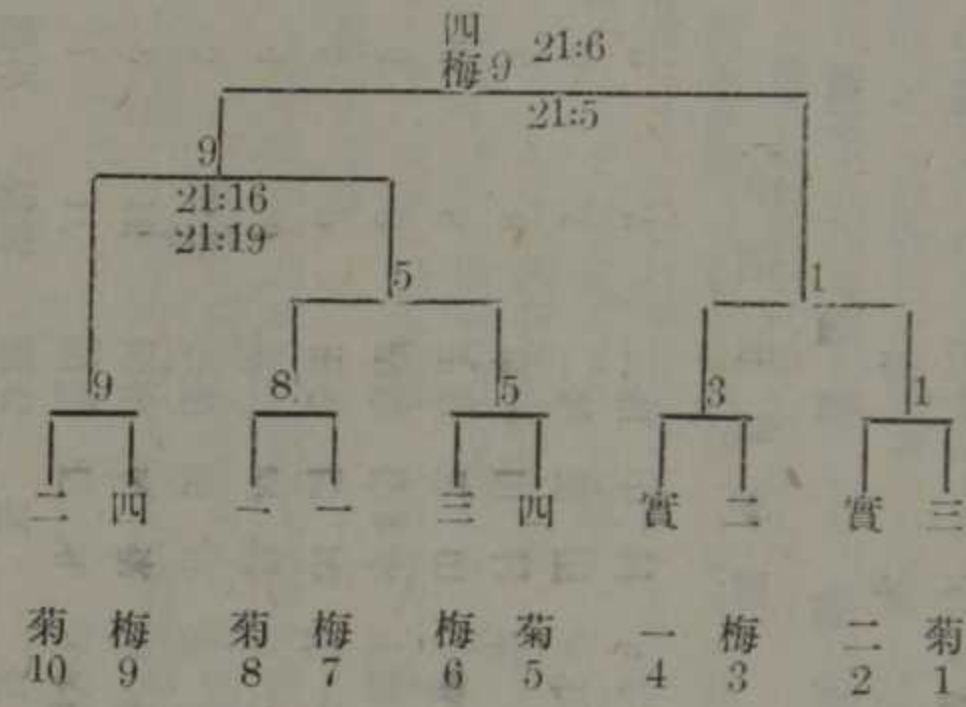
對組陸上競技會に引續いて、球技大會を開催し、第一回よりも各組共に體力は勿論、技術の進歩の大なるを認む。

排球は本四梅籃球は本四菊庭球は本三菊組の優勝となり。當日の成績左記の通り。

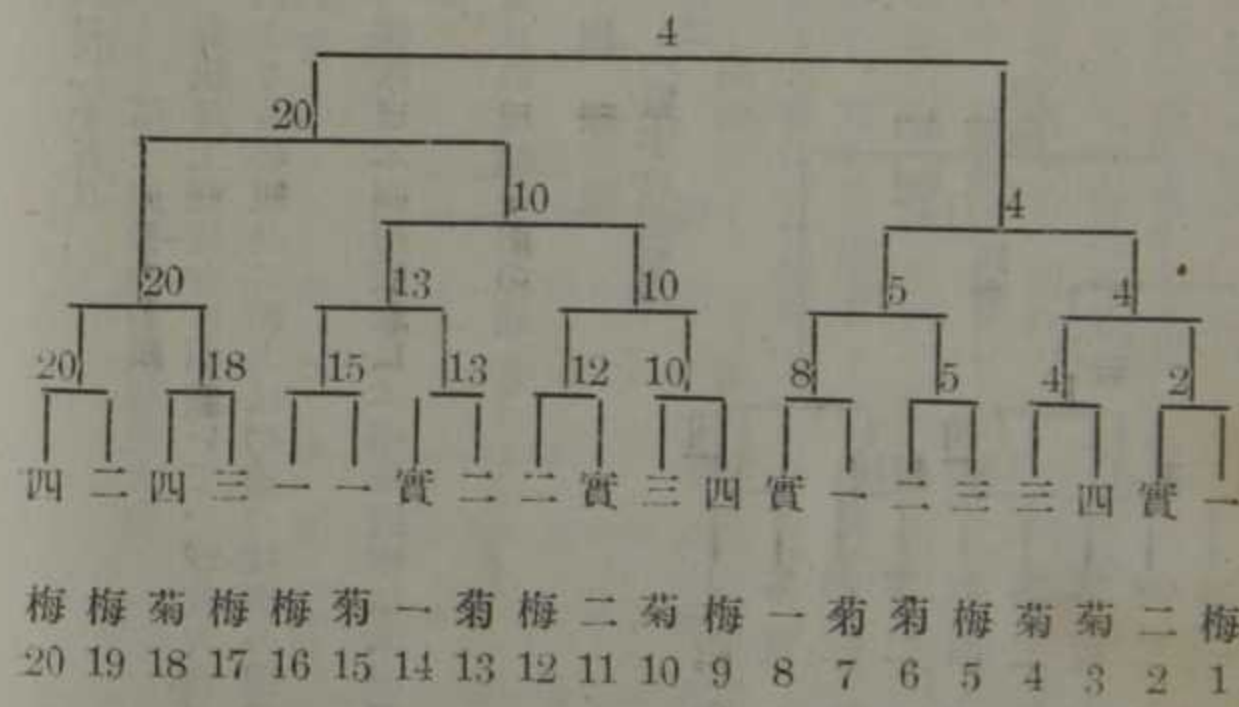
(數字は得點)



排球部



庭球部



尚優勝メンバーは左の如し。

排球部四梅チーム 平島、山縣、竹内、大野、伊藤  
佐々木、堀、和田、岡、中村、本永、野田

籃球部四菊チーム  
内藤、石丸、廣田、重本、岡野

庭球部  
三菊(杉山、竹内)、四梅(高田、大橋)

七月1、本年も亦例年の如く、菊ヶ溜に於て、十日間全校午後海水浴に行き、大いに體力増進につとむ  
尚二十一日より夏休となるや、八月一日まで炎熱と戦ひ、有志を集め、夏季運動練習會を開催す。出席生徒五十餘名。

九月二十二日

宇部體育協會主催近縣女子中等學校球技大會出場  
庭球部再び優勝し大毎寄贈の大優勝旗は  
本校に

籃球部最後の戦に惜敗

時は九月二十二日午前六時選手一同玉江羅集合、昨年優勝して獲得した、庭、籃、二個の優勝カップを持って宇部に向ふ。同十時頃宇部に着き、先づカップの返還式を行ひ、練習に遷る。各校選手は早々と、今日の榮冠吾

が校にと母校の名譽を双肩に持ち、實に物凄き練習振りを見せてゐた。戦は刻々と迫り、愈々第一回戦は始る。戦はリーグ戦である一校でも破れては望がない。六月頃より鍛ひに鍛つた腕を今日こそと選手の活躍物凄く向ふ處に敵なく進む様は實に痛快の極なり。當日の成績左の通り。

庭球部

第一回戦  
本校 山口高女  
徳山高女

◎高田四 (二) 山口高女  
◎大橋四 (二) 徳山高女  
○石原 (零) 山口高女  
○藤田 (零) 徳山高女

第二回戦  
本校 香川高女

◎高田四 (二) 香川高女  
◎大橋四 (二) 香川高女  
○石原 (零) 香川高女  
○藤田 (零) 香川高女  
○竹内 (三) 香川高女

第三回戦  
本校 山口高女

◎高田四 (二) 山口高女  
◎大橋四 (二) 山口高女  
○竹内 (二) 山口高女

第四回戦  
本校 宇部宮女

◎高田四 (二) 宇部宮女  
◎大橋四 (二) 宇部宮女  
○石原 (零) 宇部宮女  
○藤田 (零) 宇部宮女  
○竹内 (二) 宇部宮女  
○大橋四 (一) 宇部宮女

本日は本校四戦四勝にして優勝し、宇部、山口、徳山の各高女四戦二敗香川四戦四敗の順位となる。

籃球部

第一回戦に徳山高女を十四對十二の二點の差にて破り、引續いて第二回戦には平生高女を十點餘りの差を以て破り、最後の戦に山口高女に破る。

山口高女三戦三勝し一位となり、本校三戦二勝し二位となり徳山高女三戦一勝平生高女三戦三敗の成績となる。

十月十二、三日

山口縣體育大會出場

本年は陸上競技部、籃球部、庭球部以外に排球部も出場した。當大會の成績概要左記の通り。

庭球部

本校

山口高女

A組

竹内二——四(磯部)

B組

A組は良く奮闘せしも運悪く遂に山口高女に惜敗す。

第一回戦

本校(高)田橋四——二藤森柳井高女

準優勝戦

前半6——3  
後半2——9  
計8——12 (岩國高女)

排球部

排球部は今秋九月よりチームを組織し、練習の日尙浅く初めての戦にて第一回戦山口高女に敗退す。

陸上競技部

五十米豫選に岡村、百米に長山、何れもパスせしも、第二豫選に於て、何れもスタートに立ちおくれ、四着となりて決勝に出場する事出来ず。然しながら未だ下級生である故、今後の活躍は屹度本校のために榮冠を得る事と思ふ。

籃球投に於ても下級の中村善剛し、二十米七六を投げ四等に入選せしは將來大いに望みあるところである。

第十三回體育會の記

本三 尾崎登茂惠記

午前の部

青空だ!! 白く引かれたラインの上に、平和な朝の陽の光は眩しい位に輝いて居る。

第二回戦

本校(高)橋田——二(大)深川高女

第三回戦

本校(高)橋田四——零(水)元岩國高女

準優勝戦

本校(高)橋田——四(通)山山女師

高田、大橋組は斷然優勝するものとしてゐたが最後の戦に惜しくも女師のために敗れたのは、意外とする處であつた。

籃球部

第一回戦は不戦一勝し、優勝戦迄は平氣に出場する技倆を有しながら、少し相手を呑み過ぎて、遂に敗退せり即ち原因は油斷したためであると思ふ。全く惜しい事であつた。

第二回戦

本校(内藤、久保、石丸、廣田、上利)

前半22——13  
後半32——11  
計361——211 (厚狭高女)

十月二十七日午前八時、一發の煙火と共に靜寂な朝の空氣は忽ちにして破られ、全生徒は純白な運動シャツに學年別の緑桃黄白赤等のハチマキを結んで、運動場に整列した。先づ開會の辭につき、一同東方遙拜、後君が代校長先生の訓辭、校歌の合唱によつて華々しくも運動は開始された。ラジオ體操の最後のピアノの旋律が高く澄み切つた秋の空の彼方に消えて行くこと、全生徒は各定められた控席についた。これよりいよいよプログラムの順によりて競技は開始されて行く。

第一回は一年生の走技五十米だつた。幾條も引かれたコースの上を走る輕快さ。人々の足は踊る、さうして心も踊る。入賞者は氣息奄々として記録係にその名を記載してもらふ。さうして賞品を戴く。だがその時の顔色はさすがに包み切れぬ喜びのために、顔の筋肉がきゅつとゆがめられる。斯くしてプログラムの順に競技は着々として進んで行く。今度は障礙物競争だ、先づ足を縛つて兎の如く飛んで行く。それから輪をくまわり、スプーンに珠をすくひ、今度は提灯に灯を點するのだ。氣はあせるし灯はつかない。さうして居る中に一寸微風が吹く、灯が消えた。人々は、そろ／＼灯をつけて行く。あゝ氣はあせる。漸く灯がつくと途中でぶつと消える。その中に時間

が来る。あゝ忙しいこと。第九回目の四百米リレー各組  
選手の第一回豫選に一の組からは四梅と四菊がうまくバ  
スし、二の組からは三菊と一菊がのこつた。次に樽廻し  
くるくゝ廻る樽の面白さ。するとピアノの音が静かに鳴  
り、先づ實科のダンスがある。その頃から観衆は漸く集  
つて来て、あたりは黒山を築いたやうだ。三菊のダンス  
一年生のダンス、それに續いて毎年あるあの可愛い、幼  
稚園の遊戯である。無邪氣と云ふことより外は何も持  
て居ないやうな、無心の子供達の遊戯は、観衆の歡心を  
買ふにはもう十分だつた。四梅のダンスも上級生だけあ  
つて立派だ。廿二回目は待たれた小學校リレーの第一回  
豫選だつた。「××校一等、タイム××」メガホンによつ  
て小學校席に傳達されると、小學生達のごよめき飛び上  
らんばかりだ。東西の兩黒板に豫選にのつた小學校の名  
が色別に記載される。二年生のダンスが終りのち中食と  
なる。

今年の新しい催として開かれたバザーにも、正午近く  
になると澤山の人が入る。補習科の方々の活動ぶりもめ  
ざましい。

午後 部の部  
三十分間の中食のち午前ひき續き競技は進んで行

### 園藝部だより

本校の花壇は、一部が圖書館の敷地になりましたので  
稍狭められましたが、その代に農園の北側に薔薇園が出  
來ましたから、今春からは美しい花を眺める事が出來ま  
せう。この薔薇は秋山先生が挿木によつて蕃殖せられた  
ものであります。それから農園の西側には花園が設けら  
れまして、其處には色々の花卉が植ゑてありまして、春  
から夏秋まで大變に綺麗な花が咲き變ります。又、農園  
は以前には共同園が大部分で、個人園はほんの僅かし  
ありませんでした。本年度よりは共同園が少くなり、  
個人園が大部分を占める様になりましたので、一人分が  
相當廣く、且つ私共の好きな作物が出來ますから、私共  
は楽しんで種々の野菜を作つて居ります。

### 同窓會々則改正並に役員

同窓會々則は昭和四年總會の際次の通り改正せられた  
が同時に役員も左の通りになつた。

山口縣立萩高等女學校同窓會々則

一、本會ハ會員相互ノ舊情ヲ温メ心身ノ修養ヲ圖リ兼テ  
社會ノ風教ニ貢獻スルヲ以テ目的トス

秋の空は高く、コバルトに澄み渡り、ちぎれ雲一  
片すら浮んで居らない。

廿七回小學校第二豫選、三梅のダンス、走技障礙物等  
もすみ、卅四回の薙刀はかなり観衆の心をこらへた。白  
鉢巻の姿も凛々しく薙刀を搦込んだところの姿、落着あ  
り、そこに一寸の隙すらないのは眞に日本女性の持つ堅  
實のあらはれであらう。卅五回小學校リレー決勝が行は  
れた。すばらしいスピードを持つて各校の代表選手は走  
つたが、結局尋常科及び高等科のいづれも深川小學校が  
勝ち優勝旗は渡された。送る拍手の音も高く。續い  
て卒業生の籃球、四菊のダンスも造花が一入の美を添へ  
た。斯くてプログラムの数もだんく、瘦せて来て、來賓  
競争のつぎに各組リレーの決勝があつた。我が級勝たん  
と互に覇を争つたが、遂に月桂冠は一年菊組の手に落ち  
た。職員競争も面白く、こゝに無事演技終了となつた。  
最後のラジオ體操が終ると陸上競技得點の結果、一等一  
年菊組の手に優勝カップは授與せられ、校長先生の講評  
の後、萬歳三唱した。

その時、淡い夕陽の光は私達の影を地上に永く、引  
いて居た。この日を永久に忘れじと云ふが如くに。

- 二、本會ハ山口縣立萩高等女學校南園會特別會員及校外  
會員ヲ以テ組織シ事務所ヲ同校ニ置キ支部ヲ設置ス
- 三、本會ノ事業左ノ如シ
- 1、總會並ニ支部會開催ニ關スルコト
  - 2、講習會ノ開設ニ關スルコト
  - 3、敬老、慶弔、慈善、勤儉力行ニ關スルコト
  - 4、會員近況調査ニ關スルコト
  - 5、其ノ他必要ト認メタル事項
- 四、本會ニ左ノ役員ヲ置ク
- 1、會長 一名 學校長ヲ推戴ス
  - 2、副會長 一名 首席教諭ヲ推戴ス
  - 3、理事 若干名 本校南園會特別會員、支部幹  
事、並ニ本校毎回卒業生中ヨリ各組ニ付互  
選シタルモノニ名宛
  - 4、支部幹事若干名 會長之ヲ委嘱ス  
理事又ハ支部幹事ニ缺員ヲ生シタルトキハ  
總會ノ際之ヲ補充シ缺員ノ補充ニ急ヲ要ス  
ル場合ハ總會ヲ待タス會長ニ於テ便宜補充  
スルコトアルヘシ
- 五、役員ノ任務左ノ如シ
- 1、會長ハ本會ヲ總理ス



- 2、副會長ハ會長ヲ補佐シ其ノ不在ノ時ハ代理ス  
 3、理事ハ本會ノ事務ヲ擔任ス  
 4、支部幹事ハ支部ノ發展ヲ圖リ其ノ事務ヲ擔任ス  
 六、總會ハ毎年一回之ヲ開ク  
 七、本會ノ經費ハ會員ノ會費及有志ノ寄附金ヲ以テ之ニ充ツルモノトス

同窓會理事

卒業年月	卒業回数	住所	住所
大正二年三月	實一	濱崎 馬庭タマヨ	古萩 高垣 清子
三三	同二	江向 有田 ミサ	西田町 河村 貞子
四三	同三	同 内藤ヨシコ	東田町 土田 チヨ
五三	同四	吉田町 下間 静子	濱崎 高木 梅代
六三	同五	榑青海 小野 サキ	榑町 大津 アサ
七三	同六	同 西田町 有吉トミコ	江向 内藤ツル子
八三	同七	同 江向 今地タミ子	榑町 榑原伊藤 梅代
九三	同八	同 米屋町 岡本 昭子	東田町 若松 キサ
一〇三	同九	濱崎 長谷川久子	榑町 中原 ヨシ
同	本一	榑仲原 荒地 久子	南田町 有吉ノブ子
一一三	同二	白水校 榑谷 敏子	東田町 吉村 ヒナ
同	實一〇	榑青海 榑田イセヨ	同 村田トメ子
一二三	本三	南古萩 榑京子	平安古 田總 ユキ
同	實一一	御許町 下井志都子	川 島松本 操子

一三三	本四	山田 大田 貞子	同 村田 清子
同	實一二	濱崎 島本 チヨ	東田町 有吉 榮子
一四三	本五	榑新堀 中村 信子	平安古 榑浦シヅ子
同	同	榑堀内 榑榑村 榑枝	御許町 山本 繁子
同	實三	江向 町田ヨシノ	榑谷町 山崎ヨシ子
一五三	本六	濱崎 榑政子	明倫校 金子 萩野
同	同	同 榑川島 中島 幸子	榑 東土井千鶴子
同	實一四	同 榑二ツ森 岡 和子	江向 榑濃幾久子
昭和二三	本七	榑榑谷町 榑榑 榑榑	同 山本 千代
同	同	同 榑江向 榑榑 榑榑	同 榑榑 榑榑
同	實一五	西田町 有吉フサ子	平安古 林 富子
三三	本八	榑榑 山縣 ヲト	平安古 本永 芳恵
同	同	同 榑榑榑 榑榑喜美子	榑榑町 木下美恵子
同	實一六	川島 榑榑 榑榑	江向 北村喜代子
四三	本九	榑榑 榑榑 榑榑	榑榑 榑榑 榑榑
同	同	同 榑榑榑 榑榑榑	榑榑 榑榑 榑榑
同	實一七	江向 兒玉 静子	江向 榑榑 榑榑

江向方面  
同窓會支部幹事

渡邊 八百	萩原千代子	池上 キク
榑榑 榑榑	波多野愛子	山本 照
榑榑 榑榑	林 アサ	山本 光子

馬屋原壽滿

河添方面	石津 和子	瀧口芳宜江	田村 房子
橋本唐樋御許町方面	橋本 増山 静子	行本 貞子	富田 文子
御許町	川上富貴子	中村 艶子	
平安古方面	唐樋 村田 幸子		

堀内方面	田總 ユキ	芳野 和子	山田 道子
	本永 芳恵	田中 清子	竹内 操
濱崎熊谷町方面	石津 夏子	津森 榑代	赤崎 ヒナ
	福富アサ子	小林八重子	

濱崎	馬庭タマヨ	高木 梅代	
熊谷町	石川サヅ子	竹内 芳子	山根 勝子
米屋町、鹽屋町、惠美須町、油屋町、吳服町、魚棚、南	木下美恵子		
古萩、片河瓦町、津守町、片河方面			
吳服町	菊屋喜美子		

惠美須町 竹内 巴

魚棚 熊谷 愛子	宗實 元子	
田町新堀方面	榑榑 榑榑	
東田町	倉田 静子	
	久保 春枝	榑榑 榑榑
	榑榑 榑榑	榑榑 榑榑
	八木 正子	津田千恵子
西田町	榑榑 榑榑	
新堀	中村 芳子	
吉田町、五間町、古萩、今古萩、渡リ口方面		
吉田町	下間 静子	吉田富美子
下五間町	石光 静子	
渡リ口	竹内 シダ	

土原方面

吉村多喜子	榑榑 榑榑	堀 賀代	弘中 静子
中村 節子		榑榑 榑榑	阿部 嘉子
桂 松子		榑榑 榑榑	阿武ミチ子
森川ハツ子		榑榑 榑榑	山田 ミチ
中原ユキ子			

榑東方面

榑榑 榑榑

榑榑 榑榑	榑榑 榑榑	榑榑 榑榑
榑榑 榑榑	榑榑 榑榑	榑榑 榑榑
榑榑 榑榑	榑榑 榑榑	榑榑 榑榑

第十六回同窓會記

昭和四年度の同窓會は、十月二十日(日曜)をもつて盛大に開催された。場所は本校講堂、來會者百五十人。當日早朝はい、お天気らしかつたのに、丁度時間の間際(午前十時開會)になつて雨が降り出した。まあにくだらしい雨だ、これではとても出かけた人もやめになさるだらうなどと考へてゐる中に、皆様は續々と、ぬれなが

- 中原 豊子 三輪 芳子 厚東 閑子
鈴木 絶子 國重 節子 小野 サトリ
藤田 年子 百濟 萩江 土井 幸子
浅海 千代子 阿武 敦子
椿方面
布川 小千子 白井 千カ 江山 タキ子
藤田 イセコ 笠井 清子 山縣 ウメ
河村 ユク 河名 孝 竹内 睦子
金子 敏子 瀧野 敦子 田中 雪子
陽 洪子
山田方面
白井 アキ子 時山 マサ子 松本 春子
渡邊 キヨ子 大田 貞子 山本 禮子

らも、おあつまり遊ばした。なつかしの學び舎、樂しの同窓會なればこそ！定刻前の廊下には、時ならぬ美しい色彩がおよいで、そこからも、こゝからも、華やかに嬉しげな笑ひ聲が起り、何といふ和やかな気分だらうと、胸がせまる程うれしかつた。

今年からは盛大にやりたいと、校長先生始め諸先生方が前々より、御力を御つくし下され、又研究科の方々の御熱心もあり、來會者は昨年の二倍以上もあり、午後は種々の餘興もあつて盛なものであつた。

午前十時少しのびて開會、一會員入場、二會長入場、三開會の辭、四君ケ代合唱、五事業並に會計報告、六會長講話、七議事(會則改正)役員委嘱並選舉、八會員意見發表、九閉會の辭、十會長退場、十一會員退場、といふ順序で午前中は終つた。事業報告にては、南國圖書館建築の事について、中野先生が精細に御話し下さつた。校長先生の御講話は、最初こちらへ御かはりの御挨拶あり、次に會の事業がよく發達してゐる今度も圖書館を建築されるなど、誠に心強く嬉しく思ふ、皆様に御禮申し上げる、なほこれ以上に努力して次第に進んで行く様にとの御言葉があつた。次は御講話の本題で「女性」と云

ふ事につき御話し下さつた。大體次の如くである。

近來女性の自覺が大分やかましく叫ばれてゐるが、これ等の中には、男子と何でも對等な事をしようといふのが多い。これは自分の考へでは間違つてゐると思ふ。元來女子には男子に出來ぬ特有な性質があるのだから、さう云ふ方面に自覺すべきである。どう言ふ方面かといふと「生活」といふ事についてである。女子には何となく温かみがある。男子ばかりで生活すると殺風景で何だか足りない様な感じがするが、女子がある。非常に愉快な生活が出來、慰安があたへられる。偉大な人とか、聖人とか或は英雄とかたへられる人の陰には、必ずそれをなぐさめはげまし愉快を與へるところの女性がある。この様に女性は理想的な生活をする上には、ぜひともなくてはならぬ。それ故無暗に社會的に男子と對等に付く事など思はず、女性の道であるところの此の方面に自覺する事が必要と思ふ。と簡單にすれば前述の様にお話し下さつた。誠にお話の通りであるとしみじみ感じた。

議事の會則改正は評議員並に専務理事を廢して、理事支部幹事とし、毎回卒業生各組より、互選せられたもの二名を理事とする事、これにすぎない事、支部幹事に缺員を生じた場合は、總會の際にこれをきめる、しかし急

を要する場合は會長に於て、便宜之を決める事、今一つは總會は毎年十月十七日であつたが、これを「總會は毎年一回之を開く」と改正する事を踏られたが、満場一致改正する事に決し、次に別記支部幹事の委嘱があつた。午後は食堂に行き、研究科生方の心づくしのお壽司を戴き、午後一時より餘興開始、第一に福引、七儀先生の讀み手で、自分のくじと同じ文句を讀まれたら受取りに行く、随分面白いので皆大笑ひ。次に先生方の御紹介があつた。次は(一)仕舞、八島、田村房子、地、河田先生、(二)仕舞、羽衣、横木房子、地、河内先生、小鼓、芳野和子、大鼓、菊屋喜美子、(三)ヴァイオリン三重奏、神田先生、佐伯文子、桂淑子、(四)假裝種々、研究科生等引きつゞいてあり、餘興は仕舞よりはじめて、皆上出來であつた。假裝はどの組もおなをかかへる様なものばかりで、皆様大よろこびであつた。それに河内先生は仕舞の地を讀つて下さるために、御いそがしい中をわざ／＼御いで下さつた事は、本當に有難く感じた。かくて和氣霽々の中に本年度の同窓會も終つた。たれもかれも名殘惜しげに見える。來年は今年にも増して盛會であるやうに！。(菊屋喜美子記)

昭和四年度南園會歳入歳出豫算

歳入之部	
職員生徒會費	金貳千貳百五拾六圓
財産收入	金百八拾八圓八拾九錢
雑收入	金九拾圓
繰越金	金百五拾七圓六錢
歳入合計	金貳千六百九拾壹圓九拾五錢
歳出經常部	
學藝部費	金百參拾圓
圖書部費	金參百貳拾六圓
園藝部費	金參拾圓
運動部費	金六百八圓五拾錢
會報部費	金四百貳拾六圓
庶務部費	金四百參拾圓
補助金	金貳百五拾圓
豫備費	金四拾九圓四拾五錢
歳出經常部合計	金貳千貳百四拾九圓九拾五錢
歳出臨時部	
學藝部費	金拾圓
運動部費	金貳百四拾五圓

昭和三年度南園會歳入歳出決算書

歳入之部	
職員生徒會費	金壹千八百七拾四圓六拾錢
寄附金	金六百貳拾九圓七拾錢
財産收入	金百五拾八圓七拾參錢
雑收入	金百參拾四圓參拾錢
歳入合計	金貳千七百九拾七圓參拾參錢
歳出之部	
學藝部費	金參百八拾六圓四拾貳錢
運動部費	金七百參拾五圓四拾壹錢
會報部費	金參百八拾八圓拾七錢
庶務部費	金八百拾六圓拾九錢
財産編入	金參百拾四圓八錢
合計	金貳千六百四拾圓貳拾七錢

右差引殘金百五拾七圓六錢 昭和四年度へ繰越

篤志者芳名 (昭和三年十一月より昭和四年二月まで)

南園會ニ寄附者	
金七拾圓	昭和四年二月二十一日 齋藤 彦一
修身教科書六十冊	同 年十月 一日 筒井捨次郎
金五拾圓	同 年十二月 五日 秋山百合熊
金參拾圓	同 五年一月二十四日 土井 幸槌
金拾圓	同 萩將 校會
學校ニ寄附者	
裁縫教室電氣	昭和四年三月卒業生一同
アイロン設備	

會告

一、會員の通信について。學校又は南園會宛の通信は卒業生多數のことなれば、必ず何年卒業と、現住所と、改姓せられた方は舊姓をも併記して下さい。さうでないこと、詮索するに無駄の時間を費します。

二、縁の園投稿について。校外會員の通信は、讀者に非常なる感興を起さしめるものであります故、一言半句

× × × × ×

の葉書文でもよいですから、將來多數の御投稿を御願ひします。

三、會報發送について。會報代前納の方にして、會報を御受取りにならぬ時は、何かの行違ひにつき、御遠慮なく至急會報部宛御照會を願ひます。

四、會員名簿について。會員名簿は、相當苦心して作つたものですが、何分多數のことにつき、不備の點がありましたら、御自分のことでも、御友達のことでも御遠慮なく至急御通知して下さい。尙卷末の私製葉書(切手貼用のこと)により、御近狀御通知を願ひます(御助力によつて、なるべく會員名簿を完全なものにしたいと思ひます)。

五、會員身分異動について。會員の方にして、轉居・改姓其の外身分上につき、異動を生じた時は、其の都度至急御通知を願ひます。萬一御通知なき時は、會報、又は學校記事を發送することができぬのみならず、學校よりのすべての通信もむづかしくなり、何かと不便を生ずるのであります。

お願ひ

左の方々の現住所が不明で會報發送上困つて居ますが御存じの方は至急お知らせ下さい。

實科第二回

大正三年三月卒業 (年齢順)

舊姓

舊姓

舊姓

安澤 マサ(大岩)三宅 節

吉田 チヨ(原)

大野 アキ(森重)上田 正子

難家キシコ(長見)

田中 千代(中原)横地 幸(河野)

兒玉美智子(三宅)

岡田 英子(山根)

實科第三回

大正四年三月卒業 (年齢順)

三浦 チセ

尾坂喜興子(君谷)佐藤 シヅ(金子)

金子 トミ

實科第四回

大正五年三月卒業 (年齢順)

吉武 静

富塚 タネ(大田)堀水クリコ(増野)

安部 壽子(原川)黒瀬ヒデ(久保田)

長見マサコ

高壽ヨシコ

井上ふみ子 植村 雪子

岡本 ミチ

石津 光子(白根)小笠原マス

實科第五回

大正五年三月卒業 (年齢順)

久村 トキ(小林)厚東 英子(福原)玉井 ヨシ(厚東)

宮川 ツル 渡邊 嘉子 吉田 貞子

末岡ハルコ

實科第六回

大正七年三月卒業 (年齢順)

秋山 操(黒瀬)

實科第七回

大正八年三月卒業 (年齢順)

永田フジエ(植村)

實科第八回

大正九年三月卒業(イロハ順)

杉本サカヘ(矢島)田中 ミツ(山田)

實科第十回

大正十一年三月卒業(五十音順)

竹内千代子(井上)榎森 千歳(岡)谷村 綾江(河村)

藤田百合子(中村)松本 ヒナ 松浦 八重

實科第十一回

大正十二年三月卒業(五十音順)

村田 ステ(岸)藤本セサ子(中谷)五峰 穂子(西田)

實科第十二回

大正十三年三月卒業(五十音順)

柴田ユキ子(河崎)友永ヒナコ

實科第十三回

大正十四年三月卒業(五十音順)

片山 政子 藤原サチコ

實科第十四回

大正十五年三月卒業(五十音順)

山田モモヨ

實科第十六回

昭和三年三月卒業(五十音順)

増井 孝

本科第一回

大正十年三月卒業(五十音順)

原 ユキコ

本科第二回

大正十一年三月卒業(五十音順)

原 いせ子(阿武)木村テルコ(河村)口羽 龜古

末岡 良子 渡邊 春江(中原)中村 静子

大野チエ子(平田)岡島ミサヲ(矢島)藤井 カツ(山縣)

角 シヅコ(吉田)

本科第三回

大正十二年三月卒業(五十音順)

橘 ミツ子(井上)中村 静子 西永 ひさ(矢野)

本科第四回

大正十三年三月卒業(五十音順)

高原ハツノ(桶谷)國光フキ子 林 菊枝

本科第五回

大正十四年三月卒業(五十音順)

梶森 秀子(村上)

本科第六回

大正十五年三月卒業(イロハ順)

金子 ヤヘ 清水富美子(玉野)山田 ヤヘ

本科第七回

昭和二年三月卒業(イロハ順)

吉山シヅ子 山本 節子 益富 貞子

安達ヨシコ

堀 静子

名月や疊の上に松の影 其 角

鶯の身を倒に初音かな 風 雪

稻妻や昨日は東今日は西 元日や晴れて雀の物語

梅一輪一輪程のあたたかさ

太田垣蓮月

夜もすがら吹きさらしたる川風に白らけて寒き有明の月  
川沿の柳の系にかゝりけり残る水のかたわれの月  
冬畑の大根の莖に霜さえて朝戸出さむし岡崎のさこ

野村東望

しばしだに物は思はじそのまにも柳はもえて梅は散りけり  
なかなか正しき人の夏蟲の火に入るうきめ見る世なりけり  
もののふの大和心をよりあはせ末ひとすぢの大繩にせよ

落合直文

咲きつづく葦たんほほなつかしみもと來し道をまたもどりけり  
ちる花のゆくべいづことたづねればたゞ春の風たゞ春の水  
こころみに石を拾ひて投げて見む眠るが如き春の川水  
宵にきて天つ少女の忘れたるかざしの玉か萩の上の露

### 會報代について

會報代は登録金參拾五錢に付至急前納して下さい。南園會報（口繪五枚、記事、會員名簿等約二百頁）は右代金を前納されぬ方には、一切送附しません、ただ學校記事を送附するだけです。それ故南園會報御入用の方は、現住所、氏名（舊姓も併記のこと）並に卒業の年を明記の上、豫め申込んで下さい。（別紙振替用紙御使用のこと）但し在校會員は毎月南園會費を出すを以て、別に納入するに及びません。又會員名簿を整理（誤れる箇所あらば、至急御通知のこと）して、明年は南園會報とは、別冊として發行する豫定です。會員名簿だけ入用の方は實費金拾錢至急前納のこと。（會報代金參拾五錢納入の方は、別に金拾錢納入に及ばず。）會員名簿だけ入用の方も別紙振替用紙を使用せられ、現住所、氏名（舊姓も併記のこと）並に卒業の年を明記のこと。  
校外會員の方はなるべく南園會報（又は會員名簿）を御購讀になりますやうに願ひます。

特別名譽會員

●兵庫縣武庫郡本山村(逝去)  
●東京市芝區今里町  
同

久原 文子氏  
久原房之助氏  
久原 清子氏

名譽會員

兵庫縣武庫郡精道村打出  
同 神戸市奥平野  
同 玖珂郡大島  
阿武郡明木村  
豊浦郡長府町  
●阿武郡萩町(逝去)  
●都濃郡下松町  
●大阪市東區生玉町六十一番地(逝去)  
阿武郡萩町 江向  
豊浦郡彦島町

齋藤 幾太氏  
田村 市郎氏  
松浦 誠氏  
瀧口 吉良氏  
横 俊治氏  
増山 宗史氏  
岡村 勇二氏  
岡 十郎氏  
林 勇輔氏  
同 乙治郎氏

特別會員

阿武郡萩町江向(京都府相樂郡東和東村大字門前四三)  
同 萩町椿雜式町(吉敷郡嘉川村)  
同 江向(吉敷郡秋穂二島村)

筒井捨次郎  
中野 貞介  
池上岩太郎

同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同

今古萩(阿武郡大井村)  
本校内教員住宅(鳥取縣倉吉町)  
江向(阿武郡萩町四〇二五)  
(厚狹郡厚南村)  
川島十都市筋(愛知縣海部郡立田村宮地)  
椿雜式町(豊浦郡豊田中村字八道)  
江向(福岡縣八女郡福島町本町二番地/二五三)  
(滋賀縣甲賀郡水口町水口四一九一)  
河添(富山縣富山市五福町)  
八丁川島  
平安古(福岡縣田川郡後藤寺町見立三二七八)  
(上田)原田 チロ  
七俵 與  
藤田 直人  
河内ッネノ  
松村 百子  
宇野 ヒサ  
田淵 武彦  
有田 香彦  
今道 貞一  
上利 政三  
和田 涉  
笠置 はま

伊藤 通利  
秋山 誠一  
北野 ウメ  
繩田 熊雄  
神田 信明  
今城 四郎  
吉原 正士  
入江好治郎  
布村 とき  
原田 チロ  
七俵 與  
藤田 直人  
河内ッネノ  
松村 百子  
宇野 ヒサ  
田淵 武彦  
有田 香彦  
今道 貞一  
上利 政三  
和田 涉  
笠置 はま

舊特別會員

- 阿武郡佐々並村(死亡)
- 吉敷郡小郡町
- 滿洲安東九番通り滿鐵社宅二ノ一
- 東京市麴町區平河町五ノ一〇
- 廣島縣立吳高等女學校
- 動靜不明
- 長崎縣師範學校
- 阿武郡萩町土原
- 同 椿雜式町
- 阿武郡德佐村
- 東京府北豐島郡下練馬村北江古田
- 名古屋私立東海中學校
- 阿武郡萩町平安古
- 靜岡縣立靜岡高等女學校
- 神奈川縣小田原高等女學校
- 阿武郡萩町唐櫃
- 都濃郡福川町(死亡)
- 阿武郡萩町河添
- 熊本市池田町字岩立七〇一
- 吉敷郡嘉川村(死亡)

- (坂口五郎) 三戸 宣光
- 山内 清次
- 中野 スエ
- 藤井 二郎
- 今井チエ子
- 山田 兵吉
- 竹内新三郎
- (井上) 飯塚マツヨ
- (沼田) 北川 恒
- (齋藤) 大谷 タカ
- 田中タカヨ
- 田村 繁
- 米原 鶴太
- 本永 旭

- 埼玉縣北埼玉郡中條村字今井
- 下關市長崎町上條二一五四
- 和歌山縣有田郡廣
- 福井市尾上中町
- 阿武郡萩町堀内(死亡)
- 阿武郡萩町平安古
- 東京市外高田町雜司ヶ谷金山三三九
- 佐波郡出雲村
- 阿武郡萩町濱崎(死亡)
- 同 江向(死亡)
- 同 東田町
- 長崎縣立諫早中學校
- 下關市丸山町
- 吉敷郡陶村
- 阿武郡三見村
- 大阪市此花區西島町北港住宅二二ノ二
- 下關市大久保町
- 阿武郡萩町今古萩
- 同 新堀
- 千葉縣千葉市千葉淑徳高等女學校
- 廣島市外牛田村枝寄
- 名古屋市東區白壁町二ノ二 齋藤本郎内
- 山口縣吉敷郡大蔵村

- (八木) 井指コサミ
- (田村) 進藤 ウメ
- (坪野) 三崎 シヅ
- (奈良) 古津差起子
- 河村タケヨ
- 田總百合之助
- (藤野) 馬淵 カネ
- 重本マサ子
- 中津江延彦
- 福島 城清
- 三輪 マサ
- 石橋 孟
- (堀上) 飯塚 ヨシ
- 西村 キヨ
- 長澄 市衛
- 五十崎 和
- (中村) 金子モ、エ
- (荒川) 伊藤 セ
- 中村 彌兵
- 關田 貢
- 河村 一郎
- 世良 ハツ
- 安富 教子

校外會員

資料第一回

大正二年三月卒業(年齢順)

- | 氏名               | 舊姓                  | 本籍              | 現住             | 所               |
|------------------|---------------------|-----------------|----------------|-----------------|
| 野田 葉月            | 原田 梅子               | 上利 テイ           | 柳原 良助          | 野田 ヨシコ          |
| 藤井 八重            | 安永 スエ               | 佐々木ヒデ           | 山本 勉彌          | 堀江ウタコ           |
| 富谷 寛一            | 安野 章                | 守田 茂作           | 片山 幹子          | 俵野 信            |
| 吉田 勝郎            | 長濱 友雄               | 齊藤 彦一           | 赤川 正三          |                 |
| ○松野 ユキ           | 阿 萩土原               | ○松浦 コウ(伊藤)阿 萩土原 | 早知 同 東田町       | ○梅田 カツ(宮本)同 南片河 |
| ○金田 トキ           | 大 瀬戸崎               | ○大草 政子(山本)阿萩平安古 | ○緒方 幸(山本)同 同濱崎 | 山口 エン(津田)同 東田町  |
| ○井原 ミツ(竹内)同 惠美須町 | ○河崎 スエ(中島)厚狭郡船木町字小野 | ○高垣 清子          | 阿 萩古萩          | ○田中 冬子          |
| ○山下 歌子(小澤)同 萩椿   | ○久保田ミサ子             | ○伊藤ミドリ(齋藤)同 大井村 | ○山下 歌子(小澤)同 萩椿 | ○久保田ミサ子         |

- + 永井 ミツ(村田)同 同椿東 大阪中河内堅下村安堂
- + 佐々木 フジコ 同 三見村 朝鮮成鏡北道明川郡東面明源公立普通學校長宿舎
- 金子 ハツ 同 大井村 京城和泉町滿鐵社宅二
- 福間 サト(藤田)同 福川村 福賀村福田小學校
- + 長谷川 サダ(野上)同 萩土原 西田町
- + 倉田 勝子(倉田)同 萩西田町 西田町
- 水木 チヨ(倉田)同 萩今魚棚町(死亡)
- 藤井 キク 同 徳佐村 下關市之町大崎保太商店
- 大崎 トシコ(平田)同 萩無谷町 萩濱崎町
- + 馬庭 タマヨ(金子)同 福川村 臺北西門町二ノ一七
- + 松井 チヨ(河上)同 萩橋本 朝鮮全南靈光郡法聖浦川崎社宅
- 津田 桃代(金子)同 同椿東

實科第二回

大正三年三月卒業(年齢順)

- 安澤 マサ(大岩)阿 萩新堀 住所不明
- 時縣 シナ(松村)同 同江向 松村榮方
- 岡 レン(大崎)大 三隅村 萩町小橋筋
- 桂 シズエ(國司)阿 萩橋 神戸市平野神田町二五
- + 有田 ミサ(阿部)同 同江向 臺灣臺北東門町一〇六
- + 桑木 マツ(多田)同 同椿東 福岡縣嘉穂郡上穂波村字長雄嘉穂株式會社嘉穂鐵
- 原田 トミ(上田)同 同河添

- 石津喜與子(中村)同 同東田町 大阪府下中河内郡高井田
- 溝端 フジ(草刈)同 同河添 旅順市忠海町
- 上田 信子 同 明木村 朝鮮成鏡北道羅南本町監官舎
- 三浦 君子(神代)同 萩河添 岡山縣津山町
- 玉木 チヨ(大賀)阿 鹽屋町 住所不明
- + 三宅 節 美 大嶺村 住所不明
- + 玉木 ハツコ(藤波)阿 萩米屋町 下關市之町大通り九五
- + 吉田 チヨ(原)同 同土原 住所不明
- + 大野 アキ(森重)同 大井村 住所不明
- 木原 露(伊藤)同 萩堀内 在東京
- 島田 壽美 同 同椿町(死亡)
- + 内藤 千代(堀)同 同濱崎(死亡)
- 上田 正子 同 同椿神原 住所不明
- 高橋 恭(小野)同 奈古村(死亡)
- + 藤家キシコ(長見)同 萩鹽屋町 住所不明
- + 桂 ユキ(中原)同 同椿東 大阪府西成郡玉出町千本通五丁目七
- 鮫島 ハナ(安達)同 同 萩(死亡)
- + 岡藤ミヨコ(藤木)同 同御許町 香川縣丸龜市風袋町中町
- + 大田 キク(原)同 同平安古 大連市周水子小野田セメント社宅
- 田中 千代(中原)同 同橋本 住所不明

- 村田 イシ(今地)同 川上村 同
- 西岡マサヨ(倉重)同 萩椿東 下關市蟻生武久町一二五
- + 小野 キク(松村)同 同江向 西岡方
- + 坂本 タカ(岡)同 小川村 小倉市外足立村三萩野萩崎
- 山縣 於松(伊藤)同 大井村 須佐町本町
- 宮本 タカ 阿 大井村 萩町新堀
- 横地 幸(河野)同 萩江向 住所不明
- 田邊 カメ(山下)同 同椿東(死亡)
- 河村タミ子 同 同無谷(死亡)
- + 見玉美智子(三宅)同 同江向 住所不明
- 澄田 ハツ 同 同堀内 福岡縣田川郡神田村字金田東橋
- 吉本 ヨシ(神村)同 同米屋町 朝鮮京城府本町三ノ三八
- 阿部 スマ 同 同片河 大津郡深川村正明市
- 坪倉シゲヨ(岡部)同 須佐町 大津郡三隅村
- + 岡田 英子(山根)同 萩河添 住所不明
- 河村 貞子(三好)同 同西田町 姫路市宇五軒邸 藤田秀
- 藤田 豊子(末成)同 同平安古 八方
- + 三浦 テイ(大中)熊 淺江村 熊毛郡島田村原

實科第三回

大正四年三月卒業(年齢順)

○阿武タケヨ 阿 彌宮村

- 加藤 雪(栗屋)下關市田中新町一丁目
- + 藤田 愛子(筒島)阿 吉部村 大津郡三隅村
- + 島田ウメコ(山本)同 萩濱崎 下關市入江町海岸通り
- 藤村 マツ 同 川上村
- 松岡 花子(松野)同 萩土原 東京府大井町出石五二六
- 三浦 ナセ 同 萩濱崎 住所不明
- 瀬川 由子(河北)同 萩今古萩(死亡)
- 河野ミツ子 同 同山田
- 山口屋シナ(山下)同 同濱崎
- 島本 チヨ(大森)同 同東田町 青森縣井陘軍官舎
- 伊藤 ミチ(村上)同 同椿東 朝鮮全北鎮南
- + 飯村 嘉子(椿)同 同山田 東京本郷區本郷五ノ一四
- 長崎チエ子(三上)同 同川島 萩町金谷
- 玉木 ヨシ(西山)同 同 山口市木町
- 大橋 トメ(國弘)同 同平安古 朝鮮大邱八重垣町
- 下瀬 清子(林)同 小川村 住所不明
- 尾坂喜與子(君谷)同 萩椿東字 朝鮮全羅南道羅川郡時谷
- 野村ツルヨ(田中)同 萩小畑 面駐在所 野村庄一方
- 中村 操(田村)同 同椿東 東京府下荏原郡平塚町大
- + 山下 壽美(吉田)同 同川島 字戸越三六四
- 植村フミヨ(田中)同 同椿東 香川津
- + 齋藤 マス 同 大井村



○三好アヤコ(秋枝)同 福賀村 萩町香川津  
 +○厚東 佐世 同 同椿東  
 ○原 フミ(長井)同 川上村 京都市上京区吉田上阿達  
 ○南方 京 同 萩椿東 神戸市山下町四丁目三ノ  
 ○植村サチヨ(山本)阿 三見村 山口市今市七七  
 ○三原 幸子(山中)同 萩橋本 山口市今道二三  
 ○福永 フサ(伊藤)同 川上村  
 +○倉増千代子 同 高俣村 (死亡)  
 +○林 シズ(河田)玖 米川村 大阪市西區長堀北通二丁目一番地米元幸重内 (死亡)  
 ●齋藤 キク 阿 萩椿 朝鮮京畿道長端郡邑内 (死亡)  
 ○金井 カメ(阿武)同 同椿東 同吉田町 (死亡)  
 +○赤司 尊子(倉田)同 同吉田町 (死亡)  
 ○井上キミヨ(黒瀬)同 同江向 (死亡)  
 ○山下 サト 同 同山田  
 ○吉賀 クリ(三村)同 同濱崎 吉賀幸助方  
 ○小宮 トラ(中原)同 同土原 朝鮮釜山本町一丁目  
 ○藤野 トシ(吉賀)同 同熊谷町 厚狭郡船木町  
 +○藤井 菊代(鹽見)同 同椿 萩町土原 永田但一  
 ○津守 フキ(重枝)同 同橋本町 豊浦郡西市町  
 ○中村 スミ(大山)同 同椿 東京府下松澤村上北澤文  
 ○松原 ツル 同 同米屋町 (死亡)  
 ○久保田ヨシ(大田)同 同土原 下關市丸山町八九〇

+村木 秀子 同 同堀内 美 於福小學校  
 +○能美滿壽子 同 同江向  
 ○馬屋原孝子 同 同椿東 福岡縣若松市堺町四丁目  
 +○内藤ヨシヨ 同 同江向 萩明倫小學校  
 +○佐藤 シズ(金子)阿 萩平安古 住所不明  
 ○渡邊 テツ(村田)同 同江向 萩町堀内  
 +○宮原 千世(河野)同 同土原 美禰郡赤郷村  
 ○笠原嘉子(三好)同 同濱崎町 長野縣長野市南縣町  
 ○能美 ヨシ(片山)同 同椿東 大分縣魚川御越町白金温泉 森鶴松方  
 +○井上マツヨ 同 福川村 山口市立第一小學校  
 ○長嶺 芳子 同 德佐村 阿 小川村  
 ○小河ハナエ(岩竹)同 萩江向 愛知縣安城町稻荷一九ノ  
 +○白井 ハナ(平木)同 同椿 住所不明  
 ○三浦 ヨシ 同 同江向 (死亡)  
 ○金子 トミ 同 同椿東 住所不明  
 ○三浦サダ(阿座上)同 同江向 朝鮮忠清北道清州本町五ノ二  
 ○岡野 千代(長谷)同 同津守町 臺灣臺北  
 ○田原千代子(石井)同 同田町 橫濱市上反町五〇〇吉田  
 ○伊藤 喜代(古橋)同 同川島 泰司方  
 ○野村 フジ 同 同米屋町  
 +○田村 清(金子)同 宇田郷村 大阪市天王寺區眞法院町二番地

+○榎原マサミ 阿 萩堀内 (死亡)  
 ○大谷フクコ(堀永)同 同東田町 大津郡深川村湯本  
 ○秋里シヅコ(松岡)同 同椿東 美禰郡長登  
 ○浅野ミサヲ(伊藤)同 同江向 東京府下高井戸町中高井戸六七  
 ○阿武 クリ(寺田)同 萩椿東 萩町橋本町  
 ○松崎 チヨ(阿部)同 同古萩 萩町江向徳隣寺裏川筋  
 ○土田 チヨ(松屋)同 同東田町 同東田町梅月亭右  
 ○岡村シゲコ 同 同平安古  
 +○松井 松江(山本)同 同江向 阿 彌富村  
 +○三上 文子(松井)同 同川島 大阪市東成區南島町一八  
 ○藤原 キク(三村)同 同椿東 萩町推原  
 ○原 ハル(溝部)同 同 (死亡)  
 ○小野フミヨ 同 奈古村 阿 奈古小學校  
 ○藤井 致(大賀)同 萩江向 (死亡)  
 ○加藤 春(竹重)同 同 福井縣福井市浪花中町二番地加藤七三郎氏  
 ○黒瀬 ヒサ(宮原)同 同山田  
 +○佐村 ヨシ(安田)同 同福川村 (死亡)  
 +○荒木ハツメ(米原)熊本市外黒髮村 大分縣宇佐郡四日市町寺山  
 +○堀 壽子(鈴木)阿 萩西田町 橫濱市青木町澤渡谷二〇〇  
 ○村岡ミドリ(堀江)同 同江向 江向八丁  
 ○村田 コト 同 同熊谷町  
 ○植松 須惠(村田)同 同江向 朝鮮咸北會寧五洞四四

○林 保子(渡邊)同 同平安古 山口市八幡馬場  
 ○吉田 トキ(遠藤)同 同古萩 吉敷郡小郡町柳井田  
 ○永松 静子(國重)阿 萩椿東 朝鮮黃海道海州殖産銀行 舍宅  
 +○佐伯千代子 同 福川村  
 ○松井 豊子(河村)同 萩橋本 (死亡)  
 ○米澤 秀子(和田)防府町三田尻 佐波郡三田尻 米澤菊五郎内  
 +○山川 文子(阿武)阿 福川村  
**實科第四回**  
**大正五年三月卒業(年齢順)**  
 ○吉武 静 佐 中ノ關町 住所不明  
 ○富塚 タネ(大田)阿 津守町 住所不明  
 ○堀永クリヨ(増野)同 同濱崎 住所不明  
 ○磯部 ヒサ(原田)同 同山田 福岡縣戸畑市戸畑物會社々宅内  
 ○兄玉 豊子(山根)同 嘉年村  
 ○高木 梅代 同 萩濱崎  
 ○藤原 久枝 同 同椿東 (死亡)  
 ○山根マタコ(山下)同 同平安古 (死亡)  
 ○北村 龜子(井本)同 須佐町 阿 小川村原中  
 ○伊藤 光子(北村)同 萩江向 (死亡)  
 ○前田トミヨ 同 地福村 (死亡)  
 ○江原キタコ(能美)同 萩唐穂町

○佐須 菊野(世良)神戸  
 ○津原ミヨコ(浮里)阿 三見村 (死亡)  
 ○鈴木 菊枝(猪口)兵衛縣三原郡松帆村 東京府下南葛飾郡金町一六二八  
 ○織 富美(工藤)阿 荻南古萩 東京府下大崎町桐ヶ谷一三四  
 +○中隈 千代 島根縣濱田 大津郡深川村  
 ○永岡フサコ(佐々木)阿 生雲村 荻町倉江  
 白井アキコ(吉山)同 荻山田  
 長谷川トシヨ 同 篠生村  
 ○岡村 ツル(横山)同 荻河添 東京市外濠ノ川町濠ノ川北谷端二二九六  
 (死亡)  
 ○野村 マツ 同 荻河添 長野縣埴科郡屋代町  
 ○大田 スミ(井町)同 三見村  
 ○江山タキヨ 同 荻河添 長野縣埴科郡屋代町  
 ○中村 絹子(岡)同 同川島 荻五間町 岡本直介内  
 ○岡本 秀子(田原)同 同山田 滿洲奉天松島町二〇 柏村商會内  
 ○柏村 ヨシ(中村)同 同川島 荻五間町 岡本直介内  
 ○秋山 キク(齋藤)同 御許町 滿洲奉天松島町二〇 柏村商會内  
 ○登川 トラ(桂木)同 小川村 四洩線洩南縣城康聖衛國際運輸株式會社洩南營業所  
 +○阿武 ミト(河村)同 荻橋東 荻橋東中ノ倉  
 ○藤本 豊子(岩田)宇部市梶返 荻橋東中ノ倉  
 ○齋藤 喜美(伊佐)阿 荻橋本 住所不明  
 +○安部 壽子(原川)同 同土原 住所不明

○黒瀬ヒデ(久保田)同 同橋東 住所不明  
 +○長見マサコ 同 福賀村 住所不明  
 ○下間 靜子 同 荻吉田町  
 ○高壽ヨシヨ 同 同山田玉江浦 住所不明  
 +○藤原フチノ(藤原)佐 防府町 佐波郡三田尻下道  
 ○井上ふみ子 阿 荻江向 住所不明  
 +○藤井 文子(竹内)佐 島地村 東京市外濠谷金王一二  
 +○野上 壽恵 阿 荻土原  
 ○枝村 茂子(石光)同 同下五間町 京都府下新舞鶴町三條海岸三井物産  
 ○堀 綾子 同 同上五間町(死亡)  
 ○吉村 キク 同 同橋東 荻町中ノ倉  
 ○内山 ノブ(中村)同 同川島 臺北市外奎府町四丁目50  
 ○瀧田 高子(安田)同 同河添 岩手縣沼宮内營林署  
 ○齋藤ヤス子 同 同橋大谷 (死亡)  
 ○末武 満子 同 同橋東 阿武郡紫福村  
 ○玉井 芳江 同 同江向  
 ○伊藤 君代(堀)同 同河添 (死亡)  
 +○大草チヨコ(山本)同 同平安古 神戸市再度筋三二ノ一八  
 ○藤山ユクセ 同 紫福村 京都市木屋町御池下ル  
 +○伊藤アキコ(難波)同 荻米屋町 北海道小樽市東雲町七八  
 ○宮川 八重(國司)同 同橋東鶴江 東京市外大井町鯉洲一三〇  
 ○宗樂シゲコ 同 同橋本

○坂口タカコ(高橋)同 同江向 朝鮮本浦府祝町三丁目八番地  
 ○領家 マス(村上)同 同東田町 大連陸軍町關東館口號  
 +○植村 雪子 同 同橋東 住所不明  
 ○阿武ミユキ 同 同 (死亡)  
 ○石川 文子 同 同 下關市本町四丁目六〇三  
 ○水津フミ子(村木)同 同 廣島市白鳥九軒町一七八  
 谷井 雪子(横)同 同江向 千葉縣銚子町榮町  
 ○花村 秀子 同 同堀内 名古屋市女子商業學校  
 +○岡本 ミチ 同 同吉田町 住所不明  
 ○堀 壽子 同 同東田町 (死亡)  
 ○藤山 末(原)同 同平安古 小野田町段 朝鮮慶尙南道統營大和町一八三  
 +○白石 マス(山下)同 同山田  
 ○柴田タケヨ(吉岡)同 高儀村 (死亡)  
 石井 壽万 同 荻土原  
 ○石津 光子(白根)同 同濱崎 住所不明  
 ○上田 ツル 同 同御許町 (死亡)  
 ○久保 春枝(阿武)同 同濱崎 荻東田町  
 ○今地 マツ 同 川上村 荻町江向  
 +○吉田ヨシヨ 同 荻濱崎  
 +○吉光野俊子(中原)同 同橋本 (死亡)  
 ○小笠原マス 同 同堀内 住所不明  
 ○藤村 文子(野村)同 同御許町 (死亡)

○松本 アサ(後藤)同 同今古萩 門司市丸山町二丁目  
 ○渡邊 八百 同 同江向  
 ○村田 照子(山中)同 同橋本  
 ○永田 操(植村)阿 荻橋東 (死亡)  
 ○河村 千代 同 同新堀 (死亡)  
 ○松谷トラコ(重枝)同 同橋本 朝鮮仁川府濱町  
 ○藤井 良子 同 同米屋町  
 ○廣瀬 照子(齋藤)同 同濱崎 住所不明  
**資料第五回**  
 大正五年三月卒業(年齢順)  
 ○志道 百重(宮原)美 赤郷村 岡山縣倉敷町倉敷紡績會社々宅  
 ○高橋 タミ(茂住)阿 荻堀内  
 ○三島 コウ 同 三見村 (死亡)  
 +○都築ユキヨ 同 生雲村  
 久村 トキ(小林)同 奈古村 住所不明  
 ○後藤 フミ 同 荻御許町  
 ○松村 キク(中村)同 同唐櫃町 山口市後河原  
 +○倉富 イチ 都 鹿野村  
 ○福根フサコ(富士見)玖岩國町 都濃郡徳山町字新町  
 ○神田 雪江(伊藤)阿 大井村 朝鮮釜山辨天町三ノ二九  
 ○永吉 芳子(伊藤)同 同 下關市竹崎町  
 ○伊藤 ヨシ 同 荻橋小畑 荻町奥鳥越

神代 政子(村上)同 同土原 兵庫縣武庫郡打出字三反田二二

○萩原千代子(河村)同 三見村 萩町八丁筋七九五

○大谷 壽(松尾)同 萩椿東 萩町鹽屋町

○片山 キク(小河)同 小川村 島根縣美濃郡吉田村

○藏貫 ツル 同 生雪村

伊藤トミコ 同 萩椿東 山口市飯田町 宮村竹藏樓方

○大津 アサ(椋木)大 三隅村 阿 萩町椿

山崎 サチ(河井)阿 萩川島 名古屋市東區新出来町一丁目

○平田 睦子(伊藤)同 大井村 北海道札幌市外琴似村農事試験場官舎一二號

厚東 英子(福原)同 萩椿東 住所不明

○飯田 静江(岸)同 同椿 千葉市登戸四三

○長井 トミ 同 川上村 萩町土原

○石川 ハルコ 同 萩町椿原 萩町椿原

○師井 アイ 阿 萩熊谷町(死亡)

○岡田八重子(松本)同 同 東京市赤坂區一ツ木町四

○玉井 ヨシ(厚東)同 同山田 住所不明

○田村 良子(近藤)同 同椿東 朝鮮新義州守備隊官舎内

○河崎 好子(竹内)同 同古萩 神戸市池田廣町一〇五

倉増 太代 同 高俣村

○池田 京子 同 萩熊谷町(死亡)

○岸森 京 同 同江向 生雲小學校

○藤本 芳江 阿 同御許町 神戸市東尻池一丁目一五

○村田喜代子(金子)同 同川島 朝鮮成慶北吉州郡吉川邑

○篠田 アヤ(武田)同 同山田 福岡縣直方町山部

○川口 信子(河村)同 萩江向 北海道旭川市宮下通三丁目

○田上ヨシ子 同 同椿東 兵隊縣明石市戎町當津古川榮吉方

○西島キヨ子(田中)同 同椿 豊浦郡宇賀村本郷

○小柳サヨ子(並川)同 同河添 臺北市築地町三丁目五番

○吉田 フミ(厚東)同 同椿東 萩町松本新道

○中嶋ヨシ子 同 同土原 萩町松本新道

○大谷チヨ子(武林)同 同平安古 東京府下千駄ヶ谷町八五

○松本 静子 同 同東田町 東京府下北多摩郡砦村成城學園北斗寮

○松尾 キク(中原)同 同椿東 東京市芝區白金今里町六

○宮川 ツル 同 同濱崎 住所不明

○西山キク子(田中)同 同椿東 大阪府三島郡吹田町田中

○齋木 ミツ(齋藤)同 同八丁 大津郡仙崎町

○井上 三枝(藤井)同 同江向 神戸市熊野町四丁目六一

○田中 静子 同 同椿町 (死亡)

長屋チヨ子 同 同山田木間

○柴田 キク 同 同江向

○白石 則子(中原)同 同福川村 大津郡通村

○松本喜久子 同 同福川村 神戸市平野矢部町二二二

○渡邊 嘉子 同 萩古萩 住所不明

○久保アヤ子 同 同江向 明倫小學校

○武田 静枝(木村)島根縣邑智郡田所村(死亡)

○杉村 サヨ 阿 萩山田 (死亡)

○佐伯マツ子(小島)同 同椿東 萩町川島

○増野 ユリ(土田)島根縣益田町イ三三三

松谷 ウメ(松浦)阿 萩橋本 大阪市港區田中町三丁目七〇四

○吉田 貞子 同 同椿東 住所不明

○齋藤 雪枝 同 同新堀 萩町小畑

台田 康子 同 同椿東 萩町小畑

○長田千代子(松浦)阿 岩國散島 吉敷郡小郡町長田敬房方

○桂 竹子 阿 萩土原

○松本 サキ(神野)同 同江向 朝鮮論山郡馬九平

○奥 幾子(山根)厚 小野田 大連越後町三〇城地三井社宅内

○白井 チカ 阿 萩椿 椿東小學校

○末岡ハルコ 美 於福村 住所不明

○渡邊 ヨシ 阿 萩林濁淵

○吉屋 ハル 同 同油屋町

○辻野ハナコ(溝部)同 同椿東 (死亡)

○藤村 峰子(多田)同 同椿東 (死亡)

○大瀧 政子(草刈)同 萩河添 神戸市平野桶谷町二六二

○小野 サキ 同 同椿青海 (死亡)

○山内ハツエ(乃美) 同 同御許町 吉敷郡秋徳村 山内唯宗

○肝付 澄江(瀧口) 同 同江向 東京市麹町區下二番町三

○天野 ミツ(田坂) 同 同椿東 佐波郡右田村

○森脇美智子(黒瀬)阿 萩山田 山口市下野小路

○藤田ハツセ 同 同椿 (死亡)

○秋山ウメ子(増山)同 同上五間町 支那上海楊樹浦六八

○村上 貞子(新庄)同 同熊谷町 萩町江向

○増山 静子 同 同橋本

三好 シゲ 阿 萩濱崎 大牟田市曙町一四 弓狩

栗田 鹿子 同 吉部村 高四郎方 (死亡)

種子 綾(岩武)同 紫福村 相島尋常小學校

岩田フミエ 同 篠生村

○山田マサコ 同 萩山田

○佐々木ツチ(竹重)同 吉部村

○小野 静子 同 奈古村 菅島明水路二號

堀永 ツタ 同 三見村 (死亡)

○富田シゲコ 同 萩土原

○小河 良子(藤田)同 同椿 萩小弓町

○守重 志都(羽鳥)同 同椿東 鹿兒島市岩町本願寺別院

實科第六回

大正七年三月卒業(年齢順)

○田中 スミ(平田)同 同棒 大阪市北區東野田町五丁目八五  
 ○品川 マツヨ 同 福賀村  
 ○木村 清子(堀)同 宇多郷村 山口市大野大路  
 ○藤井 静子(田中)同 萩村 門司市田浦南町四五七  
 藤井 美代(高洲)同 臺灣臺中市高砂町一六帝  
 國製糖會社々宅  
 ○金子 徳 同 宇多郷村  
 +○田中 静(桂)同 萩川島 福島市船場町三十一  
 ○内藤ツルコ 同 同江向  
 ○名倉ナヲコ(今田)同 同五間町 岡山縣都窪郡倉敷町榮町  
 六〇〇ノ二  
 ○山中 松子 同 同平安古 高知市江ノ口東慶田一二  
 五八 山内伍六内  
 ○神田サトセ(服部)同 三見村  
 ○有吉トミコ 同 萩西田町  
 +○關屋 千代 同 同瓦町(現住所) 下關市上新地 甲賀内  
 甲賀 露子 同  
 ○吉澤 文子(大谷)同 同唐樋町  
 ○中村 貞子 同 同棒東 (死亡)  
 ○岡 朝子 同 同河添 名古屋市中區西塚町一七  
 ○福田 文(林)同 同河添 横濱市子安町字溝下一五  
 一四  
 ○熊谷フサコ(藤田)同 同棒  
 +○末成 清子 同 同平安古(死亡)  
 ○波多野ナツ 同 同新堀 (死亡)

○後藤 通子 同 同棒東 神奈川縣足柄下郡小田原  
 町十字三丁目六三坂本方  
 萩町熊谷町  
 ○鳥屋 ツナ(河野)同 奈古村  
 ○小田 エイ(中村)同 同  
 +○阿部 照子(早川)同 萩堀内 東京市芝區西應寺町二七  
 ●村上 ウメ 同 同東田町(死亡)  
 +○飯塚 ヨシ(堀上)同 同新堀 下關市丸山町一八九三  
 ●大庭ヨシ子 同 同西田町(死亡)  
 ○横山 朝子(岡本)同 米屋町 豊橋市札子町八千代製藥  
 株式会社 横山三郎方  
 ○陶村 園子(陶村)同 同平安古 大阪市東區今市町  
 ○松本ヨシコ 同 同新堀 神戸市外原田二四八關西  
 學院前東門  
 ○秋本 綾子(吉崎)同 室津村 東京市麻布區市兵衛町一  
 丁目七番地  
 ○尾崎ヨシコ(西郷)同 萩棒東 萩町濱崎  
 ○田北 治子(松尾)同 同江向 紫福村永田沖  
 ○綾木 貞子(藤田)同 福川村 奈良縣吉野郡下北山村下  
 池原宇治川電氣會社住宅  
 ○藤田 トミ(池田)同 萩棒東 山口市野田官舎内  
 ○竹内 麗(杉山)同 同惠美須町  
 +○小池ヒサ子(河村)同 同川崎 臺灣臺中市新富町二丁目  
 ○仲子 菊子(吉賀)同 同濱崎  
 ○金田千代子(齋藤)同 大井村 福川村  
 ○松村 糸妣(吉村)同 萩五間町  
 ○岡本 シゲ(藤田)同 同棒 吉敷郡小郡町

秋山 操(黒瀬)同 住所不明  
 秋本ミツコ 同  
 ○田總イセコ 同 同平安古(死亡)  
 +○倉塚登志恵(杉)同 高俣村  
 ○岡 ツチヨ 同 福川村 上海華德路八七東華紡績  
 會社々宅  
 ○松尾 ヒサ(山内)同 川上村  
 安井 フユ 同 萩  
 村上 スエ 同 同土原  
 ○香川 マサ 同 同濱崎 門司市谷町一丁目  
 白水小學校  
 ○杉山 梅尾(大島)同 同川島 萩町沼田ヶ原  
 萩市倉通四丁目九番  
 地  
 +○三輪 芳子(小島)同 同濱崎  
 ○日高ノブコ(音吉)同 小川村 神戸市平野湊川町三五三  
 八ノ五  
 ○町原 シカ(小河)同 福川村 慶南酒川郡邑内平和洞八  
 ○末永 梅尾(石川)同 萩江向 神戸市外原田字大井出八  
 ○野尻 幸代(渡邊)同 同東田町(死亡)  
 ○白石 壽子 同 同江向 八ノ五  
 ○笹尾知世子(屬)同 同河添 朝鮮仁川町一丁目  
 ○齋藤 文(田坂)同 同西田町 東京市外高田町高田三五  
 ○磯村 トミ(田村)同 同棒東ヶ濱  
 ○内藤キヨ(藤川)同 同棒東ヶ濱  
 ○末武 愛子 同

●伊藤 花子 同 同江向 (死亡)  
 ○佐方敏子(阿座上)同 川上村 阿武郡地福村  
 ○中山 壽子 同 萩 (死亡)  
 ○原 千代 同 同  
 伊藤ヒデコ(岡)同 同 下關伊崎町利慶寺前伊藤  
 廣太郎方  
 +長島 藤之(瀬戸)同 勝間村 下關市後田一一  
**實科第七回**  
 大正八年三月卒業(年齢順)  
 藏重 ユミ(藏重)美 大田町 千葉縣成田町藏重康美方  
 ○山縣 ヤス 阿 萩平安古  
 ○中村ユキヨ(伊達)同 同棒 朝鮮全羅南道長城  
 ○堀 貞(金子)同 宇田郷村 島根縣鹿足郡如迫村  
 ○小塚 静子(遠崎)同 萩濱崎 東京府下代々木西原五美  
 平田 春江 同 小川村 (死亡)  
 +○田中 繁 同 萩濱崎 東京府下長崎村大和田二  
 一四六  
 ○下瀬 ミツ(内藤)同 同川島  
 ○井町ヒサコ 同 同濱崎  
 ○伊藤 チヨ 同 川上村  
 ○中野フミオ(阿武)同 萩西田町 阿 奈古村  
 ○澄川スミ子(池田)同 須佐町 朝鮮成興雲興里高等普通  
 學校正門前 岡村龍藏方  
 ○岡村 テフ(後藤)同 萩濱崎

○横山ヒナ子(三島)同 三見村 朝鮮江原道洪川郡洪川  
 ○福田 和子(瀧口)都 福川町  
 ○小松 サダ(木村)阿 萩惠美須町 愛媛縣宇摩郡土居村  
 ○井原喜勢子(金子)同 同村 東京市外世田ヶ谷下町七  
 ○松浦キミ子 同 同濱崎 (死亡)  
 +○安野ヤエ子 同 同江向 臺北市下查府町四ノ三〇  
 +○笠井 咲子(笠井)同 同村 長崎縣崎戸工業所淺浦社  
 ○松井須磨子 美 赤郷村  
 ○竹内 マツ 阿 萩惠美須 東京府北豊島郡長崎町一  
 +○大賀 花子(中村)同 同平安古 (死亡) 和原治氏方  
 ○永田フジエ(植村)同 同村 住所不明  
 +○安田 清子 同 同河添 阿 福川村二保谷  
 ○阿武ヤエ子(山川)同 同村 臺中高砂町一〇帝國製糖  
 ○栗屋 探(久保)同 同土原 株式會社々々  
 ○佐藤 壽子(上井)同 福川村 臺灣基隆市瑞芳庄四脚亭  
 +○今地タミ子(三戸)同 萩江向 第十坑社宅内  
 ○吉田 靜江(加藤)島根縣仁田郡阿井子下阿井 東京市芝區  
 ○片岡 綾子(鈴川)吉 東波波村 二本榎西町二加藤三良方  
 ○山田ユク子 阿 萩山田 吉原郡東波波村  
 ○山田マサヨ(原)同 紫福村 東京府豊多摩郡中野町千  
 ○阿 安子(兼重)同 萩川島 光前三三來島眞介方  
 港製糖株式會社々々宅

長町 雪子(神代)同 同山田 東京市芝區松本町四四  
 ○中務 繁子(落合)同 同吳服町 厚狹郡万倉村  
 ○岩田 文子(植村)同 同村 朝鮮黃海道海河郡上町一  
 ○福地 竹子(阿武)同 同濱崎 六六 朝鮮釜山富平町  
 ○秋枝イト(阿座上)同 同濱崎 大津郡深川村  
 ○安田 安子(市原)同 同村 嘉年村  
 ○原 スミ 同 紫福村 阿武郡紫福村  
 +○大賀 ヒデ 同 萩屋町 (死亡)  
 ○三好 ウラ 同 淺江村  
 +○横山ヨシ子 阿 川上村 大島郡森野村字森  
 +木原 ヨシ 同 萩村 阿 越ヶ濱小學校  
 ○杉山アサ子(久保)同 同濱崎  
 ○宮原 千代 同 同土原  
 ○田中 マサ 美 共和村  
 +○藤田 貞子(林)阿 萩平安古 朝鮮咸鏡南道新興郡東上  
 ○内田 文子(堀)同 同川島 面道安朝鮮水電株式會社  
 ○澄川 千里 同 小川村 東京市外阿佐ヶ谷一六四  
 ○今地 ヒデ 同 川上村 (死亡) 八  
 ○山崎 貞(和田)大阪府豊能郡箕面村 大字牧落百樂莊神  
 ○阿川 榮子 阿 地福村  
 ○田中 セキ(元玉)同 萩村 都濃郡徳山町順庵町 田  
 中修一

○厚東 美恵 同 同 (死亡)  
 ○宮本 信子 同 福賀村 (死亡)  
 ○岡村 由枝 阿 福川村 島根縣鹿足郡津和野町  
 ○田中 基礎(植村)同 萩村 山口市石橋橋側三八  
 ○松永 カツ 大 向津具村 阿 白水小學校  
 ○吉津 ツキ 阿 萩村 東京市小石川區雜司ヶ谷  
 ○細川 淑子(竹内)同 同平安古 二六村田内  
 ○厚東 磯子(前田)同 同山田 山形市新築四通官舎  
 ○小島ケマ(三隅田)同 同平安古 東京府下大森入新井町新  
 ○有田 シヅ(來島)同 同村 井宿子母澤一ノ三三三  
 ○藤田 トヨ 同 同村 神戸市菊水町七ノ二三  
 +○津田サダ子 同 同江向 萩町瀧淵  
 +○中村 キヨ(山下)同 同山田 須佐町中津  
 +○森田ミチ子 同 同村 (死亡) 六島村相島小學校  
 ○岩武 綾子(藤田)同 同村 東京府下阿佐ヶ谷五四七  
 ○島田トメ子 同 同村 樹山徳義方  
 ○河村 清子 同 同村  
 +○佐田 初枝 美 大嶺村 (死亡)  
 ○堀 梅 阿 萩村 群馬縣利根郡片品村下掛  
 ○大野美智子(大野)同 同土原 東京市外早稲田鶴巻町  
 ○角 喜久代(倉田) 同 同村 二五一 豊饗堂内

○濱田 ハナ(中村)同 同土原 京都市上京區下長者町衣  
 ○末益 マス 同 奈古村 棚東入ル  
 ○波多野芳子 同 三見村  
 ○山本 静子 同 萩吳服町 住所不明  
 ○佐久間文子(田坂)同 同江向 島根縣美濃郡都茂村大字  
 ○羽鳥トシ子(田中)同 同村 九茂 (死亡)  
 ○大田 春代 同 吉部村 東京市外大井町永神下二  
 ○伊佐トミコ 同 萩橋本 一三九  
 ○徳田 英子(前田)同 同村 福岡市大工町仲通り八六  
 ○中村トミ子(羽仁)同 同村 福岡市大工町仲通り八六  
 +○伊藤 桃代 同 同村 丁目六號  
 ○立野彌壽子 同 田万崎村 千葉縣房州西柳村波佐間  
 ○内藤 静子(大谷)同 同村 五香地  
 ○齋藤ハナコ 同 同村  
 ○森 松枝 同 川上村  
 ○落合 愛子 同 同村 東京市小石川區久堅町七四

實科第八回  
 大正九年三月卒業(イロハ順)

大谷 渡子(石光)同 阿 生雲村大谷幡一内  
 ○飯田 テイ 東京東郷駒込追分三〇室蘭市千歳町一三  
 ●林 春枝 阿 萩川島 (死亡)  
 ○岩本 静子(林)同 同平安古 三重縣鈴鹿郡野登村兩尾  
 ○工藤 敏子(原)同 地福村 大坂市此花區春日出町北  
 港住宅六二ノ二  
 + ●仁尾 玉 高知縣高岡郡 (死亡)  
 ○堀江トミコ 阿 萩江向  
 ○村田 ナミ 同 同川島 宇部市西區上町二丁目  
 ○堀内 トメ 同 同堀内  
 ○豊田喜代子 同 同河添 朝鮮永登浦  
 ○領家 文子 同 宇田郷村 萩町米屋町  
 ○岡本 照子(大津)同 萩濱崎 萩町米屋町  
 + ○大谷 キク 同 同椿瀨淵 明倫小學校  
 ○渡邊 初子 同 同濱崎  
 ○桑原シヅコ(加藤)同 同米屋町 大連市天神町七八  
 ○浴野テルコ(金國)同 同水車筋 大津郡日置村長行  
 ○河野ユキコ 同 同濱崎 (死亡)  
 + ○坪井ヨシコ(金子)同 同江向 朝鮮慶南河東郡露梁津  
 + ○中津江三知子(片山)同 同濱崎  
 + ○下瀬ミチコ(横山)同 同河添 (死亡)  
 ○倉田ミネエ(高村)同 同椿 大坂市外千里山二〇七  
 ○高洲ナヲコ 同 同土原 (死亡)  
 若松 キサ(田中)同 同椿東 萩東田町

○富田 慎子(竹内)阿 同濱崎 (死亡)  
 ●村谷 キク(高橋)同 同唐穂 (死亡)  
 ○田村マサヨ 同 同山田  
 ○田坂アヤ子 都 徳山町 (死亡)  
 同 シゲ子(坪倉)同 萩石屋町 大津郡三隅村市岡光藏氏  
 方 神戸市湊川町五丁目六ノ四  
 ○佐伯美代子(根來)美 秋吉村  
 ○岡江 澄(有田)阿 萩江向  
 ○永田 シヅ 同 同椿東 萩町エビス町米屋店長谷  
 千代治氏方  
 + 青木 勝子(村田)同 同江向 朝鮮平安南道龍岡郡龍岡  
 邑内  
 ○若林 ウメ(井町)同 同濱崎 沖繩縣那覇市大門前通  
 岡崎 壽子(信常)同 同平安古 島根縣美濃郡中西村  
 ○神原 幸(野村)同 同椿東 萩町石田古物店隣  
 ○小田 チヨ 同 同山田 東京市外高田町雜司ヶ谷  
 金山三三九馬淵方  
 ○小澤 ハツ 同 同平安古 大坂市東成區北清水町九  
 三四  
 + ○小野 君子 同 田万崎村  
 ○小野 静子 同 同椿  
 ○口羽 朝子 同 萩生村  
 ○國重 淑子 同 萩椿東  
 ○桑原イトコ(山本)同 同椿東 山口市下堅小路字松下  
 住所不明  
 ○杉本サカ(矢島)同 高俣村  
 + ○田中 ミツ(山田)同 奈古村 住所不明

○古谷 照子(山中)同 下關市碑ノ町古谷茂治方  
 ○河上屋房子(八木)同 萩藤屋町 (死亡)  
 ○松浦マツ子 同 同橋本  
 ○松林 和子 同 同椿東 明倫小學校  
 松本 慎子 同 同東田町  
 ○大庭 クラ(松浦)同 奈古村 紫福村  
 ○佐々木仁子(福島)同 萩椿東 福岡縣八女郡福島町稻富  
 四六一ノ一  
 ○西尾 末子(古川)同 田万崎村  
 ○兒玉 章子 同 明木村  
 笹井フサ子(兒玉)同 萩堀内 明倫小學校  
 + ○後藤カツヨ 同 同御許町  
 ○須郷 ツチ(小河)同 小川村 横濱市西戸部町境ノ谷一  
 六九〇  
 ○矢次美智蘇(小島)同 萩春若町 大阪府三島郡千里村片山  
 三六  
 + ○西村 繁子(小島)同 同椿東 山口市後河原  
 ○遠藤千代子 吉 小郡町柳井田 吉田耕造方  
 ○内藤 豊子(寺山)阿 地福村 福岡市吉塚七丁目六九九  
 + ○阿武 菊子 同 同上村  
 + ○秋山 佳重 同 萩町 双葉幼稚園  
 田村 壽子(阿武)東京府荏原郡池上村雪ヶ谷四〇  
 ○佐竹 昌子(佐竹)美 岩永村 東京市本郷區元町二ノ六  
 ○佐久間ユキ 阿 嘉年村 三 明華齒科學校  
 ○杉山キヨ子(木村)同 萩淨國寺 朝鮮黃海道海州北旭町

●北野ツネ子 阿 同平安古(死亡)  
 + ○岸 縁 同 同椿 都濃郡下松町宇殿ヶ浴五  
 五九  
 ○豊田 ヨシ(行本)同 同河添 宇部市琴芝  
 ○辻 元妃(薄部)同 萩椿東 朝鮮馬山府陸軍官舎  
 西岡 爲子(光國)福岡市渡邊通り三丁目九水舎宅  
 ○三浦 アヤ 阿 萩濱崎  
 ○板垣 キヨ(三戸)同 同山田 岡山市門田屋敷一五九  
 (死亡)  
 ○宮本マスエ 同 同片河 (死亡)  
 + ●重岡 キヨ 同 同 萩 (死亡)  
 白井 サダ 同 同椿 東京市小石川區老松町ブ  
 ラツクマ1ホム内  
 高松市四番町二ノ一  
 + ○黒田 愛江(龜見)同 同土原 上海寶樂安路求安里一〇  
 三號  
 ○末成ウメヨ(平田)同 紫福村 (死亡)  
 ○宗像 俊子(森永)美 眞長田村 萩町役場  
 ○杉山 孝子(澄川)阿 萩 朝鮮京城西大門町官舎隣  
 ○須子美登里 同 小川村 東京市麻布區市兵衛町二  
 ノ六五太田方  
 ○山根 サト(水津)同 大井村 營口旭街二號  
 ○鈴木ヒサコ 同 萩山田

實科第九回 大正十年三月卒業(五十音順)

○中村 捷子(井本)同 萩垣内  
 ○森重 久子(砂)同 萩垣内  
 +○山本 タネ(上田)同 同熊谷 山口市申讀井  
 +上野 マサ(植村)同 同藤東 大津郡日置村黄波戸上  
 ○上野ユキ子 同 同平安古(死亡)  
 ○寺山タマ子(江山)同 地福村 吳市古川町三〇ノ六  
 ○古川 時代(小野)同 奈古村 廣島市皆實町市營住宅  
 ○小林ヨシコ(大島)同 萩濱崎 萩町米屋町  
 ○光野 綾子(河村)同 同橋本 東京大森馬込村一五七  
 ○柴田 一子(河崎)同 同堀内 廣島縣吳市東二河通り五  
 丁目五番地官舎  
 今田 マシ(來島)  
 ○小峠ヒサコ 阿 萩山田木間 木間小學校  
 ○石橋 キミ(齋藤)同 同橋東 朝鮮京城鐵道水源郡發安石  
 橋武夫方  
 ○戸田ヨシ子(島本)同 同濱崎 朝鮮釜山南濱町二丁目山  
 本方  
 ○池田 ヒデ(水津)同 奈古村 福岡縣大牟田市三井三池  
 ○河田ヨシ子(宗樂)同 萩橋本 鐵業所醫院内  
 ○田中 君 同 同川島 佐世保市  
 ○藤田 俊子(田中)同 同橋 福岡縣若松市三番町四丁  
 目税關官舎内  
 ○村上 清子(田中)同 同北片河 函館市東濱町三九村上壯  
 方  
 +○岩本 クリ(田坂)同 同橋河内 佐賀縣鳥栖町  
 田中フミ子(高木)同 同橋東松本 阿武郡地福村

○河村 雪江(田口)同 同橋 東京市牛込區市ヶ谷谷町  
 ○河上ヨシ子(田村)同 同橋河内 六八 臺灣淡水郡淡水街烽火七  
 ○角水 綾子(時山)同 同山田 大津郡三隅村  
 ○小川 トシ(時山)同 同山田中渡 南滿洲瓦房店山中街昭  
 和寺内  
 ○茂刈 フユ(刀福)同 同東田町 三重縣渡會郡小保町下之  
 町七  
 ○元澤 ヨシ(富川)同 同熊谷町 釜山本町三丁目  
 ○中村ツル子(中村)同 福川村  
 ○中村フサ子(中村)同 萩濱崎  
 ○中村 ヨシ 同 同今魚棚 山口市下宇野令一一二一  
 號井方  
 ○山之内喜代(野田)同 同南古萩 臺北市泉町一丁目七番地  
 一十號  
 ○大和屋静子 同 同橋東  
 ●波多野トミ子 同 同西田町(死亡)  
 ○長谷川久子 同 同濱崎  
 ○林 静子(弘兼)同 同橋東 朝鮮水登浦金山里林雄輔  
 ○井野場コト(堀)同 同山田玉江中渡 朝鮮平壤府外西川  
 面仁興里朝鮮無煙炭株式  
 會社  
 ○川上喜久子(増山)同 同米屋町 關東州金州島海町七五ノ  
 六分縣長州町木村方  
 ○町田 松子 同 同橋 大分縣長州町木村方  
 ○西林ヒサ子(松浦)同 同濱崎 秋田市檜山古川新町二〇  
 三上ヨシ子 同 同山田奥玉江(死亡)  
 ○徳重 萬(松尾)同 大井村 阿武郡養生村渡川

○御手洗峰子 同 川上村立野(死亡)  
 ○竹内 チエ(茂刈)同 宇多郷村字豊郷 臺灣臺北州海山郡  
 三峽大約三井社宅  
 ○吉田 ヨシ 同 萩平安古 萩町橋町

實科第十回 大正十一年三月卒業(五十音順)

+○竹内千代子(井上)阿 福川村福井 住所不明  
 +○白井ムメノ(岩崎)同 萩山田小原  
 ○岩崎サヨ子 同 同東田町  
 ●植村 親 同 同橋東(死亡)  
 ○藤田イセコ(岡)同 阿武郡萩町青海  
 +○榊 千歳(岡)同 紫福村都 住所不明  
 ○高藤 久代(大谷)同 田万崎村 東京市牛込區市ヶ谷臺町  
 十二番地  
 ○谷村 綾江(河村)同 三見村 住所不明  
 ○河村 操子 同 同堀内 東京府下阿佐ヶ谷五四七  
 榊山徳義方  
 ○松井志都子(神田)同 同堀内 東京府下上大崎七六七最  
 上寺内  
 ○河村スミ子 同 同橋 朝鮮咸鏡北城郵便局官舎  
 ○新田ミツエ(桐山)同 平安古 朝鮮慶尙北道軍威郡邑内  
 ○小川ヨシ子(窪田)大 菱海村 萩江向  
 ○黒瀬シズ子 阿 同橋東  
 ○國重 米子 同 同橋東  
 ○品川 政子 同 同熊谷町

○石田 利子(末成)同 同平安古 廣島市中水主町三番町一五  
 ○堀 スエ子(杉本)同 同 大阪府北泉郡母尾小西万  
 喜子方  
 ○榎屋 菊子 同 同江向 都濃郡徳山町代々小路柿  
 町一〇六  
 ○坂本 文江(田中)阿 萩橋東 東京市小石川區小山御殿  
 町一〇六  
 ○中村シズコ 同 同橋本  
 ○大坪節子(中津井)玖 川越村 朝鮮木浦府大和町一丁目  
 四番地  
 ○藤田百合子(中村)阿 萩橋 住所不明  
 ○野村 キク 同 同濱崎  
 ○金清 菊香(林)熊 勝間村呼坂 東京芝區白金志田町亥  
 ○年光 キヨ(長谷)阿 萩熊谷町 福岡縣戸畑市饒物會社々  
 宅  
 ○大西 房子(林)同 同平安古 長野縣小諸町耳取町三三  
 七  
 ○廣 トミ子 同 同濱崎 東京市外中野町打越二〇  
 二三幸阪恭作方  
 ○平田タキ子 同 同橋 八幡市東通町一丁目横山  
 美虎方  
 ○平野 花子 同 同平安古 朝鮮大立東雲町平野與三  
 方  
 ○末武千代子(藤田)同 同橋東 萩町越ヶ濱  
 +○藤本トシ子(藤田)同 同橋 大津郡三隅村字宗頭  
 ○藤原 静子 同 同笠屋 (死亡)  
 ○堀 幹子 同 同橋東 松江市北堀前ノ丁  
 ○松本 ヒナ 同 三見村 住所不明

- 松浦 八重 同 萩山田 住所不明
- 大山 秋子(松本)同 同東田町 東京品川區苗木原一、二
- 藤岡 歌子(松永)大 向津具村 大津郡菱海村
- 村木カヅコ 阿 萩濱崎町 朝鮮新義州稅關官舎村木
- 村木 勝子 同 同堀内 義一方
- 村田トメ子 同 同東田町
- 安田 貞子 同 同河添
- 齊加 千勢(山根)同 同堀 大連市外周水子小野田セ
- 藤村ミホコ(吉田)大 三隅村 美禰郡秋吉村
- 吉賀 キコ 阿 萩土原 朝鮮釜山本町一小宮修一
- 吉武 フジ 同 同唐樋町 方 滿洲吉林新關門外吉武常
- 武林 カツ(渡邊)同 同平安古石屋町 大津郡仙崎町武林
- 神田 静子(若松)同 同東田町 次郎方 横濱市根岸鷺山三六七〇

實科第十一回

大正十二年三月卒業(五十音順)

- 阿武 幹子 阿 萩椿東 門司
- 井上 明子(石光)同 同五間町 島根縣益田町
- 吉田喜美子(石井)同 同東田町 東京府下荏原郡荏原市延
- 中本 静子(石川)同 同 朝鮮仁川山手町二丁目七
- 井上 幸江 岡山縣上高梁町下町 阿萩町平安古

- 村上 芳子(井上)厚 小野田町 島根縣益田町
- 大石 ツヤ 阿 佐々並村(死)
- 岡本 初江 同 萩東田町 住所不明
- 堀 ヨシコ(小方)同 同十日市 東京市外蒲田町北蒲田三
- 鹿島フジコ 美 共和村 八〇 大阪市西成區二丁目三六
- 金子タミコ 阿 萩町 松原通城方
- 増野フジコ(金子)同 同五間町 阿武郡萩町川島
- 松本 操子(柁山)同 同川島 阿武郡萩町濱崎
- 村田 ステ(岸)同 同堀 住所不明
- 津田喜代子(國吉)同 萩町 京都府下上嵯峨中院
- 中村 正子(久保)大 菱海村 臺灣臺東廳里壠支廳里壠
- 小島 秀子 阿 萩椿東 區里壠街官舎
- 里川美智子 同 奈古村 岡山縣苦田郡津山町山下
- 坂本 勝子 同 明木村 五八
- 下井志都子 美 大田町 福川小學校
- 杉山キタエ 阿 萩米屋町 萩御許町
- 安田 芳子 同 同御許町 朝鮮湖南線裡里土車仁作
- 田中 壽子 同 同濱崎 阿武郡地福村
- 田中 フミ 同 同椿東 下關市丸山町石井牧場内
- 永井 多津(坪井)同 同山田 萩町江向
- 都野美代子 同 同山田 萩町江向

- 時山マサコ 同 同山田
- 三輪シヅエ(永安)同 奈古村 阿武郡萩町濱崎橋本町
- 松田ハナコ(中原)同 福賀村 東京府下荏原郡荏原市延
- 藤本ヒサ子(中谷)同 萩熊谷町 住所不明
- 五峰 稔子(西田)同 同川島 住所不明
- 長谷川菊代 同 同濱崎 大分縣速見郡杵築町南榮
- 波多野シズ子 同 同 住所不明
- 林 壽子 同 同平安古
- 廣瀬 ツル 同 同 下關市伊崎町八四古屋勘
- 藤山マスコ 同 同川島 五郎氏方 朝鮮慶尙北道大邱府大邱
- 藤本 峰子 同 同米屋町 醫院内
- 堀野富美子 同 須佐町 山口縣大津郡仙崎町秋津
- 秋津ツギコ(松浦)同 大井村 不二郎方
- 松本登美恵 同 萩米屋町 下關市中町中通松屋初
- 松屋ヨシ子 同 同濱崎 五郎方
- 宮川ヒデ子 同 橋本町
- 高橋ミツ子(三浦)防府町宮市太平町
- 森重ハツ子 同 大井村
- 森 まさ江 大 通村 熊谷町光源寺内
- 山田 トヨ 阿 萩町熊谷町
- 城市 アサ(横山)同 大井村 阿武郡生雲村
- 和田ユミ子 同 福賀村 廣島市大須賀町警署第四〇

實科第十二回

大正十三年三月卒業(五十音順)

- 小林フジ子(阿武)阿 木間 朝鮮京城府西大門外冷洞
- 有吉 榮子 同 萩東田町 九四
- 山下喜代子(有田)同 同梅 萩町平安古
- 瀬戸イシコ(有田)同 同江向 鹿兒島縣川邊郡西南方村
- 高木イチ子(阿川)同 同濱崎 林鐵業株式會社春日金山
- 東屋ヨシコ 同 同下五間町 事務所
- 池内登美子 同 同堀内 下關市阿部高等技藝學校
- 植村キタコ 同 三見村 厚狹郡小野田實業實踐學
- 金子智恵子 同 字田郷村 校
- 河野タマコ 同 萩椿 大阪市東淀川區今里町一
- 柴田ユキ子(河崎)同 堀内 三 佐藤庄九郎方
- 河村ミドリ 同 同越ヶ濱 不明
- 佐伯フサ子 同 福川村
- 久織 美子(佐古)同 萩阿添 萩町濱崎
- 島本 チヨ 同 同濱崎



○關屋キヨコ 同 同瓦町  
 ○井上 キク(田村)同 同椿  
 ○岩崎ハナコ(田村)同 同河添  
 ○平岡 芳子(田村)美 大田町  
 ○田村フミコ 大 菱海村  
 ○友永ヒナコ 美 大田町  
 ○石津 敬子(内藤)阿 福川村  
 ○中原シズコ 同 福川村  
 ○中本 初代 同 田万崎村  
 ○梅地 キサ(中村)同 大井村  
 ○村岡アキ子(西山)同 萩川島  
 ○原田 テル 同 同江向  
 ○林 フヂ子 同 同川島  
 ○阿川アキコ(林)同 同下五間町  
 ○波田野フミ 同 三見村  
 ○福永 ミツ 同 萩堀内  
 ○中谷ミチコ(福住)大 菱海村  
 ○三浦ミサコ(藤田)阿 萩土原  
 ○堀本トキ子 同 同堀内  
 ○松浦タケ子 同 同橋本町  
 ○松原 ムメ 同 同奈古村

萩町奥玉江  
 朝鮮咸北清津府相生町三丁目坂本方  
 支那上海揚樹浦路裕紗廠社宅  
 阿萩町越ヶ濱  
 住所不明  
 大連市沙河口白金町二番地  
 山口野田女學校  
 愛媛縣東字和郡字和町字鬼窪

○三輪 和子 同 萩梅東  
 ○水島ヒサヨ 大 菱海村  
 ○村田シヅ子 阿 萩濱崎  
 ○武藏屋梅子 同 同  
 ○森田富士枝 同 三見村  
 ○吉屋 タケ 同 大井村  
 ○石原フジ子(渡邊)福同縣鞍手郡新入村福同縣鞍手郡宮田地二ノ六  
 町大浦五坑 貝島舊宅内

南滿洲奉天紅梅町一二番

**資料第十三回**  
 大正十四年三月卒業(五十音順)

○伊藤シヅ子 阿 萩前小畑  
 ○伊藤 コト 同 同濱崎  
 ○池田 キミ 同 奈古村  
 ○井上 清子 同 小野村  
 ○井町フク子 阿 萩濱崎  
 ○沖野マス子 大 菱海村  
 ○岡田 ヒナ 同 深川村河原  
 ○大草 操 阿 須佐村 (死亡)  
 ○小田 文子 同 奈古村  
 ○小田 マツ子 同 同村  
 ○片山 政子 同 大井村  
 ○河崎 イト 同 萩籙式丁  
 住所不明  
 大阪市淀川區十三西ノ町二九

○佐藤ヤス子 同 生雲村 (死亡)  
 ○佐々木トキ子 同 吉部村 萩小橋筋長濱醫院内  
 ○末武キクノ 同 萩越ヶ濱  
 ○小島クマコ(田中)同 奈古村 神戸市菊水町七丁目二三  
 ○田中 末子 同 大井村  
 ○谷村スミ子 大 菱海村  
 ○高洲 リヨ 阿 萩金谷  
 ○徳重 イツ 同 篠生村  
 ○安野 貞子(水田)同 大井村 阿紫福村字小西見  
 ○深田宇多代 大 菱海村 住所不明  
 ○藤原サチコ 阿 萩大谷  
 ○堀尾シズエ 同 同堀内 岡山縣兒島郡琴浦町 村  
 ○杉浦 チヨ 同 大井村 下駒一方  
 ○町田ヨシノ 同 萩江向  
 ○三浦 文子 同 同濱崎  
 ○山崎ヨシ子 同 同熊谷町  
 ○久保田菊子(八木)同 同西田町 朝鮮京城本町二丁目十五  
 ○吉永 久子 美 綾木村金燒  
 ○松本 操(吉村)阿 萩青海 萩町東濱崎  
 ○阿武トシコ 同 同川島 山口市道場門前二八

○砂 君子 阿 萩堀内  
 ○岩本 雪代 同 明木村  
 ○原田シキブ 同 萩山田  
 ○波多野照代 同 同濱崎  
 ○堀野 文子 同 同濱崎  
 ○大野キヨ子 美 大田町  
 ○小田カメユ 阿 奈古村  
 ○大田キシコ 同 田万崎村三見小學校内  
 ○小野千代子 同 奈古村  
 ○岡 和子(大田)同 萩町川島二ッ森 萩東小學校  
 ○渡邊スミ子 同 萩濱崎  
 ○金子 ツル 同 福川村  
 ○河村美登里 同 萩梅東無田口(死亡)  
 ○吉屋 時江 同 大井村  
 ○田村モミ子 同 明木村  
 ○立野ハルヨ 同 彌富村 萩町東田町 岩佐方  
 ○津田 幸子 同 須佐町  
 ○都野幾久子 同 萩江向 朝鮮大邱府東雲町六六  
 ○中村 君子 同 同梅東松本  
 ○森重智恵子 同 六島村大島 萩町津守町  
 ○柴田 菊司 同 吉部村 萩町吳服町  
 ○山田モモヨ 同 萩梅東松本 住所不明  
 ○山本 絹子 同 同東濱崎

**資料第十四回**  
 大正十五年三月卒業(五十音順)

- 松浦 愛子 同 大井村
- 藤原キクノ 同 福川村
- 安藤 ツル 同 萩椿香川津
- 君谷 藤子 同 吉部村 小川津常高等小學校
- 三好富貴子 同 萩吉田町
- 末成 佳子(下瀬)同 紫福村 阿武郡吉部村
- 窪田 祥子(品川)東京府澁谷町字豊澤三〇番地
- 茂刈 菊代 阿 宇田郷村
- 吉村 満子(末永)同 紫福村 阿武郡高俣村岸高

實科第十五回

昭和二年三月卒業(五十音順)

- 池田スエノ 阿 紫福村
- 三好チトセ(井上)美 秋吉村 東京市本郷區眞砂町一六三好俊行方
- 波多野愛子 山口市八幡島場 萩町江向
- 林 富子 阿 萩平安古 椿壽海
- 藤田トミコ(大山)同 同 萩町後小畑
- 小野村満子 同 同 萩町西田町
- 河内山照子 同 同 萩町西田町
- 花村ハツ子(横山)同 同 萩町西田町
- 田中ヤスエ(上村)同 萩椿東 東京市外在原郡日黒町下日黒六四一 植村方
- 中村 節子 同 同 萩町西田町

實科第十六回

昭和三年三月卒業(五十音順)

- 上野キヨ子 同 同平安古
- 宇野 英子 同 同川島
- 山村八重子 同 吉部村
- 山村 イシ 同 萩椿東 新川
- 富田トシコ(山本)大 菱海村 天津郡三隅村宗頭小學校
- 藤田ヤスコ 阿 萩椿青海
- 寺戸キミエ 同 同椿東
- 上利ヨシノ 大 菱海村
- 有吉フサ子 阿 萩西田町
- 齋藤 豊子 同 萩東田町
- 三村キタ子 同 福川村
- 品川 和子 同 福川村
- 平川 フジ 阿 萩平安古
- 森田 キミ 同 田万崎村
- 森川ハツ子 同 萩土原
- 末成タケ子 同 吉部村
- 井上 幾代 岡山縣上房郡高梁町萩町椿東
- 伊藤 芳子 同 川上村
- 岩崎フジ子 同 萩東田町 東京市小石川區下富坂町二〇小野女塾

- 四川 芳子 阿 柳井町 萩町土原
- 林 孝子 阿 萩北古萩
- 長谷川明子 廣島縣蘆品郡驛家村字田郷村大字郷郷
- 細田サト子 阿 川上村 萩町江向
- 大塚 調子 同 須佐町
- 大田 美子 阿 大井村
- 渡邊キクコ 同 萩濱崎 門司市宗利町一丁目野坂只一方
- 河村千代子 同 萩椿東 宇部市琴芝町澁谷芳子方
- 河村トミ子 同 明木村
- 横山 清子 同 川上村字熊谷
- 田中 芳子 同 萩濱崎
- 中澤イセ子 大 菱海村
- 中村富美子 阿 萩江向
- 中原タカ子 同 萩御許町
- 山中 瀧菜 同 萩平安古 東京市外在瀧野川中里三七五錦華寮
- 山田フジノ 阿 宇田郷村
- 堀 貞子(松永)大 日置村 萩維式町
- 松岡マス子 阿 萩北古萩
- 松浦 篤子 同 大井村
- 増井 孝 東京市芝區高輪町住所不明
- 藤田アサコ 阿 萩町青海
- 阿武マツ子 同 三見村 三見村中山
- 阿部 嘉子 同 萩川島

實科第十七回

昭和四年三月卒業(いろは順)

- 佐藤百合子 美 綾木村 神戸市灘區河原三八四
- 齋藤 豊子 朝鮮京畿道土城 萩町土原
- 岸 マス 阿 萩椿町 萩町金谷
- 北村喜代子 同 萩江向
- 御手洗菊枝 同 川上村 川上村立野
- 三輪 美子 同 紫福村 萩町御許町
- 柴田キヨ子 同 三見村 三見村浦
- 森田マツ子 同 三見村 三見村河内
- 茂刈 文子 同 宇田郷村
- 井川志末子 大 三隅村
- 石津スミ子 阿 明木村 萩町川島
- 林 トミ子 同 萩町川島
- 林 宣子 同 同平安古
- 西尾 祥子 同 田万崎村 三見村
- 西村 正恵 高知縣土佐郡下知町大阪天王寺區細工谷町一〇八能美方
- 堀江 靖子 阿 萩町江向
- 岡崎 政子 同 川上村高瀬
- 岡崎 壽子 同 同
- 河内山千壽江 同 萩町濱崎
- 中谷 芳子 大 向津具村
- 村岡おさだ 阿 萩町川島 萩町江向

- 村田マサエ 同 同北古萩
- 岡守ツチ子 同 同神原
- 木原 春子(久志)同 同江向 廣島市河原町二二三ノ一
- 郡司須恵子 同 萩露前 六 木原龜鐵方
- 山根サヲヨ 同 紫福村
- 松永 菊枝 同 菱浜村伊上
- 松本ツルヨ 同 同
- 松永 静代 同 同 東京市麹町區和洋女子專門學校内
- 増野 綱世 同 同 萩町江向
- 藤川 美枝 同 萩町西田町 愛知縣安城女子職業學校
- 兒玉 静子 同 井關村 萩町江向
- 江原千鶴子 同 日置村
- 粟屋 得子 同 萩町平安古 萩町江向
- 有吉 壽 同 北古萩
- 有馬 初枝 同 同濱崎町
- 末武ヒサヨ 同 同越ヶ濱
- 相本フミ子 同 同
- 鈴木ヨシコ 同 同 福川村

本科第一回  
大正十年三月卒業(五十音順)  
○平岡ハルヲ(池田)阿 萩土原 平安北道新義州府雲井町 九ノ八

- 荒地 久子(石川)同 同 萩町神原
- 横山 龍子(板垣)同 同 東田町 住所不明
- 山本静子(宇多田)同 同 松東 大阪市東淀川區三國本丁
- 伊藤千代子(大山)同 同 梅西 一〇六 中村方
- 綿貫ユウ子(小田)同 同 奈古村 大津郡三草村中尾
- 三井チヨ(小野村)同 同 萩町大字山田萩 新川
- 竹村タキ子(岡本)同 同 春若町 朝鮮慶南金海郡進禮面
- 小島 基(大深)同 同 奈古村 萩町中小畑
- 大本カヅノ 同 同 佐賀村 熊 佐賀小學校
- 泉原 壽子(桂)阿 同 萩橋本 長府町松原
- 賀屋ヒデ子 同 同 同土原 三見小學校
- 笠原キクコ(河村)同 同 同 門司市大久保越
- 國重タツ子 同 同 同 東田町 廣島市吉島町
- 有馬 淑子(國弘)同 同 同 川島 神戸市野崎通五丁目十四番屋敷
- 栗田シゲヨ 同 同 嘉年村
- 倉重フミコ 同 同 萩橋東
- 小池キヨコ 同 同 生雲村 (死亡)
- 小嶋 貞子 同 同 萩橋東 (死亡)
- 河村千代子(小枝)同 同 濱崎 滿洲撫順南臺町一丁目四ノ三
- 佐伯 清子 同 同 福川村
- 神崎シヅコ(坂本)同 同 明木村
- 佐久間ユキ 同 同 嘉年村 東京市本郷區元町二ノ六

- 陶山ミサ子 同 同 三 明華齒科醫學校
- 瀨川 愛子 同 同 大向津具村大連市大江町六吉屋貞子方
- 谷川トラコ 同 同 三見村 奈古小學校
- 椿 マスコ 同 同 佐々並村 住所不明
- 兒島ノブコ(坪野)同 同 萩濱崎 下關市豊前田町兒島林吉
- 中村サカエ 同 同 同 朝鮮全羅南道康津郡公立普通學校
- 森 テルコ(中村)同 同 同 八丁 臺北市大正町九條通り三丁目三十二中村方
- 阿武ツチコ(能美)同 同 川上村 住所不明
- 原 ユキヨ 同 同 共和村
- 原田 光子 同 同 萩熊谷町 萩熊谷町藤村次郎方
- 村岡ミツ子(藤村)阿 同 同 川島 福岡縣田川郡後藤寺町平
- 藤山於菟子 同 同 同
- 守永フミコ(堀)同 同 同 松 福岡縣田川郡後藤寺町平
- 有富ミサヲ(松浦)同 同 同 松西小學校
- 三浦アサヲ 同 同 島根縣鏡川郡西濱崎 住所不明
- 近藤 マツ(三好)阿 同 同 山口市鶴石
- 椋木 里 同 同 大 三隅村
- 守永 節子 同 同 生雲村
- 大藤 キク(山本)同 同 同 山田 住所不明
- 山根 静子 同 同 大井村 (死亡)

- 兒玉 キヨ(吉村)同 同 同 朝鮮平安北道泰川郡院西
  - 白井 サダ 同 同 同 松東 東京市小石川區高田老松
  - 有吉ノブ子 同 同 同 西田町 町プラダグマホーム内
  - 岡村 マス(有吉)同 同 同 北古萩
- 本科第二回  
大正十一年三月卒業(五十音順)
- 原いせ子(阿武菊子)阿萩橋本 住所不明
  - 阿武 重子 同 同 福川村
  - 堀 可子(石津)同 同 萩江向 奉天稻葉町一五
  - 板谷 敏子 同 同 同 山田 萩町立白水小學校在職
  - 宇佐川都子 同 同 同 堀内 千葉縣成田町幸町
  - 高田 花子(小田)同 同 同 熊谷町 下關市西細江町
  - 仁保 克子(大田)同 同 同 吉部村 阿武郡須佐町
  - 大田 キク 同 同 萩橋東 (死亡)
  - 中村 アイ(大藤)大 同 同 向津具村 山口市錢湯小路
  - 金子シズコ 同 同 同 萩橋東 小倉市古船場一
  - 兼重 魚子 同 同 同 十日市筋
  - 牛尾千代子(河村)同 同 同 同 西田町 大阪府下泉郡春木町本町一四四九
  - 木村テルコ(河村)同 同 同 同 明木村 住所不明
  - 安達 静子(木村)同 同 同 同 萩北古萩 佐波郡防府町三田尻
  - 日羽 魚古 同 同 同 同 篠生村 住所不明
  - 黒瀬チヨ(久保田)同 同 同 同 萩橋東 東京府豊多磨郡野方町上

- 久保田花子 下關市外彦島町江浦區百合寛一内
- 見玉 貞(兒玉)阿 同田万崎村 百合野寛
- 吉原 ヒナ(笹井)熊 藤間村
- 佐々木民子 大 三隅村
- + ○齋藤 貞子(齋藤)阿 小倉市米町十丁目 齋藤正教方
- 杉 愛子(齋藤)阿 田万崎村 徳佐村
- 末岡 貞子 同 紫福村 住所不明
- 能美フサ子(鈴木)同 萩山田 川上村字山田
- 吉本ヒナ子(鈴木)同 須佐村 小倉市米町九丁目
- + ○末若ヨシコ 同 奈古村 奈古小學校
- 金子 静江(流口)同 明木村 (死亡)
- 永田 能生 同 大井村 住所不明
- 渡邊 春江(中原)同 同椿東 住所不明
- 中村 静子 同 同萩町 住所不明
- + ○中村八千代(中村)同 同江向 東京府邑川町商品川苗木 原一二二五
- 岸 ヨシコ(上野)同 同椿 高俣
- 安藤八重子(蓮池)同 福賀村 明倫小學校
- 服部 貞子 同 萩土原 住所不明
- 大野チエ子(平田)同 同江向
- + ○福富 朝子 同 同堀内
- 松浦 コウ(松浦)同 奈古村 萩椿東
- 松田己知子 同 萩椿東

本科第三回

大正十二年三月卒業(五十音順)

- 荒地ユキ子(前田)同 萩後小畑 大阪府茨木町中條三四五
- 安藤ヒサ子(三隅)同 同五間町 萩町雜貨下り
- 堀 ヨシ子(椋木)大 三隅村 神奈川縣川崎市旭町二丁目四三七
- 村上 コト 阿 萩東田町 (死亡)
- 岡島ミサヲ(矢島)同 高俣村 住所不明
- 藤井 カツ(山縣)同 六島村 住所不明
- 中村 直子(大和)同 萩町雜式町 (死亡)
- 吉村 ヒナ(吉賀)同 同濱崎 萩東田町
- 角 シヅコ(吉田)同 同平安古 住所不明
- 中村 ナス(吉村)同 同熊谷町 朝鮮仁川府新町三六
- + ○秋山 京子 阿 萩南古萩
- 安藤 タリ 同 同椿東
- 阿武 米子 同 同川島 (死亡)
- 池上 キク 吉 秋徳二島村 梧西小學校
- 山根 フサ(石井)阿 萩椿東 (死亡)
- 石川 ツル 同 同濱崎 大津郡正明市
- 藤原 存子(石津)同 同河添 朝鮮平壤東町陸軍官舎乙 區第六號
- 伊藤 菊子 同 大井村
- 橋 ミツ子(井上)同 萩河添 住所不明
- 小谷ミツ子(小川)同 宇田郷村 大分縣龜川町新川

- 小野 フサ 同 奈古村
- + ○河内山織子 同 萩平安古
- 柏木 晴子 同 同東田町
- 波多野壽滿子(片山)同 東京市牛込區市ヶ谷木村町一五
- 森田マツコ(兼田)同 朝鮮慶尙南道蔚山錦町一丁目
- 北野フジコ 同 萩平安古 大正市西成區粉濱中之町 丁二五
- 佐古 花子(木原)同 同川島 (死亡)
- 桑原 小春 鳥根縣鹿足郡津和野 阿 萩平安古
- + ○桑原 サヨ 阿 萩平安古 (死亡)
- 桑原 節子 同 田万崎村 田万崎村多磨尋常高等小 學校在職
- 宮井 マキ(小茅)同 萩濱崎 朝鮮東萊郡東萊城內宮井 春一方
- 三元 信子(新庄)同 同新堀 南洋サイパン島南洋興發 株式會社
- 郡 美代子(鈴木)同 同椿東 熊本市春日町七七九
- 助石アサ子 同 同平安古
- 岡田 テル 埼玉縣秩父郡影森村
- 田坂 幸子 阿 萩江向
- 田總 ユキ 同 同平安古
- 中村 静子 同 同椿東 住所不明
- 永安 静枝 同 同椿東
- 中村 泰子 同 同椿 北海道空知郡沼貝村美唄 炭坑社宅稻村篤太方
- 中村 君代 同 同御許町

- 濱田 豊子(中原)同 福川村 萩町江向
- 長嶺 光子 同 萩西田町
- 野村 静子 同 同下五間町 朝鮮釜山南濱一丁目野 村梅藏氏方
- 久保田素子(羽仁)同 同山田 朝鮮元山府外川内里小野 田セメント川内支社住宅
- 河村 アサ 同 同江向
- 河村 梅子(福永)同 同橋本町 金北全州面高砂町五七 藤田 カツ 同 臺灣臺北泉町一ノ四 萩町唐樋町
- 波多野トキ子(堀)同 同川島
- 三浦 テル 同 同濱崎
- 木村夫久子(三島)同 同 同 臺北市大正町三丁目三二
- 溝部キクエ 同 同椿東
- 三好 敏子 同 同東田町
- 三村ミサヲ 同 福川村 神戸市千鳥町二ノ三九
- 三輪 幾子 同 萩御許町 下關
- + ○椋木百合子 同 同椿屋町
- + ○森田 ヤス(村木)同 萩町 廣島縣安藝郡熊野町森田 原光方 (死亡)
- 村橋 元子 同 同唐樋町
- 伊藤 壽子(森田)同 三見村 萩町大字山田區小原
- 安間アヤコ 同 福川村
- 山縣アサ子 同 萩平安古
- + ○山中トキコ 同 同 惠美須町 大井小學校
- 西永 ひさ(矢野)熊本市九品寺町二丁目五〇〇 住所不明

本科第四回

大正十三年三月卒業(五十音順)

- 白石 キク(赤崎)阿 萩堀内 萩土原
- 田中 俊子(伊東)同 佐々並村 神戸市池田廣町一八九
- 伊藤壽美子 同 萩土原
- 池永ハツ子 同 同山田
- 岩武千壽子 同 紫福村
- 佐藤スミ子(井町)同 萩濱崎 釜山富平町一丁目
- 惠美須屋ツル 同 山田區玉江 鹿野實業補習學校
- 高原ハツノ(桶谷)大 三隅村 住所不明
- 大田 貞子 阿 萩山田
- 大田 ヌク 同 同熊谷町
- 岡田 滿枝 同 同平安古
- 村田 清子(神崎)同 川上村 萩町川島村田方
- 北野 トヨ(香川)同 萩濱崎 新潟縣中頸城郡直江津町 信越窒素肥料株式會社今 城社宅一九號
- 金田 佳子 同 福川村
- 石田 信子(河村)同 萩西田町 京都市外深草町一ノ坪三
- 河村ユキ子 同 同御許町 住所不明
- 國光フキ子 同 同 東田町
- 齋藤 元子 同 同
- 品川 光子 同 同 彌富村

- 杉山 綾子 同 萩土原
  - 須子 紀子 同 小川村
  - 松倉サト子(高州)同 萩土原
  - 田村ヒサヨ 同 須佐町
  - 刀彌 琴子 同 萩東田町
  - 富田ハル子 同 同土原
  - 永田 綾子 同 同
  - 永野 文子 同 同橋本
  - 佐伯 照子(中村)同 同川島
  - 中村 政子 同 吉部村
  - 野北トメ子 同 萩河添
  - 林 菊枝 同 須佐町
  - 弘 ヒサ子 同 萩津守町
  - 室 チエ子(藤井)同 三見村
  - 藤井 藤江 同 萩江向
  - 阿座上マサコ(藤本)同 同川島
  - 井原トモコ(藤原)同 同橋東
  - 古川 愛子 同 田万崎村
  - 若松椿緒子(藤田)同 萩土原
  - 堀 テフ 同 同東濱崎
- 山口縣大島郡蒲野村三浦三浦小學校内三浦實業補習學校内  
吳市草里町五四番地三好桃太郎内  
朝鮮龍山野砲官舎二十八號  
京都市西淀川區蒲江町七四七  
大正市西淀川區蒲江町七四七  
朝鮮全羅南道光州西光山町  
朝鮮黃海道瑞興郡細坪面芝山里  
廣島市皆實町高等學校北  
東京府豊多摩郡井荻村下  
萩窪川南

本科第五回

大正十四年三月卒業(梅組)五十音順

- 堀 マサコ(松浦)同 同濱崎 朝鮮仁川府本町二丁目二
- 三好 榮子 同 同東田町 十二番地
- 元山 初子 同 德島市室三島町(死亡)
- 森 光子 同 滋賀縣大上郡吉波村和歌山市北訂町二番地 山本勉彌方 萩町油屋町河瀬方
- 河瀬 春子(森屋)阿 萩米屋町 萩町油屋町河瀬方
- 山田 富子 大 通村
- 山根千代子 阿 大井村 岩國町錦見
- 三村スエ子(山藤)同 萩山田 三見村河内
- 吉村 コト 同 同無谷町
- 守永 房江(渡邊)同 朝鮮京城府旭町一丁目市場
- 吉田 初江 同 高根縣仁多郡阿井村大字下阿井
- 梶森 秀子(村上)愛媛縣今治町 住所不明

- 岡 トヨ 同 萩熊谷町 京都市龜町區下二番町五
- 佐々木アサ子(大山)同 同橋町 吉部小學校
- 河村タキエ 同 同
- 川上富貴子 同 同御許町
- 河村登美子 同 同川島 京城市御成町一五〇河村 清治方
- 神代 照子 同 同八丁
- 河野ウメ子 同 同橋本町
- 金川 露子 同 同土原
- 市川美壽子(木谷)同 同堀内 靜岡縣伊豆下田町在中ノ 堀
- 久志アヤ子 同 佐波郡防府町富市 臺灣加茂郵便局
- 熊野ヒサ子 同 阿 萩土原 山口市湯田一本松安武方
- 熊谷 愛子 同 同今魚店町
- 後藤ミヨ子 同 同御許町
- 岩武 尚子(佐伯)同 福川村 阿武郡奈古村
- 齋藤 貞子 同 同橋東 山口市平野町二五番藤頼 郷方
- 篠原 光 同 島根縣美濃郡小野村
- 尾崎婦美子(鈴木)同 萩橋東 大津郡深川村藤木
- 中野キクヨ(末成)同 吉部村 臺南縣義街北門外三三五
- 武居 榮子 同 都濃郡下松 萩町平安古
- 竹下ハナ子 同 阿 萩橋東 京都市六角油小路西入森 田橋鶴方
- 高橋ミチ子 同 同唐橋町 神戸市平野町天王谷田村 方

○内藤 静江 同 明木村 美福郡淳美小学校内  
 ○中村 トヨ子 同 萩椿東松本  
 ○中村 信子 同 同新堀  
 ○奈古屋 イト 同 同米屋町  
 ○西山 文子 同 同山田  
 ○青沼 チヨ(能美) 同 同中津江 福岡縣箱崎町細屋土手山崎方  
 ○原田 シヅ子 同 同土原 滿洲大石橋大正街一ノ三  
 ○大阪 宣子(原田) 同 同日向 岐阜縣岐阜市春日町二丁目北組  
 ○福永 ヒサ子 同 同橋本町 安奉線草河口河上春亮方  
 ○堀 俊子 同 同日向 横濱市神奈川區青木町澤渡谷一六〇〇  
 ○松浦 シヅ子 大 依山村 萩町平安古頓野内  
 ○三好 民子 同 萩椿東香川津  
 ○光井 泰子 同 同濱崎  
 ○村上 フサ子 同 三見村  
 ○村谷 チヨコ 同 萩山田  
 ○本永 繁子 同 同堀内  
 ○美尾 シゲ子 同 同御許町 山口市大附町森尾虎太郎内  
 ○依 文子(山田) 同 同平安古 島根縣濱田町蛭子町  
 ○山本 房江 同 川上村 高瀬長井内  
 ○山本 義子 同 須佐町  
 ○横山 ミサヲ 同 川上村

○坂本 ミサヲ(松田) 同 萩川島 熊毛郡三丘村  
 ○長井 アヤ子 同 川上村 山口市大蔵小路三吉方

**本科第五回**

大正十四年三月卒業(菊組)(五十音順)

○藤田 千代子(秋山) 同 萩五間町 東京府下灘川町上中里五〇番地  
 ○石川 ナツ子 同 同梅町 (死亡)  
 ○内田 恭子 同 吉部村 東京市牛込区河田町九東京女子醫學專門學校寄宿舎  
 ○岡本 トシエ 同 萩椿町 (死亡)  
 ○岡田 カツ 同 同椿東香川津 岡山縣立味野高等女學校  
 ○小野 勝子 同 奈古村  
 ○重宗 與志子(岡村) 同 萩濱崎町 廣島縣世羅郡甲山町  
 ○小川 ナツ子 同 同椿東松本 東京府下松江隣保館  
 ○柳 時子(河邊) 大 三隅村 東京府下杉並町阿佐ヶ谷六九三住所不明  
 ○金子 ヤヘ 同 萩江向  
 ○木原 キヨ 同 同椿東小畑  
 ○窪田 智恵子 大 菱海村  
 ○國重 節子 同 萩椿東松本  
 ○齋藤 春子 同 同土原  
 ○綿谷 由久代(鹽見) 同 同椿西 樟太登原町東三條南一丁目陸軍官舎第一號  
 ○鈴木 百合子 同 同山田  
 ○清水 富美子(玉野) 同 同椿東 住所不明

○高橋 クニ子 同 同唐崎  
 ○竹内 芳子 同 同濱崎  
 ○田中 花子 同 同五間町 (死亡)  
 ○種子 千代子 同 吉部村 高俣小学校在職  
 ○椿 シズ子 同 萩椿東 萩土原新道  
 ○飛田 久子 同 田ノ崎村  
 ○中村 芳子 同 萩土原  
 ○長井 龜代 同 同椿西 (死亡)  
 ○長村 ウメ 同 同 (死亡)  
 ○原 シゲコ 同 同御許町 白水小学校横  
 ○林 吉子 同 同椿西 旅順市青葉町文英堂内  
 ○林 露子 同 川上村 福川村  
 ○平井 キミコ 同 萩熊谷町 朝鮮水登浦京町村田  
 ○福谷 政子 同 同津守町 萩町西田町  
 ○藤屋 春子 同 同東田町  
 ○福山 壽 同 同梅町 奈古小学校  
 ○松林 英子 同 同椿東松本  
 ○松岡 アヤ子 同 同北古萩 下關市奥小路町法福寺山  
 ○馬來 富士枝 同 同堀内  
 ○三戸 歌子 同 同山田  
 ○宮内 マツ子 同 同熊谷町  
 ○溝部 ミドリ 同 同椿東日代  
 ○宮内 ツル子 同 同熊谷町

○村上 キヨ子 同 同五間町  
 ○原 良子(柳田) 同 同梅町 南滿洲瓦房店大和街十七番地ノ一號  
 ○山根 キク 同 萩町吉田町  
 ○山根 芳子 大 連市外周水子 小野田セメント會社住宅加方住所不明  
 ○山田 ヤヘ 同 同椿東無田原 住所不明  
 ○山本 繁子 同 同御許町  
 ○山本 貞子 同 同濱崎町  
 ○山本 フユコ 同 同椿東松本  
 ○芳野 和子 同 同平安古  
 ○渡邊 キヨ子 同 同山田

**本科第六回**

大正十五年三月卒業(梅組)(いろは順)

○清水 久子 同 同福川村  
 ○石川 サザ子 同 同萩濱崎  
 ○今津 シヅコ 同 同梅區瀧淵  
 ○井上 綾子 同 同福川村 東京市外馬込町三六六九木村方  
 ○井町 梅子 同 同生雲村  
 ○服部 クマ子 同 同紫福村  
 ○長谷川 マサコ 同 廣島縣豊田郡東野村 萩町新川  
 ○波多野 千代子 同 同萩濱崎  
 ○林 諒子 同 同御許町

○植田ミツコ 同 同山田 東京市赤坂區水川町五二  
 ○藤 テイ子 美 赤郷村 堀三郎方  
 ○小野村サトリ 阿 萩椿東 東京市牛込區若松町七六  
 ○大谷 ハツ 同 同 小島七郎方  
 ○岡村 セツ 同 同 神戶市喜樂町六丁目三七  
 ○岡 里子 同 同 岩本徳鳳方  
 ○渡邊 愛子 同 同 撫和東三條通樂天地西村  
 ○金子 萩野 同 同 杉東小學校  
 ○鍵村シズ子 同 同 同 同 同  
 ○河野マツ子 同 同 同 同 同  
 ○河野チエ子 同 同 同 同 同  
 ○吉賀ヨシ子 阿 萩椿東 小畑(阿武郡大井小學校)  
 ○山根不二子(吉見) 同 同河添 厚狹郡厚南村神且、眞鍋氏方  
 ○田村トミ子 同 同格 同 同 同  
 ○田村千代子 同 同 同 同 同  
 ○臺田 末子 同 同 同 同 同  
 ○武田 トシ 同 同 同 同 同  
 ○高橋 芳子 同 同 同 同 同  
 ○中原 光子 同 同 同 同 同  
 ○宗實千代子 同 同 同 同 同  
 ○村岡チヨ子 同 同 同 同 同

○村田 幸子 同 同 同 同 同  
 ○百濟 萩江 同 同 同 同 同  
 ○久保ミヤ子 同 同 同 同 同  
 ○山本 照 同 同 同 同 同  
 ○山本 静子 同 同 同 同 同  
 ○土井喜美子(丸尾) 同 同 同 同 同  
 ○藤井ヲツギ 阿 萩山田 朝鮮新義州常盤町七丁目  
 ○小林登喜江 同 同 同 同 同  
 ○寺田アサコ 同 同 同 同 同  
 ○有吉 トヨ 同 同 同 同 同  
 ○有吉 八枝 同 同 同 同 同  
 ○坂本 於橋 同 同 同 同 同  
 ○齋藤 政子 同 同 同 同 同  
 ○木村フジコ 同 同 同 同 同  
 ○三輪 恒子 同 同 同 同 同  
 ○柴田シヅ子 同 同 同 同 同  
 ○神保富美子 同 同 同 同 同  
 ○澄川 トク 同 同 同 同 同

**本科第六回**

大正十五年三月卒業(菊組)(いろは順)

○伊佐 貞子 阿 本町 東京小金井關野新田四四  
 一箇豊助方

○井町アツコ 同 三見 明倫尋常高等小學校  
 ○岩崎 鐵代 同 萩椿東 萩町鶴江  
 ○橋本 貞子 同 同格 同 同 同  
 ○羽鳥 壽子 同 同格 萩町河瀬  
 ○土井千鶴子 同 同格 同 同 同  
 ○岡崎マツ子 同 同 同 同 同  
 ○窪田スミ子(金子) 同 大井村 臺灣北州七星郡湖庄内三  
 ○河野 厚子 同 萩椿東 却寺田通治方  
 ○桂 松子 同 同土原 大津郡日置村  
 ○柏屋トミ子 同 同魚店 臺灣北州七星郡湖庄内三  
 ○上田 道子(河野) 同 同橋本 却寺田通治方  
 ○吉山シヅ子 同 同山田 大府府西成區松通り五丁  
 ○松井ウメ子(吉屋) 同 同油屋町 住所不明  
 ○永岡ミサコ(高洲) 同 同土原 大府府東區南久太郎町四  
 ○多田 照子 同 同格東 丁目心齋橋角  
 ○瀧口芳宜江 同 同明木村 東京市牛込區通寺町二二  
 ○澤 正子(田中) 同 萩濱崎 荻町河添  
 ○竹重壽美子 同 同江向 名古屋市東區千種町池ノ  
 ○山本 保子(津守) 同 明木村 兵衛縣武郡住吉八甲田  
 ○中村タチ子 同 萩山田 六七九  
 ○中島 壽子 同 同川島 山口市清水區榮町三六  
 木間

○村上 玉子 東京府下豊多摩郡澁谷町  
 ○植木 イシ 阿 萩山田  
 ○村田 筆子(梅本) 熊 光井村 茨城縣水戸市上市元山町  
 ○植田 文子 阿 萩椿東 五六三五横須賀亥之松方  
 ○柳井 君子 同 同格東 岡山市上西川町古實田唯  
 ○小倉 敏子(山根) 同 大井村 吉方  
 ○山本 節子 同 萩渡り口 住所不明  
 ○山本 ナヲ 長崎縣長崎市(死亡)  
 ○安田百合子 阿 萩椿東 明木尋常高等小學校  
 ○益富 貞子 吉 嘉川村 住所不明  
 ○中野キクノ(杉本) 同 同山田 山口市西白石 中野嘉次  
 ○眞本アツコ(藤田) 同 同格東 京市芝區南佐久間町二丁  
 ○福島 靖子 同 同格東 目九  
 ○小池 幸子 同 同堀内 神奈川縣箱根小涌谷  
 ○後藤 文子 同 同格東 下關市宇後田京町二丁目  
 ○伊藤ヨシ子(阿武) 同 同 川上村 一八  
 ○阿武 恒子 同 同 同 同 同  
 ○齋藤 節子 同 萩上五間町 臺灣基隆市鼻仔頭七二  
 ○清須 イト 同 同格神原 林梯三方  
 ○三原 貞江 同 同 同 同 同  
 ○白井 律子 阿 萩江向 東京日本女子大學

- 森重 貞子 大三隅村 山口縣女子師範學校寄宿舎
- 末永 貞子 阿 萩橋本町
- 羽生美壽子(杉山)同 同川島 朝鮮成鏡南道甲山郡惠山鎮陸軍官舎
- 鈴木壽美子 同 同梅東
- 居田 春子 同 同堀内 指月神社境内社務社内

本科第七回

昭和二年三月卒業(梅組)(いろは順)

- 石津 甲子 阿 萩橋東 大阪市外守口女子藥學專門學校
- 伊藤 智子 同 奈古村 同
- 河内 君代(板垣)同 熊毛郡呼坂村 同
- 岩田美代子 同 同興玉江 萩町吳服町
- 岩本 禮子 同 同江向
- 波多野ヒサコ 同 同前小畑 福川村半田小學校
- 長谷富美子 同 同津森町 萩町無谷町
- 林 光子 同 同梅東中ノ倉 東京市神田區今川小路共立女子專門學校寄宿舎内
- 原 文子 同 明木村
- 坂田 満恵 兵庫縣揖保郡立野町 萩町神原
- 堀 ヨシ子 阿 萩青海
- 大橋トミ子 同 同川島 東京市外灘谷町常盤松八
- 大田ミサ子 同 同土原

- 大島スエ子 同 同濱崎 大連市目田町十ノ一ノ四
- 岡本 芳江 同 同大谷 花田清熊方 戸畑市明治專門學校官舎
- 和田 久 同 同田村 神戶市無内町四丁目一〇
- 渡邊美和恵 阿 萩大谷 八和田準分方
- 鹿島イツコ 美 共和村
- 金山 治子 阿 萩下五間町
- 河野 夏子 同 同橋本町 東京市外下灘谷二〇〇田
- 柁山 通子 同 同川島 同
- 宮内ヤエ子(竹内)同 同渡り口 津町濱崎
- 田總 ヨシ 同 同平安古
- 津森 松枝 同 同堀内
- 中村 夏子 同 同
- 仲子 キク 同 同西田町 門司市大里町御所町三丁目青木徳義方
- 内山 愛子 同 同西田町 都濃郡久米村 美濃郡大田町
- 口羽美智子 阿 萩堀内
- 山根 秋 同 同吉田町
- 山中由喜子 同 同三見村
- 山中リヨエ 同 同萩恵美須町
- 山本 千代 同 同御許町 江向
- 山中 淑子(山本)同 同土原 神戶市太田町四丁目七〇
- 松田 年子 同 同梅東無田ヶ原
- 福永 ウメ 同 同堀内 東京市芝區白金三光町根

- 厚東 閑子 同 同松本 本貫吉方
- 安達ヨシコ 同 同金谷 住所不明
- 阿武 英子 同 同土原
- 佐方キミ子 同 同倉江 大阪市西成區松通リ六丁目七七八下城安熊内
- 北出イタエ 同 同倉江 萩町江向
- 木村 壽子 阿 萩御弓町
- 末岡ハナ子 同 同今魚堀
- 杉山 文子 同 同川島 善福寺前
- 杉山ナツ子 美 共和村

本科第七回

昭和二年三月卒業(菊組)(いろは順)

- 池内 巴 阿 萩恵美須町
- 伊藤 基美 美 於福村 東京本郷區西片町二十二川崎清松方
- 伊東 濱子 阿 萩橋本
- 林 喜代子 同 同平安古
- 堀 賀代 同 同川島
- 堀 壽子 同 同梅東中ノ倉 住所不明
- 堀上 重 同 同江向
- 大谷 ナエ 同 同梅東中ノ倉
- 鬼村 露子 同 同橋本 門司市日之出町稻荷座前藤井方

- 岡 キヨコ 同 同梅東後小畑
- 上田 壽子(岡田)同 同梅東鶴江 吉敷郡小郡新町
- 小野キミコ 同 同梅町 神戶市外西灘村原田六〇二田上方
- 若松ツルコ 同 同東田町
- 西山 豊子(渡邊)同 同 朝鮮京城漢江通十六番地
- 河村 繁子 同 萩橋町
- 川村 清子 同 同熊谷町 (死亡)
- 兼田 ミネ 同 同前小畑 山口高等女學校
- 横山 藤枝 同 同川上村
- 横木 房子 同 萩江向
- 竹谷ハル子 同 同下五間町
- 竹中 富恵 同 同梅東松本 防府町松崎小學校
- 津田智恵子 同 同東田町
- 中村フジ子 美 共和村
- 中尾ハル子 阿 萩濱崎
- 村上 信子 同 同東田町
- 上田ヨシノ 同 同山田
- 植村ヨシコ 大 日置村 神戶市大橋町一ノ二五植村照人方
- 能美ハル子 阿 萩唐樋
- 山下 悦子 同 同倉江 (死亡)
- 山田 ミチ 同 同土原 佐波郡防府町宮市中光幸一方
- 山本 ハナ 同 同梅 大阪此花區吉野町一丁目二〇春海寛方



○山本壽徳恵 同大谷  
 ○山本 禮子 同倉江  
 ○三輪 トミ(松村)同 同上五間町 萩町吉田町  
 ○甲谷壽美枝(馬來)同 同堀内 東京市芝區高輪南町二七番地  
 ○藤田 郁子 同土原  
 ○藤井マサ子 同 菱海村  
 ○赤川 鐵子 同 萩土原 鹿兒島市新願院二二三  
 ○行本 貞子 同 同橋本  
 ○宮原千代子 同 同鹽屋町 北海道札幌市南九條西十五  
 ○下井 美子 同 大田町 萩御許町  
 ○清水タミ子 同 萩上五間町 萩西田町  
 ○水洋 芳子(品川)同 同熊谷町 阿武郡福賀村水津方  
 ○廣 文子 同 兵府縣武郡住吉村字八甲田若田虎三郎方

本科第八回

昭和三年三月卒業(梅組)いろは順

○岩武 正子 同 紫福村第七千六百三番地  
 ○花田 鏡子 同 同椿西 大阪市中河内郡八尾町 佐の川琴指南所方  
 ○西村 政子 同 奈古村第四百三十番地  
 ○仁保 キク 同 萩土原三百七番地  
 ○時山 文子 同 同山田第四千五百五十九番地  
 ○富田 文子 同 同橋本町六十一番地

○大野 イネ 同 奈古村  
 ○大津シン子 同 萩松本  
 ○小田 ミツ 同 奈古村 萩町河添  
 ○金子 敏子 同 萩町大谷  
 ○金山ツエ子 同 同御弓町  
 ○河名 孝 同 同椿西  
 ○柏木 敏子 同 同東田町  
 ○吉村多喜子 同 同川島  
 ○横山 稔子 同 同唐樋町  
 ○竹内 静子 同 同惠美須町  
 ○瀧野 敦子 同 萩町沖原  
 ○高村 文子 同 同江向  
 ○渡谷美智子(高橋)同 同 臺榭臺中市老松町十七  
 ○津森 茂子 同 同熊谷町  
 ○中村 貞子 同 同平安古 小野田山手セメント會社 大賀泰助方  
 ○中村登美子 同 同新堀  
 ○梅下マツ子 同 同濱崎  
 ○植田 重子 同 同椿東 萩町鶴江  
 ○倉重千代子 同 同椿東  
 ○安光 親枝 同 同土原 萩町堀内  
 ○山縣 ウメ 同 同河内  
 ○山根 勝子 同 同濱崎  
 ○山田 道子 同 同平安古

○櫻井 壽(松田)同 同川島 千葉市新町二五一〇山崎方  
 ○松野 君子 同 美 大田町  
 ○藤田 フミ 同 萩南片河 長府町切通原田方  
 ○小原美代子 同 島根縣簸川郡西濱村 萩町吉田町  
 ○鬼村ユキ子(小林)同 萩中津江 東京市外世田ヶ谷大字堂六三  
 ○佐伯 文子 同 徳佐村 萩町川島  
 ○北村 敏子 同 美 大田町 室積町山口縣女子師範學 校  
 ○三隅 フサ 同 萩五間町 萩町新川  
 ○光國 榮 同 同米屋町  
 ○宮内千代子 同 同熊谷町  
 ○靜間 芳子 同 須佐町  
 ○弘中 靜 同 萩川島  
 ○本永 芳恵 同 同平安古  
 ○森福サダ子 同 大 三隅村 室積町山口縣女子師範學 校  
 ○須子 安子 同 萩江向八丁 東京府高田町鎌司ヶ谷 三一〇子寶社内  
 ○助石フキ子 同 同平安古

本科第八回

昭和三年三月卒業(菊組)いろは順

○井上ヒサ子 同 萩江向  
 ○石井八重子 同 同小畑  
 ○市川 フミ 同 同川島 大阪市西成區國出町七丁目九番地

○原田 照子 同 兵府縣保那郡野町 萩登谷  
 ○原 マツ代 同 阿 紫福村 萩町雁島  
 ○波田 幸世 同 萩椿東  
 ○原 ミサヲ 同 美 赤郷村 神奈川縣川崎市南河原六 七二齋藤チエ氏内  
 ○西山 初枝 同 阿 萩川島 宇部市上宇部錢谷賢次方  
 ○堀本トシ子 同 同堀内 室積町山口縣女子師範學 校  
 ○友永マサ子 同 美 大田町 室積町山口縣女子師範學 校  
 ○土井 梅代 同 阿 萩椿東 中小畑  
 ○小田 文子 同 同御許町  
 ○大谷 ウメ 同 同後小畑 室積女師在學  
 ○小田 綾子 同 同奈古村 室積女師在學  
 ○大田 好子 同 同萩熊谷町  
 ○大谷 好子 同 同中ノ倉  
 ○落合八重子 同 同川上村 萩町土原  
 ○河邊マサ子 同 大 三隅村  
 ○河村 ユク 同 阿 萩椿西  
 ○桂 淑子 同 同川島  
 ○笠井 清子 同 同椿西 萩町雜式町  
 ○高橋イネ子 同 同同上五間町 下關市西大坪町了圓寺 上二三一今泉よしの方  
 ○長岡シズ子 同 同 紫福村  
 ○村田 貞子 同 同 萩唐樋町  
 ○中原ユキ子 同 同 同土原

○永安ハナ子 同 同川島  
 ○中野カヲル 大 目置村 萩町江向  
 ○村上 照子 阿 萩東田町  
 ○能美ミツヨ 同 同中津江  
 ○黒瀬田鶴子 同 同格西  
 ○桑原 ヨシ 同 同新堀  
 ○山田 費子 大 通村 一八 東京市外北品川御殿山七  
 ○山村 梅子 阿 萩濱崎  
 ○松村 ハナ 同 同上五間町  
 ○小橋伊楚子 同 神戸市平野町天王田村邸西  
 ○江舟二美子 同 川上村大字佐古山口市清水吉川猛  
 ○●佐伯 増榮 同 萩江向 (死亡) 方  
 ○菊屋喜美子 同 萩奥服町  
 ○木下美恵子 同 同熊谷町  
 ○陽 洪子 同 同格  
 ○溝部百合子 同 同格  
 ○溝部ウメ子 同 同格東 廣島縣因ノ島土生町  
 ○三浦 綾子 同 同御弓町 鹽濱北區三宅亮作方  
 ○島方サダ子 同 同濱崎  
 ○下田得子 大 仙崎町 萩町平安古  
 ○西村 文子 阿 宇田郷村 萩町青海  
 ○最上 綾子 同 萩西田町  
 ○守田トミ子 熊 勝同村

○鈴木 絶子 阿 萩椿東  
**本科第九回**  
 昭和四年三月卒業(梅組)(いろは順)  
 ○石丸 文子 阿 明木村明木市  
 ○石光 静子 同 同下五間町  
 ○國崎 峯子(生駒) 同 同格  
 ○波多野照子 同 三見村  
 ○渡多 静江 同 萩椿東  
 ○仁保 正子 同 同土原  
 ○細田マツコ 同 同東濱崎  
 ○堀本シヅエ 同 同堀内  
 ○堀野 公子 同 同堀内  
 ○土井 幸子 同 同格東 萩町松本  
 ○大庭キクエ 同 同瓦町 朝鮮忠清北道清州西町二  
 ○大石ヒサ子 同 同堀内 七河野益一方  
 ○小野 清子 同 同濱崎  
 ○河村ツタエ 同 三見村 萩町津守町  
 ○田中 清子 同 萩平安古  
 ○竹内 操子 同 同平安古  
 ○竹内 茂 同 同古萩町  
 ○田中 雪子 同 同格  
 ○高洲 キヨ 同 同同

○中谷 幸子 同 同明木村 萩町川島  
 ○中村富美子 同 萩春若町 同堀内  
 ○馬屋原壽満 同 同江向  
 ○上田ミドリ 同 同山田  
 ○百濟 万喜 同 同格東  
 ○山田 徳子 同 同北古萩  
 ○八木 正枝 同 同東田町  
 ○山根 アヤ 同 大井村  
 ○山縣 スミ 同 萩山田  
 ○松井 節子 美 赤郷村 東京府下世田ヶ谷町下北  
 ○藤田 照代 廣島市竹原町 萩町萩今古萩  
 ○藤山 常磐 阿 紫福村  
 ○藤井 繁子 同 萩土原 萩町川島  
 ○小林八重子 同 同堀内  
 ○浅海千代子 同 同格東  
 ○黒川 ヒナ(赤崎) 同 朝鮮京城府大和町三ノ十七 川村ノ  
 ○阿武 敦子 同 同格東  
 ○有田 瀧子 同 同堀内  
 ○有田 和子 同 同江向 萩町堀内  
 ○齊藤ナミ子 同 同格  
 ○齊藤フジエ 同 大井村  
 ○佐伯千代賀 同 萩濱崎新丁萩町青海

○三坂ハルエ 同 同椿東  
 ○三戸 正子 同 同江向  
 ○三輪 隆子 同 同椿東  
 ○三好クメ子 同 同同  
 ○柴田キヨ子 同 同同  
 ○弘 ユキ子 同 同津守町  
 ○水津 福子 同 同格  
 ○田村 朝子 同 同東田町 萩町土原  
**本科第九回**  
 昭和四年三月卒業(菊組)(いろは順)  
 ○伊藤 静枝 吉 山口市 萩町平安古  
 ○石津 夏子 阿 萩堀内  
 ○西山 正子 同 同山田 山口縣蜜積女子師範學校  
 ○刀懸 カメ 同 同東濱崎  
 ○大永千代子 大 目置村 萩町椿町  
 ○宗實 元子 阿 萩惠美須町  
 ○村木 宣子(岡田) 同 朝鮮羅南東本町五〇  
 ○大島 敏子 同 同濱崎  
 ○河村フジエ 萩 江向  
 ○川島佐芽子 同 須佐町  
 ○吉田富美子 同 萩吉田町  
 ○吉見 武子 同 同東田町

○田中美譽子 同 同 福岡市馬出寺中一二三四  
 ○田中富佐子 同 同 二並木方  
 ○田中シズエ 同 同 萩東田町  
 ○竹内 睦子 同 同 山口縣室積女子師範學校  
 ○田村フサ子 同 同 萩東田町  
 ○永安イクコ 同 同 萩東田町  
 ○長村フジエ 同 同 萩東田町  
 ○中原 豊子 同 同 萩東田町  
 ○中村 豊子 同 同 萩東田町  
 ○中村 千枝 同 同 萩東田町  
 ○中村 芳子 同 同 萩東田町  
 ○中本 智恵子 同 同 萩東田町  
 ○上田 静子 同 同 萩東田町  
 ○口羽千重子 同 同 萩東田町  
 ○倉重トミ子 同 同 萩東田町  
 ○久保田恵美子 同 同 萩東田町  
 ○矢次登美子 同 同 萩東田町  
 ○山根キクヨ 同 同 萩東田町  
 ○松本ハル子 同 同 萩東田町  
 ○松屋千代子 同 同 萩東田町  
 ○深井 貞子 同 同 萩東田町  
 ○藤田 富枝 同 同 萩東田町  
 ○阿武 淑子 同 同 萩東田町

○秋山 敏子 同 同 同北古萩  
 ○阿字雄美子 同 同 同大井村  
 ○佐伯 花子 同 同 同萩東田町  
 ○木原 雪子 同 同 同萩東田町  
 ○下井智恵子 同 同 同萩東田町  
 ○柴田シヅコ 同 同 同萩東田町  
 ○守田富美子 同 同 同萩東田町  
 ○森屋満壽子 同 同 同萩東田町  
 ○杉原ミツ代 同 同 同萩東田町  
 ○末岡 静子 同 同 同萩東田町  
 ○荒地千鶴子 同 同 同萩東田町  
 ○美野 芳江 同 同 同萩東田町

本科第四學年  
 梅組 (いろは順)  
 伊藤 里子 同 同 同萩東田町  
 石丸 都 同 同 同萩東田町  
 波多野靖子 同 同 同萩東田町  
 林 善子 同 同 同萩東田町  
 堀 登美代 同 同 同萩東田町  
 小原 正代 同 同 同萩東田町  
 大橋マサコ 同 同 同萩東田町

大野サダ子 同 同 同三見村  
 小田 君江 同 同 同萩東田町  
 若松 梅子 同 同 同萩東田町  
 和田 安子 同 同 同萩東田町  
 河野喜彌子 同 同 同萩東田町  
 吉井 延子 同 同 同萩東田町  
 高田 美子 同 同 同萩東田町  
 田中喜美子 同 同 同萩東田町  
 竹内 義子 同 同 同萩東田町  
 中村千代子 同 同 同萩東田町  
 長野 光子 同 同 同萩東田町  
 長嶺マサコ 同 同 同萩東田町  
 村上アサエ 同 同 同萩東田町  
 野田 綾子 同 同 同萩東田町  
 久保 菊子 同 同 同萩東田町  
 久津内貞子 同 同 同萩東田町  
 柳井 文子 同 同 同萩東田町  
 山縣 照子 同 同 同萩東田町  
 安田マサコ 同 同 同萩東田町  
 松浦 光子 同 同 同萩東田町  
 藤田 トミ 同 同 同萩東田町  
 藤屋ツル子 同 同 同萩東田町  
 藤山タメ子 同 同 同萩東田町

厚東 静子 同 同 同萩東田町  
 粟屋喜美子 同 同 同萩東田町  
 有田 幸子 同 同 同萩東田町  
 坂 佳子 同 同 同萩東田町  
 佐々木千鶴子 同 同 同萩東田町  
 三好 孝子 同 同 同萩東田町  
 水野 信子 同 同 同萩東田町  
 弘兼 文子 同 同 同萩東田町  
 平島 節子 同 同 同萩東田町  
 森 艶子 同 同 同萩東田町  
 本永 隆子 同 同 同萩東田町  
 森中 美代 同 同 同萩東田町  
 居田百合子 同 同 同萩東田町  
 杉山 昌 同 同 同萩東田町  
 澄川喜江子 同 同 同萩東田町  
 鈴木志計子 同 同 同萩東田町  
 重藤美知子 同 同 同萩東田町

本科第四學年  
 菊組 (いろは順)  
 伊藤ハツ子 同 同 同萩東田町  
 井上 忠子 同 同 同萩東田町  
 石津 麻子 同 同 同萩東田町

石丸喜久枝 同 同瀨淵  
 波多野富美子 同 同萩町川島  
 西村ヤエ子 同 紫福村 本校寄宿舎  
 岡野 芳子 同 同熊谷町 萩町倉江  
 小田喜久子 同 熊谷町  
 渡邊 時子 同 萩山田  
 河邊不二子 大 三隅村  
 川村 利子 阿 萩熊谷町  
 香川 ミチ 同 同濱崎新町  
 金子 初代 同 同江向  
 吉村フミ子 同 萩熊谷町  
 高木千枝子 同 同西田町  
 田中 夏子 同 同林町  
 竹岡 文子 同 同西田町  
 竹田 直子 同 同福賀村福田下 萩町堀内  
 竹重 國子 同 同江向  
 瀧野 琴 同 同林東 萩町椿神原  
 内藤ヨシ子 同 同福川村福井下 萩町萩椿東  
 長田ミツ子 同 萩椿東  
 長澄富美枝 同 三見村  
 草刈 貞子 同 萩細工町  
 國司壽恵子 大 日置村日置下 本校寄宿舎  
 矢次 純代 阿 萩平安古 萩町榎屋町

安田クニコ 同 同河添  
 松尾 愛子 同 三見村  
 松田フミ子 同 同林東  
 藤田喜多子 同 同德佐村 本校寄宿舎  
 藤井シズエ 大 同津具村向津具下 萩町西田町  
 福田 静枝 阿 萩町  
 栗屋 淑子 同 同江向 萩町平安古  
 有吉 久子 同 同川島  
 有馬キヨ子 同 同濱崎  
 淺野 綾子 同 同林東  
 安野志都子 同 同福賀村福田下 萩町平安古  
 天野レイコ 美 伊佐村 本校寄宿舎  
 澤本 乙女 同 萩東田町  
 土原境千代 同 同江向  
 光國 茂子 同 同米屋町  
 柴田 信子 同 同吳服町  
 重本千鶴子 同 同麻里布町室木 萩町瀨淵  
 廣 常子 阿 萩濱崎  
 廣田 綾子 同 同土原 萩町椿東  
 關屋ヨシコ 同 同瓦町  
 助石マツコ 同 同平安古  
 同 同川上川

梅組 (いろは順)

岩本 當子 阿 須佐町本町 本校寄宿舎  
 岩本 林子 同 萩南古萩 萩町南片河  
 井町 ハル 同 萩越ヶ濱  
 伊藤 昌子 東京豊多摩郡大久保百人町 同萩江向  
 池上キミ子 吉 秋穂二島村字南區萩町江向八丁筋  
 石橋智加子 佐賀縣杵島郡住吉村 萩町椿東  
 波多野トヨ子 阿 萩濱崎  
 長谷川マスエ 同 萩椿東  
 富田千恵子 同 萩橋本  
 岡村 フキ 同 萩土原  
 小野智枝子 同 奈古村字土 萩町川島  
 川上 幸子 同 三見村字浦  
 河野タケ子 同 奈古村濱崎  
 金子 恭 同 福川村 萩町江向  
 金子 光代 同 萩江向  
 加藤 富子 同 西田町 萩町瓦町  
 官野ヒサ子 同 同古萩  
 横木 貞子 同 同江向  
 吉田 花子 同 同平安古  
 田中 操 同 同川島 萩町瓦町  
 玉井 節子 同 同南古萩  
 長井 密子 同 同川上村高瀬 萩町原

中原 隆子 同 同福川村山崎 萩町細工町  
 越谷喜代子 同 萩御許町  
 中村タキ子 同 同林  
 室谷キヨ子 同 同田万崎村江崎 本校寄宿舎  
 内山 泰子 同 萩上野 萩町松本  
 内山 貞子 津 久米村 本校寄宿舎  
 黒瀬千鶴子 阿 萩金谷  
 山根ゆき子 東京市深川區六間堀町 萩町瀨淵  
 山本 禎子 阿 萩倉江  
 深井 テエ 同 同  
 福原 綾子 同 同川島八丁筋 萩町川島小橋筋  
 藤田 實子 同 同堀内  
 藤田 文子 同 同土原  
 藤田 幸子 同 同椿東松本 萩町椿東前小畑  
 藤村多喜子 同 同土原  
 厚東 葛子 同 同八丁川島  
 有吉喜久子 同 同前小畑  
 淺野 愛枝 同 同西田町  
 安藤フジエ 同 同江向  
 佐久間千代子 同 同平安古  
 佐々木美都子 同 須佐町 本校寄宿舎  
 紫田 君代 同 同福川村 本校寄宿舎

本科第三學年

本永 松惠 同 萩平安古  
 森川 秀子 同 小川村千匹 萩町南古萩  
 岩武 哉 阿 紫福村平原 萩町南古萩  
 岩崎タミ子 同 萩東田町  
 石原 英子 同 同松本上市 萩町土原馬場町  
 石光 幾代 同 同平安古  
 服部富喜子 同 紫福村長尾 本校寄宿舎  
 堀田 文子 同 萩町江向 萩町川島  
 大島 秀子 同 萩町江向 萩町濱崎町  
 岡崎 文枝 同 萩町江向 萩町江向  
 岡村 孝子 同 萩町江向 萩町江向  
 岡村喜久枝 同 萩町江向 萩町江向  
 尾崎登茂子 同 萩町江向 萩町江向  
 河村 壽江 同 萩町江向 萩町江向  
 横山壽美子 同 萩町江向 萩町江向  
 高杉 愛子 同 萩町江向 萩町江向  
 竹原 房子 同 萩町江向 萩町江向  
 竹田 貞子 同 萩町江向 萩町江向  
 田坂チヅ子 同 萩町江向 萩町江向  
 田中 清子 同 萩町江向 萩町江向  
 田北ミネ子 同 萩町江向 萩町江向

菊組 (いろは順)

中村 靜江 阿 同川島  
 上田 昌子 同 萩西田町  
 能美ユキ子 同 唐櫃  
 能美タミ子 同 川上村 本校寄宿舎  
 柳井 君子 同 同濱崎  
 山縣 貞子 同 同平安古  
 山本 イチ 同 同御許町 萩町江向  
 山本 美智 同 萩川島 同  
 山本ツル子 同 同倉江 同河添  
 松浦 富枝 同 同濱崎  
 松浦キク子 同 同東濱崎  
 福間 正子 同 同濱崎  
 幸崎シズエ 同 同濱崎  
 上利 光子 同 同吳服町  
 阿武トシ子 同 同川島  
 阿武マツ子 同 同椿東前小畑  
 齋藤 義子 同 奈古村 本校寄宿舎  
 齋藤 信子 同 萩町御許町  
 齋藤 雪子 同 同吉田町  
 坂本 展子 同 同熊谷町 萩町御許町  
 三好カツ子 同 同川島  
 宮内 信子 同 同熊谷町  
 守田 律子 同 淺江村 萩町江向

本科第二學年

梅組 (いろは順)

末岡 益子 阿 福川村 同土原  
 末武 貞代 同 萩町堀内  
 末國ミサエ 同 同平安古  
 末光紀代子 同 同平安古  
 杉山 美枝 阿 萩川島 萩町今古萩  
 伊藤 敏子 阿 萩椿  
 伊藤ウサヨ 同 福川村黒川  
 伊藤みつ子 同 同 本校寄宿舎  
 稻井みみ子 同 同 本校寄宿舎  
 石金 夏子 同 萩土原 萩古萩  
 二宮 漢子 同 同椿東  
 時山八千枝 同 同山田  
 大永 初子 大 日置村字日置上 萩椿町  
 大和和ヤス子 阿 萩椿 萩雜式町  
 岡田 義子 同 萩江向  
 岡田 元子 同 同椿東  
 小野 榮 同 同堀内  
 河野壽恵子 同 同堀内  
 兼田 静子 同 同南片河  
 吉村 常子 同 同河添  
 吉屋 静枝 同 用上字藤藏 本校寄宿舎

高洲ヨツ子 同 萩土原前町  
 田中喜美子 同 同椿町  
 田中 君江 同 同濱崎新町  
 田村 菊恵 同 同山田  
 竹下千代子 同 同椿東  
 瀧野 芳江 同 同 萩町椿沖原  
 中村 貞子 同 同春若町 萩堀内北總門  
 中野 桃子 大 日置村蔵小田 萩江向  
 室谷 豊乃 阿 田万崎村江崎 本校寄宿舎  
 久保田フケ子 同 萩椿東  
 山縣 信子 同 同  
 山田 廉子 大 通村 本校寄宿舎  
 山本 武子 同 同後小畑  
 山本 雪子 同 同 吉部村吉部上 萩平安古  
 松田己美子 同 萩椿東  
 藤村 静子 同 山口市 同萩米屋町  
 藤田ステコ 同 同  
 藤永 初枝 美 直長田村眞名 本校寄宿舎  
 福田喜久子 阿 萩椿東  
 厚東 晴子 同 同  
 厚東 光子 同 同  
 阿部 光子 同 同  
 粟屋 チエ 同 三見村  
 同 萩平安古

天野 紀子 同 萩東田町  
 安藝 美枝 同 同平安古  
 阿部タミ子 同 大井村 本校寄宿舎  
 齋藤ミツコ 同 同 本校寄宿舎  
 左野 政子 同 見島村 萩熊谷町  
 木村 俊子 同 三見村  
 菊屋 正子 同 萩吳服町  
 三戸 文子 同 同江向 萩瓦町  
 光永 一枝 同 明木村 本校寄宿舎  
 志賀 篤子 同 萩河添  
 廣田八重子 同 同橋東  
 末本 節子 同 同橋東 吉 名田島村 萩堀内

本科第二學年

菊組 (いろは順)

岩田タマコ 福岡縣若松修多羅 萩平安古  
 伊藤 昌子 阿 萩土原  
 生川タマエ 福井縣足羽上宇坂相谷 萩橋本  
 石川 光子 阿 萩 萩濱崎  
 稻村 八重 阿 萩川島 萩橋  
 波多野百合子 同 同橋東  
 波田美代子 同 同堀内  
 西村 紀子 同 同堀内

富田 敏子 同 橋東  
 張 達子 同 萩土原  
 大橋キヨ子 同 同川島  
 大谷 榮子 同 同橋東 萩川島  
 大田 操 同 同濱崎  
 渡邊ヤスコ 同 同北古萩  
 河野 菊子 同 同橋本  
 桂 知佐子 同 同上五間町 萩下五間町  
 金子 夏江 同 同橋東  
 金子トモエ 同 大井村市場 本校寄宿舎  
 神野 博江 同 彌富村字彌富下 萩今古萩  
 横山トメ子 同 川上村熊谷 萩惠美須町  
 吉原 正子 同 萩上五間町  
 吉賀キミ子 同 同濱崎  
 竹下マツエ 同 同橋  
 高典 齋子 廣島縣廣島市大手前町 萩堀内  
 瀧口 桃江 阿 明木村 萩河添  
 津守 文代 同 萩堀内  
 中原シゲ子 同 同橋東  
 中村ヒサエ 同 同橋本  
 宗實 文子 同 同惠美須町  
 上田テルコ 同 同山田  
 桑原富美子 同 同西田町

熊毛屋光子 阿 同橋  
 柳井 良子 同 同山田  
 山縣 チセ 同 同山田  
 山田タミ子 同 同土原  
 松岡 勝子 同 同北古萩  
 松浦 照子 同 同奈古村 本校寄宿舎  
 藤家 美枝 同 佐々並村久年 本校寄宿舎  
 藤田みずき 廣島縣賀茂郡竹原町 萩今古萩  
 小池 清子 阿 萩堀内  
 寺内 政 同 同平安古 萩橋東  
 荒地 綾江 吉 小郡町 萩町瀨淵  
 淺野アヤコ 阿 萩吳服町  
 秋田 順子 同 同惠美須町  
 齋藤富美子 同 同濱崎  
 齋藤 菊代 同 同東田町  
 齋藤 靜枝 同 大井村坂本 萩樽屋町  
 譜岐 秋代 同 萩古萩  
 溝部 恭子 同 同河添 萩川島  
 鹽見 智子 同 同橋

本科第一學年

梅組 (いろは順)

岩本フミヨ 阿 須佐町 本校寄宿舎

岩崎 幸子 同 萩江向 萩川島  
 井上 玉江 同 同山縣上房郡高梁町 萩香川津  
 井町マサコ 阿 萩橋東  
 西林キミ子 同 同古萩町  
 西田 清子 同 同北古萩町  
 岡崎 玉恵 同 秋吉村 萩江向  
 小田 清子 阿 萩御許町  
 河邊 綾子 大 三隅村 萩川島  
 河瀬シゲ子 阿 萩町惠美須町  
 金子 チセ 同 福川村 萩川島  
 鹿島 チヨ 美 共和村 本校寄宿舎  
 横見 園子 阿 萩土原  
 吉田 泰子 同 須佐町 本校寄宿舎  
 高屋 琴子 同 川上村 萩土原  
 高松 正子 同 紫福村 同吳服町  
 高崎八重子 同 高森町 同吉田町  
 田邊フミ子 阿 萩唐櫃町 萩倉江  
 田中ヨシ子 同 同橋東  
 田中百合子 同 同橋東  
 竹内 文子 同 同古萩  
 冷泉 龍子 同 同川島  
 津田 貞子 同 同東田町  
 中川 清子 同 同江向

中村 聖子 同 萩椿東  
 野村 京子 美 大嶺村 本校寄宿舎  
 柳田 秀 福岡縣救企郡曾根村 萩土原  
 山縣 節子 阿 萩平安古  
 浦田喜美子 大 向津具村 萩江向  
 馬屋原範子 阿 萩江向  
 益成 雅子 同 同堀内  
 藤田マサコ 同 同堀東  
 藤田スエコ 同 同堀  
 藤井 弘子 同 同米屋町  
 河内 光子 同 見島村 萩濱崎町  
 小谷 幾子 山 山口市 同南片河  
 寺内 綾子 阿 萩平安古 同堀東  
 有田 定子 同 同堀内  
 赤川 元子 同 同堀東 萩河添  
 朝枝都喜子 大 三隅村 同吉田町  
 阿武 勝子 阿 萩川島 同江向  
 齋藤 富美 大 向津具村 同江向  
 木村喜美子 阿 萩北古萩町  
 三輪 愛子 同 紫福村 萩町北古萩  
 三浦 スミ 美 別府村 本校寄宿舎  
 三島 房子 阿 萩北古萩町  
 品川 房子 同 同熊谷町

平島ミユキ 阿 萩町  
 末武 政子 同 萩椿東  
 末國フサエ 同 萩町  
**本科第一學年**  
**菊組 (いろは順)**  
 磯野千尋子 阿 萩五町  
 石原 禮子 同 萩椿東  
 原川 幸子 玖 柳井町  
 林 英子 阿 萩川島  
 西村 政子 同 紫福村 本校寄宿舎  
 堀 初子 同 萩濱崎町  
 梶野萬龜子 同 萩椿東  
 飛落八千代 同 吉部村 本校寄宿舎  
 岡野 輝子 同 萩唐樋町 萩山田  
 岡 ユキ 同 同堀東 同平安古  
 大岡 光子 同 同西田町  
 小田多都子 同 同熊谷町  
 渡邊 静子 同 川上村 本校寄宿舎  
 和田 榮子 同 田掛村 萩町江向  
 河村サダコ 都 福川町 本校寄宿舎  
 角屋シゲ子 阿 萩古萩町  
 賀田多美代 同 大井村

金子 牧子 阿 萩川島  
 龜屋 文子 同 萩椿東  
 吉賀 澄子 同 大井村  
 吉野トシ子 同 萩堀内  
 玉井喜久子 同 萩南古萩町  
 長富ヨシ子 同 萩十原  
 中村 正子 同 萩唐樋町  
 中村 鈴子 同 萩椿東  
 中村 澄子 同 萩椿  
 長山 菊代 同 奈古村  
 揚井 竹子 同 萩町  
 山本 光子 同 同堀東  
 前田 禮子 同 同堀東  
 福井 諱子 同 同土原  
 藤野 文枝 同 同山田  
 藤本 愛子 佐 和田村埤 萩川島  
 小林 愛子 阿 萩江向  
 小原 種子 島根縣西濱村 萩西田町  
 栗屋 儀子 阿 萩椿  
 阿座上勝子 同 萩江向 萩川島  
 佐伯 朝子 美 別府村 本校寄宿舎  
 佐伯 節子 阿 萩東田町  
 佐々木一枝 廣島縣高田郡横田村 萩鹽屋町

木村喜久枝 阿 萩川島  
 木村代志子 同 佐々並村 萩新川  
 光井千代子 同 萩濱崎町  
 島屋 光子 同 萩町  
 弘長 治子 同 見島村 萩鹽屋町  
 守永千鶴子 同 萩濱崎町  
 水津 静江 同 福川町 萩鹽屋町  
 末岡サカエ 同 萩椿東  
 岡 ユキ 同 萩椿東 萩平安古  
**實科第二學年**  
**(いろは順)**  
 井上 正世 厚 小野村 萩東田町  
 石井喜久恵 阿 萩椿東  
 石田 芳子 同 福川黒川  
 原 トミ子 同 萩川島  
 林 シズ子 大 向津具村向津具下 本校寄宿舎  
 西村 芳乃 阿 萩樽屋町  
 西山テル子 同 同川島  
 堀 千代子 同 同堀  
 豊田 縫子 山 山口市田町 萩下五間町  
 土井 富子 阿 萩川  
 鬼村シヅ子 同 福川 福井下 萩土原

大西 民子 同 萩濱崎町  
 大石ヒナ子 同 明木村 萩椿町  
 小野 規子 同 奈古村 本校寄宿舎  
 片山 歌子 同 萩椿東  
 片山 安子 同 紫福村 本校寄宿舎  
 吉繼キクエ 同 萩椿  
 高橋ヨシ子 同 同唐穂町  
 田中 幸子 同 同山田  
 瀧 禮子 同 同濱崎新町 萩東田町新堀  
 土田 テル 同 同木村 萩椿町金谷  
 内藤 良子 同 六島村大島 萩町米屋町  
 長岡ハル子 同 田方崎村上田方 萩町椿東  
 村田ウメ子 同 萩磯屋町  
 武藏屋ヒナ子 同 同椿東  
 藤原龜代子 同 同椿  
 藤田 花子 同 同椿  
 藤田喜美子 同 同熊谷町  
 藤山トヨ子 同 同椿東中倉 萩町新川  
 齋藤千代子 同 船木町 萩吳服町  
 木原美津子 同 萩今古萩町  
 光田 照世 同 福山村 萩町土原  
 白井美都子 同 同  
 篠田千代子 同 同 吳市龍川通 萩町椿東

下田美智子 大 仙崎町 萩平安古  
 實科第一學年  
 (いろは順)  
 伊勢島キヨ子 阿 萩濱崎町  
 井川 竹子 大 三隅村  
 西村 正子 阿 宇田郷村 萩古萩町  
 東野 幸子 大 向津具村 本校寄宿舎  
 大田タミ子 同 日置村 本校寄宿舎  
 大山 玉代 同 向津具村 本校寄宿舎  
 大山 富代 同 阿奈古村 本校寄宿舎  
 小野村清子 同 萩椿東  
 大田ヒサ子 大 向津具村  
 金子 信子 阿 萩椿  
 金子 芳子 同 萩椿東  
 吉田 千代 同 萩御許町  
 吉岡トキヨ 大 菱海村 本校寄宿舎  
 吉崎ヒサ子 美 赤郷村 萩土原  
 田村トキエ 阿 萩椿東  
 田中 敏子 美 大嶺村 本校寄宿舎  
 田中 照子 同 同 本校寄宿舎  
 田村 高子 厚 二俣瀬村 萩八丁  
 都築 松代 阿 生雲村藏日喜 本校寄宿舎

中村セツノ 同 萩平安古  
 中原 操 同 同椿東  
 永田 常子 同 同  
 植村 春子 同 同  
 熊野 實枝 大 深川町  
 矢次 清子 阿 萩平安古  
 山本 静子 同 同熊谷町  
 藤村 静代 同 同  
 藤田 菊枝 同 同南片河町  
 藤井 玉子 同 同山田  
 藤田ヒサ子 同 同椿西  
 福永 徳榮 同 同東田町

香原キクエ 同 同樽屋町  
 寺戸ハルノ 同 同椿東  
 阿部 スミ 同 同御許町  
 佐々木初代 同 三見村  
 岸 千代子 同 萩椿  
 三浦富美子 同 同北古萩町  
 三浦 鳩子 同 同河添  
 三隅田貞子 同 同平安古  
 弘津 静子 同 同瓦町  
 東 佐喜子 山 山口市吉敷 本校寄宿舎  
 須山マサ子 阿 萩河添

皇太后陛下御歌

限りなき御國の富やこもるらむ賤がかふこのまゆのうちにも  
 かご松のみどりも清きあしたかなちりやはらへる年のはつかぜ  
 かごまつのみどりの色もいや深くなりまさりけり今朝のみゆきに



昭和五年三月十五日印刷  
昭和五年三月二十日發行

山口縣立萩高等女學校內

發行兼編輯人 中野貞介

山口縣山口市道場門前百十番地ノ十

印刷人 平佐國介

同上

印刷所 大同印刷舍

山口縣阿武郡萩町

發行所 山口縣立萩高等女學校南園會

